



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道における農業生産力の現段階                                                                  |
| Author(s)        | 美土路, 達雄; 山田, 定市; 高倉, 嗣昌 他                                                         |
| Citation         | 北海道大學教育學部紀要, 29, 9-113                                                            |
| Issue Date       | 1977-03                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/29156">https://hdl.handle.net/2115/29156</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 29_P9-113.pdf                                                                     |



## 北海道における農業生産力の現段階

美土路 達 雄    山 田 定 市    高 倉 嗣 昌  
 神 田 嘉 延    木 村        純    藤 田 昇 治  
 千 葉 悦 子

### On the Present Stage of Agricultural Productive Forces in Hokkaido

Tatsuo Midoro. Sadaichi Yamada.  
 Tsugumasa Takakura. Yoshinobu Kanda.  
 Makoto Kimura. Shoji Fujita. Etsuko Chiba.

#### 目 次

|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| まえがき                          | 10  |
| 第1章 農業生産力と農業技術                | 10  |
| 1. 若干の理論的整理                   | 10  |
| 2. 農業生産力、技術と生産関係              | 13  |
| 第2章 北海道農業生産力の現段階              | 18  |
| 1. 北海道農業の展開過程とその特質            | 18  |
| 2. 農業生産力の現段階                  | 20  |
| 3. 農民層分解と農業共同化の現段階            | 32  |
| 第3章 地域農業の生産力形成過程における構造的関連分析   | 40  |
| まえがき                          | 40  |
| 1. 稲作地帯—士別市における農業生産力の特質       | 40  |
| 2. 酪農地帯—別海町における酪農生産力の発展       | 49  |
| 3. 畑作・そさい地帯—洞爺村における農業生産力形成の特質 | 60  |
| 4. ま と め                      | 73  |
| 補 章 農業技術と農民教育制度の概況            | 76  |
| まえがき                          | 76  |
| 1. 農民の学習要求と学習機会               | 76  |
| 2. 農業改良普及制度と農協の営農指導事業の役割      | 81  |
| 3. 農業学園と農村青年                  | 91  |
| 4. 農業者転職訓練と農民                 | 100 |
| 5. ま と め                      | 110 |
| あとがき                          | 112 |

## ま え が き

1976年、本北海道は激しい冷害に襲われた。北海道の場合は作況指数70(1976.10.15現在)で1971年冷害の66につぐが、減収額は723億円で北海道農業史上最悪の被害となった。とりわけ、稲作は被害の8割をしめ、もっとも打撃がひどい。

ここで見すごせないのは、現在普及過程にある稲作大型機械化「一貫」体系がこの冷害を激成していることである。そのことは、機械化の進んでいる稲作中核地帯ほど被害の激しいことによって立証できる。

そのメカニズムは、兼業、出稼ぎ等による一般の手ぬきのほか、①手植の場合と異なり、最近普及しつつある機械田植は稚苗植付のため、低温、日照不足の影響がとくにつよくでること、②生脱穀機からコンバインに至る日本型の収穫の機械化で、藁の土壌還元が少なく、有機質不足からその緩衝作用その他地力が低下していること、の2つによる。

ひろく技術進歩の過程ではさまざまな試行錯誤が生起するが、現在ドラスティックにおこなわれている日本農業の大型機械化の場合は、今次冷害をはじめ見過せぬ問題を提起している。ひとことでいえばそれは、現在の農業生産力が資本主義的生産関係と、小農的生産様式に規定され、技術学的法則性(合理性)がいちじるしく歪曲されていることである。

具体的にいえば、(1)現在の農業機械化「一貫」体系は、ほとんど農業機械独占の開発にかかわり、開発と販売の過程で、利潤本位の歪曲性がみられること(とくに個別労働過程を孤立分断的に機械化する技術開発方向が追求され体系性に欠けていること)、(2)農民の側にも、省力と増産が追求されるあまり、農業技術の総合性と、その機械化に当てる科学的な位置づけと、技能が不足していること、である。稚苗植付時期の未習熟も冷害激化の一因であった。

もともと、現実の生産力は、その客体的契機である生産手段を、主体的契機である労働力が労働過程で十分合理的に運用するところに形成される。その意味で、一方では生産手段は一定の科学・技術水準を前提とするし、他方、それを運用する主体はそれに照応する教育、科学・文化水準と、技能・熟練を前提とする。

従来、長く手の労働によって農業生産をいとなみ、それに照応する技術水準にあった日本の農業が、いまや始めて大型機械化「一貫」体系の段階に入るにいたり、そこで現実の農業技術の性格と、農業(技術)教育の再検討が緊急な課題として提起されている、といわねばならぬ。

本論は——以上のような観点から——農民教育の重要な一分野たる農業技術・技能教育研究の準備として、第1章で農業技術論の方法論的開示、第2章で北海道農業生産力の現段階、第3章でその具体的形成過程、とくにその階層的技術構造の諸関連を明らかにし、あわせて補章で現行主要農業技術関係農民教育制度、機関の概況整理を試みたものである。

## 第1章 農業生産力と農業技術

## 1. 若干の理論的整理

まず、農業生産力の客体的契機である農業生産手段と農業技術の構造的な諸関係について理論的整理をしておこう。

一般的に生産手段は、労働手段、労働対象、その他補助材料等の諸要素より成立ち、そのうち労働手段の体系が技術を構成する、という立場にわれわれはたつが、農業生産の場合は品種改良、施肥等、労働対象の生産力形成にはたす役割の大なることから農業技術の規定には多くの論議が交わされてきた。

すなわち、有機生産たる農業技術の場合は労働対象をふくむとの農業技術特殊説、あるいは種子、仔畜等を「対象化された技術」と規定する立論等がそれである（例えば吉岡金市等）。

生産力の形成に種子、肥料等の労働対象が少なからぬ役割を果たすことはたしかに農業の現実的な特徴である。北海道で稲作が可能になった前提の一つも耐冷品種の創出である。だが、農業生産の自然科学的農学的分析と社会科学的分析、さらに技術学的分析と経済学的分析は厳密に区別されたうえで、それらを構造的に関連させて把握することが大切である。

たとえば、ドイツの Seel Horst は Traugott Berndt のデータにもとづき、世紀転換期 50 年間の穀物粗収量増大の寄与率を、人工施肥 50%、土地改良 25%、品種改良 15%、作付順序の改善 10% と推計し、また日本でも松本五楼は施肥効果 78.5%、品種改良、栽培法、病虫害防除の効果 21.5% としている（1939）。だが、そこでは期せずして増収ということが土地生産性の側面からとらえられていて、本来的な生産力形成の主體的契機、労働力とのかかわり、つまり本来の技術とのかかわりが正しく位置づけられていないという特徴をもつ。したがって、Seel Horst や松本五楼の推計をもって農業技術の特性を全面的にとらえたものとはいえないであろう。<sup>(1)</sup>

もともと、“人間は道具をつくる動物。Tool making animal” といわれてきたように、農業生産力の形成においても、労働を労働対象に伝える労働手段こそが生産力の客體的契機として決定的に重要な役割を演じるのであって、農業労働対象の特殊性は——技術論的には——従属的現象形態にすぎない。そうした諸問題について理論的に整理しておく必要がある。

農業における主要な労働対象、改良品種の種子、仔畜等、一般的に生物の生育過程は、(1)その自然的環境、とくに気象的条件、macro = micro climatic factors、(2)土性的条件 edaphic factors、(3)さらに種子、仔畜ないし作物、家畜群みずからの狭義の内外的生態的条件 ecological factors、の三つに規定され、それらが広義の生態的狀態 ecological conditions を形づくる。

そこには陽光、温度、湿度、風その他諸条件の無数の組合せがあり、また未知の要因が関連しつつ働く。したがって、農業生産力の主體的契機たる労働力はそれらの生育阻止要因を除去排除し、促進条件を創出、調整するために農業労働をおこなうのである。

フイジオクラートからアダム・スミスに至るまで、あたかも農業が自然力に依拠するところ大であるために生産的であるとの自然主義的な把握が克服されずにその経済学の中にもちこまれたが、農業技術に無媒介に労働対象を包含させる見解はそれと共通した誤りをおかすことになるだろう。

農業生産力は栽培労働、飼養労働の主體的契機によってはじめて形成されるという、一見当然なことが改めて強調されねばならない所以である。

そこで、農業労働の一般的性格を確認しておこう。それはつぎの2点である。

#### (1) 労働期間と生産期間の不一致（自然的被制約性）

いうまでもなく、作物・家畜の自然的生育過程によって、農業労働の態様は規定され、そこでは異種労働が時間的（あるいは時季的）序列にしたがって継起する。したがって、それだけ協業なり、分業なりがおこなられがたい。しかし、それは、自然からの被制約性が科学的に、また技術的、経済的に克服される程度に応じて、両期間のギャップは克服される方向にあること、栽培における水耕法、ないし礫耕法、家畜飼育におけるウインドレス畜舎を考えただけでわかるであろう。

むろん、作物、家畜群の生長にともなう異種労働の継起は必要だが、その点は化学工業等における反応順序、速度、さらには機械工業における作業順序も同じことである。

つまり、農業における自然被制約性は単なる被制約性ではなく、自然科学と、技術、経済に媒介された上でのものであり、とくに農業労働の社会化が工業ほどに進まないのは現実にはその生産様式に規定されてである、という関連が重要なのである。したがって、現実技術の性格は——技術学的合理性と同時に——生産関係からの被制約性をとれない、その両面の関連をふまえて分析的に把握されねばならない。つまり自然的被制約性のみを孤立的に前提としてはならないのである。

## (2) 土地利用、耕作労働の重要性

作物生育への労働の働きかけのうち、とくに土性的条件の改善に投下され、土地を通じて作物に間接的に働きかける労働が大きなウエートをしめる（畜産の場合は、その飼料生産を通じる働きかけ）。このように、「土をつくり」、それによって「作物をとる」のが農業で、そこでは土地への耕作労働のみでなく、装置としての農地を造成・改良する労働も大きな意義を有する（そこに、単なる土地利用上の差額地代、絶対地代範疇のみならず、開拓地代範疇が成立する、という土地制度とのかかわりがある）。

以上のように、農業における土地は技術的には装置としての性格をもち、したがって一般的な生産条件（立地）、労働対象でもある労働手段として根源的な性格をもつ。

だが、それも水耕法にみられるように、農業生産における土地は科学、技術、経済の諸条件に規定されたものとして、現実にはそうあることをとらえねばならない。

以上のほか、労働力と生産手段の具体的結合様式はその自然条件と科学・技術・経済の水準によって多様な展開をしめす。それらの体系がいわゆる農法を形成するが、ここでも同様なことが前提にされねばならないであろう。<sup>(2)</sup>

これらの条件によって、農業労働は可変的な重層的体系をかたちづくる。そして、その労働体系の生産性を高むべき労働手段の体系が農業技術の根幹を構成する。基本はあくまで、農業労働である。ただ留意すべきは、農業においては労働手段の二形態、筋骨体系としての農業機械と、脈管体系としての土地装置との関連がきわめて深いという、機械工業にも化学工業にもみられない特徴である。

では、種子、仔畜等労働対象は農業技術においてどのような地位をしめるであろうか。

それもまた生産力の重要な要素であることはたしかである。

だが、施肥技術が、一方では施肥労働の機械化として農業技術を構成すると同時に、肥料生産における化学工業部門の技術発展と不可分の関係にあるのと同じく、改良種子、仔畜の生産労働における労働手段の体系がその中心技術を構成するはずである。

だが、(1)品種改良ならびに改良品種種子、仔畜生産そのものも広義の農業であること（育種、種子生産の資本主義的社会分業の発展を考慮に入れば明らかであろう。たとえば種苗会社、ブリーダー等）。(2)現在、種子、仔畜は狭義の農業生産過程における突然変異および純系分離、交配等の採種、育成労働によって、同時並行的に再生産される場合が少なくないこと（とくに前者の社会的分業の未展開な小農的生产様式において格別の品種改良労働のしめるウエートは低い、という特性が農業技術特殊説へ傾斜させるのであるが、本来それは分化し異種の労働過程を構成するものであることに留意せねば論理的混乱をまねくであろう）。<sup>(3)</sup>

したがって、労働対象たる種子、仔畜の技術的性格は、本来、農業労働手段、すなわち農業技術そのものに規定されるのであって、品種改良一般ではなく、その改良方向にこそ肝腎な技術的関連性格がある（体系性の一つ）。そして、さらにいえば、その性格と方向は——その生産

における技術のみでなく——現実適用の生産関係に鋭く規定されざるをえないのである。

このことは、個別部門産業における技術を考える場合とくに留意されねばならぬ。

というのは、施肥が化学工業部門技術に規定されるのと同じく、前述の農地造成ないし改良は土木部門技術に規定される等々、その他方では農業における生産諸関係に規定され、一定の方向をもって現実化する。現実技術はその統一にほかならぬ。

したがって、部門産業の現実技術の、技術学的法則性（合理性）と、その現実化を規定する生産関係による歪曲性と、その双方が構造的にとらえられねばならぬ。そこに、農業技術の一貫性なり、総合性の意義があらためてとわれねばならない理由がある。

そのことを、歴史的に概括することによって、確認しておこう。

## 2. 農業生産力、技術と生産関係

わが国の近代的農業生産力が——その小農的生产様式と同じく——長く半封建的地主的生产関係に制約されて成立したことはあらためていうまでもないであろう。日本農業の現実技術もそれを反映して一定の歴史的歪曲性を刻みこまれて今日に至っている。

それはひとことでいえば水田＝稲作中心主義であり、土地生産性追求への偏倚性、裸手労働と、それらを反映した農業生産力における労働対象の地位の高さ（逆にいえば、それは労働手段体系の地位の低さの表現）を特徴とする。

そのコロラリーとして、畑作、畜産（技術）の未発達、地力維持の認識の低さ等がでてくるわけだが、そのメカニズムについてもう一步立入ってみよう。

わが国の稲作技術が戦後初期まで、本質的には裸手労働に依存する移植栽培としてほとんど体系的な農法的・技術的变化をへずにきたことはすでに指摘されている（例えば古島敏雄）。

それは水田という特殊な土地の装置性と裸手労働に照応して品種改良を徹底的に発展させる、という技術方向をとった。

したがってその第1の特徴は、用排水施設造成、管理における労働と技術発展であり、第2が、先述の品種改良種子、肥料への生産力発展の偏倚性、その他脱穀調整労働の跛行的機械化である。

そこでは、とりわけ水の、土地装置不可欠の補助材料的性格の意義を大ならしめた。

水は、水稻の生態的環境の促進的要因としては、保温（水深調節と水管理労働の大いさ）と同時に肥料分、保肥力にも強い関係をもつ。

自然供給水の所要量は、(1)葉面蒸発 $41\text{m}^3/\text{ha}$ (2)水面蒸発量 $42\text{m}^3$ 、(3)地下滲透量 $50\text{m}^3$ 、計 $133\text{m}^3$ を要し、無栽培放置の場合の倍量を必要とする。したがってそうした龐大な水を保障する用排水技術、同施設造成技術の運用主体が支配階級であり、その技術独占を通じて、農業労働の編制がおこなわれたこともあらためて指摘する必要はないであろう。

水は当然、土地ないし施設と一体化し、土地所有制度と不可分の関係にあり、その技術過程を分離しうのような耕地整理は明治末の論争から大正にかけてはじめて緒についたといえるのである。

他方、そうした龐大な供給水は  $\text{ha}$  当り、 $20\sim 25$  キロの燐酸分、 $13\sim 15$  キロの窒素分を供給する。こうして、土地制度とあわせ、土地生産性を高める方向で農業生産力が半強制的に追求され、周倒な水管理労働のための小圃制、連作の形態が形成された。水田の場合は、水利用によってそれが可能であり、したがって、わが国では西欧の農法にみられるような輪作による地力維持の認識およびそのための労働＝技術と農法は十分には形成されえなかったのである。

また、保肥力を高める保水の強化のため、床じめ労働、くろぬり労働等の重労働も加わる。

逆に吸肥力の多い品種 *Oliza Sativa Japonica* (*Indica* でなく) が、土地生産性を高める方向で改良を重ねられていった。また、元肥と追肥の分施労働もおこなわれるようになった。

栽植密度、田植方式、何れも労働集約的な方向で農法が追求され、しかもそれを規定する同じ関係が労働手段の発展を阻害した。

基本的には、そうした生産力の諸態様のうえに、最近大型機械化「一貫」体系が導入されはじめたのである。その条件はいうまでもなく農業労働力の流出、つまり集約的裸手労働体系を支えた家族制度、農村地域社会の変化であり、その過渡を媒介したのが道具的作業機械、小型耕耘機の普及である。

それは、一方では農地改革による土地所有制度の変化と、他方におけるMSA以来の方向づけをもつ日本資本主義の復活過程によって現実化され、そこには小農の生産様式と、それを規定する資本主義的生産関係の刻印をもつ農業技術展開の軌跡が見られるのである。

その特徴を要約すればつぎの諸点が目立つ。

#### (1) 軍事産業技術の平和産業への転換利用

軍需市場を失った資本が、国内市場において農業を対象領域として転換した例は少なくない。戦時中の軍事産業技術、たとえば航空機エンジンの発達による小型高速空冷方式の利用が小型自動噴霧機、撒粉機、ミスト機を可能ならしめ、毒ガスの生産技術が農業に応用された。農地造成の土木技術にみられるブルドーザー、また耕耘過程における小型耕耘機もおなじである。

#### (2) 小農的技術体系枠としての小圃制

しかし、それらが小農的生産様式の中に定位せしめられるためには、いちじるしい技術学的歪曲が必要であった。というのは、小圃制—低所得という経済関係ともに—にあわせた動力耕耘機は動力における効率を十分発揮せしめぬ「小型」(したがって浅耕)以上にでられなかったからである。

またそれによって田植、収穫の二つの労働ピークは基本的にはくずされない(その農繁労働が家族数の大きさを規定した)。動力脱穀、ライスセンター方式で間接的にピークをくずすという限界があった。

しかし、労力不足はそれ以上に進行し、こうして大型機械化「一貫」体系にいま半強制的に誘導促進せしめられているのである。

以上のように日本農業の、本来的な意味での技術発展がいま苦渋にみちた形で追求されているのだが、それを規定する土地制度および小農的生産様式が早くから克服されている場合はどうか、それをアメリカ農業における技術発展についてみてみよう。

アメリカ農業もその労働手段からいえば、その植民地時代は鍬 *hoe*、木犁 *swing plough* を主とし、プラウの刃にブリキないし馬蹄の鍛鉄を着装する程度の水準であった。

独立革命に前後して、先行ヨーロッパの科学的農法、たとえばノーフォーク・システムが導入されたが、それはアメリカには根づかなかった。ノーフォーク・システムを規定するのは、根菜の導入による科学的輪栽(地力維持)、それによる生産力発展で、それを農業革命として全面的に行うにはエンクロージャーという土地制度の改変が必要であった。そして、それにとまなう労働集約化がやがて農業機械化という農業技術の発展を必然的たらしめたのである。<sup>(5)</sup>

これにたいし、アメリカの場合は、広大な「無占取地」への西漸のため、地力維持より労働節約がより緊要であり、その結果、(1)根菜類導入による労働集約的地力維持より、玉ころこし

の導入によるチスター・システムがとられ、(2)しかも、玉もちの中耕除草労働の増加を節約するため、ストレートに畜力作業機が開発されていった。そのイニシエーターは機械好きの農民、野かじ等で、1800～1830年にはプラウ関係の特許124種、とくに1800～1850年には撥土板の特許は200種をこえる試作競争が展開された。こうして、1837年G・デービスや、J・ディアーの綱鉄プラウが完成されていった（それは鉄道建設にともなう鉄鋼業の発展とその技術的開発、生産力発展を前提とする）。

収穫機も、当初の鎌 sickle から大鎌 cradle への発展後、マコーミックとハッシーが1833～34年リーパーを完成した。畜力中耕除草機は1820年から開発され、1840年には専用有輪中耕機（50年代エスタリの改良）がつくられた。

さらに1840年にピットの脱穀機が実用化され、同じくペノックの条播機もつくられた。

こうして、西漸運動とともに、1840年ころ畜力作業機の技術的体系化が完成し、そのことがまた西漸運動を拡大し鍛鉄プラウその他による重粘土、芝草地帯の開拓の可能性を促進した。

このように、産業革命から産業資本の確立に接続して、農業の作業機においてもアメリカ農業技術革命がおこなわれ、農業労働の資本主義的社会化の条件が早くもつくられていったのがアメリカの農業技術の特徴である。その意味で、それは典型的な技術発展の道を歩んだといえよう。

こうして、1830、40～1900年がアメリカ農業技術革命の時期といわれる。前半は畜力機械化一貫体系の完成、後半はその普及の段階である。イギリスのコーンローの廃止による小麦市場の拡大、市民戦争による労力不足等がそれに拍車をかけたことはいうまでもない、

ここで特徴的なことを2、3指摘しておく、つぎのとおり。

(1) 産業革命の根幹が作業機にあったようにアメリカの農業技術革命もまず作業機を中心に展開されたこと。

(2) それは土地生産性より、労働生産性へむけられるという本来の方向で追求、展開されたこと（その条件は前述のとおり）。

(3) したがって、土地単位面積当り収量は1866年から1900年迄1割弱しか上昇していない。むしろ、品種改良も行われたし、施肥改善もおこなわれたが、それは何よりも作業機械化に適合的な方向にむけて追求されたことが重要なのである。

品種改良でいえば、小麦の場合、日本のように土地生産性を高めるため、施肥し、多肥に耐える長稈種の開発でなく、逆に機械化に適合した短稈剛直、穂丈の揃う方向での品種改良で、しかも施肥は収奪肥料分を補給する程度であった（稲の場合は穂重による倒伏をふせぐため草丈の低いことが必要だったが、それは藁の利用と矛盾し、中程度のものとなった）。

したがって、裸手労働、多収を目標に改良を極度におしすすめた改良品種の種子をそのままに、大型機械化を進める矛盾がいまわが国では生起せざるをうないのである（そうした技術発展の総合性の軽視が、今回の冷害激化の一因となったこと先述のとうり）。

ところで、アメリカでは市民戦争後の畜力作業機体系の確立と、西漸運動によって、アメリカの農機具工業＝資本は早くも確立したのみか、産業資本主義の中で第1級の地位をしめた（1880年の農機具工場数1943にたいし1890年910工場と早くも集中過程を歩み、U.S.スチールの合同した翌年1902年マコーミックを中心にインターナショナルハーベスター設立）。

こうして、20世紀は動力における内燃機関利用のトラクタリゼーションを中心に農業技術が展開する。

ここで特徴的なのはアメリカ的コンベヤー・システムをとるフォードがトラクター生産に乗り出し、1917,8年から1925年にかけてインターと覇をきそい、(とくにホイール式)低廉な価格で販売するが結局敗退することである。

というのは、フォードはトラクター専門生産のみで、アタッチメントの作業機調達は他社依存というのでは農場にとって非能率で、そのため総合農機生産資本であるインターナショナル、J.ディアが結局市場支配をする(フォードは敗退する)。つまり、独占体制の段階にいたり、機械化「一貫」体系が独占のイニシアティブによって形成されるが、それは本質的には産業資本確立段階における畜力作業機体系の完成(いわば農工平等の交錯関係のもとでの)をひきつぐものであった。この両面を見失ってはならぬ。そこには農業を中心とする技術の総合性の側面が厳存するからである。

もう一つの特徴は、技術発達とともにトラクターの軽量化がおこなわれたことで、1915年の平均2.5万ポンドは1917年の0.5万、現在の0.2万ポンドと重量はこの半世紀で1割以下になった。

そのことが家族的農業にも両大戦間にトラクタリゼーションを可能にしたのである。

そうした農業及び関連技術の世界史的発展を前提にして、いま日本の水田＝稲作及び北海道畑作にも大型機械化「一貫」体系が導入されつつあるのだが、その「一貫」性は日本の農民的農業から内発的に生成したものではなく、そこに日本の農業技術の総合性という点から多くの技術的矛盾をとまわずにはおかない一因がある。

しかも、生産関係(土地制度、市場関係)、小農的生産様式(とくに地目)の異なる状態を基本的にはそのままにして行政的、セールスプロモーション的に大型機械化「一貫」体系がすすめられる。そこにつぎのようなさまざまな問題がでてくるのである。

- (1) 機械事故、農薬事故等、農業労働災害の多発
- (5) 過剰投資と階層分解の激発(とりわけ、農民の借金自殺)
- (3) 冷害被害の激化

われわれはむろん農業技術の発展の積極論を評価する。労働の社会化の必然だからである。

しかし、それにとまなう諸矛盾が現実技術の歪曲性にもとづくとするれば、そこにはそれにたいする対策、技術の現実的適用の条件の吟味と条件設定のきわめて不十分な点を重視せざるをえない。むろん、本質的にはそれが小農的生産様式と独占資本主義的生産諸関係に規定されているのであってみれば、そのこととのかかわりぬきには単なる糊塗対策に墮するが、しかもそうした点においてすら、その調整をすべき立場にある行政がそのことに配慮をおこなっていること、そののみか政治的経済的責任を回避した形での構造改善事業として大型機械化「一貫」体系が半強制的に導入されていることを指摘せざるをえない。

もともと、小農的生産様式を支配的形態とする日本農業にあって——それを規定した歴史的生産関係は同様に——本来の技術発展を品種改良、施肥等の土地生産性の専一的追求のもとにいちじるしく歪曲してきた。そこでは、篤農的な経験的品種模索から試験場における「科学的」交配品種への発展がみられ、そうした公的な技術支配と同時に、それに照応した公的技術教育支配がおこなわれてきた、といってよい。

農地改革によって農民はのかぎりにおいて小型耕耘機の導入による生産力発展の端緒をとらえたが、それは半封建的地主的生産関係にとってかわった従属的国独資的生産関係のもとであって、その結果の一頂点がいま大型機械化「一貫」体系への誘導・普及の矛盾となっている

のである。

そこでの大型機械はその体質において——1960年の増価額1,266億円から1974年の7,481億円への——拡大市場商品にすぎない。その技術合理性はそれが農民に無縁たりえないかぎりでのものにすぎない。そして、行政がそれに従属する。

したがって、そうして導入された技術手段は農民の生産力を形成するうえで、さまざまな矛盾をもたらさざるをえない。

しかし、そのことを現実の経験のなかから農民は学びつつある。大型機械とはいえ、その主体的契機を無視しては生産力たりえないからである。

そして、そこに再び技術技能教育＝学習における対抗関係が形成される。

そうした照応関係を、まず、農業生産力形成の現段階における構造的諸関連として北海道の現実 に即して明らかにして本論の定点としたいと考える（中心はむしろ大型機械である）。<sup>(6)</sup>

注1. R, Krzymowski, Geschichte der deutschen Landwirtschaft (Stuttgart, 1939)  
S196 ~ 197

この土地生産性を中心とする考え方がA, Thaer (1752 ~ 1828) Walffen (1788 ~ 1853), Voght, v. Thünen (1783~1850) にいたる農業重学 Statik des Landbaues の系譜のものであることはいうまでもない。松本五楼「綜合肥科学」(1939)もドイツ系農学の例外ではなかった。

注2. 1950年代半以降、加用信文、飯沼二郎、熊代幸雄、の諸氏によって農法論研究が水準を画して発展せしめられた。これによって、農業技術論は既述の「農業技術特殊説」等の抽象論から、歴史的、自然科学的、社会科学的に豊かな内容を約束する研究方法を獲得したが、現在、技術論との関係は逆に稀薄となり、重要な第2の課題を提供しているように考えられる。

注3. 現実、品種改良は、したがって、行政的試験研究機関でおこなわれ、それは最近の大型機械化の進行にともない、シードセンターと採種農家の体系的分業化へ移行しつつある。それらの統一的把握が農業技術教育にしめる意義の高さは、そこに（同一経営内の労働の異種性）一つの原因をもつといわねばならぬ。

注4. しかも、用排水体系は個別経営のみでは支配しえず、そこに特殊な水利施設を中心とする共同体的関係が成立し、しかも水利施設を造成するものの支配関係がそれに重合する。この点も現在国家投資（大型圃場整備）による農業技術支配の一条件となっている。

注5. 前述した農法研究の現到達水準は、それを①作付方式、②地力再生産方式、③労働手段体系、「技術的三範疇」としてとらえる点にある。（たとえば江島一浩「農業経営学と農法論」—『農法展開の論理』農法研究会編、お茶の水書店1975, 214頁）がその一代表といえる。この規定は加用信文氏の「生産力＝技術視点からみた農業の生産様式、換言すれば農業経営様式または農耕方式の発展段階を示す歴史的な範疇概念」との「農法」規定を発展させたものであるが、生産力を技術と等置しているように、それは不正確といわざるをえない。

第1に、客観的な「技術」には生産力の主体的契機は含まれぬこと。第2に前述の「3範疇」のうち労働手段の体系たる技術が中心的地位をしめる技術構造が平板にとらえられている点を克服する必要がある。土地の装置性にふくまれる「地力」は労働手段（本来的なそれは労働手段としての土地の双方）によって生産体系の中に顕現して定位せしめられる。したがって、加用信文氏の理論的寄与、三圃制から輪栽式への移行過程に穀草式が位置づけられた点は、封建的三圃制による耕作強制からの農民の自主的契機の指摘（労働手段は旧式）として高く評価されねばならないが、同時にその移行をさらに促進したのがJethro Tullの畜力条播・中耕機drill-and-horse-hoeという労働手段の開発・使用であって、その主導性がとりわけ強調されねばならないであろう。それによって根菜類の作付という「作付体系」と耨耕による「地力再生産」が可能になったのであって、三範疇は並列的なものではない、と筆者は考える（加用信文『日本農法論』お茶の水書房 1972.4. 123頁参照）。

注 6. 本章における筆者の農業技術論の原型は拙稿「農業技術学の方法論に関する覚え書—農業技術と地価統制—」(日本勸業銀行『自彊』1943.5—以下6回連載)にある。したがって戦後の星野、武谷技術論にたいする中村静治氏の批判と克服、農業技術論プロパーの分野では既述の農法論の成果の継承・発展が筆者の課題であるが、それは別途に果されねばならないと考えていることを附記したい。

## 第2章 北海道農業生産力形成の現段階

### 1. 北海道農業の展開過程の特質

#### (1) 北海道農業の歴史的性格

北海道農業が本格的に形成・展開されはじめたのは明治期に入ってからである。この場合、生産の担い手はむろん本州からの移民であり、農民経営が支配的となったから、その生産力形成・展開の基本的性格が、在来日本農業と軌を一にしていたことはいまでもないが、北海道の開拓が日本資本主義の「内国植民地」の位置づけのもとに展開されたことは、北海道農業の生産力形成を支配的に方向づけることになったといえよう。明治期の日本資本主義にとって北海道は経済的に「辺境」として位置づけられた。<sup>(1)</sup>すなわち、北海道は資本にとって「占拠されていない、自由な土地」(レーニン「ロシアにおける資本主義の発展」、『全集』第3巻627ページアイヌ系住人の権利は無視された)として存在し、これと移住者を結合することによって、当初から国内・世界(市場)を前提とする商業的農業が展開せしめられ、その展開過程のなかで合わせて国内市場を拡大してきた。このような資本による北海道農業の当初からの位置づけは、その生産力形成、農業技術の現実的展開にも府県の場合とは相対的に異なった影響力をもったことは否定できない。

このような視点に立つと、北海道における畑作はその特徴をもっとも端的に示しており、資本の要請に直接的に応える形で、作目としては加工原料農産物を基軸に、地力掠奪的に展開された。しかし、このような農業展開はやがてそれじたいの内部的矛盾の顕在化と市場条件の変化によってゆきずまり、その再編成をよぎなくされる。<sup>(2)</sup>そのひとつの問題は、地力掠奪的畑作農業が地力再生産構造をいかに回復するかということに帰着する。それは、具体的には畑作に輪作体系を加味すること、あるいはその一環として畜産(および飼料作)を導入するという、それじたい農業経営方式、農法にかかわる問題である。いまひとつの問題は、本州から移住してきた農民が主としてその生活を維持するための必要性から稲作を根強く志向し、それが北海道に定着・展開する過程で、あらたに技術的、経済的諸矛盾に直面したということである。

そして、畑作・稲作を基軸とする生産力構造のもとに寄生地主制が独自の展開をとげ、地主による農民収奪が、生産力構造の危機をいっそう深刻なものとした。さらに、この過程で、農業生産をめぐる地主・資本と農民との対抗関係はいっそう激烈なものとなったが、これに対する地主・資本の側の政策的対応はもっぱら拓殖政策を中心に展開された。しかし、第一次世界大戦以降の時期に及ぶ北海道農業の再編成過程は、このような地域農業の独自の課題に対応することを許さず、むしろ、ますます国家統制が強まり、日本農業全体にわたる国独資的再編成の一環として進行したのであった。

戦後、農地改革によって半封建的土地所有が消滅し、1950年以降、作付統制が撤廃されたことにより、北海道農業が農民的商品生産として展開する新たな条件が与えられた。事実、その

展開過程は、1950年代前半の戦前の生産力水準への回復過程を経て新たな展開を見せるのであるが、それはほぼ1955年をひとつの頂点としてやがて小農的商品生産をめぐる矛盾の深まりのなかでゆきづまり、その後はその資本主義的「打開」をめざす農業「近代化」政策によって支配的に方向づけられることになる。

この場合、北海道においては、一農業「近代化」政策を基調としつつも、その政策的意図が「地域開発」政策の中に強く貫徹してきた点に注目しなければならない。すなわち1960年以降本格的に展開されてきた農業「近代化」政策は、全体として農民に対する選別・分断を基調としつつ、具体的には農業構造政策と農業市場政策を2つの柱としてきた。前者は農業構造改善事業、後者は貿易自由化の推進を中軸とする価格・流通政策をその主な内容としている。そして、このような農業「近代化」政策は北海道「開発」政策と一体化しつつ、その政策目標をいつそう明確に体现してきたのであった。

いうまでもなく北海道「開発」政策は、戦後の資源開発から産業再編成（スクラップ・アンド・ビルド）へとその基調を移すなかで、農業はしだいに開発の重点からはずされ（したがって全体としては「スクラップ化」として方向づけられ）、ごく一部の農家層を中心に「高生産性農業」をつくるという、その意味で農業構造政策の北海道版として位置づけられてきた。しかし、農業に対する「スクラップ化」の方向は、畑作・畜産物の貿易自由化、米の減反政策などによって強く貫徹し、現に、北海道農業は、生産力構造、農家経済の再生産構造において重大な危機に直面しているのである。

## (2) 農業技術・生産力発展の特質

前項で指摘した北海道農業の歴史的な性格を前提として、農業技術の形成およびそれを基礎とする生産力発展、さらにその生産様式の歴史的過程としての農法の性格変化に着目するとき、北海道農業生産力の現段階の考察に欠かせない視点として少なくとも次の諸点をふまえておかなければならない。

まず、第1に府県農業技術の継承という点である。北海道の技術、農業生産力の展開の場は、前項で指摘したように、畑作を起点とし、逐次、稲作、畑作、畜産（一部に畑・畜混同）の3部門構成となった。このなかで農業技術は、おおむねそれぞれの部門ごとに形成・発展してきたのであるが、この場合、前章で指摘された日本における農業技術の歴史的な特徴はほぼそのままひきつがれてきたといえる。すなわち、稲作技術における土地生産性への偏倚性（土地、水の重視）、労働手段体系の地位の低さ、さらに畑作・畜産技術の未発達、などである。

第2に以上のことを前提としつつも北海道農業技術の相対的・独自の発展という側面が指摘されなければならない、それは大別して欧米畑作・畜産技術の導入の可能性として存在したという一面と、いまひとつ、それらの移植・開発をふくむ行政（試験研究機関）・資本（主として農産加工資本）の農業技術開発が進められてきたことに示されている。（品種、農機具など）。

第3に、稲作、畑作（および畜産）のそれぞれについて、農民による新しい農業技術（直播機などの農機具、品種）が開発されてきたという点も軽視できない。

また大要以上3つの農業技術がそれぞれ別途な発展をたどり、とりわけそれらが農民的農業技術として十分に総合的・統一的に形成・発展されなかった点が特徴的である。

農業生産力の形成・発展についてまとめるならば、これら農業生産力の客体的契機としての農業技術（労働手段の体系）がその主体的契機である農業労働力と結合するさいに、資本主義的生

産関係と小農的生産様式が強い規制要因となったことを基本的な特徴として指摘しておかなければならない。とりわけ、北海道では農業生産力の展開条件が行政・資本主導的につくられてきたため、農業生産力発展における小農的生産様式との矛盾もいっそう大きかったといえる。そして、この過程で、農業生産力の発展における流通過程（貯蔵・保管・輸送など流通過程に延長された生産過程とともに）の諸条件が重きをなし、農協組織がひととき高い位置を占めてきたのであった。

こうした条件のもとで、現在、農業機械投資を中心に形成された大型機械化「一貫」体系を技術的基礎として、農業生産力をめぐる対抗関係がいっそう鋭くなっている。とくに北海道の場合、すでに兼業農家が大半を占める府県の場合と異なり、「専業農家」を主たる構成部分とする農民階層構成のもとで、その矛盾、対抗関係がより広範に顕在化しているといえる。

## 2. 農業生産力の現段階

### (1) 農業生産力の不均等発展

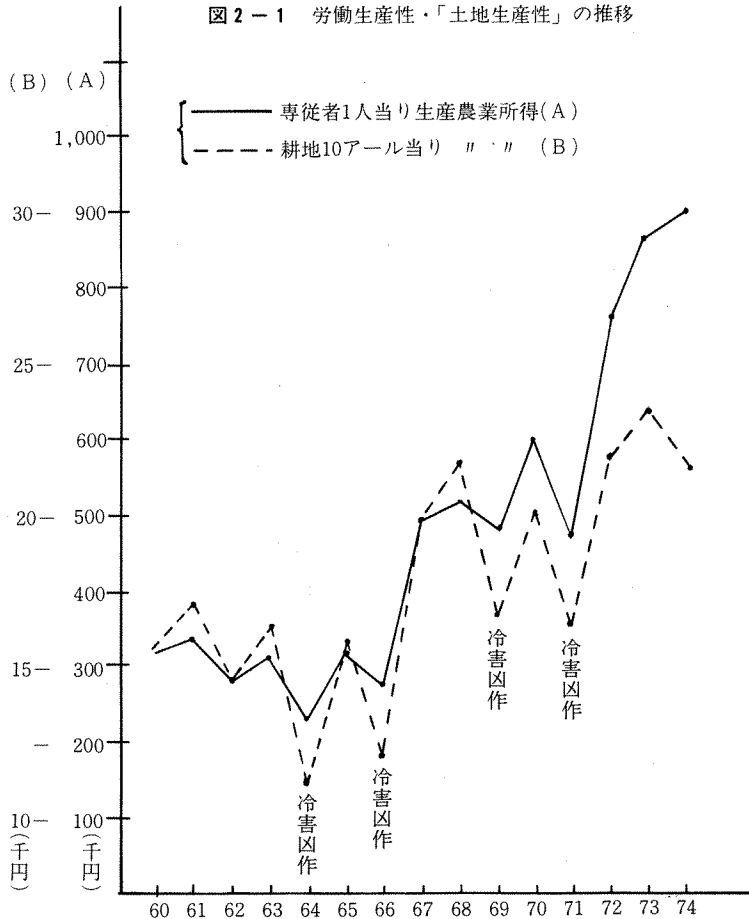
農業生産力の歴史的発展過程は、①個別農業生産単位(経営)、したがって個別的生産過程における生産力の展開と、②社会的再生産過程における総体の農業生産力、との統一された過程であるとみることができる。とくに後者については、単に農業生産部門内だけでなく、他の生産諸部門との関連における農業生産力の水準・位置を明かにすることが必要である。このような視点からまず指摘されなければならないのは、農業生産力の不均等発展である。それは、第1に工業生産力との間の不均等発展としてあらわれる。このことは資本主義社会に固有の傾向であり、日本の資本主義発展のなかでも一貫した傾向であったが、最近の北海道においても、その近似的指標として生産指数をとると、1970年を基準年次とする1974年の数値は、工業117.2に対し農業は109.1とたちおけている。また、北海道における農業と他産業との比較生産性を就業者1人当り純生産についてみると、1974年において、農業は他産業に対比して54.0%にすぎない。第2に、農業生産諸部門間の不均等発展の傾向が顕著になっている。ちなみに1970年を基準年次とする主な生産部門の生産指数は、耕種100.9、うち米84.9、麦類109.5、雑穀268.7、豆類111.3、いも類84.9、野菜総合140.3、果実122.6、花き241.4、工芸作物（主としててんさい）81.0、畜産127.8、うち乳用牛130.9、肉用牛336.0、豚153.0、ブロイラー71.0、鶏卵115.5、生乳118.0、などとなっており、生産の伸び率の農業生産部門ごとの不均等が目立っている。第3に、農業生産部門内における生産力の不均等発展は、さらに地域間、農民階層間においても顕著になっており、地域間では生産部門ごとの主産地とそれ以外との格差としてあらわれている。階層間格差についてはのちにふれる。

以上のような動向のなかで、日本の農業生産の総体における北海道の位置は、むしろ高まり、とくに主要畑作物、乳用牛、牛乳などでは、北海道が最大の産地となっている。このことは府県における農業生産力の停滞化ないし後退が北海道を上回る速度で進行しているという日本農業の危機的状態の反映でもある。さらに、農業生産力をめぐる不均等発展の諸相が、工業開発優先の「地域開発」、農産物貿易自由化、農業構造改善事業を中心とする農業「近代化」政策の展開によって促進されていることはいうまでもない。

### (2) 労働生産性・「土地生産性」の跛行的展開

農業生産力水準に関する計量的・近似的指標として、生産農業所得を専従業者1人当り、耕地10アール当りについてみると図2—1のとおりである。この2つの指標をそれぞれ労働生産性、「土地生産性」の近似的指標とみるならば、①長期間にわたる趨勢としては、「労働生産性」、

図 2-1 労働生産性・「土地生産性」の推移



注1. 農林省「農業所得統計」によって作成

2. 1970年を基準年次としてデフレートした数値

「土地生産性」とも上昇傾向をたどっている。②1960年代の前半期は労働生産性・「土地生産性」はともに停滞的である。③1960年代後半は、両者が併進的に上昇している。④1970年代に入ると労働生産性の急速な上昇、「土地生産性」の停滞傾向がみられる。つまり、両者の跛行的ないし不均等な展開がみられる。

さらに主要作物の10アール当り投下労働時間を表2-1についてみると、各作物とも一貫して急速な減少を示している。他方、主要農産物の10アール当り収量の推移をみると表2-2に示したように、1960年代、とりわけ60年代の後半は、各作物ともおおむね上昇傾向にあったが、70年代に入ると、畑作物の10アール当り収量の停滞ないし低下傾向がみられ、したがって労働生産性指標との対比では不均等性があらわれている。このような傾向は図2-1の示す傾向と符合しているといえる。このように1970年代に入って顕著にみられるようになった「労働生産性」と「土地生産性」の不均等な展開は、もともと農業の生産様式によってその意義を異にしている。資本制生産のもとでは、そのことがかならずしも利潤率低下には結びつかないが、日本のように小農

表2-1 主要作物の10アール当たり投下労働時間の推移(北海道)

| 作物 \ 年次 | 1961(A) | 1970 | 1974(B) | B/A×100 |
|---------|---------|------|---------|---------|
| 米       | 138.8   | 90.9 | 70.0    | 50.4    |
| 小麦      | 34.5    | 26.8 | 6.2     | 18.0    |
| ばれいしょ   | 49.2    | 24.6 | 19.0    | 38.6    |
| だいず     | 36.5    | 29.6 | 18.2    | 49.9    |
| いんげんまめ  | 27.7    | 20.7 | 16.8    | 60.6    |
| てんさい    | 73.5    | 50.0 | 39.1    | 53.2    |

注1.農林省「農産物生産費調査」による。

2.単位：時間

表2-2 主要作物の10アール当たり収量の推移(北海道)

| 年次 \ 作物 | 水稲  | 小麦  | ばれいしょ | 大豆   | 小豆  | 菜豆  | 牧草      | てんさい  |
|---------|-----|-----|-------|------|-----|-----|---------|-------|
| 1960    | 400 | 207 | 2,015 | 1159 | 163 | 166 | ※ 1,875 | 2,269 |
| 65      | 334 | 167 | 2,380 | 130  | 120 | 151 | 2,280   | 3,040 |
| 66      | 283 | 119 | 1,860 | 69   | 60  | 88  | 2,190   | 2,700 |
| 67      | 453 | 281 | 2,530 | 170  | 175 | 156 | 2,810   | 3,320 |
| 68      | 474 | 333 | 2,730 | 161  | 141 | 160 | 2,880   | 3,840 |
| 69      | 351 | 294 | 2,460 | 137  | 119 | 163 | 2,920   | 3,540 |
| 70      | 443 | 103 | 3,100 | 162  | 155 | 175 | 3,240   | 4,310 |
| 71      | 273 | 172 | 2,660 | 100  | 74  | 149 | 2,740   | 4,050 |
| 72      | 500 | 265 | 3,050 | 176  | 174 | 192 | 3,240   | 4,780 |
| 73      | 479 | 268 | 2,920 | 182  | 174 | 185 | 3,190   | 4,780 |
| 74      | 503 | 278 | 2,680 | 180  | 164 | 175 | 3,300   | 3,950 |
| 75      | 446 | 239 | 2,930 | 195  | 134 | 158 | 3,150   | 3,660 |

注1.農林省「作物統計」による

2.※牧草の1960年の欄の収量は1961年について

的生産様式が支配的な場合には、両者の併進が、その生産様式の中では、それに適合した生産力展開の形態であるといえる。逆に、両者が相互に不均等に推移することは、それじたい、小農的生産様式下の農業生産力構造をめぐる矛盾が深化していることを示している。以下では、その内部構造について考察することにした。

### (3) 農業技術の新段階—大型機械化「一貫」体系—

さきに農業生産力水準の指標について考察したさいに、1960年代の後半と70年代とでは異った動向を示していることに着目したが、このような農業生産力水準の動向を強く条件づけたのは農業機械化の進展である。<sup>(3)</sup> いいかえれば人力・畜力用農機具から跛行的機械化を経過する大型機械化「一貫」体系への移行が現段階の農業技術の発展過程をもっとも端的に特徴づけているとみることができる。ちなみに、表2-3は主要作物の投下労働時間のうち畜力・動力利用時間の推移を示したものである。この表によると、いずれの作物も、1960年代に入って畜力利用時間が急速に減少し、逆に動力利用時間が増大しているが、両者の利用時間の大小関係が相互に入れかわるのは米については60年代の初頭、畑作についてはほぼ60年代の後半期である。そして、70年代には、いずれの作物についても畜力がほとんど用いられなくなっている。また、表2-4は、主要農業機械の北海道における全般的な普及状況を示したものである。この表に

表 2-3 動力・畜力利用時間(北海道)(10アール当り時間)

| 年次   | 作物<br>区分 | 米   |      | ばれいしょ |     | てんさい |     | あずき |     |
|------|----------|-----|------|-------|-----|------|-----|-----|-----|
|      |          | 畜力  | 動力   | 畜力    | 動力  | 畜力   | 動力  | 畜力  | 動力  |
| 1957 |          | 9.7 | 2.8  | 11.0  | 0.2 | 9.2  | 0.2 | 6.9 | 2.1 |
| 58   |          | 8.9 | 3.4  | 9.5   | 0.2 | 9.0  | 0.2 | 6.6 | 1.3 |
| 59   |          | 9.1 | 3.3  | 9.1   | 0.8 | 9.7  | 0.4 | 7.7 | 1.3 |
| 60   |          | 8.4 | 4.1  | 9.6   | 1.0 | 8.9  | 0.6 | 6.3 | 1.2 |
| 61   |          | 7.6 | 4.8  | 9.3   | 1.3 | 8.8  | 0.8 | 6.2 | 1.0 |
| 62   |          | 6.0 | 6.2  | 8.3   | 1.5 | 8.5  | 0.8 | 4.0 | 1.2 |
| 63   |          | 4.6 | 9.5  | 7.4   | 1.7 | 8.1  | 0.8 | 3.8 | 2.4 |
| 64   |          | 3.9 | 11.3 | 6.0   | 1.9 | 6.6  | 1.1 | 4.1 | 1.3 |
| 65   |          | 3.6 | 10.9 | 5.7   | 1.9 | 4.6  | 1.5 | 3.1 | 2.3 |
| 66   |          | 3.0 | 10.9 | 5.1   | 2.1 | 4.8  | 1.7 | 2.3 | 1.5 |
| 67   |          | 2.6 | 12.9 | 4.5   | 2.5 | 3.9  | 1.7 | 1.9 | 2.4 |
| 68   |          | 1.6 | 13.1 | 4.0   | 2.8 | 3.0  | 2.8 | 1.8 | 2.7 |
| 69   |          | 1.6 | 12.8 | 3.1   | 3.2 | 2.4  | 3.0 | 0.6 | 3.5 |
| 70   |          | 1.1 | 12.8 | 2.0   | 3.2 | 2.0  | 3.0 | 0.5 | 3.6 |
| 71   |          | 0.7 | 12.7 | 1.5   | 3.7 | 1.6  | 3.4 | 0.2 | 3.4 |
| 72   |          | 0.6 | 13.6 | 1.1   | 3.9 | 0.9  | 4.1 | 0.3 | 3.2 |
| 73   |          | 0.3 | 15.7 | 0.9   | 4.1 | 0.5  | 4.3 | 0.1 | 3.7 |
| 74   |          | 0.1 | 10.5 | 0.5   | 4.6 | 0.4  | 4.5 | 0.0 | 3.1 |

注 農林省「農産物生産費調査」による

表 2-4 主要農業機械の普及状況(北海道)

(単位:台)

| 機種         | 年次 | 1960   | 1965   | 1966   | 1967   | 1968   | 1970    | 1971    | 1972    | 1973    | 1974    | 1975    |
|------------|----|--------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 農用トラクター    |    | 1,810  | 7,597  | 9,563  | 13,168 | 97,470 | 114,540 | 114,470 | 118,330 | 120,480 | 121,980 | 131,365 |
| 動力耕うん機     |    | 13,200 | 72,720 | 77,730 | 82,110 | 97,470 | 114,540 | 114,470 | 118,330 | 120,480 | 121,980 | 131,365 |
| 動力噴霧機      |    | 6,100  | 16,210 | 22,220 | 22,180 | 26,710 | 18,840  | 28,350  | 25,550  | 24,860  | 28,410  | 24,216  |
| 動力防除機      |    | 7,100  | 23,870 | 29,130 | 33,790 | 36,940 | 43,180  | 41,170  | 39,840  | 42,420  | 42,370  | 24,341  |
| スピードスプレーヤー |    | 50     | 197    | 248    | 344    | 567    | ...     | ...     | ...     | ...     | ...     | ...     |
| 田植機        |    | —      | —      | —      | —      | —      | 370     | 300     | 1,060   | 1,360   | 6,260   | 11,538  |
| 動力刈取機      |    | ※3     | ...    | 945    | 11,730 | 23,760 | 16,760  | 31,670  | 37,840  | 40,930  | 43,430  | 37,155  |
| 自脱型コンバイン   |    | —      | —      | —      | —      | —      | 1,410   | 2,200   | 3,940   | 4,540   | 6,510   | 11,714  |
| 乾燥機        |    | ...    | ...    | 25,010 | 31,280 | 35,280 | 36,990  | 46,150  | 47,180  | 47,570  | 48,470  | 40,793  |

注 北海道農務部「北海道農業統計表」による ※は農林省「農業動向総合把握」による。

よると、年次別普及状況は機種によって異なるが、動力耕転機が1965年ではほとんどの農家に普及したのに対し、乗用トラクターは、それが本格的に普及しはじめたのは1960年代の後半に入ってからである。いま、その階層別普及状況を表2-5についてみると、動力耕転機とトラクターの普及をめぐる階層別動向のちがいを明確に読みとることができる。すなわち乗用型と歩行型とを合わせた台数（その大部分は動力耕転機）は3ヘクタール以上層で100%前後の普及率を示しているが、乗用トラクター30馬力以上をとると、10ヘクタール以上層で48.9%、15ヘクタール以上層で87.1%と、そこに明瞭な階層差が存在する。つまり、動力耕転機がほとんど全階層的な普及状況に達したのに対し、大型トラクターは、依然として中・上層、とりわけ上層農を中心とした普及の水準にとどまっている。

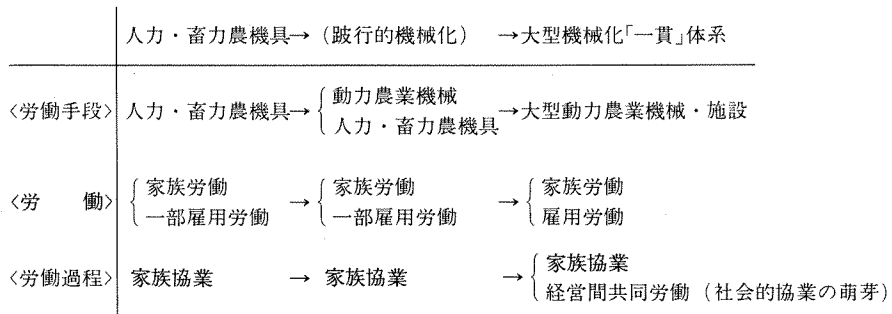
表2-5 トラクターの普及状況(北海道)

| 階 層       | 区 分    | 総農家数(戸)<br>(A) | 乗用型+歩行型<br>台数(台)(B) | 乗用30馬力以上<br>(台)(C) | B/A (%) | C/A (%) |
|-----------|--------|----------------|---------------------|--------------------|---------|---------|
| 経営耕地面積広狭別 | ～1ha   | 25,460         | 3,690               | 50                 | 14.5    | 0.2     |
|           | 1～3    | 24,730         | 19,380              | 510                | 7.8     | 2.1     |
|           | 3～5    | 28,980         | 31,040              | 1,500              | 107.1   | 5.2     |
|           | 5～7.5  | 23,880         | 28,000              | 3,100              | 117.6   | 13.0    |
|           | 7.5～10 | 11,780         | 12,570              | 2,920              | 106.7   | 24.8    |
|           | 10～15  | 11,600         | 11,450              | 5,670              | 98.7    | 48.9    |
|           | 15ha～  | 15,300         | 15,850              | 13,330             | 103.6   | 87.1    |
|           | 計      | 141,730        | 121,980             | 27,080             | 86.1    | 19.1    |

注1. 農林統計協会「農業機械統計」によって作成

2. 1973年1月現在

図2-2 農業機械化の過程



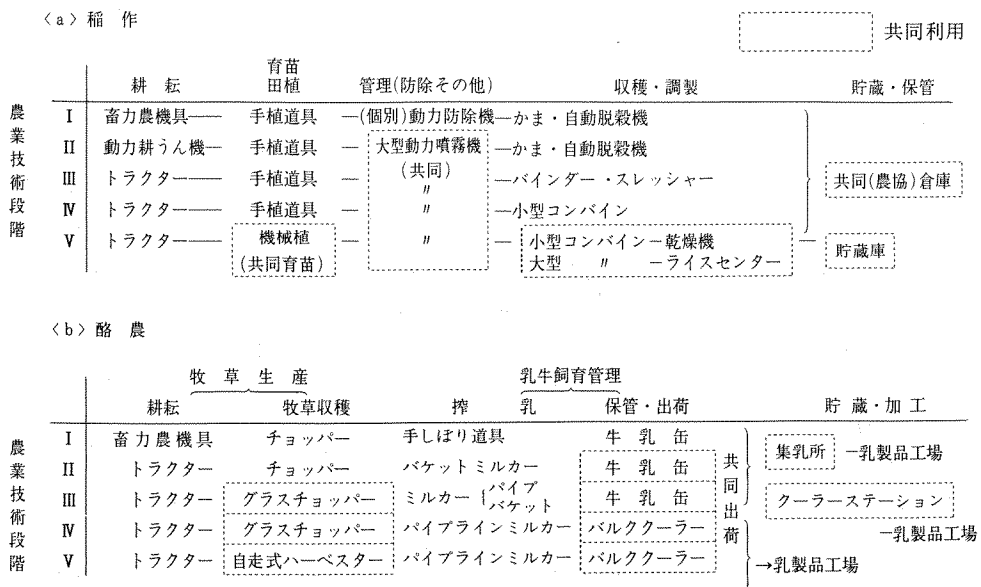
以上の動向を基礎にして農業機械化の過程を図式化するならば図2-2のようになろう。すなわち、これまで日本の農業生産力構造の客体的条件であった人力・畜力農機具は、耕耘過程の動力化を基礎にして、跛行的機械化を経て大型機械化「一貫」体系(大型流通・加工・貯蔵・保管施設などがこれに連続する)に移行しつつあるといえる。ところで、人力・畜力農機具から大型機械化「一貫」体系に移行する過程でたどる跛行的機械化の段階は、すでに戦前段階で脱穀・調製過程の動力機械化を出発点として進行しており、戦後は、その全自動化とともに耕耘過程、肥培管理過程の部分的動力化が進んだ。その際、その中軸的位置を占めた労働手段は動力耕耘機である。動力耕耘機は、その機種によって性能を異にするが、その動力化の範囲はおおむね耕耘過程に限られ、それも浅耕にとどまる。そして、内蔵する原動機を他の作業機に結びつけて動力化の領域を拡大することは困難であって、この点からも動力機械化は部分的、跛行的に進まざるをえない。この点が、のちに普及するトラクターの汎用性格と大幅に異なるのである。

また、動力耕耘機を基軸とする農業技術の現実的展開のいまひとつの特徴は、それが基本的に小農的生産様式の枠内で広範に普及できる技術的・経済的条件を有し、げんにほとんど全階層的に普及してきたということである。1960年代は、まさにその進行過程であり、このことにより農業機械生産資本は広大な国内市場を獲得することができた。しかし、この動力耕耘機を中軸とする跛行的機械化の段階は、その現実的展開の過程で、小農的生産様式との矛盾に直面する。そのひとつは労働力問題として顕在化する。すなわち、跛行的機械化(主として耕耘過程)

にともなう労働生産性の上昇は、それじたい経営規模の拡大を可能とするが、それは逆に機械化されない労働過程における労働のピークをいっそう激しくすることによって規模拡大の制約条件となる。また、すでに兼業化を志向しつつある中・小農民は、部分的・季節的労働のピークにより、労働力としての農業からの離脱を妨げられ、経営内、農業内に束縛されてピーク時以外での遊休化を拡大する（そのような意味で潜在的過剰人口を増大させる）。さらに、動力耕耘機は、従来の人力・畜力による耕耘過程が動力化したにとどまり、生産力水準を飛躍的にひきあげる技術としての条件を有していない。他方、農業機械生産資本の資本蓄積は、動力耕耘機が一巡した段階で新たな機械による市場拡大を求める。このような要請にこたえて出現したのがトラクターである。トラクターは、すでに欧米では半世紀前に新しい農業技術の中核的労働手段として定着し、日本（とりわけ北海道）でもごく一部の上層農に輸入機械として導入されていたが、それが大量に導入されるようになったのは、やはり国産体制が確立してからのことである。トラクターの技術的特質は、①大型化によって重筋作業の機械化の範囲が一段と拡大し、深耕をはじめとする土地改良的技術としての内実を有すること、②その内蔵する原動機に各種作業等を連結することにより、動力機械化の範囲が著るしく拡大し、さらに各種労働過程の連続が可能となること、③以上の特質をふまえて農業生産における機械化「一貫」体系が技術体系としてはじめて確立しうが、これを農業生産力発展の客体的条件としてみた場合、それは農業の多面的な発展の基礎的条件をなし（したがってのちに指摘するような現実の機械化にともなう単作化は機械化の本来的性格にもとづくものではなく、むしろ資本主義的性格による歪曲である）、農業生産力水準を飛躍的に発展させる契機となりうる。

しかし、このような農業技術の現実化は、実際には、資本および行政主導で推進され、農民的農業生産力の展開にとって著るしく歪曲された農業技術として、大型機械化「一貫」体系が形成される。以下では、図2—3を基礎としつつ北海道における主要な生産部門、稲作、畑作および野菜作、酪農について、大型機械化「一貫」体系の成立過程を特徴づけてみよう。

図2—3 大型機械化「一貫」体系への移行過程



## &lt;c&gt; 畑 作

| 農業技術段階 | 播 種 移 管 理 取 穫 (調製・加工) 貯蔵・保管 |          |          |              |           |          |
|--------|-----------------------------|----------|----------|--------------|-----------|----------|
|        | 耕 耘                         | 播 種 移    | 管 理      | 取 穫          | (調製・加工)   | 貯蔵・保管    |
| I      | 畜力農機具                       | 人力・畜力農機具 | 人力・畜力農機具 | 人力・畜力農機具     |           |          |
| II     | トラクター<br>(動力耕耘機)            | トラクター    | トラクター    | トラクター・ハーベスター |           | 共同(農協)倉庫 |
| III    | トラクター                       | トラクター    | トラクター    | 大型ハーベスター     | 大型調製・加工施設 |          |

## &lt;d&gt; 野菜作

| 農業技術段階 | 耕 耘 播 種 管 理 取 穫 選果・出荷(運搬) 貯蔵・保管 |                      |           |           |                      |               |
|--------|---------------------------------|----------------------|-----------|-----------|----------------------|---------------|
|        | 耕 耘                             | 播 種                  | 管 理       | 取 穫       | 選果・出荷(運搬)            | 貯蔵・保管         |
| I      | 畜力農機具                           | 人力農機具                | 人力農機具     | 人力農機具     | 人力・トラック              | 定温貯蔵庫<br>(共同) |
| II     | 動力耕うん機                          | 人力農機具                | 人力(動力)農機具 | 人力農機具     | 人力                   |               |
| III    | 動力耕うん機<br>(トラクター)               | (共同)人力・動力<br>農 業 機 械 | 動力機械      | 人力・動力農業機械 | (共同)・(共同)<br>農 協 施 設 |               |

表2—6 稲作作付規模別反(10アール)当り労働時間(北海道)

| 階 層                   | 区 分     | 1955  |                     | 1963  |                     | 1965  |                     | 1969  |                     | 1972  |                     | 1974 |                     |
|-----------------------|---------|-------|---------------------|-------|---------------------|-------|---------------------|-------|---------------------|-------|---------------------|------|---------------------|
|                       |         | 実 数   | 指 数<br>(平均<br>=100) | 実 数   | 指 数<br>(平均<br>=100) | 実 数   | 指 数<br>(平均<br>=100) | 実 数   | 指 数<br>(平均<br>=100) | 実 数   | 指 数<br>(平均<br>=100) | 実 数  | 指 数<br>(平均<br>=100) |
| 作<br>付<br>規<br>模<br>別 | ～1.0ha  | 181.3 | 115.8               | 157.0 | 125.5               | 135.5 | 116.5               | 124.5 | 115.5               | 104.0 | 128.2               | 96.9 | 138.4               |
|                       | 1.0～2.0 |       |                     | 135.0 | 108.3               | 118.3 | 101.7               | 106.6 | 98.9                | 87.4  | 107.8               | 90.5 | 129.3               |
|                       | 2.0～3.0 |       |                     | 135.4 | 108.2               | 117.7 | 101.2               | 94.5  | 87.7                | 85.5  | 105.4               | 93.6 | 133.7               |
|                       | 3.0～4.0 | 137.9 | 88.1                | 122.3 | 97.8                | 116.4 | 100.1               | 109.4 | 101.5               | 85.7  | 105.7               | 71.0 | 101.4               |
|                       | 4.0～5.0 |       |                     | 111.4 | 89.0                | 112.6 | 96.8                | 108.0 | 100.2               | 79.8  | 98.4                | 68.7 | 98.1                |
|                       | 5.0～6.0 |       |                     |       |                     |       |                     |       |                     | 74.4  | 91.7                | 62.9 | 89.9                |
|                       | 6.0～7.0 |       |                     |       |                     |       |                     | 89.7  | 83.2                | 76.7  | 94.6                | 60.9 | 87.0                |
|                       | 7.0ha～  |       |                     |       |                     |       |                     |       |                     | 73.1  | 90.0                | 55.9 | 79.9                |
|                       | 平 均     | 156.5 | 100.0               | 125.1 | 100.0               | 116.3 | 100.0               | 107.8 | 100.0               | 81.1  | 100.0               | 70.0 | 100.0               |

注 農林省「農産物生産費調査」による

## (a) 稲 作

稲作技術にとって装置としての土地の改良はきわめて重要な意義を有する。戦後、かん排水、暗渠、客土などの土地改良が広範に行われるなかで、作物品種改良を中心とする労働対象の改良がすすみ、それが多肥多労の肥培管理と結合して「土地生産性」志向の生産力展開を条件づけた。事実1950年代の稲作生産力は、人力・畜力農機具の技術を中軸として単位面積当り収量増加を志向して展開した。1960年代に入ると動力耕耘機が急速に普及したが、それは、基本的には人力・畜力による労働過程を動力化することにとどまり、それにともなう生産力構造の大きな変化はみられなかったが、一部に、耕耘労働の能率化、期間短縮による肥培管理の集約化(とくに防除)が可能となった。このような動力耕耘機を基軸とする跛行的機械化は、一面では、動力耕耘機の全階層の普及にともなって表2—6に示したように生産力の階層間格差を縮小した。しかし、他面ではこのことが、技術の跛行性(一貫した体系になりえない)と相まって、稲作上層農の生産力の優位性とそれにもとづく上向的發展を十分に裏づける条件となっていないという制約をもっている。これに対し、1960年代の後半に本格化したトラクターの導入は、技術・生産力構造に大き

な変化を与えることになった。まず、トラクターの導入は、従来行われてきた土地改良に加えて圃場整備（水田区画の大型化、農道整備）を前提とした。このことは、圃場整備の進展にみられる階層差、地域差がとりもなおさずトラクター導入の階層差、地域差をもたらすことを意味する。とくに圃場整備、機械化に必要な資金の蓄積、借入条件の差が大きく影響することになる。このようにトラクターを基軸とする機械化は、その導入条件において階層差をともなっているが、それはさらに稲作生産力にも反映する。すなわち圃場整備を基礎とするトラクター耕は、深耕の実現やそれによる労働生産性の上昇によって可能となった肥培管理労働の集約化によって、単位面積当り収量の増大に結びつく。事実、1960年代の後半期は、すでに指摘したように、「土地生産性」と労働生産性が併進的に上昇しており、冷害は十分克服されていないとはいえ、その最低収量水準が引き上げられることにより、生産力水準の安定化も含めて、稲作生産力水準が飛躍的に上昇した時期とみなすことができる。さらに、その内部では生産力の階層差、地域差が拡大しはじめたことも軽視できない。

稲作における大型機械化「一貫」体系が現実導入されたのは1970年代に入ってからであり、跛行的機械化のなかで残存していた田植、収穫労働の機械化が中心となった。この結果、表2-7

表2-7 稲作作業別労働時間（北海道）

| 項 目         | 年 次 | 1965   | 1974  | 増 減     |
|-------------|-----|--------|-------|---------|
| 合 計         |     | 119.5  | 70.0  | △49.5   |
| （内 雇 用）     |     | (16.0) | (9.5) | (△ 6.5) |
| 種 子 子 措     |     | 0.4    | 0.3   | △ 0.1   |
| 代 苗 一 切     |     | 7.5    | 8.1   | 0.6     |
| 本 田 耕 起・整 地 |     | 7.4    | 3.2   | △ 4.2   |
| 元 肥         |     | 4.4    | 2.2   | △ 2.2   |
| 直 播         |     | 1.2    | —     | —       |
| 田 植         |     | 22.1   | 14.6  | △ 7.5   |
| 追 肥         |     | 0.1    | 0.2   | 0.1     |
| 草           |     | 24.4   | 12.0  | △12.4   |
| か ん 排 水 管 理 |     | 9.1    | 6.6   | △ 2.5   |
| 防 除         |     | 1.3    | 1.4   | 0.1     |
| 稲 刈・稲 こ ぎ   |     | 38.5   | 17.8  | △20.7   |
| もみ乾燥・もみすり   |     | 3.1    | 3.6   | 0.5     |

注 農林省「農産物生産費調査」による

表2-8 水稻うるち作付品種別作付比率（北海道）

（単位：％）

| 区 分<br>順 位 | 1967  |      | 1973  |      | 1975  |      |
|------------|-------|------|-------|------|-------|------|
|            | 品 種 名 | 比 率  | 品 種 名 | 比 率  | 品 種 名 | 比 率  |
| 第1位        | しおかり  | 23.6 | ゆうなみ  | 18.0 | イシカリ  | 30.2 |
| 第2位        | ほうりゅう | 14.8 | ほうりゅう | 17.4 | ゆうなみ  | 20.1 |
| 第3位        | イシカリ  | 8.6  | しおかり  | 17.4 | しおかり  | 10.4 |
| 第4位        | ゆうなみ  | 7.1  | イシカリ  | 14.8 | さ ち ほ | 6.6  |
| 第5位        | そらち   | 6.9  | コーカラ  | 5.4  | ほうりゅう | 6.1  |
| 小 計        |       | 61.0 |       | 73.0 |       | 73.4 |
| 1～10位計     |       | 83.2 |       | 89.8 |       | 88.2 |

注 北海道食糧事務所資料による

に示したように、「稲刈・稲こぎ」労働時間が著しく短縮され、田植労働の動力化による労働節減も目立っている。そして、この大型機械化「一貫」体系の導入にともない、稲作生産力構造に少からぬ歪みを生じている。その主な内容としては、(1)大型機械化「一貫」体系の導入が資本、行政主導で推進されているため、機械化が農業生産力の多面的な発展を条件づけるのではなく、むしろ、逆に、機械の効率的利用を主眼として、特定品種への集中(表2—8参照)、コンバイン利用の結果としての稲わらの焼却とそれによる有機質の不足、さらにそのことによる地力低下、のちにのべるような農外就業の増大にともなう肥培管理労働の削減(いわゆる「手ぬき」)、などにより単位面積当り収量の停滞ないし低下や品質低下(表2—9参照)を招いている。この結果、1970年代に入ると「土地生産性」と労働生産性の跛行性が顕著になると同時に、前掲表2—6に示したように、生産力の階層間格差も大きくなっている。

#### (b) 酪農

酪農の生産過程は、大別して搾乳部門と飼料生産部門とからなり、そのそれぞれについて機械化が進められてきた。前者にあっては搾乳の動力化がその技術の特徴づけているが、それが牛乳搬出・出荷労働に結びつくことから、搬出・出荷労働過程における牛乳缶からバルククーラーへの移行が技術・生産力構造を特徴づける条件になっている。他方、飼料生産部門においては、人力・畜力農機具から大型機械化「一貫」体系への移行のなかで牧草収穫労働過程の機械化が重要な位置をしめている。

以上の諸点をふまえて、酪農機械化の動向をみた場合、トラクター、ミルカーの導入は、ともに1960年代の後半に本格化する。そして、このことを客体的条件としつつ酪農における農業生産力が発展したことを確認しておかなければならない。まず、牧草の単位面積当り収量は前掲表2—2に示したように、1960年代の後半に上昇し、70年代に入ってやや停滞気味に推移している。1960年代後半期の牧草収量の増大は、トラクター導入にともなう深耕を基礎にして牧草の肥培管理が改良されたことによるところが大きいといえよう。また、70年代に入ってから牧草収量の停滞は、牧草畑の規模拡大、労働力の農外流出などによって、肥培管理が十分に

表2—9 道産米の等級別比率(%)

| 区分<br>年次 | 総買上数量 | 1 等 | 2 等 | 3 等  | 1~3 等 | 同 全国 |
|----------|-------|-----|-----|------|-------|------|
| 1961     | 592   | 0.0 | 2.0 | 37.5 | 39.5  | 56.1 |
| 62       | 532   | 0.0 | 0.4 | 20.1 | 20.5  | 70.8 |
| 63       | 648   | 0.0 | 1.0 | 21.2 | 22.2  | 57.0 |
| 64       | ○ 427 | —   | 0.0 | 5.0  | 5.0   | 50.2 |
| 65       | 634   | 0.0 | 0.8 | 18.0 | 26.0  | 61.6 |
| 66       | ○ 567 | —   | 0.0 | 18.6 | 18.6  | 62.8 |
| 67       | 999   | 0.0 | 2.7 | 43.4 | 46.1  | 66.7 |
| 68       | 1,095 | 0.0 | 1.8 | 39.9 | 41.7  | 56.0 |
| 69       | ○ 765 | 0.0 | 0.6 | 15.4 | 16.0  | 51.9 |
| 70       | 769   | 0.0 | 0.5 | 27.4 | 27.9  | 52.3 |
| 71       | ○ 437 | 0.0 | 0.5 | 11.3 | 11.8  | 46.4 |
| 72       | 654   | 0.0 | 0.2 | 17.4 | 17.6  | 47.4 |
| 73       | 586   | 0.0 | 0.4 | 25.3 | 25.7  | 52.9 |
| 74       | 681   | 0.0 | 0.5 | 24.5 | 25.0  | —    |

注 北海道食糧事務所調べ ○印は凶作ないし不作

表 2-10 搾乳牛 1 頭当り搾乳量の推移(北海道)

| 年 次  | 乳 量(kg) | 年 次 | 乳 量(kg) | 年 次 | 乳 量(kg) |
|------|---------|-----|---------|-----|---------|
| 1955 | 4,617   | 63  | 4,033   | 71  | 4,608   |
| 56   | 4,527   | 64  | 4,050   | 72  | 4,764   |
| 57   | 4,442   | 65  | 4,264   | 73  | 4,708   |
| 58   | 4,214   | 66  | 4,325   | 74  | 4,627   |
| 59   | 4,004   | 67  | 4,524   |     |         |
| 60   | 3,869   | 68  | 4,524   |     |         |
| 61   | 3,834   | 69  | 4,680   |     |         |
| 62   | 3,899   | 70  | 4,609   |     |         |

注 農林省「牛乳生産費調査」による

表 2-12 牛乳生産の投下労働時間(北海道) (単位:年間1頭当り時間)

| 区 分<br>階 層             |       | 1 9 7 1 |       |             |       | 1 9 7 4 |       |             |       |
|------------------------|-------|---------|-------|-------------|-------|---------|-------|-------------|-------|
|                        |       | 飼 育 労 働 |       | 飼 料 生 産 労 働 |       | 飼 育 労 働 |       | 飼 料 生 産 労 働 |       |
|                        |       | 時 間     | 指 数   | 時 間         | 指 数   | 時 間     | 指 数   | 時 間         | 指 数   |
| 飼 育<br>頭 数<br>規 模<br>別 | 1～2頭  | 424     | 192.7 | 118         | 210.7 | 366     | 194.7 | 88          | 220.0 |
|                        | 3～4   | 377     | 171.4 | 105         | 187.5 | 285     | 151.6 | 72          | 180.0 |
|                        | 5～6   | 292     | 132.7 | 64          | 114.3 | 265     | 141.0 | 71          | 177.5 |
|                        | 7～9   | 242     | 110.0 | 73          | 130.4 | 217     | 115.4 | 57          | 142.5 |
|                        | 10～14 | 214     | 97.3  | 55          | 98.2  | 210     | 111.7 | 46          | 115.0 |
|                        | 15～19 | 201     | 91.4  | 44          | 78.6  | 176     | 93.6  | 37          | 92.5  |
|                        | 20～29 | 177     | 80.5  | 42          | 75.0  | 174     | 92.6  | 32          | 80.0  |
|                        | 30頭以上 | 119     | 54.1  | 29          | 51.8  | 136     | 72.3  | 25          | 62.5  |
| 平 均                    |       | 220     | 100.0 | 56          | 100.0 | 188     | 100.0 | 40          | 100.0 |

注1. 指数は平均を100とする数値

3. 飼料生産は家族労働時間のみ

2. 農林省「牛乳生産費調査」による

ゆきとどかなくなってきたことの反映とみることができる。また、搾乳牛1頭当り搾乳量の推移をみると表2-10に示したように、1950年代後半から60年代の前半にかけては低下気味に推移するが、60年代の後半には漸次上昇し、70年代に入ってふたたび停滞する。ここでは1960年代の後半にミルカーの導入などにより飼育管理労働の能率が向上するなかで、これと併進的に1頭当り搾乳量が増大していることに注目する必要がある。しかし70年代に入ると様相を異にする。表2-12によって年間搾乳牛1頭当り投下労働時間についてみると、飼料生産労働の方が階層差が大きいこと、飼育労働の場合にはパイプラインミルカーの導入により階層差がむしろ平準化していること、などが指摘できる。酪農生産における大型機械化「一貫」体系が主として飼料生産部門に導入され、しかもその導入が上層農家に優位に行われているため、とくに飼料生産部門で階層差が大きくなっているのである。また、ここ数年らい、飼育部門でバルククーラーの導入がはかられ、すでに酪農専業地域の根室地域では53.1% (1975年現在) の普及率を示しているが、この中で、その導入による搬出労働の軽減もさることながら (これは時間的にはそれほど大きくない)、画一的導入によって小規模乳牛飼育農家を排除する方向で強い市場規制力が作用している点に注目しなければならない。

このように70年代になって酪農における大型機械化「一貫」体系が急速に導入される中で

生産力構造をめぐる矛盾が顕在化し、生産力水準の階層間格差がますます大きくなってきている。

### (c) 畑作・野菜作

北海道における畑作は、十勝、網走地域を中心に展開してきており、両地域の畑作主産地としての地位は現段階も変わらないが、その生産力構造は、畑作機械化の進展の過程で少なからぬ変化を示している。そのような変化は主としてトラクターの導入を契機として生じたといえる。すなわち、トラクター耕による深耕、動力防除機の導入などは、従来の浅耕・少肥・少労の豆類単作から深耕・多肥・多労の根菜類（ビート、ばれいしょ）の導入を可能とし、むしろ後者が基幹の畑作物として位置づいた。このような作付構成の変化は、表2—13に示したように1960年後半に顕著になっており、ほぼトラクター化の進展と符合している。このことじたい、畑作の集約化を意味するが、さらに集約的作物としての根菜類の単位面積当り収量が、1965年以降急速に上昇し、とくに主産地において高く、労働生産性と併進していることは、1960年後半期の畑作生産力の前進的側面をあらわしているといえよう。

しかし、やがて1970年代に入り、畑作の機械化が収穫労働の機械化をふくむ大型機械化「一貫」体系に移行するなかで、生産力形成・発展をめぐる諸矛盾がにわかに顕在化する。連作障害、地力低下の問題、新たな病虫害の発生、およびそれらに起因する単位面積当り収量の低滞ないし低下の現象があらわれ、労働生産性と「土地生産性」の跛行的展開が顕著となってくる。こうした傾向はそれぞれの作物の主産地においてとくに著しい。それは、たとえば、ばれいしょ、ビートなどがともに加工原料農産物であって、その生産が工場周辺に過度に集中してきたこと、そのような地域において大型機械化「一貫」体系の導入が、資本・行政主導で促進されてきたことなどにより、生産力形成が歪曲されたためである。

野菜作は一般畑作よりは集約的であるが、それじたい露地栽培から施設園芸にいたるまで、資金的にも労働投入の面でも著しく集約度を異にしている。北海道の野菜作は、たまねぎ、ばれいしょなど一部の移出作物を除けば、大半が道内消費用であり、消費地周辺に立地する近郊野菜生産が支配的で、技術・生産力構造も概して閉鎖的であった。そのような野菜生産構造に変化を生じてきたのは1960年代に入ってからである。変化をもたらした条件は、動力耕耘機、防除機、ビニールハウスを中心とする新しい技術の導入、野菜の消費構造の変化、青果市場の再編成（とくに局地的地方市場の再編成）、などであり、これらの条件が相互にからみ合う中で野菜生産をめぐる産地間競争が激烈になった。この場合、その生産力構造は、耕耘、防除の動力化など機械化が一面において進展し、その点で一般畑作と共通しているが、他面では、肥培管理、収穫労働など労働集約的な労働過程を残存せしめ、生産力形成において労働の保有状態が依然として決定的な要因となっている。また、選別、出荷、貯蔵・保管などで大型施設、交通条件が生産力発展で重要な位置を占めていることも特徴的である。

以上、主要な農業生産部門について、大型機械化「一貫」体系の現実化の過程とその特徴に関してのべたが、これらを次のように要約することができよう。(1)北海道農業の生産力形成は、1960年代以降は機械化、したがって労働生産性志向を中軸に進んできた。この過程で1960年代の後半は、「土地」・労働生産性が併進的に上昇し、その点で北海道の農業生産力は一段階高いレベルに達したが、それがトラクター導入（その導入過程で階層差がある）を基礎として進行的なため、生産力展開をめぐる階層差が激烈となった。(2)70年代は大型機械化「一貫」体系の導入が資本・行政主導的に進められるようになった時期であるが、この過程で生産力構造の内部

表2-13 主要作物の作付地域動向

| 作目                    | 区分<br>年次 | 全道作付<br>面積(ha) | 全道10アール<br>当り平均<br>収量(kg) | 支庁別作付順位別全道比率(%) |                          |         |         |      |  |
|-----------------------|----------|----------------|---------------------------|-----------------|--------------------------|---------|---------|------|--|
|                       |          |                |                           | 第1位             | 同10アール<br>当り平均<br>収量(kg) | 第2位     | 第3位     | 計    |  |
| 水<br>稲                | 1950     | 134,618        | 325                       | 空知 35.3         | ...                      | 上川 30.2 | 石狩 8.1  | 73.5 |  |
|                       | 55       | 143,571        | 231                       | " 35.2          | 351                      | " 29.4  | " 8.8   | 73.4 |  |
|                       | 60       | 197,100        | 400                       | " 35.7          | 406                      | " 27.6  | " 11.2  | 74.5 |  |
|                       | 65       | 229,700        | 334                       | " 37.2          | 355                      | " 25.8  | " 11.5  | 74.5 |  |
|                       | 70       | 206,400        | 443                       | " 36.6          | 458                      | " 24.8  | " 10.8  | 72.2 |  |
|                       | 75       | 185,300        | 446                       | " 43.4          | 444                      | " 20.7  | " 9.0   | 73.1 |  |
| 小<br>麦                | 1950     | 25,546         | 146                       | 網走 40.0         | ...                      | 上川 16.9 | 十勝 15.6 | 72.7 |  |
|                       | 55       | 15,815         | 163                       | " 47.6          | 176                      | 十勝 15.0 | 上川 14.7 | 77.3 |  |
|                       | 60       | 15,100         | 207                       | " 58.3          | 237                      | " 14.5  | " 6.6   | 79.4 |  |
|                       | 65       | 14,400         | 167                       | " 49.4          | 185                      | " 26.3  | " 6.5   | 82.2 |  |
|                       | 70       | 11,700         | 103                       | 十勝 55.5         | 68                       | 網走 39.9 | 胆振 1.6  | 97.0 |  |
|                       | 75       | 23,100         | 239                       | " 55.8          | 235                      | " 31.8  | 上川 5.4  | 93.0 |  |
| 大<br>豆                | 1950     | 78,102         | 162                       | 十勝 46.7         | .....                    | 網走 16.4 | 上川 7.7  | 70.8 |  |
|                       | 55       | 54,498         | 171                       | " 44.0          | 169                      | " 16.0  | " 7.1   | 67.1 |  |
|                       | 60       | 68,600         | 159                       | " 60.3          | 172                      | " 12.7  | " 5.3   | 78.3 |  |
|                       | 65       | 32,900         | 130                       | " 65.0          | 136                      | " 10.6  | " 4.3   | 79.9 |  |
|                       | 70       | 10,000         | 162                       | " 74.2          | 173                      | " 7.0   | 渡島 4.8  | 86.0 |  |
|                       | 75       | 17,100         | 195                       | " 81.9          | 206                      | 上川 4.8  | 空知 3.8  | 90.5 |  |
| 小<br>豆                | 1950     | 15,951         | 145                       | 十勝 29.7         | ...                      | 空知 13.9 | 上川 10.5 | 54.1 |  |
|                       | 55       | 32,394         | 155                       | " 25.0          | 181                      | " 16.9  | " 14.5  | 56.4 |  |
|                       | 60       | 61,000         | 163                       | " 38.6          | 192                      | 上川 15.3 | 空知 11.5 | 65.4 |  |
|                       | 65       | 44,200         | 120                       | " 46.4          | 110                      | " 16.8  | 網走 10.3 | 73.5 |  |
|                       | 70       | 43,800         | 155                       | " 51.4          | 162                      | " 14.7  | " 11.0  | 77.1 |  |
|                       | 75       | 46,700         | 134                       | 上川 34.5         | 118                      | 十勝 26.3 | 空知 10.3 | 71.1 |  |
| ば<br>れ<br>い<br>し<br>ょ | 1950     | 71,269         | 1,518                     | 網走 22.4         | ...                      | 上川 22.0 | 十勝 16.3 | 60.7 |  |
|                       | 55       | 68,340         | 1,358                     | " 22.5          | 1,418                    | " 17.2  | " 15.5  | 55.2 |  |
|                       | 60       | 89,300         | 2,015                     | " 21.4          | 2,137                    | " 18.7  | " 14.2  | 54.3 |  |
|                       | 65       | 92,800         | 2,380                     | " 24.4          | 2,580                    | 十勝 21.7 | 上川 19.0 | 65.1 |  |
|                       | 70       | 69,800         | 3,100                     | " 27.7          | 3,730                    | " 26.9  | " 16.0  | 70.6 |  |
|                       | 75       | 71,400         | 2,930                     | " 33.2          | 3,300                    | " 31.2  | " 11.1  | 75.4 |  |
| て<br>ん<br>さ<br>い      | 1950     | 14,666         | 1,230                     | 網走 32.1         | ...                      | 十勝 32.0 | 上川 12.9 | 77.0 |  |
|                       | 55       | 16,200         | 2,216                     | " 36.1          | 2,370                    | " 22.1  | " 13.4  | 71.6 |  |
|                       | 60       | 46,000         | 2,269                     | " 36.9          | 2,379                    | " 27.5  | " 7.5   | 71.9 |  |
|                       | 65       | 55,200         | 3,040                     | " 40.8          | 2,910                    | " 34.2  | " 6.7   | 81.7 |  |
|                       | 70       | 54,100         | 4,310                     | 十勝 45.7         | 4,290                    | 網走 34.4 | " 7.7   | 87.8 |  |
|                       | 75       | 47,958         | 3,660                     | " 49.8          | 3,700                    | " 34.0  | " 6.9   | 90.7 |  |

注 資料：農林省「作物統計」，「北海道全基本調査」

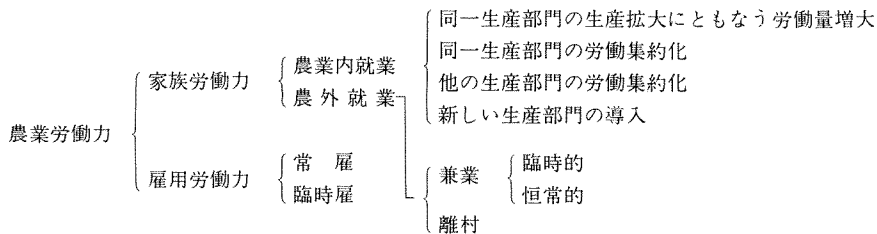
的矛盾がいっそう深まった。それはひとつには大型機械化「一貫」体系が技術体系として歪曲されていることによっている。具体的には、(イ)個々の機械（労働手段）が多くの場合、開発途上にあり農業技術としてまだ安定的に定着しがたい状況にある。(ロ)とくに農業生産力の主体的条件である労働力の諸条件（健康保全、事故防止装置、操作のしやすさ）などが十分考慮され

ていない。いすでに指摘したように機械は本来、農業生産力を多面的に発展させるための技術的条件であり、機械じたいが多面的に開発されなければならないが、実際には、機械生産資本本位の開発が行われている。いいかえれば技術開発にさいして地域農業の実態や農民の要求がほとんど反映されていない。このような技術体系としての歪曲性に加えて、その導入がメーカーや行政の強いイニシアティブのもとに推進されているため、それが現実の生産力形成・発展をめぐる矛盾としていっそう顕著に具現しつつあるといえる。

### 3. 農民層分解と農業共同化の現段階

### (1) 農民諸階層の動向

小農の生産様式における農業生産力は、生産手段を私有し家族労働力を基幹の労働力として展開されるため、生産力構造の均衡的条件を求めがちである。そして、家族労働力を中心とする労働力の保有状況が生産力形成に決定的な意義を有する。このような視点に立って農業技術の現段階—大型機械化「一貫」体系—の導入による生産力形成における労働力の構成変化についてみるならば次のように特徴づけることができる。農業労働力の構成が労働生産性の上昇のもとで変化するに際しては次図のような場合が考えられる。このことと機械化の動向を結びつけた



場合、人力・畜力農機具の技術段階では、農業生産の拡大・集約化はとりもなおさず農業労働力の拡大（家族労働力、雇用労働力ともに）をもたらす。これに対し跛行的機械化の技術段階では、機械化された労働過程においては投下労働が急速に減少するが、他の労働過程においては、とくに農業生産が内包的に展開（集約化）する場合には、投下労働量は顕著な減少を示さない。1960年代後半の北海道農業の動向はげんにこのような傾向を示してきた。すなわち表2—14によれば、常雇は一貫して減少傾向をたどっているが、1960年代後半の減少度合は比較的鈍く、臨時雇はこの期にむしろ増大している。これは、この期に、農業機械化と農業集約化（たとえば畑作において労働集約的なばれいしょ、てんさいの作付が増大するなど）が併行して進んでおり、そのようななかで農業生産力が発展したことを示している。ところが、70年代に入ると、常雇が激減すると同時に、臨時雇延人数も70年をピークとして減少傾向に転ずる。このことは大型機械化「一貫」体系が導入される中で、雇用労働力の排除が急速に進んでいることを示している。同時に、この期に家族労働力も急激に減少している。このような農業労働力（農業生産力の主体的条件）の急激な減少が、農業生産力構造の内部的矛盾（それは端的に取量低下に示されている）を深めていることはいうまでもない。しかし、このような動向のなかにあっても農業労働力の構成は農民階層によって異っている。ちなみに、表2—15によると、全体として農業雇用労働力が減少する中にあっても、経営耕地面積の大きい農家においては、常雇がかなり入っており、臨時雇も100日を超える日数に及んでおり、雇用労働力が農業労働

表 2-14 農 業 雇 用 労 働 力 の 推 移

| 年次   | 区分 | 常 雇         |             |          |                  | 臨 時 雇        |             |           |                  |
|------|----|-------------|-------------|----------|------------------|--------------|-------------|-----------|------------------|
|      |    | 雇用農家数       | 雇用人数        | 雇用農家割合   | 雇用農家1戸<br>当り雇用人数 | 雇用農家数        | 雇用日数        | 雇用農家割合    | 雇用農家1戸<br>当り雇用日数 |
| 1960 |    | 人<br>19,483 | 人<br>31,299 | %<br>8.3 | 人<br>1.6         | 人<br>102,333 | 人日<br>5,628 | %<br>43.8 | 人日<br>66         |
| 65   |    | 9,269       | 13,770      | 4.7      | 1.5              | 98,714       | 6,518       | 49.6      | 66               |
| 66   |    | 7,991       | 11,102      | 4.2      | 1.4              | 86,322       | 5,985       | 45.4      | 69               |
| 67   |    | 7,707       | 13,618      | 4.2      | 1.8              | 87,213       | 6,224       | 47.1      | 71               |
| 68   |    | 7,025       | 11,607      | 3.9      | 1.7              | 94,876       | 7,678       | 53.3      | 81               |
| 69   |    | 6,166       | 11,510      | 3.6      | 1.9              | 96,668       | 8,554       | 56.2      | 88               |
| 70   |    | 4,256       | 5,935       | 2.6      | 1.4              | 97,076       | 8,407       | 58.5      | 87               |
| 71   |    | 3,466       | 5,428       | 2.2      | 1.6              | 82,072       | 6,593       | 51.9      | 81               |
| 72   |    | 2,936       | 4,776       | 2.0      | 1.6              | 78,923       | 6,070       | 52.6      | 77               |
| 73   |    | 2,503       | 4,330       | 1.7      | 1.7              | 72,330       | 5,367       | 50.0      | 74               |
| 74   |    | 2,281       | 4,180       | 1.7      | 1.8              | 68,661       | 5,252       | 49.6      | 77               |
| 75   |    | 1,640       | 2,944       | 1.2      | 1.8              | 68,971       | 5,233       | 51.4      | 76               |

注1. 農業常雇は7ヶ月以上雇用したもの

2. 1960, 65, 70年は「農業センサス」、他の年次は北海道「農業基本調査」による。

表 2-15 農業雇用労働力の現況（北海道 1975）

| 経営耕地面<br>積 広 狭 別 | 総農家数<br>(A)(戸) | 農 業 常 雇          |                 | 農 業 臨 時 雇        |                  | B/A<br>(人) | C/B<br>(人) | D/A<br>(%) | E/D<br>(人日) |
|------------------|----------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|------------|------------|------------|-------------|
|                  |                | 雇入れ農家<br>数(B)(戸) | 実 人 員<br>(C)(人) | 雇入れ農家<br>数(D)(戸) | のべ人日数<br>(E)(人日) |            |            |            |             |
| 総 数              | 134,263        | 1,640            | 2,944           | 68,971           | 5,233,859        | 1.2        | 1.8        | 51.4       | 75.9        |
| 例 外 規 定          | 872            | 68               | 166             | 69               | 11,420           | 7.8        | 2.4        | 7.9        | 165.5       |
| ～1.0ha           | 26,512         | 43               | 84              | 2,952            | 82,498           | 0.2        | 2.0        | 11.1       | 27.9        |
| 1.0～1.5          | 6,045          | 32               | 62              | 2,342            | 90,506           | 0.5        | 1.9        | 38.7       | 38.6        |
| 1.5～2.0          | 5,075          | 29               | 43              | 2,456            | 111,514          | 0.6        | 1.5        | 48.4       | 45.4        |
| 2.0～2.5          | 5,735          | 35               | 47              | 3,135            | 162,617          | 0.6        | 1.3        | 54.7       | 51.9        |
| 3.5～3.0          | 5,500          | 30               | 58              | 3,391            | 187,827          | 0.6        | 1.9        | 61.7       | 55.4        |
| 3.0～5.0          | 25,538         | 151              | 241             | 17,774           | 1,148,157        | 0.6        | 1.6        | 69.6       | 64.6        |
| 5.0～7.5          | 21,409         | 192              | 291             | 15,575           | 1,278,428        | 0.9        | 1.5        | 72.7       | 82.1        |
| 7.5～10.0         | 11,138         | 171              | 225             | 7,660            | 751,287          | 1.5        | 1.3        | 68.8       | 98.0        |
| 10.0～15.0        | 10,113         | 229              | 368             | 5,958            | 624,602          | 2.3        | 1.6        | 58.9       | 104.9       |
| 15.0～20.0        | 6,252          | 173              | 274             | 3,216            | 298,934          | 2.8        | 1.6        | 51.4       | 93.1        |
| 20.0～25.0        | 3,975          | 141              | 240             | 1,911            | 191,536          | 3.5        | 1.7        | 48.1       | 100.2       |
| 25.0～30.0        | 2,471          | 103              | 206             | 1,027            | 115,700          | 4.2        | 2.0        | 41.6       | 112.7       |
| 30ha以上           | 3,634          | 243              | 639             | 1,505            | 178,833          | 6.7        | 2.6        | 41.4       | 118.8       |

注 農林省「農業センサス」によって作成

力のなかで不可欠の構成部分をなしている。このことは、農業経営規模の拡大が、機械化のなにかにあっても、たえず労働力需要をつくり出していることを示している。

いまひとつ重要なことは、大型機械化「一貫」体系の導入にともなう労働生産性の上昇が、かならずしも経済的有利性に十分に結びついていないということである。たとえば、表2-16について、米の生産費（第二次）、さらに表2-17について牛乳の生産費（第二次）をみると、それぞれ、規模の大きい農家ほど生産費が相対的に低くなっているが、その階層間格差は、さき

表 2-16 米の第2次生産費の階層別格差(北海道)

| 階 層                   |           | 1 9 7 2 |       | 1 9 7 4 |       |
|-----------------------|-----------|---------|-------|---------|-------|
|                       |           | 実 数     | 指 数   | 実 数     | 指 数   |
| 作<br>付<br>規<br>模<br>別 | ～ 1.0ha   | 21,783  | 133.7 | 12,368  | 139.1 |
|                       | 1.0 ～ 2.0 | 19,186  | 117.7 | 10,064  | 113.2 |
|                       | 2.0 ～ 3.0 | 17,517  | 107.5 | 10,460  | 117.7 |
|                       | 3.0 ～ 4.0 | 16,590  | 101.8 | 9,048   | 101.8 |
|                       | 4.0 ～ 5.0 | 14,819  | 90.9  | 8,327   | 93.7  |
|                       | 5.0 ～ 6.0 | 16,060  | 98.6  | 8,396   | 94.5  |
|                       | 6.0 ～ 7.0 | 15,663  | 96.1  | 8,449   | 95.1  |
|                       | 7.0ha～    | 14,764  | 90.6  | 8,465   | 95.2  |
|                       | 平 均       | 16,294  | 100.0 | 8,889   | 100.0 |

注1.指数は平均を100とする数値 2.農林省「農産物生産費調査」による

3.1972年＝150kg当り 1974年＝ 60kg当り

表 2-17 牛乳生産費(第2次)の規模別格差(北海道)

(100kg当り)

| 階 層                             |        | 1 9 7 1 | 同 指 数 | 1 9 7 4 | 同 指 数 |
|---------------------------------|--------|---------|-------|---------|-------|
| 飼<br>育<br>頭<br>数<br>規<br>模<br>別 | 1～2頭   | 5,257   | 140.6 | 5,214   | 106.7 |
|                                 | 3～4頭   | 4,634   | 123.9 | 6,044   | 123.7 |
|                                 | 5～6頭   | 4,096   | 109.5 | 5,381   | 110.1 |
|                                 | 7～9頭   | 3,792   | 101.4 | 5,164   | 105.7 |
|                                 | 10～14頭 | 3,705   | 99.1  | 5,007   | 102.5 |
|                                 | 15～19頭 | 3,627   | 96.9  | 4,527   | 92.7  |
|                                 | 20～29頭 | 3,755   | 100.4 | 4,810   | 98.4  |
|                                 | 30頭以上  | 2,653   | 70.9  | 4,942   | 101.1 |
|                                 | 平 均    | 3,740   | 100.0 | 4,886   | 100.0 |

注1.指数は平均を100とする数値 2.農林省「牛乳生産費調査」による

表 2-18 農 家 経 済 の 概 要 (北海道)

| 経営形態   | 階 層               | 農業所得(千円)     |             | 同 指 数<br>(平均＝100) |       | 農業所得率(%) |      |
|--------|-------------------|--------------|-------------|-------------------|-------|----------|------|
|        |                   | 1972<br>(千円) | 1974<br>(%) | 1972              | 1974  | 1972     | 1974 |
|        |                   |              |             |                   |       |          |      |
| 稲<br>作 | 平 均               | 1,859.5      | 3,405.6     | 100.0             | 100.0 | 62.1     | 66.7 |
|        | ～2.0ha            | 631.2        | 1,149.5     | 33.9              | 33.7  | 56.5     | 61.8 |
|        | (2.0～3.0<br>作付面積) | 1,328.7      | 2,297.8     | 71.5              | 67.5  | 62.2     | 65.9 |
|        | 3.0～5.0           | 2,120.2      | 3,698.9     | 114.1             | 108.6 | 61.0     | 67.6 |
|        | 5.0～7.0           | 2,984.2      | 4,933.1     | 160.5             | 144.9 | 63.7     | 67.7 |
|        | 7.0～10.0          | —            | 7,931.7     | —                 | 232.9 | 66.0     | 68.2 |
|        | 10.0ha～           | —            | —           | —                 | —     | 68.8     | —    |
| 酪<br>農 | 平 均               | 1,880.6      | 2,734.3     | 100.0             | 100.0 | 39.9     | 37.1 |
|        | ～4頭               | 372.8        | —           | 19.8              | —     | 44.5     | —    |
|        | (5～9<br>飼育頭数)     | 1,111.4      | 1,352.2     | 59.1              | 49.5  | 40.1     | 42.0 |
|        | 10～14             | 1,716.5      | 2,518.8     | 91.3              | 92.1  | 41.0     | 36.7 |
|        | 15～19             | 2,628.1      | 3,211.1     | 139.8             | 117.4 | 40.9     | 37.9 |
|        | 20頭以上             | 3,010.6      | 3,793.7     | 160.1             | 138.7 | 33.9     | 30.8 |

注 農林省「農家の経営形態別にみた農家経済」による

にかかげた労働生産性（単位当たり投下労働時間）の格差ほど大きくはない。また、米の場合には4ヘクタール以上になると作付規模による格差がほとんどなく、牛乳の場合には最上層（飼養頭数規模30頭以上）になるとかえって割高になっている。このように生産費に関しては、かならずしも上層優位の傾向にはなっていない。このことには多くの要因が考えられるが、最も大きく作用している要因は、大型機械化「一貫」体系の導入が農家の資金蓄積の進行度合に先行し、その導入にあたり借入金への依存度を高める結果、農家の経済的負担を大きくしているこ

図2-4 農業生産力の階層構造

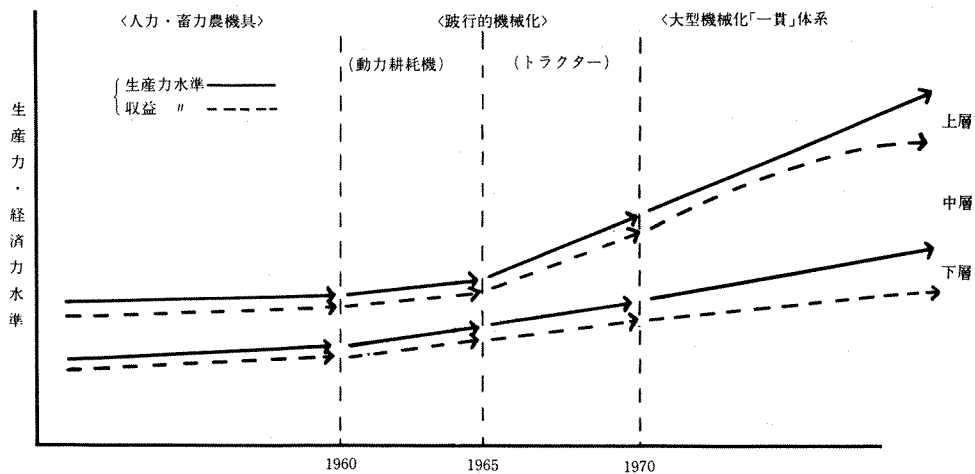


表2-19 経営耕地面積広狭別農家戸数の推移

| 階層     |      | 総戸数     | ～1ha   | 1～2    | 2～3    | 3～5    | 5～7.5  | 7.5～10 | 10～15  | 15～20 | 20ha～  | 1戸当り経営<br>耕地面積(ha) |
|--------|------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------------------|
| 全道     | 1960 | 233,634 | 61,141 | 25,159 | 31,947 | 56,857 | 32,824 | 14,320 | 9,361  | 2,025 |        | 3.5                |
|        | 65   | 198,969 | 46,970 | 19,014 | 23,780 | 48,180 | 30,567 | 14,934 | 11,919 | 3,605 |        | 4.1                |
|        | 70   | 165,978 | 36,365 | 13,903 | 14,694 | 34,867 | 27,773 | 13,637 | 13,547 | 6,397 | 4,795  | 5.1                |
|        | 75   | 134,263 | 27,382 | 11,120 | 11,231 | 25,538 | 21,409 | 11,138 | 10,113 | 6,252 | 10,080 | 6.8                |
| 空知(水田) | 1960 | 34,105  | 4,671  | 3,999  | 6,635  | 12,986 | 4,621  | 1,020  | 160    | 13    |        | 3.3                |
|        | 65   | 30,266  | 3,465  | 2,839  | 4,564  | 12,106 | 5,587  | 1,408  | 262    | 35    |        | 3.8                |
|        | 70   | 26,090  | 2,800  | 2,071  | 2,489  | 8,537  | 7,365  | 2,108  | 607    | 113   |        | 4.5                |
|        | 75   | 22,578  | 2,341  | 1,729  | 1,938  | 6,213  | 6,493  | 2,623  | 1,001  | 127   | 113    | 5.0                |
| 十勝(畑作) | 1960 | 23,254  | 1,865  | 681    | 853    | 2,761  | 5,168  | 4,928  | 5,454  | 1,314 | 230    | 7.9                |
|        | 65   | 19,761  | 981    | 499    | 583    | 1,624  | 3,494  | 4,352  | 5,949  | 1,816 | 463    | 9.2                |
|        | 70   | 16,239  | 676    | 358    | 371    | 984    | 1,790  | 2,379  | 4,987  | 3,127 | 1,567  | 11.5               |
|        | 75   | 12,790  | 554    | 294    | 314    | 696    | 930    | 1,208  | 2,646  | 2,713 | 3,435  | 14.9               |
| 根室(酪農) | 1960 | 5,261   | 947    | 227    | 216    | 596    | 1,115  | 984    | 1,054  | 101   | 21     | 6.3                |
|        | 65   | 4,324   | 682    | 116    | 157    | 324    | 682    | 689    | 1,238  | 346   | 90     | 8.0                |
|        | 70   | 3,447   | 166    | 81     | 99     | 110    | 184    | 167    | 521    | 696   | 1,423  | 14.1               |
|        | 75   | 2,857   | 69     | 32     | 35     | 51     | 93     | 59     | 141    | 249   | 2,128  | 28.7               |

注1. 農林省「農業センサス」による 2.1ヘクタール未満には例外規定農家をふくむ

とである。したがって機械を重点的に導入している上層農家においては、むしろ、収益性指標が低下しているのである。この点については、表2—18によってたとえば農業所得率の動きをみても明らかである。このような生産力および農家経済についての階層構造を図式化するならば、図2—4のようになろう。すなわち、人力・畜力農機具から跛行的機械化の過程の前半期にかけては、生産力の階層差がそれほど大きくなくむしろ縮小の傾向がみられるが、その後は、階層差が急速に拡大する。また、収益性に関しては一貫して階層間格差がみられるが、それは生産力格差ほど大きくはない。このような動向は、農民の階層別動向にも反映している。表2—19は最近の農民諸階層の動向を概括的に示しているが、これによると、分解基軸が1960年から65年にかけては7.5ヘクタール層、65年から70年にかけては10ヘクタール層、70年から75年にかけては15~20ヘクタール層と、5年ごとに1ランクずつ上昇している。この点は、水田と畑作・畜産とでは地域的にややその様相を異にしているが、分解基軸が著しく上昇するという点では双方が同じ足どりをたどっている。そして、このような激しい農民層分解の過程で、一方では多数の農民を離農、兼業に追いこんできていると同時に、他方では一部の農家層がたえず上向的發展を志向し、新上層農ともいふべき階層を生み出している。それは、稲作に関してはほぼ10ヘクタール以上層、畑作では25~30ヘクタール以上層、酪農では搾乳牛30頭以上層にみられるといえよう。しかし、これらの農家層がたえず順調に上向的發展をとげているわけではない。その技術的・生産力的条件となっている大型機械化「一貫」体系にそくしてみるならば、(イ)生産力的には、大型機械化「一貫」体系は従来の家族協業の枠をこえた協業、労働組織を求める。(ロ)経済的には、大型機械化「一貫」体系を個別農化の段階で自己完結的に導入することはたとえ新上層農といえども困難である。いいかえれば、農業機械の共同利用はこれら新上層農にとっても現実的課題となってくる。まして、それ以下の農家階層にあっては、階層によって異なるとはいえ、共同化に対する志向がいっそう強まっていることは否定できない。

## (2) 農業共同化の現段階

農業共同化をめぐる諸問題は、資本主義下の小農的生産様式のもとの農業發展とその生産様式の歴史的変化にかかわる基本問題である。しかし、ここでは課題を限定して、現段階（主として1970年以降）において現実化した大型機械化「一貫」体系を農業に導入する過程での問題を中心にして共同化の意義にふれることにする。表2—20は最近の共同経営の動向を概括的に示したものである。この表から(1)総農家数に対比して「協業経営組織」はその数、構成農家数などからみて副次的位置にとどまっている。(2)その設立年次は1960年代が大半で、(3)参加戸数は10戸未満が圧倒的である。(4)組織形態としては農事組合法人、任意組合が多い。(5)部門別には、北海道では稲作、酪農部門が多い。いずれにしても、経営の共同化は、1960年代に農業「近代化」政策の推進のなかで一種のブームの様相を呈しつつ設立された時期をのぞけば、概して停滞的に推移しており、解散した事例も少なくない。

これにたいし、機械・施設の共同利用に関しては、協業経営組織に比べて急速なひろがりを見せている。たとえば表2—21によると大型トラクター、各種収穫機などについては共同所有（したがって共同利用）が急速に増大している。このように、農業機械の共同所有、共同利用が1970年代に入って急速に増大したことは、ほぼ大型機械化「一貫」体系の導入と時期を同じくしている。そこで、このような機械・施設の共同利用組織について概括的に表示すると表2—22のようになる。この表から、(1)設立年次別には大半が65年以降である。(2)参加世帯数別には10戸未満が圧倒的である（また共同利用組織の総利用面積は50ヘクタール未満が過半を占

表 2-20 協業経営組織の概要

| 区 分<br>項 目 |             | 実 数   |     |       | 割 合 (%) |       |       |
|------------|-------------|-------|-----|-------|---------|-------|-------|
|            |             | 全 国   | 北海道 | 都府県   | 全 国     | 北海道   | 都府県   |
| 設立年次別      | 1959年以前     | 202   | 5   | 197   | 4.5     | 1.6   | 4.7   |
|            | 1960～64年    | 1,443 | 83  | 1,360 | 32.0    | 27.1  | 32.3  |
|            | 1965～69年    | 1,978 | 157 | 1,821 | 43.8    | 51.3  | 43.3  |
|            | 1970年以降     | 888   | 61  | 827   | 19.7    | 20.0  | 19.7  |
|            | 計           | 4,511 | 306 | 4,205 | 100.0   | 100.0 | 100.0 |
| 参加世帯数別     | ～10戸以下      | 3,469 | 281 | 3,188 | 76.9    | 91.8  | 75.8  |
|            | 11～20戸      | 585   | 14  | 571   | 13.0    | 4.6   | 13.6  |
|            | 21～50戸      | 333   | 8   | 325   | 7.4     | 2.6   | 7.7   |
|            | 51～100戸     | 89    | 3   | 86    | 2.0     | 1.0   | 2.0   |
|            | 100戸以上      | 35    | —   | 35    | 0.7     | —     | 0.8   |
|            | 計           | 4,511 | 306 | 4,205 | 100.0   | 100.0 | 100.0 |
| 管理・運営主体別   | 法人 { 市町村農協等 | 30    | 3   | 27    | 0.7     | 1.0   | 0.5   |
|            | 農業組合法人      | 1,380 | 172 | 1,208 | 30.6    | 56.2  | 28.7  |
|            | 会社          | 253   | 57  | 196   | 5.6     | 18.6  | 4.7   |
|            | 非法人 { 農業集落  | 146   | 1   | 145   | 3.2     | 0.3   | 3.5   |
|            | 任意組合・団体     | 1,876 | 53  | 1,823 | 41.6    | 17.3  | 43.4  |
|            | 特殊グループ等集団   | 826   | 20  | 806   | 18.3    | 6.6   | 19.2  |
|            | 計           | 4,511 | 306 | 4,205 | 100.0   | 100.0 | 100.0 |
| 主作目別       | 水 稲         | 467   | 107 | 360   | 10.4    | 35.0  | 8.6   |
|            | 果 樹         | 974   | 3   | 971   | 21.6    | 1.0   | 23.1  |
|            | や さ い       | 103   | 3   | 100   | 2.3     | 1.0   | 2.4   |
|            | そ の 他 作 物   | 309   | 38  | 271   | 6.8     | 12.4  | 6.4   |
|            | き の こ 類     | 584   | 16  | 568   | 12.9    | 5.2   | 13.5  |
|            | 施 設 園 芸     | 130   | 1   | 129   | 3.9     | 0.3   | 3.1   |
|            | 養 蚕         | 552   | —   | 552   | 12.2    | —     | 13.1  |
|            | 乳 用 牛       | 339   | 87  | 252   | 7.5     | 28.4  | 6.0   |
|            | 肉 用 牛       | 194   | 9   | 185   | 4.3     | 2.9   | 4.4   |
|            | 豚           | 399   | 19  | 380   | 8.8     | 6.2   | 9.0   |
|            | 採 卵 鶏       | 370   | 22  | 348   | 8.2     | 7.2   | 8.3   |
|            | プ ロ イ ラ ー   | 78    | —   | 78    | 1.7     | —     | 1.9   |
|            | そ の 他 畜 産   | 12    | 1   | 11    | 0.3     | 0.3   | 0.3   |
|            | 計           | 4,511 | 306 | 4,205 | 100.0   | 100.0 | 100.0 |

注 農林省「農業生産組織調査」(1972年8月1日現在)によって作成

める)。(3)専従者のいる組織数が総数の約3分の1強を占め、またオペレーターのいる組織が大半を占めていることは、共同利用組織内の新たな分業化の進展を示す動向として注目に値する。(4)指導を受けている組織数が大半をしめ、主として市町村、農協がこれにあたっているということは、共同利用が行政主導で推進されていることを反映している。

げんに大型機械・施設の導入、共同利用は農業構造改善事業をはじめとする補助・融資のともなう政策的措置によって進められている。このことを基礎に、一面では、大型機械・施設の共同利用が現実には無視できない動向として拡がりつつあると同時に、他面では、その進行過程で

表2-21 主要農機具台数(北海道)

(単位:台)

| 区 分<br>項 目           |                  | 総 数 (A) |         | 個人所有(B) |         | 共同所有(C) |       | C/A (%) |      | 共同所<br>有農家 | 1台当り<br>農家数(同) |
|----------------------|------------------|---------|---------|---------|---------|---------|-------|---------|------|------------|----------------|
|                      |                  | 1970    | 1975    | 1970    | 1975    | 1970    | 1975  | 1970    | 1975 | 1975       | 1975           |
| 動力<br>耕うん<br>トラクタ    | 総 数              | 114,541 | 131,365 | 109,029 | 122,321 | 5,512   | 9,044 | 4.8     | 6.9  | 21,506     | 2.4            |
|                      | ～30馬力            | 101,773 | 98,506  | 100,285 | 96,990  | 1,488   | 1,516 | 1.5     | 1.5  | 3,741      | 2.5            |
|                      | 30～50            | 10,689  | 18,819  | 7,491   | 15,342  | 3,198   | 3,477 | 3.0     | 1.8  | 10,294     | 3.0            |
|                      | 50馬力～            | 2,079   | 14,040  | 1,253   | 9,989   | 826     | 4,051 | 39.7    | 28.9 | 14,306     | 3.5            |
| トラクタ<br>付属機<br>具     | 耕うん・整地機類         | 42,942  | 57,491  | 35,205  | 50,394  | 7,737   | 7,097 | 18.0    | 12.3 |            |                |
|                      | 施肥・は種機類          | 5,108   | 21,114  | 3,522   | 16,400  | 1,586   | 4,714 | 31.0    | 22.3 |            |                |
|                      | 中耕・除草用具          | 5,291   | 12,311  | 4,347   | 10,309  | 944     | 2,002 | 17.8    | 16.3 |            |                |
|                      | 牧草類用収穫機          | 11,542  | 38,549  | 8,469   | 31,839  | 3,073   | 6,710 | 26.6    | 17.4 |            |                |
|                      | 根菜類用収穫機          | 2,385   | 6,259   | 1,082   | 3,639   | 1,303   | 2,620 | 54.6    | 41.9 |            |                |
|                      | 穀物類用収穫機          | 1,172   | 3,461   | 1,070   | 2,842   | 102     | 619   | 8.7     | 17.9 |            |                |
| その他<br>農業<br>用機<br>械 | 走行式動力防除機         | 134     | 9,776   | 52      | 6,647   | 82      | 3,129 | 61.2    | 32.0 | 16,504     | 5.3            |
|                      | 動力噴霧機            | 18,841  | 24,216  | 14,802  | 21,632  | 4,039   | 2,584 | 21.4    | 10.7 | 10,361     | 4.0            |
|                      | 動力散粉機            | 43,184  | 24,341  | 39,740  | 23,106  | 3,444   | 1,235 | 79.8    | 50.7 | 4,486      | 3.6            |
|                      | 動力田植機            | 368     | 11,538  | 344     | 10,466  | 24      | 1,072 | 6.5     | 9.3  | 2,976      | 2.8            |
|                      | バイダ―             | …       | 37,155  | …       | 35,668  | …       | 1,487 | …       | 4.0  | 3,958      | 2.7            |
|                      | 自脱型コンバイン         | 1,045   | 11,714  | 1,313   | 10,716  | 92      | 998   | 6.5     | 8.5  | 2,917      | 2.9            |
|                      | ミルカー             | 28,295  | 35,659  | 28,256  | 33,448  | 39      | 50    | 0.2     | 0.1  | 77         | 1.5            |
|                      | バケット型<br>パイプライン型 |         |         |         | 2,161   |         |       |         |      |            |                |
|                      | 米麦用乾燥機           | 36,987  | 40,793  | 36,666  | 40,217  | 321     | 576   | 0.9     | 1.4  | 1,136      | 2.0            |

注 農林省「農業センサス」による

共同利用をめぐる諸矛盾がしだいに顕在化しつつあるといえる。

さらに、農業共同化について考察するさい、それは多くの場合、農業生産過程の共同化に限定されがちであるが、すくなくとも流過程の共同化を視野に入れることなしに、今日の共同化の動向の総体を正しく把握することはできない。げんに、現在、もっとも進んだ農業技術として進行しつつある大型機械化「一貫」体系は、それじたいのなかに、流通・加工・貯蔵・保管・運搬施設を含んでおり、それらを含めて「一貫」体系を形成している。また、このことを物質的基礎として政策的に推進されている農業の「装置化・システム化<sup>(4)</sup>」では、農協が中枢的役割を担わせられるべく位置づけられているのである。他方、農民の側からみても、農協組織は、農民じしんによる流通共同化の現段階での到達点を示しており、むしろ、農業の生産・労働の社会化は生産過程に先行して流過程で広範に進行してきたとみることができる<sup>(5)</sup>。この結果、げんに農協には広義の流通にかかわる農業技術が蓄積されていると同時に、「資産」として現実化し、それが労働力(専従労働者)と結合して、地域的・集团的な農業生産力形成の一側面を示している<sup>(6)</sup>。表2-23はその動向を簡略に示したものであり、農協資産は、農家資産に対比して約2分の1に相当し、その金額、増大率からも、農業、農村にあって重要な位置をしめしているとみることができる。そして、この流通共同化の動向が農業生産共同化と直接的に関連し、農業生産共同化の性格、動向を強く条件づけているのである。

以上のべてきたように、北海道における農業生産力の現段階は、基本的には、大型機械化「一貫」体系への移行過程として特徴づけられるが、さらに農業生産力の現実的展開は資本・行政主導の中で歪曲されており、かかる歪曲性を克服するための主体的努力が、農民諸階層の中に

表 2-22 共同利用組織の概況（北海道）

| 項 目                                                                    |                              |            | 区 分 | 稲 作<br>部 門 | 畜 産             |                 |                 |                    |     |
|------------------------------------------------------------------------|------------------------------|------------|-----|------------|-----------------|-----------------|-----------------|--------------------|-----|
|                                                                        |                              |            |     |            | 土地の共同<br>利用 組 織 | 機械の共同<br>利用 組 織 | 施設の共同<br>利用 組 織 | 繁 殖 育 成<br>セ ン タ ー | 計   |
| 設 立<br>年 次<br>別                                                        | 1959年以前                      |            |     | 6          | 16              | —               | —               | 8                  | 24  |
|                                                                        | 1960～64                      |            |     | 33         | 9               | 37              | —               | 9                  | 55  |
|                                                                        | 65 ～ 69                      |            |     | 486        | 75              | 204             | 1               | 87                 | 367 |
|                                                                        | 70 以 降                       |            |     | 503        | 9               | 156             | 2               | 27                 | 194 |
| 参 加<br>世 帯<br>数 別                                                      | ～10戸以下                       |            |     | 547        | 25              | 299             | 3               | 12                 | 339 |
|                                                                        | 11 ～ 20                      |            |     | 270        | 22              | 73              | —               | 17                 | 112 |
|                                                                        | 21 ～ 50                      |            |     | 188        | 31              | 24              | —               | 34                 | 89  |
|                                                                        | 51 ～ 70                      |            |     | 15         | 9               | —               | —               | 13                 | 22  |
|                                                                        | 71 ～ 100                     |            |     | 2          | 12              | —               | —               | 14                 | 26  |
|                                                                        | 100戸以上                       |            |     | 6          | 10              | 1               | —               | 41                 | 52  |
| 管 理 ・<br>運 営<br>主 体<br>制                                               | 法 人                          | 市町村・農協等    | 2   | 44         | 1               | —               | 108             | 153                |     |
|                                                                        |                              | 農事組合法人     | 14  | 2          | 3               | 1               | 4               | 1                  |     |
|                                                                        |                              | 会社         | —   | —          | 1               | 1               | 3               | 5                  |     |
|                                                                        | 非 法 人                        | 農業集落       | 87  | 5          | 28              | —               | 4               | 37                 |     |
|                                                                        |                              | 任意組合・団体    | 811 | 56         | 345             | —               | 9               | 410                |     |
|                                                                        |                              | 特定グループなど集団 | 114 | 2          | 19              | 1               | 3               | 25                 |     |
| 手 づ け<br>の 作 業<br>組 織<br>実 数<br>が 同 じ                                  | 計                            |            |     | 147        | 6               | 31              | 2               | 1                  | 40  |
|                                                                        | 全戸出役                         |            |     | 122        | 4               | 17              | 2               | 1                  | 24  |
|                                                                        | 一部農家の出役                      |            |     | 25         | 2               | 14              | —               | —                  | 16  |
| 専 住 者 の い る 組 織 数                                                      |                              |            |     | 274        | 37              | 67              | 1               | 88                 | 193 |
| 特 定<br>の オ<br>ー<br>バ<br>ー<br>の<br>組<br>織<br>数                          | 計                            |            |     | 802        | 14              | 128             | 1               | 37                 | 180 |
|                                                                        | 構 成 員                        |            |     | 796        | 8               | 127             | —               | 24                 | 159 |
|                                                                        | 雇 用                          |            |     | 6          | 6               | 1               | 1               | 9                  | 17  |
|                                                                        | そ の 他                        |            |     | —          | —               | —               | —               | 4                  | 4   |
| 組 導<br>機 関<br>別<br>（ 重 複<br>計 上 ）<br>組 織<br>数<br>に<br>対<br>す<br>る<br>指 | 指 導<br>を<br>受<br>け<br>組<br>織 | 都道府県       | 54  | 2          | 44              | —               | 9               | 55                 |     |
|                                                                        |                              | 市町村        | 308 | 57         | 194             | —               | 63              | 314                |     |
|                                                                        |                              | 農協         | 644 | 41         | 365             | 1               | 34              | 441                |     |
|                                                                        |                              | その他        | 213 | —          | 17              | 1               | 1               | 19                 |     |
|                                                                        | 指導を受けていない組織数                 |            |     | 158        | 28              | 396             | 2               | 42                 | 78  |
| 組織数(1972年 8 月現在)                                                       |                              |            |     | 1,028      | 109             | 397             | 3               | 131                | 640 |

注 原資料，農林省「農業生産組織調査報告書」(1972年8月調査)

## 北海道における農家・農協資産

(参考)

| 年 次  | 区 分 | 農家資産(千円) |       | 農協資産(10億円) |       | B / 農家数<br>(千円) |
|------|-----|----------|-------|------------|-------|-----------------|
|      |     | 金 額 (A)  | 同 指 数 | 金 額 (B)    | 同 指 数 |                 |
| 1968 |     | 5,589    | 100.0 | 341        | 100.0 | 1,915           |
| 70   |     | 7,037    | 125.9 | 451        | 132.3 | 2,716           |
| 73   |     | 10,370   | 185.5 | 758        | 222.3 | 5,227           |

注 農林省「総合農協統計表」，「農家経済調査」による

表 2-23 農 協 の 資 産 形 成 (単位10億円)

| 年次 | 区分   | 資 産    |       | 固 定 資 産 |       | 有 形 固 定 資 産 |       |
|----|------|--------|-------|---------|-------|-------------|-------|
|    |      | 全 国    | 北 海 道 | 全 国     | 北 海 道 | 全 国         | 北 海 道 |
| 実数 | 1968 | 5,229  | 341   | 345     | 33    | 280         | 25    |
|    | 70   | 7,565  | 451   | 513     | 47    | 426         | 37    |
|    | 73   | 14,027 | 758   | 816     | 65    | 680         | 52    |
| 指数 | 1968 | 100.0  | 100.0 | 100.0   | 100.0 | 100.0       | 100.0 |
|    | 70   | 144.7  | 132.3 | 148.7   | 142.4 | 152.1       | 148.0 |
|    | 73   | 268.3  | 222.3 | 236.5   | 196.9 | 242.9       | 208.0 |

注 農林省「総合農林統計表」,「農家経済調査」による。

みられることもたしかである。この点は現実の農業・農村の中で実態をふまえて検討されなければならない。

注 1. 北海道立総合経済研究所『北海道農業発達史』(1961年,中央公論事業出版社刊)参照

注 2. 保志恂『戦後日本資本主義と農業危機の構造』(1975年,御茶の水書房),とくに第三篇,第二章,第二節参照。

注 3. 農業機械化については七戸長生『農業機械化の動態過程』(1975年,亜紀書房)で詳しく展開されている。とくにこの中で,小農経営のもとでの農業機械化の跛行性が指摘されている。それとの関係で大型機械化「一貫」体系を位置づける必要がある。

注 4. 農業の装置化,システム化については山田定市「農民の生産力の基本的性格」(北大『教育学部紀要』第26号,1976年)を参照されたい。

注 5. 農業共同化を流通共同化をふくめて把握することに関しては,前掲,山田論文を参照されたい。

注 6. 前掲,山田論文を参照されたい。

### 第 3 章 地域農業の生産力形成過程における構造的関連分析

#### ま え が き

全道的な農業生産力の到達水準についてみてきたわけだが,その形成過程における客体的契機と主体的契機の構造的な諸関連をより具体的に明らかにするために,稲作,酪農,畑作(そさい園芸)の三部門について士別,別海,洞爺の地域分析をこころみる。

その何れも,大型機械化「一貫」作業の段階への移行期にあるといえるが,そこにおける農民の対応形態,したがって矛盾の発現形態はむろん一様ではありえない。

そこに,むしろ,われわれは主体的,集团的対応の重要性をみるものだが,さしづめ,農業生産力の階層構造に焦点をあてて,三地域における農業生産力形成の客体的,主体的契機の関連に接近していく,という方法をとりたい。

#### 1. 稲作地帯一士別市における農業生産力形成の特質

——士別市T地区の事例を中心に——

士別市における稲作の作付は屯田村入植直後からなされていたが,大正期に土功組合が組織されて,なかでも大正末期に急速に開田がなされてきた。

その後,排水・客土による土地改良がなされ,あるいは耐冷性の品種改良,温冷床苗代方式の導入など,資本投下および生産技術の改良がはかられてきた。

戦後は,食糧不足および米価の相対的安定という社会的条件の下で,一貫して水田作付面積の増大が見られ,また品種改良,化学肥料の増投などにより,平均反収の向上も実現されてきた。

1960年代に入ってから動力耕耘機・小型トラクターの導入を中心とした新たな生産力段階に移行し、さらに70年代に入ってから、機械化「一貫」体系への移行が顕著に認められる。以下、このような生産力形成の中で具体的に生じてきている諸問題を士別市の実態に即してとらえていこうとするものである。

#### (1) 機械化「一貫」体系への移行

1970年代の稲作の農業生産力形成の特質として、機械化「一貫」体系への移行が挙げられる。機械化「一貫」体系は、従来の耕耘過程での機械化——畜力による耕耘から動力耕耘機・小型トラクターによる耕耘への移行——から、さらに移植過程・防除過程・収穫過程まで稲作の基本的な労働過程における機械化が実現された技術体系を言う。そして、従来の多肥・多労的で土地生産性を重視した技術体系に比べ、著しく労働生産性を重視した技術体系となっている。

この機械化「一貫」体系への移行は、行政および資本主導でなされていることを特徴としている。すなわち、独占機械メーカーによる強引な農民への売り込みと、基盤整備事業への国家投資および共同化にともなう機械化「一貫」体系への移行を、財政補助によって誘導しつつ展開されている。

機械化「一貫」体系への移行は、農民の資金蓄積条件の違いによって——小農的生産様式に規定されて——階層間格差をもたらしながら、従来の土地生産性重視の技術体系から労働生産性重視の技術体系に移行する中で、様々な問題を生じさせてきている。

以下、近年急速に機械化「一貫」体系に移行してきている士別市T地区における実態に即して論じて行くことにする。

表3-1に示すように、士別市を含む北海道食糧事務所名寄支所管内（士別市、名寄市、和寒町、剣淵町、朝日町、風連町、下川町、美深町、中川町を含む地域）においては、1963年に奨励品種に採用された「しおかり」に、60年代後半以降急速に統一されてきた。これは、①技術

表3-1 名寄地域における作品種の推移(うるち米)

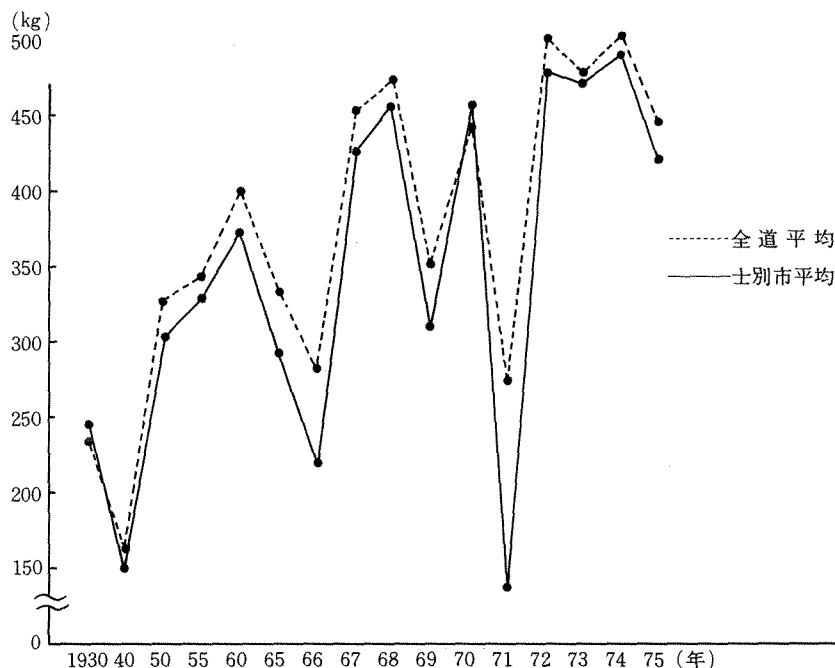
| 年次   | 第 1 位 |      | 第 2 位  |      | 第 3 位  |      | その他計 | 合計  |
|------|-------|------|--------|------|--------|------|------|-----|
| 1963 | ふくゆき  | 37.4 | 北海116号 | 8.6  | 農林20号  | 5.3  | 48.7 | 100 |
| 1964 | ふくゆき  | 24.2 | しおかり   | 15.7 | ささほなみ  | 6.7  | 53.4 | 100 |
| 1965 | しおかり  | 27.4 | ふくゆき   | 22.7 | 岩系15号  | 20.7 | 29.2 | 100 |
| 1966 | しおかり  | 40.0 | ふくゆき   | 21.7 | ささほなみ  | 7.4  | 30.9 | 100 |
| 1967 | しおかり  | 49.0 | ふくゆき   | 16.9 | ささほなみ  | 8.5  | 25.6 | 100 |
| 1968 | しおかり  | 50.3 | ふくゆき   | 13.2 | ささほなみ  | 7.3  | 29.2 | 100 |
| 1969 | しおかり  | 59.5 | うりゅう   | 10.5 | 上育294号 | 3.2  | 26.8 | 100 |
| 1970 | しおかり  | 60.8 | うりゅう   | 11.9 | なるかぜ   | 5.9  | 21.4 | 100 |
| 1971 | しおかり  | 72.6 | なるかぜ   | 8.4  | うりゅう   | 6.0  | 13.0 | 100 |
| 1972 | しおかり  | 81.3 | イシカリ   | 7.9  | うりゅう   | 3.2  | 7.6  | 100 |
| 1973 | しおかり  | 89.0 | イシカリ   | 3.5  | うりゅう   | 1.8  | 5.7  | 100 |
| 1974 | しおかり  | 91.1 | イシカリ   | 3.3  | うりゅう   | 1.4  | 4.2  | 100 |
| 1975 | しおかり  | 85.9 | イシカリ   | 9.2  | うりゅう   | 1.2  | 3.7  | 100 |
| 1976 | しおかり  | 80.3 | イシカリ   | 15.7 | うりゅう   | 1.0  | 3.0  | 100 |

注1. 北海道食糧事務所調べより名寄支所について作成。

(%)

2. 数字はそれぞれ作付面積の比率を示す

図3-1 10a当平均収量の推移



注 「士別市史」(1930～60年まで)および農林省北海道統計情報事務所調べより作成

的にみれば、トラクターの普及によって中生品種の適期作業(耕耘代掻について)が可能となったこと②経営的には、耐冷性に優れた品種であるが故に生産力の安定した発展を求める農民の要求に合致したこと、を意味している。しかし、この品種への統一は、同時に「限界地」における生産技術それ自体の脆弱性を意味するものであり、移植・収穫過程の労働力需要を一層拡大し、したがって農業労働力の減少にともなう機械化を促進する条件を形成していったともいえる。

士別市の平均反収の変化は図3-1に示すとおりである。ほぼ全道平均と同じ数字を示しているが、冷害の年次には極端に反収が少なくなっており、「限界地」農業としての生産技術の脆弱性が明瞭である。

農業機械の普及状況(1975年度)を見ると、表3-2に示すとおり明確に階層差が存在している。すなわち、トラクター、田植機、自脱型コンバインの普及は上層になるほど高い。したがって耕耘過程から収穫過程までの技術体系は、階層間において格差が存在している。上層(6畝以上)においては「トラクター+田植機+自脱型コンバイン」の機械化「一貫」体系がほぼ確立し、中層(4畝以上6畝未満)においては耕耘過程でトラクター導入がなされているが移植過程では機械植えと手植えが併存し、また収穫過程ではバインダー刈と自脱型コンバイン刈の併存が見られる。下層(4畝未満)においては耕耘過程でも動力耕耘機とトラクターとの併存であり、移植過程は手植えで、収穫過程はバインダー刈ないし手刈という技術体系になっている。

表 3-2 主な農業機械の普及状況(共同所有も含む)

| ha       | 0～           | 1～          | 2～          | 3～           | 4～           | 5～           | 6～           | 7～           | 8～           | 9～           | 10～          | 全体            |
|----------|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 動力耕運機    | 10<br>(41.7) | 6<br>(54.5) | 8<br>(61.5) | 39<br>(81.3) | 81<br>(68.6) | 31<br>(63.3) | 34<br>(68.0) | 17<br>(54.8) | 12<br>(70.6) | 13<br>(76.5) | 12<br>(66.7) | 263<br>(66.4) |
| トラクター    | 2<br>(8.3)   | 1<br>(9.1)  | 4<br>(30.8) | 18<br>(37.5) | 85<br>(72.0) | 36<br>(73.5) | 41<br>(82.0) | 29<br>(93.5) | 14<br>(82.4) | 16<br>(94.1) | 16<br>(88.9) | 262<br>(66.2) |
| 田植機      | —            | —           | 1<br>(7.7)  | 7<br>(14.6)  | 35<br>(29.7) | 13<br>(26.5) | 18<br>(36.0) | 8<br>(25.8)  | 7<br>(41.1)  | 13<br>(76.5) | 9<br>(50.0)  | 111<br>(28.0) |
| バインダー    | 1<br>(4.2)   | 3<br>(27.3) | 8<br>(61.5) | 34<br>(70.8) | 89<br>(75.4) | 38<br>(77.6) | 41<br>(82.0) | 27<br>(87.1) | 15<br>(88.2) | 13<br>(76.5) | 11<br>(61.1) | 280<br>(70.7) |
| 自脱型コンバイン | 1<br>(4.2)   | —           | 1<br>(7.7)  | 6<br>(12.5)  | 22<br>(18.6) | 14<br>(28.6) | 25<br>(50.0) | 20<br>(64.5) | 10<br>(58.8) | 14<br>(82.4) | 8<br>(44.4)  | 121<br>(30.6) |

注1. 北海道農業基本調査(1976. 2. 1)よりT地区について作成

2. 上段は所有農家戸数(実数), 下段は普及率(所有農家戸数/総農家戸数-%)

3. 規模は経営耕地面積による。



図 3-2

機械体系の移行性と  
階層間格差の推移—士別市T地区—

○ I～IXは機械体系の類型を示す。

耕耘過程 移植過程 収穫過程

- I. 畜力耕—手うえ—手刈
- II. 動力耕機—手うえ—手刈
- III. 動力耕機—手うえ—バインダー
- IV. トラクター—手うえ—手刈
- V. トラクター—手うえ—バインダー
- VI. トラクター—手うえ—自脱型コンバイン
- VII. トラクター—田植機—手刈
- VIII. トラクター—田植機—バインダー
- IX. トラクター—田植機—自脱型コンバイン

○ 各類型の上段は機械の共有をしているもの、下段は個人所有によるものを示している。

○ 1～20は農家番号、番号が若いほど土地面積は大きい。

○ ○—○は稲作の技術体系の典型的類型の推移を示す。

第一段階

畜力耕+手うえ+手刈

第二段階

(動力耕+手うえ+バインダー)  
トラクター耕

第三段階

トラクター耕+機械植+自脱型  
コンバイン刈

注 北海道農業基本調査個票より作成。

図3-2は、T地区のある実行組合における各農家の5年間の技術体系の推移を示したものである。機械化「一貫」体系への移行の過程で跛行的な技術体系の存在と、階層間格差が認められる。すなわち、第2章に示した生産力段階の歴史的段階差が、階層間の生産力格差としてあらわれているのである。

このように階層間に技術体系の差異を持ちながら、行政による上からの農民の組織化が行なわれ、したがって共同生産組織の農民間において、生産技術の混乱を必然的にもたらす。

機械化「一貫」体系に移行する時期の生産技術の混乱として次の諸点が挙げられる。

①耕耘代掻——機械移植に適した土の状態にするには、手植えに比してより高度な代掻労働の技能が必要とされる。代掻の状態が悪い場合には定植が不安定で、補植労働が多量に必要とされて来る。②育苗——手植えよりも均質な苗の育成が必要とされる。したがって育苗過程において、催芽・施肥方法・土性についての知識などの新たな技能の習得が必要とされる。③肥培管理——稚苗育苗方式の機械植えの場合、気象条件が成育に大きな影響を与えるので、より緻密な肥培管理方式の確立が必要とされる。④現在広範に作付されている「しおかり」品種には芒があり、これは収穫・乾燥過程において機械の労働能率を低下させている。したがって機械の労働能率を向上させるためには機械の性能の改良か新たな品種の採用が必要とされる。とくに後者の場合、新たな育苗方式や肥培管理方式の採用が不可欠となってくる。⑤機械化「一貫」体系の機械それ自体の機能として、労働生産性と土地生産性の均衡のとれた発展が阻害される条件も生じている。すなわち、自脱型コンバインの導入は従来稲ワラを堆肥生産に使用していた農家に堆肥づくりを放棄させ、地力問題を生じさせてきている。<sup>(1)</sup>

つぎに、機械化「一貫」体系への移行の中で、農民層分解がどのように進行しているかを見る。

表3-3 農業労働力の推移

| 年次   | 常 雇          |              |              | 臨 時 雇          |                |                | 一戸当り農業従事者数 |      |      | 一戸当り150日以上農業従事者数 |      |      |
|------|--------------|--------------|--------------|----------------|----------------|----------------|------------|------|------|------------------|------|------|
|      | 全 道          | 上 川          | 士 別          | 全 道            | 上 川            | 士 別            | 全道         | 上川   | 士別   | 全道               | 上川   | 士別   |
| 1967 | 4.2<br>(1.8) | 4.4<br>(1.5) | 3.8<br>(1.5) | 42.6<br>(74.6) | 56.4<br>(62.5) | 59.4<br>(66.7) | 2.66       | 2.77 | 2.80 | 2.01             | 2.25 | 2.29 |
| 1968 | 3.9<br>(1.7) | 3.6<br>(1.4) | 2.9<br>(1.4) | 53.3<br>(80.9) | 69.5<br>(68.0) | 71.0<br>(84.5) | 2.73       | 2.84 | 2.90 | 2.03             | 2.31 | 2.37 |
| 1969 | 3.6<br>(1.9) | 3.4<br>(1.4) | 2.8<br>(1.4) | 56.2<br>(88.5) | 73.8<br>(77.0) | 73.5<br>(90.0) | 2.75       | 2.90 | 2.90 | 2.06             | 2.25 | 2.34 |
| 1970 | 2.6<br>(1.4) | 2.2<br>(1.3) | 2.4<br>(1.4) | 58.5<br>(86.6) | 79.3<br>(74.7) | 81.3<br>(83.2) | 3.00       | 3.25 | 3.13 | 1.79             | 2.03 | 2.13 |
| 1971 | 2.2<br>(1.6) | 1.6<br>(1.5) | 0.9<br>(1.3) | 51.9<br>(80.3) | 68.9<br>(70.1) | 71.2<br>(68.4) | 2.68       | 2.87 | 2.80 | 1.86             | 1.97 | 2.09 |
| 1972 | 1.9<br>(1.6) | 1.5<br>(1.5) | 0.8<br>(1.3) | 52.3<br>(76.9) | 68.0<br>(67.0) | 72.1<br>(63.4) | 2.68       | 2.84 | 2.79 | 1.83             | 1.89 | 1.98 |
| 1973 | 1.7<br>(1.7) | 1.2<br>(1.5) | 0.9<br>(1.3) | 50.1<br>(74.2) | 61.7<br>(62.7) | 60.6<br>(57.5) | 2.70       | 2.80 | 2.76 | 1.78             | 1.69 | 1.81 |
| 1974 | 1.6<br>(1.8) | 1.0<br>(1.8) | 0.7<br>(1.5) | 50.0<br>(76.6) | 58.1<br>(63.5) | 59.1<br>(56.3) | 2.70       | 2.76 | 2.78 | 1.76             | 1.62 | 1.74 |
| 1975 | 1.2<br>(1.8) | 0.7<br>(1.6) | 0.4<br>(1.3) | 51.4<br>(75.9) | 64.6<br>(64.2) | 60.6<br>(53.4) | 2.78       | 2.83 | 2.76 | 1.54             | 1.39 | 1.47 |

注1. 北海道農業基本調査およびセンサス(1970, 1975年)より作成

2. 雇用については、上段は雇用の雇入れ農家の割合(%), 下段は雇入れ農家1戸当人数をあらわす(人)

① 農業労働力——60年代以降いわゆる高度経済成長期に入って、農業労働力は大量に商工業に吸収され、農業内雇用および家族労働力の存在形態は大きく変わってきた。雇用労働力では、60年代後半には常雇という形態の農業内雇用は急速に減少し、70年代に入ってからには臨時雇という形態の雇用も急速に減少してきている。また家族労働力においても農業従事者が漸減してきており、基幹労働力（150日以上農業従事）は急速に減少してきている。そこで析出された労働力は農外労働力市場へ吸収されている。このような農業労働力の減少は、一方では機械化促進の条件となり、他方で機械化の結果として作用している（表3-3）。

② 階層間の土地移動——士別市T地区における1971年2月1日から76年2月1日までの5年間の階層間土地移動の動向は表3-4に示す通りである。

表3-4 1971～1976年の階層間土地（水田面積）移動

| 1971年<br>1976年   | 0 1<br>ha<br>未<br>上満 | 1 2<br>ha<br>未<br>上満 | 2 3<br>ha<br>未<br>上満 | 3 4<br>ha<br>未<br>上満 | 4 5<br>ha<br>未<br>上満 | 5 6<br>ha<br>未<br>上満 | 6 7<br>ha<br>未<br>上満 | 7 8<br>ha<br>未<br>上満 | 8 9<br>ha<br>未<br>上満 | 9 10<br>ha<br>未<br>上満 | 10 11<br>ha<br>未<br>上満 | 11<br>ha<br>以上 | 合<br>計 |
|------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|------------------------|----------------|--------|
| 0 以上<br>2ha未満    | 13                   | 5                    | 1                    | 1                    | 1                    |                      |                      |                      |                      |                       |                        |                | 21     |
| 1ha以上<br>3ha未満   |                      | 5                    | 1                    | 2                    | 2                    |                      |                      |                      |                      |                       |                        |                | 10     |
| 2ha以上<br>3ha未満   |                      |                      | 9                    | 3                    | 1                    |                      |                      |                      |                      |                       |                        |                | 13     |
| 3ha以上<br>4ha未満   |                      | 1                    | 3                    | 30                   | 12                   |                      |                      |                      |                      |                       |                        |                | 46     |
| 4ha以上<br>5ha未満   |                      | 1                    | 2                    | 10                   | 92                   | 8                    | 2                    |                      |                      |                       |                        |                | 115    |
| 5ha以上<br>6ha未満   |                      | 2                    | 3                    | 1                    | 7                    | 33                   | 3                    |                      |                      |                       |                        |                | 49     |
| 6ha以上<br>7ha未満   |                      |                      |                      | 2                    | 7                    | 10                   | 22                   | 3                    | 1                    |                       | 1                      |                | 46     |
| 7ha以上<br>8ha未満   |                      |                      |                      |                      | 3                    | 5                    | 13                   | 6                    | 4                    |                       |                        |                | 31     |
| 8ha以上<br>9ha未満   |                      |                      |                      | 1                    | 2                    | 3                    | 2                    | 1                    | 5                    |                       | 1                      |                | 15     |
| 9ha以上<br>10ha未満  |                      |                      |                      |                      |                      | 5                    | 3                    | 1                    | 2                    | 4                     |                        | 1              | 16     |
| 10ha以上<br>11ha未満 |                      |                      |                      |                      |                      | 2                    | 1                    | 1                    |                      |                       | 2                      | 1              | 7      |
| 11ha以上<br>12ha未満 |                      |                      |                      |                      | 1                    |                      | 1                    | 1                    | 1                    |                       |                        | 1              | 5      |
| 12ha以上<br>13ha未満 |                      |                      |                      |                      |                      | 1                    | 2                    | 3                    |                      |                       |                        |                | 6      |
| 13ha以上<br>14ha未満 |                      |                      |                      |                      |                      |                      |                      | 1                    |                      |                       |                        |                | 1      |
| 14 ha 以上         |                      |                      |                      |                      |                      |                      |                      |                      |                      |                       |                        | 1              | 1      |
| 合 計              | 13                   | 14                   | 19                   | 50                   | 128                  | 67                   | 49                   | 17                   | 13                   | 4                     | 4                      | 4              | 382    |

1971～1976年間の離農農家戸数

| (ha) | ～1 | 1～ | 2～ | 3～ | 4～ | 5～ | 6～ | 7～ | 計  |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|      | 3  | 12 | 7  | 6  | 20 | 4  | 4  | 4  | 60 |

注 北海道農業基本調査個票より、士別市T地区について作成。

この特徴を階層別にまとめると次の諸点が挙げられる。(i)76年を基準としてみると上層(6%以上)の農家はこの5年間に土地拡大をすることによって上昇してきた農家が支配的である。この傾向は7~8%以上のより規模の大きい農家において顕著である。とりわけ、10%以上層は8戸から20戸へ増加し、しかもそのなかには1971年にはみられなかった12%以上層が8戸形成されていることが注目されるべきである。(ii)中層(4%以上6%未満)では、土地拡大してきた農家も一定程度存在しているが、多くは5年間土地の拡大も縮小もなかった農家である。(iii)下層(4%未満)では、拡大も縮小もしなかった農家より、縮小あるいは離農した農家が多く、停滞ないし下向的である。表にみられるように、分解基軸はすでに7%層におよぶが、過去5年についていえば、従来の中堅4%がもっとも不安定層となるにいたったのである。以上要約すれば上層がこの5年間に急速に拡大されてきているのに対し、中層では現状維持が多く——このこと自体下向的要因を含んでいると考えられる——、下層では下向の傾向が著しい、というように階層分解が促進されてきているといえる。離農率を見ると、この2~3年に急激な階層分解進行の状況をよみとることができる(表3-5)。

表3-5 離農率の推移 (%)

| 年次   | 全 道 | 上 川 | 士 別 |
|------|-----|-----|-----|
| 1968 | 3.7 | 2.7 | 3.4 |
| 1969 | 3.3 | 3.0 | 3.1 |
| 1970 | 3.5 | 3.5 | 3.2 |
| 1971 | 4.8 | 3.2 | 2.7 |
| 1972 | 4.5 | 3.2 | 2.2 |
| 1973 | 4.3 | 2.9 | 2.4 |
| 1974 | 4.2 | 3.5 | 4.9 |
| 1975 | 3.2 | 3.1 | 4.5 |

注 センサス(1970, 1975)および北海道農業基本調査より作成。

T地区は稲作単作経営が支配的であり、したがって水田面積の大小がそのまま生産力格差に結びつく。そして以上見た土地規模の格差は、同時に機械の普及度合(資金蓄積の違い)に照応している。

ところで、現在の機械化「一貫」体系は、各種の機械の効率的(経済的)利用をしようとするならば、一定の土地所有の個別的な機械化「一貫」体系への移行は過剰投資にならざるを得ない。このようにして、中層以下での個別的な機械化「一貫」体系への移行は、農民層分解を促進する方向で作用せざるを得ないのである。

## (2) 機械化「一貫」体系と共同生産組織

すでに見たように、機械化「一貫」体系への移行の中で生産技術上の混乱と生産力格差が引き起こされてきているが、この矛盾を内包しながら、行政によって上から共同化が促進されてきている。

T地区の場合には、道営圃場整備事業を基礎とし、構造改善事業として共同化=集団的な機械化「一貫」体系への移行が計画され、実施されてきた。しかし、この実施の過程で、すでにいくつかの問題が指摘できる。①地縁集団である部落実行組合を基礎として100%を基本単位とする集団化が計画化されたが、地域的に組織率は不均等を示している。それは、上からの組織化が、農民の要求と直接に矛盾し、定着していないことを意味している。②100%を単位とした集団の内部にさらに実際の労働過程における労働力と機械の結合・運用を単位としての作業班が存在する。そして、利用料や出役賃金等の決定すなわち共同生産組織の経済面での運営も作業班単位で独立している。このことは、農民的共同における生産単位(労働力・機械・土地等の結合)と上からの組織化における生産単位との対立に起因するものであるといえる。

このような上からの組織化に対して、農民は共同生産組織を個別経営の補完的手段として位置づけている。そして、そこでは明らかに階層差が認められる。①上層農においては、一方で

表 3-6 士別市T地区における生産組織化の事例

| 農<br>家<br>番<br>号 | 家族学働力(人) |   |          |   | 雇用労働力(人) |     |       |     | 1975年における農業機械 |            |     |            |               | 兼 業 従 事 (人) |    |       |       |    |       | 共<br>の<br>同<br>化<br>へ<br>参<br>加 | 5 土<br>年地<br>間移 <sup>(ha)</sup><br>の動 |               |
|------------------|----------|---|----------|---|----------|-----|-------|-----|---------------|------------|-----|------------|---------------|-------------|----|-------|-------|----|-------|---------------------------------|---------------------------------------|---------------|
|                  | 従事者      |   | 150 日 以上 |   | 1971年    |     | 1976年 |     | 動力耕<br>転 機    | トラク<br>タ ー | 田植機 | バイン<br>ダ ー | 自 脱 型<br>コンバイ | 1971年       |    |       | 1976年 |    |       |                                 |                                       |               |
|                  | 男        | 女 | 男        | 女 | 男        | 女   | 男     | 女   |               |            |     |            |               | 恒勤          | 出稼 | 人夫・日雇 | 恒勤    | 出稼 | 人夫・日雇 |                                 |                                       |               |
| 1                | 2        | 2 | 1        | 1 |          | 190 |       | 150 |               | ○          | ○   | ○          |               |             | 1  |       |       |    |       | ○                               | 5.3                                   | 7<br>ha<br>以上 |
| 2                | 2        | 1 | 1        | 1 | 5        | 140 |       | —   |               | ○          | ○   | ○          | ○             |             | 1  |       |       | 1  |       | ×                               | 1.4                                   |               |
| 3                | 1        | 2 |          |   |          | 56  |       |     |               | ○          | ○   | ○          |               |             | 1  |       |       |    | 1     | ○                               | 3.7                                   |               |
| 4                | 1        | 1 | 1        | 1 | 11       | 169 |       | 200 | ○             | ○          | ○   | ○          |               |             |    |       |       |    |       | ○                               |                                       |               |
| 5                | 1        | 1 | 1        | 1 |          | 180 |       | 30  | ○             | ○          |     | ○          | ○             |             | 1  |       |       |    | 1     | ×                               |                                       |               |
| 6                | 2        |   | 2        |   |          | 160 |       | 20  | ○             | ○          | ○   | ○          |               |             | 1  |       |       |    | 1     | ○                               |                                       | 7<br>6<br>5   |
| 7                | 1        | 1 |          | 1 |          | 170 |       | 30  | ○             | ○          | ○   | ○          | ○             |             | 1  |       |       | 1  |       | ×                               | 2.1                                   |               |
| 8                | 2        | 1 |          | 1 |          | 70  |       | 60  | ○             | ○          |     | ○          |               |             | 2  |       |       | 1  |       | ×                               | △ 0.7                                 |               |
| 9                | 1        | 1 |          |   |          | 90  |       | —   | ○             |            |     | ○          |               |             | 1  |       |       | 1  |       | ○                               | △ 0.4                                 |               |
| 10               | 2        | 2 | 1        | 1 | 4        | 150 |       | 30  | ○             | ○          | ○   | ○          |               |             | 1  |       |       | 1  | ×     |                                 | 0.3                                   | 5             |
| 11               | 1        | 2 |          |   |          | 90  |       | —   |               | ○          |     | ○          |               |             | 1  |       | 1     | 2  | ○     |                                 |                                       |               |
| 12               | 1        | 1 |          | 1 | 4        | 126 |       | 100 | ○             | ○          |     | ○          |               |             | 1  |       | 1     |    | ×     |                                 |                                       |               |
| 13               | 1        | 2 | 1        | 1 |          | 90  |       | 50  |               | ○          |     | ○          |               |             | 1  |       |       | 1  | ○     |                                 |                                       |               |
| 14               | 2        | 2 | 1        | 1 |          | 140 |       | 40  | ○             | △          | △   |            | △             |             |    |       |       |    | ×     |                                 | △ 0.9                                 |               |
| 15               | 1        | 1 |          |   |          | 130 |       | —   | ○             | △          | △   | ○          | △             |             | 1  |       |       | 1  | ×     |                                 |                                       | 4             |
| 16               | 1        | 1 |          |   |          | 120 |       | —   | ○             |            |     |            |               |             |    |       |       | 1  | ○     |                                 |                                       |               |
| 17               | 2        | 2 | 1        | 1 |          | 70  |       | 30  |               | ○          | ○   |            |               |             |    |       |       | 1  | ×     |                                 |                                       |               |
| 18               | 1        | 1 | 1        | 1 | 2        | 77  |       | 30  | ○             | ○          | ○   | ○          | ○             |             | 1  |       |       |    | ×     |                                 | △ 0.7                                 |               |
| 19               | 2        | 1 |          |   |          | 100 |       | —   | ○             |            |     |            |               |             | 1  |       |       | 2  | ×     |                                 | 0.5                                   | 3             |
| 20               | 2        | 2 |          |   |          | 60  |       | —   | ○             | ○          |     | ○          |               |             |    | 1     |       | 1  | ○     |                                 |                                       |               |
| 21               | 1        | 2 |          |   |          | 60  |       | —   | ○             |            |     | △          |               |             | 1  |       |       | 2  | ○     |                                 |                                       |               |
| 22               | 1        | 1 |          | 1 |          | 70  |       | 15  | ○             |            |     | △          |               |             | 1  |       |       | 1  | ○     |                                 |                                       |               |
| 23               | 2        | 1 |          |   |          | 80  |       | —   | ○             |            |     | ○          |               | 1           |    |       | 2     | ○  |       |                                 |                                       |               |
| 24               | 2        | 2 |          |   |          | 60  |       | —   |               | ○          |     | △          |               |             | 1  |       |       | 2  | ○     |                                 | 0.5                                   |               |
| 25               | 1        | 2 |          |   |          | 60  |       | —   |               | ○          |     | △          |               | 1           | 1  |       |       | 2  | ○     |                                 |                                       |               |
| 26               |          | 1 |          |   |          | 60  |       | —   |               | ○          |     | △          |               |             |    |       |       | 1  | ○     |                                 | 0.5                                   | 3             |
| 27               | 1        | 1 |          | 1 |          | 40  |       | 30  | ○             |            |     |            |               |             |    |       |       | 1  | ○     |                                 |                                       |               |

注1. 1976年7月, 北大社会教育研究室調査および北海道農業基本調査個票より作成

2. 機械において ○=個人所有, △=共有: 恒勤=恒常的勤務

3. 5年間の土地移動については0.3ha以上についてのみ記した。

は自己完結的な機械化「一貫」体系に移行しているため二重の投資を避けて共同化に参加しない農家があり、他方では部分的な機械導入をしている農家（既に60年代にトラクター耕段階に入り、70年代には田植機または自脱型コンバインのどちらか一方を個別で導入している農家）が、機械への過剰投資を避けて共同化に参加し、一層の資金蓄積、規模拡大を志向している。②中層では、全体として機械導入が遅れており、しかも土地拡大も余り行なわれておらず、自己完結的に機械化「一貫」体系に移行できるほどには蓄積していない農家が多い。共同化に対しては、比較的労働力が安定しており、しかもすでに田植機または自脱型コンバインを導入している農家はそれ以上の過剰投資を避け、そして自己完結的な機械化「一貫」体系を志向して不参加である。逆に、田植機・自脱型コンバインの導入をしない農家では共同化に積極的に参加している。同時にこのような農家は現在兼業に従事しており、やがて安定的兼業を維持するかあるいは規模拡大により専業化の道を追求していくか、次の段階で選択が迫られると思われる。③下層においてはトラクターの導入率も低く、またバインダーも共同所有という形態が支配的で、資金蓄積条件に乏しい。この層は共同化に加わることによって機械化「一貫」体系への移行をなそうとしている。いわば委託経営化の性格を強く持っている。つまり、自己完結的な機械導入が不可能なことに、共同化に加わることによって農業を維持しつつ、安定した兼業に従事することを強く志向している。1971年に比べ1976年には兼業への従事者が絶対的に増大していることから明らかである（表3-6）。

このように、共同化に参加している農家は一定の資金蓄積を基礎として規模拡大を志向している上層と、すでに生産力格差が存在する中で、いわば半強制的な機械化への対応としてあるいは安定した兼業従事をめざしての中・下層とに分離している。

共同生産組織の内部で農民層間の利害の対立を含んでいるので、共同生産組織の運営においては生産技術上および経済上のさまざまな問題が生じてきている。

稲作中核地帯に位置する月形町の共同生産組織（第一次構造改善事業による共同化を基礎に、さらに次の段階として1973年より共同化育苗を開始し、機械化「一貫」体系に移行している）の場合、次のような問題が挙げられる。①育苗部門においては、(イ)共同育苗に移行することにより作付品種は統一され、個々の農家は共同出役以外には基本的に育苗過程から解放される。(ロ)他方、育苗の専任者は4月末から5月末まで、毎日の管理に追われる。しかも育苗方式は、機械移植であることにより緻密な管理が要求され、育苗の専任者は共同生産組織内の労働配分・労働評価に不満を感じている。②経営問題については、農業経営費の内容をなす主要な事項は共同生産組織の専任者に委ねられ、個々の農家が経営からも排除されてきている。

T地区の例では、①階層差にもとづく技術体系の違いから、育苗過程などの主要な生産過程が専門化すると他の農民の技能が発揮されなくなるという問題が存在する。このことは、農民の集団的な生産力発展の阻害条件となっている。②生産組織内でオペレーターが確保しづらいという問題が生じている。これはオペレーターとしての出役賃金と兼業従事の賃金との格差が、階層間の利害対立として反映したものである。

このように上からの組織化、それに対する農民の階層間の対応の違いから種々の問題が指摘されて来た。しかし、機械の共同所有・共同利用および労働過程の協業化を基礎として、既存の共同生産組織を農民的共同化の中に位置づける条件も存在する。①生産技術の面では、労働の社会化を基礎として技術・技能を交流することにより集団的生産力発展の道の探究が可能であり、②経済的な利害対立も、共同生産組織内の民主主義的力量の形成によって一定程度緩

和できる。また、国家独占資本主義段階の今日、小生産者としての連帯を基礎として地域的な集団すなわち農協という組織単位での、高次な民主主義的力量の形成によって独占資本と対抗して行くことも考えられる。農協組織においては、今日農民層分解促進的に導入されている機械体系をより農民に有利な条件で導入する諸形態も可能であるだろうし、土地規模の格差に起因する生産力格差についても複合経営等の展開により、中・下層の生産力発展を図ることも可能であるだろう。いずれにしても、農民の民主主義的力量の形成が問われてきている。

## 2. 酪農地帯一別海町における酪農生産力の発展

### (1) 別海酪農の形成と機械化の進展

根釧草地酪農専業地帯の中核をなす別海町においては、耕地面積20%以上の農家が地区内全農家の83.7%を占め、また成牛30頭以上を飼養する農家が全飼養戸数の51.0%、20頭以上を含めると81.1%に達する（いずれも1975年2月1日現在、北海道農業基本調査）。従来の副業的酪農経営と複合的酪農経営との併存構造が上述のような本格的な転換をとげるのは、1960年代の酪農「近代化」政策のもとで農業構造改善事業が順次全町的に進められ、急速な規模拡大が進行してからである。

この地域のような草地酪農の場合、規模拡大のためには、乳牛飼養頭数の増大とそれに対応した自給飼料基盤を拡大することが前提条件となるが、そのさい拡大した経営を家族労働力を基礎条件として維持しうる省力技術の採用が不可欠となる。

したがって、別海酪農においても、飼料生産労働過程と乳牛飼養管理労働過程（出荷労働過程もふくむ）の両部門で急速な大型機械化が進められた。

#### i 飼料生産労働過程における機械化の進展

飼料生産労働過程（栽培、収穫調整—乾燥・運搬・貯蔵）において中軸となる労働手段はトラクターである。別海町におけるトラクターの普及の状況は表3—7のとおりである。

表3—7 別海町におけるトラクターの普及状況

|      |     | 総 数  |      | 30馬力未満 |     | 30 ～ 50 |     | 50馬力以上 |     | 所有農家率 |      |
|------|-----|------|------|--------|-----|---------|-----|--------|-----|-------|------|
|      |     | 実戸数  | 台 数  | 戸 数    | 台 数 | 戸 数     | 台 数 | 戸 数    | 台 数 | 個 人   | 合 計  |
| 1967 | 個人有 | 82   | 183  | 41     | 41  | 41      | 42  | —      | —   | 4.2   | 16.2 |
|      | 共有  | 235  | 69   | 21     | 7   | 226     | 62  | —      | —   |       |      |
| 1969 | 個人有 | 248  | 249  | 76     | 77  | 112     | 112 | 60     | 60  | 13.6  | 47.9 |
|      | 共有  | 496  | 131  | 6      | 2   | 309     | 72  | 225    | 57  |       |      |
| 1971 | 個人有 | 579  | 618  | 78     | 98  | 228     | 228 | 288    | 292 | 34.5  | 61.9 |
|      | 共有  | 461  | 192  | 10     | 4   | 322     | 91  | 281    | 87  |       |      |
| 1973 | 個人有 | 858  | 939  | 107    | 108 | 59      | 60  | 533    | 540 | 53.4  | 85.9 |
|      | 共有  | 523  | 234  | 2      | 1   | 239     | 73  | 359    | 160 |       |      |
| 1975 | 個人有 | 1046 | 1307 | 86     | 86  | 240     | 247 | 839    | 894 | 66.2  | 86.1 |
|      | 共有  | 316  | 218  | 4      | 1   | 71      | 19  | 381    | 198 |       |      |

注 農林省「農業センサス」(1975)「北海道農業基本調査」より作成。

大型トラクターの普及は、60年代に入ってから、当時すでに成牛20頭レベルに到達しつつあった少数の上層農家への個別導入形態と戦前入植者の多い地域から順次開始された第一次構造改善事業による中上層農家の共同所有の導入形態で始まった。

表3—7によれば1967年の時点においても個人所有4.2%、共同所有16.2%の普及率にすぎなかったが、それはこのような事情を示すものである。

しかしそのように大型トラクターが上層農家・中層農家に導入されることをも一つの条件と

表 3-8 別海町における酪農生産力構造諸指標の推移

|   |               | 1967      | 1968      | 1969     | 1970       | 1971     | 1972      | 1973      | 1974     | 1975      |
|---|---------------|-----------|-----------|----------|------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| A | 乳牛頭数          | 24,161    | 28,543    | 34,680   | 40,180     | 45,802   | 48,244    | 51,376    | 56,193   | 64,259    |
|   | うち成牛頭数        | 16,065    | 18,385    | 22,481   | 29,162     | 29,467   | 30,992    | 33,712    | 36,582   | 45,420    |
|   | 同対前年比         |           | 114       | 122      | 130        | 101      | 105       | 108       | 109      | 124       |
|   | 乳牛飼養農家戸数      | 1,752     | 1,710     | 1,686    | 1,696      | 1,620    | 1,569     | 1,531     | 1,439    | 1,463     |
|   | 総乳量(トン)       | 58,543    | 72,714    | 82,041   | 99,879     | 112,229  | 124,681   | 132,013   | 139,691  | 152,681   |
|   | 同対前年比         |           | 124       | 120      | 115        | 137      | 111       | 106       | 106      | 109       |
| B | 頭農家規模別数       |           |           |          |            |          |           |           |          |           |
|   | 10頭未満         | 482       | 288       | 173      | 184        | 186      | 148       | 111       | 96       | 61        |
|   | 10 - 19       | 937       | 879       | 654      | 865        | 767      | 597       | 438       | 324      | 174       |
|   | 20 - 29       | 295       | 466       | 617      | 484        | 538      | 599       | 648       | 616      | 440       |
|   | 30頭以上         | 38        | 87        | 242      | 113        | 119      | 206       | 309       | 436      | 746       |
|   | 乳牛飼養戸数率(%)    | 89.4      | 89.5      | 92.6     | 92.6       | 96.4     | 95.4      | 95.3      | 90.8     | 92.5      |
| C | 耕地面積(ha)      | 28,120.0  | 22,087.0  | 24,710.9 | 35,236.3   | 36,002.9 | 39,061.9  | 41,077.3  | 43,887.0 | 49,625.7  |
|   | 同年間増加面積(ha)   | 6,644.3   | △ 6,033.0 | 2,623.9  | 10,525.4   | 766.6    | 3,059.0   | 2,015.1   | 2,810.0  | 5,738.7   |
|   | 採草放牧地面積(ha)   | 16,335.0  | 25,674.6  | 24,746.3 | 11,704.3   | 16,388.4 | 14,675.6  | 11,732.9  | 10,053.7 | 2,723.9   |
|   | 同年間増加面積(ha)   | △ 7,474.0 | 9,399.5   | △ 928.2  | △ 13,042.0 | 4,684.1  | △ 1,712.8 | △ 2,942.7 | △ 679.2  | △ 7,329.8 |
| D | トラクター台数       | 152       | 254       | 380      | 623        | 810      | 1,008     | 1,173     | 1,427    | 1,525     |
|   | ミルカーバケット(台)   |           |           |          |            |          |           | 3,018     | 3,058    | 2,698     |
|   | 戸数            |           |           |          |            |          |           | 1,336     | 1,280    | 1,165     |
|   | パイプライン戸数      |           |           |          |            |          |           | 119       | 162      | 250       |
|   | ミルカー計 戸数      |           |           |          |            |          |           | 1,455     | 1,442    | 1,415     |
| E | 耕地および採草地      |           |           |          |            |          |           |           |          |           |
|   | 乳牛1頭当り(ha)    | 1.8       | 1.7       | 1.4      | 1.2        | 1.1      | 1.1       | 1.0       | 1.0      | 0.8       |
|   | 成牛1頭当り(ha)    | 2.8       | 2.6       | 2.2      | 1.6        | 1.8      | 1.7       | 1.5       | 1.5      | 1.2       |
|   | トラクター1台当り(ha) | 292.5     | 188.0     | 130.2    | 75.3       | 64.7     | 53.3      | 45.0      | 37.8     | 34.3      |
| F | 農従者(人)        | 2.7       | 2.7       | 2.6      | 3.0        | 2.9      | 2.8       | 2.9       | 2.9      | 3.0       |
|   | うち150日以上      |           | 2.3       | 2.3      | 1.9        | 2.4      | 2.4       | 2.5       | 2.5      | 2.3       |
|   | 耕地・採草放牧地      | 22.7      | 25.0      | 27.2     | 25.6       | 31.2     | 32.7      | 32.9      | 34.0     | 33.1      |
|   | 耕地面積(ha)      | 14.4      | 11.6      | 13.6     | 19.3       | 21.4     | 23.7      | 25.5      | 27.7     | 31.4      |
|   | トラクター台数       | 0.08      | 0.13      | 0.21     | 0.34       | 0.48     | 0.61      | 0.73      | 0.90     | 0.96      |
| G | 金雇導入農家数(戸)    | 29        | 26        | 21       | 17         | 23       | 34        | 20        | 44       | 30        |
|   | 臨時雇導入農家数(戸)   | 221       | 440       | 1,271    | 510        | 416      | 451       | 416       | 379      | 430       |
|   | 同1戸当り延べ人数     | 43.6      | 43.0      | 19.0     | 50.8       | 53.8     | 54.3      | 57.0      | 53.2     | 61.2      |
| H | 基働人当り乳牛頭数     |           | 6.6       | 8.1      | 11.5       | 11.2     | 12.1      | 12.7      | 14.2     | 17.5      |
|   | 基働人当り耕地面積(ha) |           | 5.1       | 5.8      | 10.1       | 8.7      | 9.8       | 10.1      | 11.1     | 13.5      |
| I | 成牛1頭当り乳量(kg)  | 3,644     | 3,955     | 3,649    | 3,425      | 4,240    | 4,023     | 3,916     | 3,818    | 3,362     |
|   | 牧草反収(kg)      | 1,840     | 2,140     | 2,850    | 3,600      | 2,430    | 3,320     | 3,220     |          |           |

注1. 農業基本調査・農業センサス(1970, 1975)より

2. 耕地面積・採草放牧地面積については、センサスと基本調査の数字が異なっているので単純比較できない。

3. 成牛1頭当り乳量は、総乳量を成牛頭数でわった。

4. 牧草反収は、田畑保「北海道酪農の現状とその問題」「農業総合研究」30-2.(1976. 4より引用「北海道農林水産統計年報」による根室地区のものである。

して、酪農専業農家としての再生産が可能な基軸規模が、成牛20頭段階へ上昇し、それに対応する牧草畑面積の下限が20年前後に至った現在、従来畜力体系に依存し、またはトラクター所有上層農家との賃耕関係を結んでいた中下層農家にも大型トラクターが導入されるにいたっている。これにはおりから開始された第二次構造改善事業が大きな役割を果たした。8年後の75年には、個人所有のトラクターがほぼ3分の2の農家に普及した。またこの段階では、50馬力以上のトラクターを2台以上個人所有するような農家が少くとも50戸を越えていることも看取できるが、これらの農家は自給飼料基盤としての土地を急速に拡大し、多頭化の最先端を担う農家である。これは特記すべき現象である。

また表3-7によれば、共同所有によるトラクター台数の比率が減少し、したがって参加農家の減少も同時に進行しており、共同所有の解体→個人所有という現象が進んでいることがわかる。

トラクター化を基軸として、従来の労働過程は①牧草栽培（耕耘：畜力耕→トラクター耕）②牧草収穫調整（刈取：畜力モア→トラクター・モア、反転集草：人力→トラクター・テッター、梱包：従来は梱包せず人力で堆積するか畜舎2階へ収納→トラクター・ベラー）等を主要内容として変化していった。従来の技術体系は大きく変容し、単位時間当りの作業量は大きく増大した。それに加えて畜力体系のもとでは容易に進まなかった永年草地の牧草畑化・更新年限の縮小・深耕等による肥培管理の強化と化学肥料の大量投入、刈取回数の増加が可能となり、飼料生産の省力化と集約化とを併進させる条件がきり拓かれた。

表3-8に示された1戸当り耕地面積の67年14.4haから75年の31.4haへという2倍を越える増加と採草放牧地の耕地化（1戸当り採草放牧地67年8.3ha→75年1.7ha）とは、大型トラクターを基軸とした機械化の進展を背景としていたのである。

この結果、牧草の単作化とあいまち、67年の時点では1,000kg台にすぎなかった牧草反収は70年には実に3,600kgに達し、こうした省力化とトラクター深耕による集約化とが併進したのであった。

#### ii) 乳牛飼養管理労働過程の機械化の進展

飼養生産労働過程におけるトラクターリゼーションを基軸とした技術体系の変化と同時に、多頭数飼養管理に対応した飼養管理労働過程の機械化が進んだ（給飼・給水、搾乳、牛乳処理、牛乳運搬、敷料搬入きゅう肥搬出、ふん尿処理、牛体の手入れ、畜舎の清掃・消毒）。

これは当初ミルカーの導入を主要内容としていた。別海町におけるミルカーの普及は、60年代のこの地域の電化を契機として大きく広がっていく。まず最初に、バケット式ミルカーが上層農家に導入された。続いて全階層的な普及・1戸当りの台数増加の段階を経て、バケット式ミルカーがほぼ全酪農専業農家に一巡した70年前後から、上層農家へのパイプラインミルカーの導入が進んでいる。当然ミルカーの普及によって1頭当たり乳牛飼養管理時間が減少した。

70年代に進行しているパイプラインミルカーの導入は、搾乳、牛乳移送、貯乳、搬出の省力化を一挙に実現するが、新しい畜舎の建築と同時にこなされる場合が多く、その際のバーンクリーナーの導入により、従来スコップ・一輪車で人力によっていたふん尿の処理が省力化されつつある。

以上の総結果として、1頭当りの乳量についてみると、67年には3,600kg、71年には4,240kg（表3-8）で、60年代の上昇傾向がうかがえる。

#### iii) バルクローラーの導入と集送乳過程の合理化

表3-9 別海町におけるバルククーラー導入計画

|         | 農家戸数  | 導入数 | 保育台数  | 普及率  |
|---------|-------|-----|-------|------|
| 1969-74 | —     | 270 | 270   | —    |
| 1975    | 1,389 | 381 | 651   | 44.9 |
| 1976    | 1,391 | 534 | 1,185 | 85.0 |
| 1977    | 1,395 | 172 | 1,357 | 97.3 |
| 1978    | 1,398 | 28  | 1,385 | 99.1 |

注 別海町農業委員会資料より。

界に達している農家にとってバルククーラーは、省力化の意義をもち、またパイプラインミルク→バルククーラーというそれなりの技術の体系的完結性を実現できる。

しかし、バルククーラーはそれ自体が生乳の流通体系のかなめ、独占資本主義的市場編成の地域拠点となるものであり、現在はまだ地域集乳所、クーラーステーションまでの個別集荷車と主管工場までの大型タンクローリーの「重複路線」が併在しているが、それだけに乳業資本の立場から、その調整・合理化をめざす新しい集送乳体系確立の一環として、全戸への半強制的設置が位置づけられている。明らかに資本の農民包摂の中での労働の社会化の過程である。

バルククーラーの設置は現在構造改善事業（半額補助）、農協系統による「リース事業」（5～6年の年賦償還）として行なわれている。しかし①三相電気・農道・処理室などの付帯設備・整備を要すること。②新たな集送乳体系は、対象地域の全酪農家を包摂するために、乳かんを利用した既存の集乳体系が残されないことが計画され、③「乳質改善」の規制により、落等乳を出してはならぬという強制が加わることから、小規模の農家は、過剰投資の危険性をおかして導入するか、搾乳を止めるかという岐路にたたされている。

#### iv) 別海町における規模拡大と機械化の実相

前述した機械化の進展を基軸として規模拡大が急速に進み、激しい農民層の分解が結果した。別海町中春別A地区を事例としてその実態について検討する。

この地区は、第二期拓殖計画による戦前入植者の多い地区であり、離農跡地に戦後開拓農家（9番農家）や分家入植農家（2番から5番が分家）が散在している。

農家の規模拡大と機械化の展開の概況は図3-3に示すとおりである。

I階層は72年から74年にかけて成牛30頭の段階を越えた階層で、それに対応する牧草畑の拡大を他階層より比較的早い時期に行なっている。そのためには大型トラクターを中心とした機械化においても優位を保つことが必要とされ、1番農家は共同で、2番農家は個人で、それぞれ65年に導入している。3番農家は最初の導入こそ遅いが、いずれも現在2台の大型トラクターを所有している。70年前後に現在の多頭数飼養に耐えうる畜舎を新設し、いずれもパイプラインミルクを導入し、さらに1番農家にはバークリーナーが設置されている。74年にはいずれも2,000ℓのバルククーラーを装備した。

II階層は成牛20頭の段階の農家であり、30頭の段階に達するためには、牧草畑・畜舎あるいはそのいずれかの投資を必要としている。トラクターは現在それぞれが1台所有しているが、4番農家が中古の機械を個人導入した他はすべて第二次構造改善事業で導入したものである。ミルクはバケツ式でバルククーラーは、4番から7番までが1,200ℓ、8、9番が800ℓのものを装備している。

ミルク・バークリーナーの導入とは、その意義を異にして、現在新しい設備投資としてバルククーラーの設置が急速に進んでいる。1975年度までに44%の酪農家に導入され、計画では78年度には、ほぼ全戸に設置が完了する予定になっている（表3-9）。

搾乳牛が30頭を越え、乳かんによる生乳の移動・保管・運搬の労働負担がすでに限

図 3-3 中春別 A 地区における規模拡大と機械化の展開

| 階層  | 農家番号 | 項 目                           | 1965 | 66                | 67                      | 68                      | 69                    | 70                      | 71                      | 72                    | 73                    | 74                    | 備 考                                                       |
|-----|------|-------------------------------|------|-------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------------------------------------------|
| I   | ①    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 12<br>16.2<br>2   | →16<br>-----<br>-----   | →17<br>-----<br>-----   | →19<br>-----<br>----- | →32<br>-----<br>-----   | →23<br>-----<br>-----   | →32<br>-----<br>----- | →30<br>-----<br>----- | →44<br>-----<br>----- | 72年, 臨雇30日<br>C 2,000ℓ<br>H 792m <sup>2</sup>             |
|     | ②    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 20<br>27.7<br>4   | -----<br>-----<br>----- | -----<br>-----<br>----- | →17<br>-----<br>----- | →17<br>-----<br>-----   | →23<br>-----<br>-----   | →27<br>-----<br>----- | →35<br>-----<br>----- | →40<br>-----<br>----- | 71年, 臨雇23日<br>C 2,000ℓ<br>H 660m <sup>2</sup>             |
|     | ③    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 3<br>6.5<br>2     | →3<br>-----<br>-----    | →5<br>-----<br>-----    | →10<br>-----<br>----- | →15<br>-----<br>-----   | -----<br>-----<br>----- | →26<br>-----<br>----- | →25<br>-----<br>----- | →33<br>-----<br>----- | 72年, 臨雇40日<br>C 2,000ℓ                                    |
| II  | ④    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 7<br>6.0<br>2     | -----<br>-----<br>----- | -----<br>-----<br>----- | →10<br>-----<br>----- | -----<br>-----<br>----- | →16<br>-----<br>-----   | →20<br>-----<br>----- | →25<br>-----<br>----- | →27<br>-----<br>----- | バケット式ミルカー<br>C 1,200ℓ<br>H 495m <sup>2</sup>              |
|     | ⑤    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      |                   |                         |                         | 9<br>2                | →10<br>-----<br>-----   | →15<br>-----<br>-----   | →17<br>-----<br>----- | →22<br>-----<br>----- | →20<br>-----<br>----- | 68年に②から分家<br>バケット式ミルカー<br>C 1,200ℓ<br>H 248m <sup>2</sup> |
|     | ⑥    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 | 4    | -----<br>5.2<br>2 | →6<br>-----<br>-----    | →7<br>-----<br>-----    | →9<br>-----<br>-----  | →15<br>-----<br>-----   | →17<br>-----<br>-----   | →21<br>-----<br>----- | →16<br>-----<br>----- | →30<br>-----<br>----- | C 1,200ℓ<br>H 274m <sup>2</sup>                           |
|     | ⑦    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 9<br>9.4          | →13<br>-----<br>-----   | →10<br>-----<br>-----   | →18<br>-----<br>----- | →22<br>-----<br>-----   | -----<br>-----<br>----- | →20<br>-----<br>----- | →23<br>-----<br>----- | →26<br>-----<br>----- | バケット式ミルカー<br>C 1,200ℓ<br>H 264m <sup>2</sup>              |
|     | ⑧    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 6<br>5.1<br>2     | -----<br>-----<br>----- | →7<br>-----<br>-----    | →8<br>-----<br>-----  | →15<br>-----<br>-----   | -----<br>-----<br>----- | →18<br>-----<br>----- | →23<br>-----<br>----- | →22<br>-----<br>----- | C 800ℓ<br>H 248m <sup>2</sup>                             |
|     | ⑨    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 6<br>11.6<br>3    | →7<br>-----<br>-----    | →6<br>-----<br>-----    | →10<br>-----<br>----- | →9<br>-----<br>-----    | →11<br>-----<br>-----   | →16<br>-----<br>----- | →17<br>-----<br>----- | →19<br>-----<br>----- | バケット式ミルカー<br>C 800ℓ<br>H (26頭収容)                          |
| III | ⑩    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      | 5<br>5.8<br>2     | →6<br>-----<br>-----    | →7<br>-----<br>-----    | →10<br>-----<br>----- | →11<br>-----<br>-----   | -----<br>-----<br>----- | →13<br>-----<br>----- | →14<br>-----<br>----- | →18<br>-----<br>----- | 馬2頭<br>バケット式ミルカー                                          |
|     | ⑪    | 乳牛頭数<br>耕地面積<br>農業専従者<br>機械施設 |      |                   |                         |                         |                       |                         |                         |                       |                       | 12<br>15.0<br>2       | 馬1頭<br>ミルカーなし                                             |

注1. 乳牛頭数, 耕地面積 (ha), 農業専従者 (人) については, 農業センサス (1965, 70, 75), 農業基本調査個票より。

2. 機械施設と備考欄については, ききとり。T: トラクター, P: パイプラインミルカー, B: パーソクリーナー, C: バルククーラー, H: 畜舎。

Ⅲ階層はまだ20頭の段階に到達していない農家であり、耕地面積も20haに達していない。依然、畜力労働手段体系の段階で、とくに11番農家は手搾りの段階であり、いずれもバルククーラーの地域的導入のなかで、まだ導入しえておらず、10番は導入が迫られた場合は、搾乳をやめ育成経営への一本化をさえ考えている。

それぞれの階層的な性格を規定するとⅠは中農上層、Ⅱは中農中・下層、Ⅲは貧農である。

これらの農家の機械化と規模拡大はいずれも、補助事業や制度資金に依存して行なわれており(図3-3)、1番農家・3番農家は72年に総合資金の借入れを行ない、多額な資本投下を行なっている。したがって借入金の総額もほぼ階層に対応して大きくなっており、平均がそれぞれⅠ-978万円、Ⅱ-608万円、Ⅲ-130万円となっている。このことが第2章でみた労働生産性格差の大きさに比し、生産費格差がそれほどでない条件の重要な一つをなしている。

次にトラクターを基軸とした飼料生産労働過程の機械化と作業編成について簡単にふれておく(図3-4)。

Ⅰ階層では、サイレージ調整過程がチョッパーによって行なわれている。チョッパーは、刈取り・細断・運搬部へのはね上げの三つの過程を同時に行ない、モータよりも一歩進んだ労働手段である。Ⅱ階層では、個別作業においては依然モータの段階であるが、5番農家がⅠ階層の2番と、また4・6・8番農家がそれぞれ共同でチョッパーを導入・利用している。後者の共同作

図3-4 大型トラクターの導入方法とサイレージ調整機械の体系—中春別A地区の事例—

| 番号  | トラクターの導入方法と年次    |                 |
|-----|------------------|-----------------|
| 1   | ① 構造改善(第1次) 1965 | —— 個別作業・チョッパー利用 |
|     | ② " (第2次) 1972   |                 |
| 2   | ① 個人 1965        | }               |
|     | ② 共同 1968        |                 |
|     | ③ 個人 1973        |                 |
| 3   | ① 道貨事業(共同) 1969  | } 個別作業・チョッパー利用  |
|     | ② 構造改善(第2次) 1972 |                 |
|     | ③ 個人 1974        |                 |
| 4   | ① 道貨事業(共同) 1969  | }               |
|     | ② 個人 1973        |                 |
| 5   | ① 共同 1968        | }               |
|     | ② 構造改善(第2次) 1972 |                 |
| 6   | ① 道貨事業(共同) 1969  | } 共同作業・チョッパー利用  |
|     | ② 構造改善(第2次) 1972 |                 |
| 7   | ① 共同 1970        | }               |
|     | ② 構造改善(第2次) 1972 |                 |
| 8   | ① 道貨事業(共同) 1969  | }               |
|     | ② 構造改善(第2次) 1972 |                 |
| 9   | ① 構造改善(第1次) 1965 | —— 個別作業・モータ・レーキ |
|     | ② " (第2次) 1972   |                 |
| 10  | 2次構に名目の上で参加      | —— (トラクター賃刈のみ)  |
| 馬 2 |                  |                 |
| 11  | 馬 1              | —— 個別作業・畜力モータ   |

注1. 1974年8月、ききとり調査。

2. トラクターの番号の○印は、現在所有しているものを示す。

業は1969年の道有貸付けトラクターの共同導入を契機として発展したものである。Ⅲ階層は畜力体系を基本としているが10番は刈取りについてのみトラクターの賃耕関係を結んでいる。

このようにサイレージ調整過程に限っても作業編成は複雑多岐であり、共同作業も存在するが、図3-4に示したように、トラクターの導入が最初ほとんどについて共同形態で行なわれたことを考えるならば、むしろ現在は個別作業化の方向が全体の傾向として卓越する局面となっているといえよう。だが、その過程で階層分解が一層激しく顕在化することはいうまでもない。<sup>(1)</sup>

## (2) 別海酪農における規模拡大進行下の諸問題

別海町における労働力構成の展開をみると(表3-8参照)、60年代後半から75年にかけて、家族労働力は平均2.7人から3.0人前後に推移する増加傾向にあり、年間150日以上農従者についても2.5人弱の高い数を維持している。一方雇用労働力は、全農家のほぼ3分の1、つまり搾乳牛30頭、40頭クラスの上層農家が年間のべ2ヵ月程度の臨時雇いを雇用している。

これは、この間の経営規模拡大の結果、家族労働力2~3人が必要であり、しかもなお最も繁忙な夏季の牧草収穫調整労働の時期には、2ヵ月程度の臨時雇いがトラクターを中軸とした労働編成を維持する上で、不可欠となっていることを示している。

根釧においては、この雇用労働はいわゆる実習生という特殊な低賃金労働力によって担われている。またすでに最上層では常雇をもっており、これらの農家は資本装備の点でも最先端をゆく農家である。

草地酪農における農業労働は、前述したように乳牛飼養管理労働と飼料生産労働の二部門に大別されるが、後者のうち最も主要なものが牧草収穫労働である。それは圃場作業として行なわれるが、同一経営の内部で牧草収穫労働と飼養管理労働との関係を配分・調整することが、規模拡大段階における個別経営の重要な課題となる。

朝晩2回の搾乳・給飼・ふん尿処理などの飼養管理労働は通例個別作業として行なわれ、牧草収穫労働は、共同作業と個別作業の併存として行なわれる。

夏季には、男子基幹労働力が圃場でトラクターを駆使して、牧草収穫労働に専従し、女子基幹労働力は畜舎での飼養管理労働と牧草収穫における補助労働を主に担当するという家族内の協業・分業関係が重要な意味をもつ。

自給飼料基盤の拡大と乳牛飼養頭数の増大は、両部門での労働量の増大を必然化するが(表3-10)、乳牛飼養管理労働は毎日、一定時間を必ず充当しなければならず、また牧草収穫労働は、気象条件、草生の制約によって一定期間に完了させる必要があることから、この二部門の労働量の増大は、両者の競合を強める。

表3-10 頭数規模別乳牛飼養管理および飼料作労働時間(1戸当り)(全国)

|      |              | 10~14頭 | 15~19頭 | 20~29頭 | 30頭以上 |
|------|--------------|--------|--------|--------|-------|
| 1972 | 年間乳牛飼養管理労働時間 | 2,604  | 3,270  | 3,972  | 4,800 |
|      | 年間飼料作家族労働時間  | 588    | 657    | 823    | 1,021 |
| 1973 | 年間乳牛飼養管理労働時間 | 2,616  | 3,115  | 4,049  | 4,042 |
|      | 年間飼料作家族労働時間  | 604    | 665    | 819    | 1,270 |
| 1974 | 年間乳牛飼養管理労働時間 | 2,667  | 3,062  | 4,089  | 4,719 |
|      | 年間飼料作家族労働時間  | 584    | 614    | 752    | 867   |

注1. 単位: 時間

2. 前掲、田畑保論文より引用、田畑氏が農林省「牛乳生産費調査」より作成したものである。

このような競合の結果、牧草収穫の繁忙期に男子基幹労働力が、早朝から圃場に直行し、トラクターのオペレーターとして収穫労働に暗くなって作業が不可能となるまで従事し、婦人と補助労働力が圃場の補助作業を担当すると同時に、畜舎にとってかえし、朝晩の搾乳、給飼、畜舎の清掃などに従事する。それが夜間作業その他、時間的な圧迫を生みだし、乳牛飼養管理の粗放化すら結果する。そのうえパイプラインミルク・バーンクリーナー等の省力技術の普及は、逆に多頭化による乳牛の十分な個体管理を困難にすることとあいまって、深刻な状況をもたらしている。それは技術体系の総合性というよりは「混乱」といってもよい状況にある。

またそれは、農繁期における長時間労働と短時間の睡眠を連続させ、労働負担の過大な傾向をも生みだした。

次に土地の問題を検討する。別海町における規模拡大は自給飼料基盤たる土地の急速な集中・集積を条件としていた。

それは当初、第1に、それまで粗放的にしか利用されていなかった山林牧野・未墾地を利用した草地造成。第2に、中下層農家の跡地集中による外延的拡大として行なわれた。しかし最近ではこれらの内包的・外延的拡大の余地も次第にせばめられ、耕地と採草放牧地1戸当りの面積は67年～71年には8.5ha増えたが、71年～75年には1.9haの増加にとどまり、放牧地の耕地化も限界に達している（表3—8参照）。

これにたいして、乳牛飼養頭数は一70年代初めの乳価の低迷・経営費増加などによって若干伸び率が減少したものの一貫して増加しており、したがって逆に成牛一頭当りの面積は67年の2.7haから1.2haへと減少している。しかも牧草反収は、60年代の上昇傾向にもかかわらず、最近では3,000 kg台で停滞しており、自給飼料の基盤はけっして十分とはいえなくなった（表3—8参照）。

牧草反収の向上がトラクターの導入にもとづく深耕と化学肥料の大量投入・刈取り回数増加等によって追求されてきたが、その結果として地力低下が進んだ。それは反収の停滞ということにのみあらわれるのではなく、草質の低下にもとづく乳牛の病気—とりわけ産前産後の起立不能症—の多発をもたらしている。<sup>(3)</sup>

その主要な原因は窒素・カリ多投型の施肥が土壌のマグネシウムやカルシウムの不足状態を生みだしていることにあると考えられている。技術体系の歪みの一典型である。

また従来かなり広範に存在したデントコーン・かぶ等の牧草以外の飼料作物の作付が、大規模化と牧草の収穫調整労働の機械化とにより駆逐され（表3—11）、牧草の単作化、トラクターリゼーションによる一面的な草地利用の集約化により、地力の再生産の条件が崩れつつある。明らかに農法の歪みであるが、その起点は、労働手段、トラクターの孤立的導入に端を発している。

表3—11 飼料作物作付の変化—別海町

|          |        | 1957年 | 1961年 | 1965年 | 1967年           | 1970年           | 1971年           | 1972年           | 1973年           | 1974年           |
|----------|--------|-------|-------|-------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 飼料作物作付面積 | デントコーン | 413.0 | 429.8 | 571.5 | 152.7<br>100    | 48.0<br>32      | 15.<br>32       | 5.1<br>34       | 5.3<br>104      | 18.5<br>349     |
|          | 飼料根菜   | 304.3 | 66.0  | 872.1 | 886.5<br>100    | 697.5<br>29     | 511.9<br>73     | 322.5<br>64     | 236.5<br>73     | 214.0<br>90     |
|          | 牧草     | —     | —     | —     | 21,903.3<br>100 | 32,721.3<br>149 | 34,668.5<br>106 | 38,267.7<br>100 | 38,267.9<br>106 | 43,390.5<br>107 |

注1. 単位: ha    2. 1965, 70年は「農業センサス」その他は「農業基本調査」より作成。

次に農家経済の状況をみると、別海町における多頭化・規模拡大は、もともと自己資金の蓄積条件が十分でなかったところに、政策的に多頭飼育の目標が示され、大量の制度資金が投入され、構造改善事業、根釧パイロットファーム政策を経て最近では新酪農村計画にみられるような政策的強制により、下層零細農家の離農の激発を促しながら、急速にすすめられたのであった。それは個別農家にとっては規模拡大資金を専ら外部資金、とくに制度資金に依存してきたために、不可避免的に負債を累積させ、それが酪農経営への圧迫を生みだしている。

もちろんこうした制度資金を生かしながら、労働手段装備のバランスを保ち、経営拡大のペースを維持した極めて少数の上層農家と、そのような政策的展開にもとづく一面的な規模拡大の方向にとらわれることなく自主的な対応をはかってきた一部の農家も存在したのであるが、負債償還のための多頭化→負債の増大→多頭化という悪循環に大部分の農家がとらえられてきた。別海町における酪農生産力の発展は、こうしたメカニズムを経営内にはらんだ農家群によって担われてきたといつてよい。

表3-12 農・開協の購買品取扱高の推移—別海町—

| 項<br>目<br>農協別 | 肥 料     |         |         |       |      |      | 飼 料     |         |         |       |      |      |
|---------------|---------|---------|---------|-------|------|------|---------|---------|---------|-------|------|------|
|               | 購 買 高   |         |         | 伸 び 率 |      |      | 購 買 高   |         |         | 伸 び 率 |      |      |
|               | 1971    | 1972    | 1973    | 1971  | 1972 | 1973 | 1971    | 1972    | 1973    | 1971  | 1972 | 1973 |
| 中 春 別 協       | 52,182  | 60,524  | 126,241 | 100   | 116  | 242  | 75,639  | 93,620  | 133,789 | 100   | 124  | 177  |
| 根釧 P F 開 協    | 102,500 | 221,884 | 186,618 | 100   | 216  | 182  | 225,000 | 296,452 | 515,764 | 100   | 132  | 229  |
| 西 春 別 協       | 55,603  | 72,798  | 89,792  | 100   | 131  | 161  | 144,792 | 179,936 | 308,216 | 100   | 124  | 213  |
| 別海農協          | 139,879 | 187,656 | 251,574 | 100   | 134  | 180  | 290,978 | 362,270 | 556,576 | 100   | 125  | 191  |

注1. 金額の単位は1000円。

2. 中春別農協と根釧 P F 開協は1975年に合併、根釧 P F 中春別農協となった。

3. 各年次の根室管内「農協要覧」より作成。

表3-13 別海町における挙家離農

|                     | 1965 | 1966 | 1967 | 1968 | 1969 | 1970 | 1971 | 1972 | 計   |
|---------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|
| 離農助成対策戸数            | 29   | 45   | 30   | 30   | 13   | 27   | 21   | 13   | 208 |
| 離農の理由別戸数(主要なもの二つだけ) |      |      |      |      |      |      |      |      |     |
| 土地条件劣悪<br>面積狭少      | 23   | 35   | 18   | 1    | 2    | 3    | 1    | —    | 83  |
| 乳牛の事故<br>病気がけ       | —    | 1    | —    | 1    | —    | 1    | 2    | 2    | 7   |
| 家族構成員の<br>病気がけ      | 4    | 2    | 9    | 18   | 8    | 15   | 13   | 9    | 78  |
| 死 亡                 | —    | 2    | —    | 1    | —    | 1    | 2    | —    | 6   |
| 老 令                 | 1    | 1    | 1    | 8    | 2    | 6    | 3    | —    | 22  |
| 後継者なし               | —    | —    | 2    | 1    | —    | 1    | —    | 1    | 5   |
| 離 婚                 | —    | —    | —    | —    | —    | —    | —    | 1    | 1   |

注1. 開拓者離農助成対策移転方法書より作成。

2. 木村純修士論文「酪農地帯における挙家離農の実態と性格」より。

また前述したような自給飼料基盤の制約と牧草の単作化とにより、購入飼料への依存度が増し、化学肥料の大量投入による肥料費の増大によって経営費が膨張し、所得率の低下が一層進んだ。

表3—12は1972～74年の別海町管内農協（開拓農協を除く）の肥料・飼料購買額の推移を示したものである。これらが価格の高騰をともなって、2年間のあいだに約2倍という激しい上昇をみせている。

このような矛盾は、酪農民の離農の実態の中にも端的にあらわれている（表3—13）。<sup>(4)</sup>

### (3) 泉川地区における酪農の特徴と自主的発展

別海町の泉川は、戦後開拓地区で、泉川開拓農協（76年西春別農協、西春別開協と合併）にぞくする。

この地区では、70年から中春別地区を皮切りに別海町一円に順次着手されてきた第二次構造改善事業がまだ実施されていないことに示されているように、制度資金の大量投入をうけず、政策主導があまり貫れなかったために、生産力の自主的な展開の萌芽がみられる。

75年の1戸当り生産乳量の分布をみると50㍑以下層が21.1%、150㍑以上層は77戸のうち1戸のみで（50㍑以下層P.F中春別農協8.0%西春別13.9%、150㍑以上層P.F中春別22.9%、西春別7.5%）、全体として中小規模の酪農家が多く、別海町全域で進んだ規模拡大とは大様相を異にしている（表3—14）。

これは69年に泉川開協が多額の負債をかかえ、財務内容の悪化に直面したとき、第一次構造改善事業への参加による下層農家の「強制離農」に反対し、全農家による再建をめざしての農協運営の健全化をすすめてきたこと。そのさい政策的一面的な規模拡大の方向をあらため、農家の生活を重視し、農家の条件にあわぬ多頭化・機械化を極力おさえ、自主的な生産力形成をめざした結果である。

1戸当りの負債額についても図3—5で示したとおりで（別海町全体の平均1.020万円にたいし）592万円であり、「規模拡大」型の農業近代化資金の借入も少なく、総合資金導入農家は一戸もない。

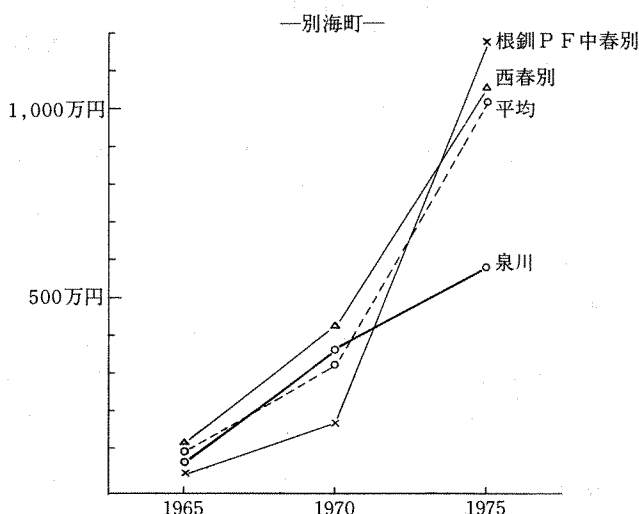
このような結果は、農家経済にもあらわれており、表3—15のように他地区農家との収支構造の相違が明らかである。

表3—14 農・開協の生産乳量別戸数—別海町

|      |          | 50トン未満   | 50—100    | 100—150トン | 150トン以上  | 計         |
|------|----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1973 | 泉川開協     | 23(29.5) | 41(52.6)  | 13(16.7)  | —        | 78(100%)  |
|      | 西春別農協    | 24(13.3) | 106(58.9) | 45(25.0)  | 5(2.8)   | 180(100%) |
|      | P.F中春別農協 | 43(13.1) | 137(41.8) | 113(34.5) | 35(10.7) | 328(100%) |
| 1974 | 泉川農協     | 20(26.3) | 38(50.0)  | 17(23.7)  | —        | 76(100)   |
|      | 西春別農協    | 28(15.1) | 90(48.4)  | 57(30.6)  | 11(5.9)  | 186(100)  |
|      | P.F中春別農協 | 40(12.3) | 108(33.3) | 133(41.0) | 43(13.3) | 324(100)  |
| 1975 | 泉川開協     | 16(21.1) | 39(51.3)  | 20(26.3)  | 1(1.3)   | 76(100)   |
|      | 西春別農協    | 26(13.9) | 77(41.2)  | 70(37.4)  | 14(7.5)  | 187(100)  |
|      | P.F中春別農協 | 25(8.0)  | 87(27.7)  | 130(41.4) | 72(22.9) | 314(100)  |

注 各年度の「根室管内牛乳出荷者名簿」より。

図3-5 農家一戸当負債額の推移



注1. 各農・開協別の推移  
 2. 各農・開協年次毎の業務報告書より作成。

表3-15 別海町泉川地区農家と他地区農家の経営概況

| 農家番号 | 家族数 | 乳量    | 農粗業収入  | 農所業得  | 所得率   | 農業経営費  |       |       |      |       |       |       | 支払元金  | 貯金共済  | 家計費   | そ支の他出 | 過不足    |
|------|-----|-------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|
|      |     |       |        |       |       | 計      | 肥料    | 機械    | 生産資材 | 飼料    | 養畜    | その他   |       |       |       |       |        |
| 1    | 4   | 150.5 | 14,000 | 5,600 | 40.0% | 8,400  | 2,500 | 1,640 | 700  | 2,000 | 1,000 | 600   | 不明    | 1,000 | 1,200 | 5,400 | △6,000 |
| ②    | 7   | 146   | 14,400 | 6,800 | 47.2% | 7,600  | 1,170 | 380   | 940  | 3,800 | 700   | 610   | 530   | 40    | 2,900 | 2,950 | 380    |
| 3    | 6   | 146   | 10,450 | 3,545 | 33.9% | 6,905  | 2,000 | 425   | 710  | 2,300 | 610   | 860   | 3,360 | 1,250 | 2,000 |       | △1,060 |
| 4    | 6   | 140   | 13,200 | 1,900 | 14.4% | 11,300 | 1,400 | 1,100 | 300  | 5,000 | 2,000 | 1,500 | 4,000 | 1,600 | 1,500 |       | △5,200 |
| 5    | 4   | 109   | 8,600  | 3,120 | 36.3% | 5,480  | 1,400 | 1,200 | 700  | 1,800 | 750   | 1,130 | 520   | 1,170 | 不明    |       | △3,100 |
| ⑥    | 4   | 107   | 8,700  | 5,475 | 66.0% | 3,225  | 1,080 | 150   | 16   | 919   | 420   | 640   | 700   | 300   | 1,800 |       | 190    |
| 7    | 5   | 107   | 10,825 | 4,698 | 45.9% | 6,127  | 937   | 96    | 680  | 2,973 | 500   | 941   | 1,361 | 850   | 1,500 |       | 987    |
| ⑧    | 4   | 100   | 10,380 | 5,380 | 51.8% | 5,060  | 750   | 30    | 890  | 1,790 | 490   | 1,050 | 1,510 | 250   | 2,124 |       | 440    |
| 9    | 5   | 100   | 9,800  | 3,510 | 35.8% | 6,290  | 1,000 | 800   | 350  | 2,700 | 470   | 970   | 300   | 220   | 2,000 |       | 990    |
| 10   | 5   | 94    | 7,340  | 3,810 | 51.9% | 3,530  | 650   | 350   | 330  | 400   | 1,500 | 300   | 500   | 520   | 1,400 |       | 1,390  |
| ⑪    | 4   | 89.5  | 8,140  | 4,806 | 59.0% | 3,334  | 733   | 553   | 57   | 964   | 316   | 711   | 540   | 287   | 1,700 | 1,348 | 931    |
| ⑫    | 4   | 70    | 6,850  | 4,518 | 66.0% | 2,250  | 660   | 66    | 203  | 823   | 70    | 430   | 860   | 332   | 2,500 | 225   | 1,447  |
| 13   | 5   | 60    | 5,000  | 1,760 | 35.2% | 3,240  | 810   | 270   | 220  | 1,300 | 220   | 420   | 860   | 680   | 1,200 |       | △ 987  |
| ⑭    | 3   | 38    | 3,450  | 1,806 | 52.3% | 1,644  | 207   | 80    | 470  | 1,116 | 241   | 230   | 582   | 151   | 960   |       | 113    |

注1. 金額の単位は1,000円。

2. ○印が泉川開協管内農家, その他は隣接する西春別農協・開協にぞくする農家である。

3. 1976年2月の「酪農経営技術研究集会」に提出された資料による。

泉川の農家は、所得率が高く、家計仕向け分が多い。負債の圧迫が少ないのは、構造改善事業とその一環として別海町全域で進められているバルククーラーの導入にさいしても農家の実態にみあった計画のもとに一画的な実施をさせてきたからである。

また所得率の高さの要因になっているのは購入飼料費・肥料費の少なさであるが、自給飼料を確保し、ふん尿の還元に努め、地力づくりが重視されてきたこと等がその主な条件になっている。

中春別地区の事例が示しているように、別海酪農においては、構造改善事業によって組織化された共同利用は、一部を除いて、個別経営による発展の追求という方向に移行しつつあり、農協による流通過程の共同化がまず進んでいる。

泉川地区の事例は、このような位置にある農協の民主的運営によって、個別経営を主体とした生産力の発展がはかられ、多頭化→負債の増大→多頭化という悪循環を断ち切ってそのような規模拡大の方向に起因する地力・労働力問題の解決がすすめられなければならないことを示している。しかし、その方向転換は現在の別海酪農の到達段階とそれがはらむ矛盾の大きさを考えたとき容易なことではないだろう。

しかし、この町で地域の労働者（農業改良普及員・農協職員・獣医・教師・保健婦など）をも重要な担い手として開催されてきた労農学習会やこれを受けついだ泉川地区を中心とする酪農経営技術研究会のような農民の自主的学習運動によって、地域酪農の発展をめぐる矛盾とそれを解決する方向が集团的に探究され、自主的発展の方向が自覚されはじめていることは重要である。

### 3. 畑作・そさい地帯

#### ——洞爺村における農業生産力形成の特質——

##### (1) 洞爺農業の展開過程と現段階の特質

「高度経済成長」下の都市への人口集中、食生活の変化による食糧需要の変化にともなって、従来、都市近郊を中心に、副業的作目としておこなわれてきた野菜作が、地域的拡散をおすすめるながら、地域的・作目的専門化を進めつつ「野菜の主産地形成」を展開してきた。「高度成長」下の全国市場の拡大・深化は、北海道をも、そうした動きの中にくみこんだ。

農業「近代化」政策のもとで、大規模に展開されつつある施設園芸は、農業生産の季節性を克服し、周年栽培を可能にした。ビニールの普及、ハウスの大型化、温度調整機能の装備等の工業技術の適用によって、自然的条件からの影響を減少させ、飛躍的に生産力を高めた。近代的施設園芸は、第1に高度な技能、第2に巨額な経営資金を必要とする。さらに、独占資本の価格誘導による、生産価格の急騰、下落にみられる不安定性が絶えずともなっている。

一般的に独占資本による市場支配と消費農産物の生産・流通における全国的再編成のもとで、農民の技術・技能上の格差、資金蓄積の大小によって必然的に農民層分解は激化されるが、そのなかで洞爺農業は、野菜・施設園芸の急激な伸長によって、大消費都市＝札幌むけの、そ菜の主産地形成をおこないつつも、階層分解をある程度、緩和することに成功しているユニークな地域といつてよい。

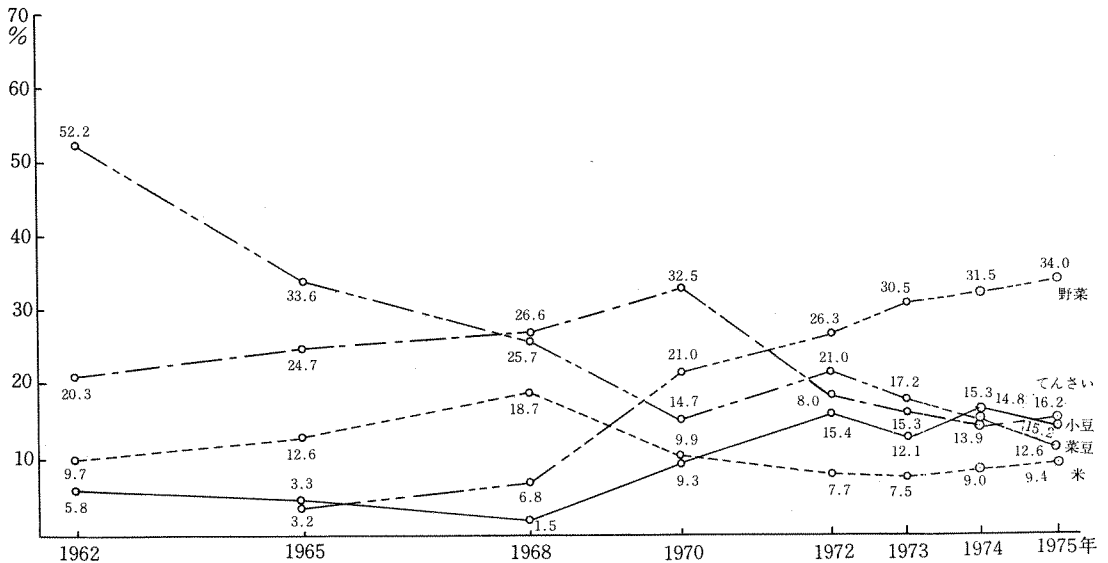
##### a, 野菜主産地の形成・展開過程

1955年当時、この地域一帯は、在来の一般畑作「高級菜豆の主産地」をなしていたが、連作障害、台風被害等により経営不振に陥った。さらに、大豆・ばれいしょ等の一般畑作も貿易自由化政策による低価格によって経営の不安定性は激化した。こうした中で、一方における大型機械の共同導入と他方における新たな方途としての一部施設園芸の先進的模索がおこなわれた。

「野菜の主産地」化の画期となったのは、1966年に会員20名ではじめた「洞爺村そ菜園芸技術研究会」である。さらに1971年から開始された第二次構造改善事業による基盤整備、大型ハウス導入によって、野菜作の急激な伸長をみ、「野菜主産地」の地位をつくってきた。今や、その比重が洞爺農業生産の3割を越えていることは、洞爺村農産物販売実績推移(図3-6)でみるこ

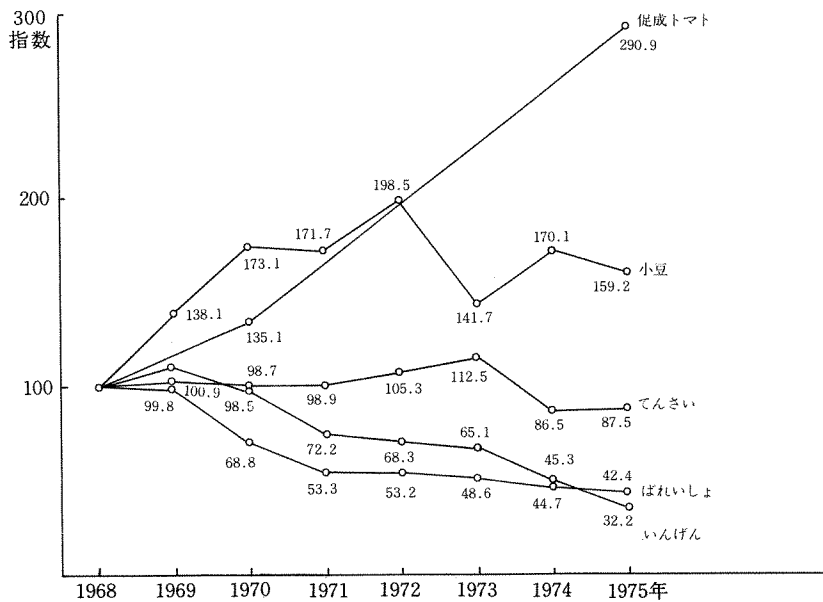
ができる。また、年次別作付面積変化（図3-7）からも、小豆の上昇、てんさいの安定した作付に対し、ばれいしょ・いんげんの作付は1967年当時の3割及び4割に減少し、それと対照的にトマトの作付が3倍にも伸びていることからその動向をうかがえる。

図3-6 洞爺村農協作物別販売比率の推移



注1. 洞爺農協業務報告書より加工

図3-7 年次別作物作付面積変化



注1. 促成トマトは「朝日農業賞推薦調査票」より加工

2. 他は「北海道農林水産統計」（北海道農林統計協会）より加工。

## b 洞爺農業の生産力構造の特質

全道的な畑作の動向をみるならば、トラクター化を基軸とした生産力展開がみられる。すなわち、技術的には、トラクター耕・トラクターによる肥培管理・機械収穫の方向に、作業的には、深耕・多肥・防除・収穫の順に、作物的には深耕・多肥に適した根菜類の方向へ展開し、現在はトラクター化を中軸とした大型機械化「一貫」体系の導入それ自体が階層間格差を激化させ、一方ではより高い生産力を基礎に規模拡大をめざし、他方では、兼業化・離農が進行していくという方向で階層分解が激化している。生産力の側面からみると省力化を中心とした機械化の進展の中で畑作においてはとくに地力問題が深刻化し、とりわけ70年代に入って土地生産性と労働生産性との跛行的展開が進んでいることは、北海道の畑作生産力構造の危機的矛盾の露呈をあらわしているといわねばならない。

こうした全道的な畑作の危機的状況のもとで、洞爺農業の生産力構造の特質として、第1にあげられるのは、土地生産性と労働生産性との並進的な伸長がみられることである（図3-8、表3-16参照）。とりわけ、土地生産性の上昇は顕著で、てんさい・小豆等一般畑作の反収は全

図3-8 「土地生産性」「労働生産性」の指数変化

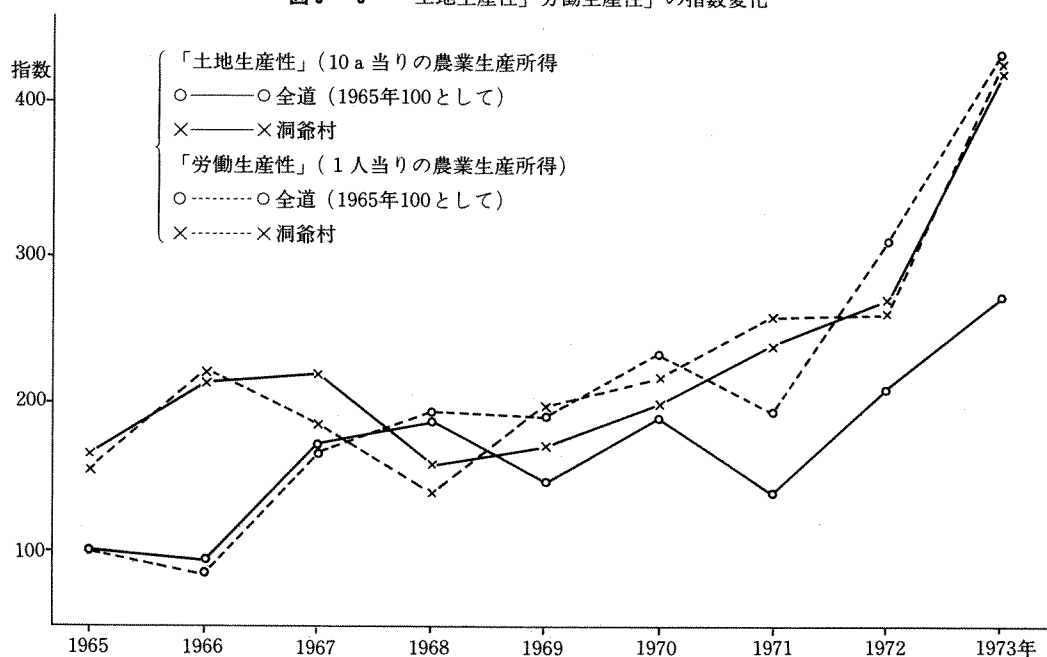


表3-16 「土地生産性」「労働生産性」の推移

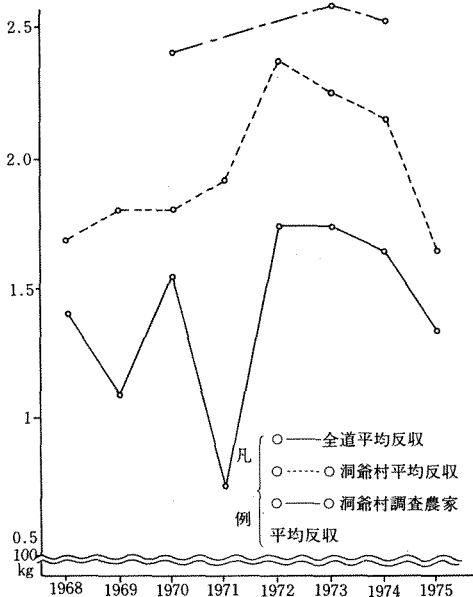
|       |     |        | 1965 | 66  | 67  | 68  | 69  | 70  | 71  | 72  | 73   |
|-------|-----|--------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 土地生産性 | 全道  | 実数(千円) | 11   | 10  | 19  | 20  | 16  | 20  | 15  | 23  | 30   |
|       | 洞爺村 | 実数(千円) | 18   | 23  | 24  | 17  | 18  | 21  | 26  | 29  | 46   |
| 労働生産性 | 全道  | 全道     | 266  | 229 | 455 | 491 | 482 | 609 | 492 | 805 | 1134 |
|       | 洞爺村 | 洞爺村    | 408  | 584 | 481 | 370 | 498 | 568 | 673 | 700 | 1118 |

注1. 「北海道農林水産統計」北海道農林統計協会より引用。

道水準をはるかに上まわっている。野菜基幹作目のトマト・セルリ・マスクメロンについても、それぞれ1968年当時の2.2倍、1.2倍、1.3倍と規模の増大とあわせて反収を増加させてきている（表3-17、図3-9、10参照）。

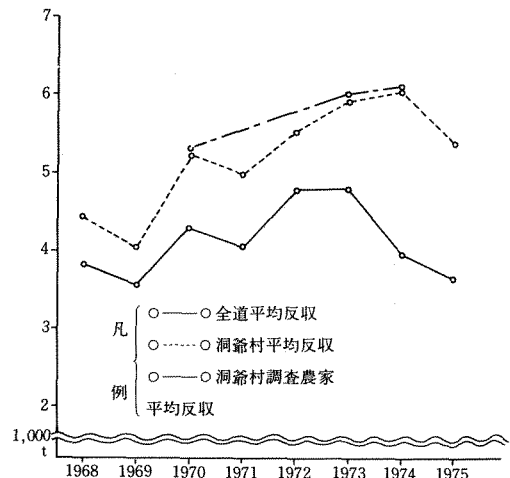
第2の特質として、肉牛導入農家比率が、豊浦、大滝、虻田等の近隣町村と比較してずば抜けて高いことである（全農家の32.2%に達している。）これは、役馬用畜舎の利用による肉牛導入で堆肥生産に力をいれ（したがって畜舎新設投資は抑制）、地力対策を講じているからである。

図3-9 小豆の反収変化



注1. 表2-17より作成。

図3-10 てんさいの反収変化



注1. 表2-17より作成。

表3-17 作目別反収の推移

| 年次   | てんさい (t) |          |         |      |          | 小豆 (kg) |          |         |      |          | トマト (kg) |          |         | 促成<br>トマト | セルリ     | マスク<br>メロン |
|------|----------|----------|---------|------|----------|---------|----------|---------|------|----------|----------|----------|---------|-----------|---------|------------|
|      | 全道       | 胆振<br>地域 | 洞爺<br>村 | 調査農家 |          | 全道      | 胆振<br>地域 | 洞爺<br>村 | 調査農家 |          | 全道       | 胆振<br>地域 | 洞爺<br>村 | 洞爺<br>村   | 洞爺<br>村 | 洞爺<br>村    |
|      |          |          |         | 平均   | 変化<br>係数 |         |          |         | 平均   | 変化<br>係数 |          |          |         |           |         |            |
| 1968 | 3.84     | 3.77     | 4.44    |      | %        | 141     | 150      | 168     |      | %        | 2,540    | 1,950    |         | 4,050     |         |            |
| 69   | 3.54     | 3.33     | 4.03    |      |          | 119     | 133      | 180     |      |          | 2,170    | 1,900    |         |           |         |            |
| 70   | 4.31     | 4.48     | 5.22    | 5.30 | 9.2      | 155     | 138      | 180     | 240  | 8.5      | 2,530    | 2,640    |         | 6,300     | 5,900   | 1,650      |
| 71   | 4.05     | 4.09     | 4.92    |      |          | 74      | 129      | 191     |      |          | 2,570    | 3,710    | 3,000   |           |         |            |
| 72   | 4.78     | 4.45     | 5.49    |      |          | 174     | 190      | 237     |      |          | 2,990    | 3,890    | 5,110   |           |         |            |
| 73   | 4.78     | 4.46     | 5.91    | 6.0  | 11.0     | 174     | 168      | 225     | 258  | 2.5      | 2,950    | 3,830    | 4,900   |           |         |            |
| 74   | 3.95     | 4.84     | 6.03    | 6.1  | 7.7      | 164     | 170      | 215     | 252  | 13.2     | 3,130    | 3,830    | 4,650   |           |         |            |
| 75   | 3.66     | 4.03     | 5.38    |      |          | 134     | 146      | 164     |      |          | 3,180    | 4,000    | 5,000   | 9,110     | 7,100   | 2,210      |

注1. 促成トマト、セルリ、マスクメロンは「朝日農業賞推薦調査票」より引用。

2. てんさい、小豆の調査農家平均反収、変化係数は1975年度社会教育研究室実態調査より作成。

3. トマトは「北海道農作物市町村別統計」より引用。

4. 他は「北海道農林水産統計」北海道農林統計協会より引用。

表3-18 雇用労働, 肉牛導入, トラクター所有, 施設の経営概況

| 年次       |                   | 1967               | 1968               | 1969               | 1970               | 1971               | 1972               | 1973               | 1974               | 1975               |
|----------|-------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 雇用労働     | 胆振地域              | 常雇 戸数<br>(人数)      | 284<br>(510)       | 258<br>(518)       | 271<br>(495)       | 196<br>(337)       | 149<br>(315)       | 175<br>(365)       | 168<br>(307)       | 118<br>(255)       |
|          | 常雇 戸数<br>(人数)     | 2,853<br>(177,477) | 3,843<br>(231,962) | 3,748<br>(252,523) | 3,995<br>(269,156) | 3,267<br>(194,527) | 3,321<br>(205,766) | 3,083<br>(189,738) | 2,814<br>(172,361) | 2,679<br>(160,847) |
|          | 洞爺村               | 常雇 戸数<br>(人数)      | 35<br>(42)         | 28<br>(35)         | 22<br>(29)         | 17<br>(20)         | 10<br>(17)         | 9<br>(13)          | 4<br>(5)           | 3<br>(5)           |
|          | 臨時 戸数<br>(人数)     | 148<br>(9,818)     | 182<br>(12,688)    | 176<br>(12,119)    | 177<br>(12,260)    | 208<br>(9,617)     | 160<br>(11,129)    | 153<br>(9,780)     | 139<br>(7,173)     | 100<br>(5,286)     |
| 肉牛導入     | 洞爺村               | 戸数<br>(頭数)         | 30<br>(144)        | 71<br>(316)        | 82<br>(340)        | 82<br>(308)        | 90<br>(314)        | 93<br>(368)        | 82<br>(386)        | 86<br>(715)        |
|          | 導入農家比率<br>(1戸当頭数) | 8%<br>(4.8)        | 19.8<br>(4.5)      | 25<br>(4.1)        | 24.0<br>(3.76)     | 27.5<br>(3.49)     | 29.8<br>(3.96)     | 28.0<br>(4.7)      | 30.7<br>(6)        | 32.2<br>(8.3)      |
|          | 豊浦町               | 戸数<br>(頭数)         | 8<br>(16)          | 11<br>(25)         | 8<br>(14)          | 12<br>(23)         | 11<br>(26)         | 17<br>(101)        | 19<br>(134)        | 19<br>(136)        |
|          | 導入農家比率<br>(1戸当頭数) | 1.5<br>(2)         | 2.2<br>(2.3)       | 2.1<br>(1.75)      | 4.4<br>(1.92)      | 2.5<br>(2.36)      | 4.1<br>(5.9)       | 4.9<br>(7.1)       | 5.5<br>(10.1)      | 3.9<br>(10.5)      |
| 導入       | 虻田町               | 戸数<br>(頭数)         | 1<br>(1)           | 1<br>(2)           | 1<br>(3)           | 2<br>(12)          | 1<br>(1)           | 2<br>(3)           | 3<br>(35)          | 8<br>(61)          |
|          | 導入農家比率<br>(1戸当頭数) | 0.3<br>(1)         | 0.3<br>(2)         | 0.5<br>(3)         | 0.8<br>(6)         | 0.4<br>(1)         | 0.9<br>(1.5)       | 1.5<br>(11.7)      | 4.2<br>(7.6)       | 8.3<br>(3.4)       |
|          | 大滝村               | 戸数<br>(頭数)         | 15<br>(18)         | 17<br>(88)         | 21<br>(41)         | 24<br>(179)        | 25<br>(185)        | 20<br>(145)        | 21<br>(176)        | 22<br>(198)        |
|          | 導入農家比率<br>(1戸当頭数) | 9.3<br>(1.2)       | 11.0<br>(5.2)      | 14.6<br>(1.95)     | 16.6<br>(7.45)     | 19.4<br>(7.4)      | 18.2<br>(7.25)     | 19.1<br>(8.4)      | 20.4<br>(9)        | 22.2<br>(10.9)     |
| トラクタ所有   | 洞爺村               | 個人                 | 142<br>(147)       | 164<br>(170)       | 170<br>(177)       | 214<br>(229)       | 241<br>(256)       | 211<br>(231)       | 179<br>(189)       | 199<br>(210)       |
|          |                   | 10人共同              | 28<br>(15)         | 25<br>(13)         | 34<br>(17)         | 9<br>(4)           | —                  | 8<br>(4)           | 9<br>(4)           | 7<br>(3)           |
|          |                   | 30人共同              | 15<br>(15)         | 13<br>(13)         | 17<br>(17)         | 21<br>(21)         | 33<br>(33)         | 45<br>(44)         | 48<br>(48)         | 18<br>(18)         |
|          |                   | 計                  | 3<br>(1)           | 7<br>(4)           | 2<br>(1)           | 5<br>(3)           | —                  | 12<br>(5)          | 25<br>(11)         | 20<br>(9)          |
|          | 虻田町               | 個人                 | 17<br>(17)         | 10<br>(10)         | 10<br>(10)         | 9<br>(9)           | 10<br>(10)         | 9<br>(9)           | 10<br>(10)         | 30<br>(22)         |
|          |                   | 10人共同              | 59<br>(19)         | 24<br>(7)          | 43<br>(8)          | 41<br>(6)          | 43<br>(10)         | 30<br>(7)          | 37<br>(7)          | 50<br>(22)         |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          | 大滝村               | 個人                 | —                  | 7<br>(7)           | 8<br>(8)           | 9<br>(9)           | 10<br>(10)         | 11<br>(11)         | 7<br>(7)           | —                  |
|          |                   | 10人共同              | —                  | 35<br>(12)         | 35<br>(11)         | 52<br>(14)         | 63<br>(15)         | 72<br>(16)         | 57<br>(18)         | —                  |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          | 計                 | 個人                 | 174<br>(179)       | 195<br>(201)       | 210<br>(218)       | 258<br>(273)       | 298<br>(313)       | 286<br>(305)       | 253<br>(263)       | 249<br>(260)       |
|          |                   | 10人共同              | 90<br>(35)         | 118<br>(41)        | 166<br>(49)        | 180<br>(52)        | 221<br>(48)        | 230<br>(58)        | 228<br>(76)        | 214<br>(64)        |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          | 豊浦町               | 個人                 | 64<br>(66)         | 130<br>(133)       | 167<br>(171)       | 202<br>(212)       | 221<br>(228)       | 204<br>(225)       | 209<br>(228)       | 233<br>(245)       |
|          |                   | 10人共同              | 63<br>(11)         | 51<br>(8)          | 39<br>(11)         | 30<br>(13)         | 19<br>(6)          | 29<br>(9)          | 20<br>(8)          | 18<br>(8)          |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          | 虻田町               | 個人                 | 66<br>(66)         | 85<br>(86)         | 106<br>(108)       | 120<br>(126)       | 138<br>(151)       | 145<br>(183)       | 158<br>(203)       | 170<br>(192)       |
|          |                   | 10人共同              | 6<br>(3)           | 9<br>(4)           | 13<br>(5)          | 12<br>(7)          | 18<br>(6)          | 13<br>(6)          | 22<br>(9)          | 22<br>(8)          |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          | 大滝村               | 個人                 | 18<br>(18)         | 27<br>(27)         | 35<br>(35)         | 32<br>(32)         | 38<br>(38)         | 39<br>(42)         | 49<br>(49)         | 47<br>(47)         |
|          |                   | 10人共同              | —                  | 23<br>(2)          | 37<br>(3)          | 19<br>(3)          | 15<br>(4)          | 17<br>(4)          | 32<br>(5)          | 27<br>(4)          |
|          |                   | 30人共同              | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
|          |                   | 計                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  |
| ハウスの施設規模 | 4~6m型             | 棟<br>㎡             | —                  | 127<br>18,800      | —                  | 248<br>38,000      | —                  | —                  | —                  | 236<br>37,700      |
|          | 8~10m型            | 棟<br>㎡             | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | 75<br>27,900       |
|          | MT12m型            | 棟<br>㎡             | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | —                  | 73<br>36,200       |

注1. 「北海道農業基本調査」より引用および加工。

2. 1970年, 1975年は農業センサスより引用および加工。

3. ハウスの施設規模は「朝日農業推薦調査票」より引用。

表3-19 専業別、規模別農数、基幹的従事者数の推移

| 地<br>域           | 年<br>度 | A 農<br>家<br>總<br>数<br>(戸) | 専 兼 別 農 家 数 (戸)      |           |        | 専 %<br>業 B<br>率 A | 經 営 耕 地 規 模 別 農 家 数 (戸) |                |             |             |             |             |              |               |               |         |             | 基 幹 的 従 事 者 数 |         |                            |  |  |
|------------------|--------|---------------------------|----------------------|-----------|--------|-------------------|-------------------------|----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|---------------|---------------|---------|-------------|---------------|---------|----------------------------|--|--|
|                  |        |                           | B<br>専 業<br>農 家<br>数 | 兼 業 農 家 数 |        |                   | 例 外<br>規 定              | 0.5ha<br>0.5ha | 0.5~<br>1.0 | 1.0~<br>3.0 | 3.0~<br>5.0 | 5.0~<br>7.5 | 7.5~<br>10.0 | 10.0~<br>15.0 | 15.0~<br>20.0 | 20.0ha~ | c<br>計<br>人 | 男<br>人        | 女<br>人  | 一 勞<br>戸 働 C<br>当 り A<br>人 |  |  |
|                  |        |                           |                      | 第 1 種     | 第 2 種  |                   |                         |                |             |             |             |             |              |               |               |         |             |               |         |                            |  |  |
| 全<br>道           | '65    | 198,969                   | 99,896               | 46,932    | 52,141 | 50.2              | 771                     | 33,117         | 13,082      | 42,794      | 48,180      | 30,576      | 14,934       | 11,919        | 2,871         | 734     | 367,918     | 177,773       | 190,145 | 1.85                       |  |  |
|                  | 70     | 165,978                   | 81,147               | 43,049    | 41,782 | 48.9              | 1,081                   | 24,677         | 10,607      | 28,597      | 34,867      | 27,773      | 13,637       | 13,547        | 6,397         | 4,795   | 297,245     | 150,165       | 147,080 | 1.79                       |  |  |
|                  | 71     | 158,072                   | 76,044               | 39,259    | 42,769 | 48.1              | 1,023                   | 22,253         | 9,946       | 27,205      | 33,312      | 26,515      | 12,952       | 12,615        | 6,598         | 5,703   | 293,421     | 142,515       | 150,906 | 1.86                       |  |  |
|                  | 72     | 150,981                   | 67,769               | 40,985    | 42,227 | 44.9              | 940                     | 20,170         | 9,571       | 26,055      | 31,111      | 25,206      | 12,063       | 12,029        | 6,680         | 7,156   | 276,836     | 134,136       | 142,700 | 1.83                       |  |  |
|                  | 73     | 144,518                   | 63,191               | 41,928    | 39,399 | 43.7              | 975                     | 19,098         | 9,050       | 24,919      | 29,363      | 23,968      | 11,490       | 11,029        | 6,628         | 8,268   | 257,332     | 123,965       | 133,367 | 1.78                       |  |  |
|                  | 74     | 138,559                   | 58,854               | 41,481    | 38,224 | 42.5              | 878                     | 18,106         | 8,633       | 23,817      | 27,570      | 22,439      | 11,031       | 10,415        | 6,383         | 9,287   | 243,340     | 117,209       | 126,131 | 1.76                       |  |  |
|                  | 75     | 134,263                   | 57,491               | 38,634    | 38,138 | 42.8              | 872                     | 18,543         | 7,967       | 22,351      | 25,538      | 21,409      | 11,138       | 10,113        | 6,252         | 10,000  | 232,142     | 118,526       | 113,616 | 1.73                       |  |  |
| 胆<br>振<br>地<br>域 | '65    | 8,146                     | 3,928                | 1,821     | 2,397  | 48.2              | 43                      | 1,391          | 626         | 1,768       | 2,271       | 1,280       | 424          | 244           | 31            | 18      | 14,099      | 6,682         | 7,417   | 1.73                       |  |  |
|                  | 70     | 6,974                     | 3,276                | 1,791     | 1,907  | 46.9              | 77                      | 1,088          | 522         | 1,269       | 1,818       | 1,328       | 469          | 254           | 92            | 57      | 12,004      | 6,386         | 6,518   | 1.85                       |  |  |
|                  | 71     | 6,584                     | 3,100                | 1,576     | 1,908  | 47.1              | 69                      | 964            | 469         | 1,238       | 1,702       | 1,327       | 460          | 232           | 68            | 55      | 13,090      | 6,190         | 6,897   | 1.99                       |  |  |
|                  | 72     | 6,212                     | 2,892                | 1,607     | 1,713  | 46.6              | 66                      | 832            | 449         | 1,139       | 1,574       | 1,322       | 449          | 243           | 74            | 64      | 12,457      | 5,912         | 6,545   | 2.00                       |  |  |
|                  | 73     | 5,958                     | 2,704                | 1,687     | 1,567  | 45.4              | 73                      | 772            | 426         | 1,142       | 1,463       | 1,261       | 432          | 232           | 87            | 70      | 11,777      | 5,565         | 6,212   | 1.97                       |  |  |
|                  | 74     | 5,687                     | 2,566                | 1,680     | 1,441  | 45.1              | 66                      | 721            | 413         | 1,087       | 1,422       | 1,171       | 412          | 237           | 76            | 82      | 11,064      | 5,258         | 5,806   | 1.95                       |  |  |
|                  | 75     | 5,601                     | 2,417                | 1,584     | 1,600  | 43.2              | 65                      | 745            | 434         | 1,071       | 1,332       | 1,150       | 425          | 208           | 74            | 97      | 9,258       | 4,615         | 4,643   | 1.65                       |  |  |
| 洞<br>爺<br>村      | '65    | 372                       | 296                  | 46        | 30     | 79.6              | —                       | 8              | 14          | 53          | 111         | 111         | 59           | 15            | 1             | —       | 910         | 432           | 478     | 2.45                       |  |  |
|                  | 70     | 341                       | 248                  | 65        | 28     | 72.7              | —                       | 10             | 13          | 53          | 90          | 96          | 65           | 14            | —             | —       | 795         | 387           | 408     | 2.33                       |  |  |
|                  | 71     | 327                       | 250                  | 52        | 25     | 76.4              | —                       | 8              | 13          | 49          | 96          | 95          | 55           | 10            | 1             | —       | 808         | 384           | 424     | 2.47                       |  |  |
|                  | 72     | 312                       | 236                  | 52        | 24     | 75.6              | 1                       | 7              | 14          | 47          | 89          | 83          | 54           | 16            | 1             | —       | 781         | 375           | 405     | 2.50                       |  |  |
|                  | 73     | 292                       | 213                  | 55        | 24     | 72.9              | 1                       | 12             | 12          | 49          | 74          | 84          | 42           | 15            | 3             | —       | 703         | 327           | 376     | 2.41                       |  |  |
|                  | 74     | 267                       | 197                  | 42        | 28     | 73.8              | —                       | 2              | 20          | 58          | 56          | 77          | 43           | 9             | 2             | —       | 632         | 297           | 335     | 2.36                       |  |  |
|                  | 75     | 267                       | 205                  | 32        | 30     | 76.8              | 1                       | 10             | 13          | 69          | 48          | 75          | 40           | 8             | 2             | 1       | 582         | 287           | 295     | 2.18                       |  |  |

注1. 北海道農業基本調査より引用および加工。

2. 1965年, 1970年, 1975年は農業センサスより引用および加工。

反収増加はその結果の一つとみられる（表3—18 参照）。

第3の特質として、トラクターの所有形態が他町村と比較して、共同所有形態が圧倒的に多いことが指摘できる。これは過剰投資を避けて、共同利用による効率の運用、省力化をはかっていることを示している。また他地域でみられる共同所有＝利用の、個別化の退行傾向も弱い（表3—18 参照）。

特4の特質として、農業生産力の担い手としての家族労働力は、全道的に2人をわっている中で、基幹労働力（年間150日以上従事者）2人をこえる比較的豊富な労働力を確保していることがあげられる（表3—19 参照）。

#### c 農民層分解の特徴

以上を踏えて、農民層分解全体の様相をみるならば、それが部分的なものに留まり、分解をおしとどめ緩和しようとして一定の成果をあげていると見てよい。すなわち、表3—19の経営耕地規模別農家数をみると、3ha以下層の場合と7.5ha以上層の停滞の傾向がしめしているように、比較的小規模農家が多数存在し、しかも、全体としてきわめて高い専業率を示している。このなかで離農をたどっていく農家は、立地条件のごく悪い地域での観光資本の土地の買い占めによるもので、総じて部分的・局地的なものといえる。

洞爺村の農業経営の動向は、立地条件の違いによってことなり、洞爺湖に面した摺鉢状の南下りの傾斜地の多い、規模の比較的小さい下台地区では、ハウス園芸が展開され、羊蹄山麓の比較的平坦な規模の大きい高台地区では一般畑作が展開されている。

1975年7月に社会教育研究室で実施した農家実態調査の農家経営概況（表3—20）によると、高台の一般畑作地域ではトラクター化を中心にした機械化が進展している。しかしその機械化への対処の仕方は、前述のように共同利用によって、その導入に伴う経営圧迫を最小限にとどめ、効率の運用をはかるとともに、畜産の導入による堆肥生産に力をいれて畑作物の反収を高めている。この結果、てんさいと小豆の反収の変化係数は比較的小さく安定的である（表3—17参照）。また階層間格差も小さく、各階層とも高水準で安定した反収をあげてきていることがわかる。

一般畑作に野菜作（かぼちゃ・根菜類などで、地元では「高原野菜」と称している）を導入している農家が目だつが、これはトラクター化による、余剰労働を新部門にふりわけ、より高い収入を実現しているものとして注目すべきことである。この結果、中層農の畑作農家より土地面積の小さい農家で前者と同程度の収入をあげている。<sup>(6)</sup>こうした高台畑作の動向は、十勝、網走など他の畑作地帯にみられるように、機械化を契機とした階層間格差が激化する方向で富農層を形成し、他方で離農・兼業化をおしすすめるという方向ではなく、むしろ、機械化による、より高い生産力を全体として実現し、それを基礎に余剰労働を新部門導入と結合し、収入の増加をはかるとともに、家族内完全就業を実現してきている。

下台では、土地面積の小規模農家がハウス中心の経営によって上層群を形成し、比較的土地区域の大きい農家では従来どおり一般畑作を行ない、中規模農家で露地野菜の導入によって収益を高めようとする方向が追求されている。下台の小規模農家は、一般には、零細経営のゆえに機械化・規模拡大を基軸とした農業「近代化」政策のもとでは、離農・兼業化を強いられるのであるが、洞爺村では、急激に需要がのびてきた野菜の導入による経営集約化にその克服の道を見出したといえる。施設園芸は小規模農家でも可能であり、規模拡大にとって、他の作目ほど所有面積に制約されることがない。したがって規模拡大を可能にせる資金蓄積が行わ

表3-20 農 家 経 営 概 況 —洞爺村—

| 農<br>家<br>番<br>号                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | 耕 地 面 積 (10 a) |     |            |         |     | 肉<br>牛<br>頭<br>数 | ト<br>ラ<br>ク<br>タ<br>有 | 農 業 租<br>収 益<br>(千円) | 部門別収入割合% |     |     |     | 農 業<br>所 得<br>(千円) | 各 種 目 割 合 % |          |          |          |     | 農 業<br>所 得<br>(千円) | 農 業<br>所 得<br>率<br>% | 導 入<br>資 金<br>人 | 家 族<br>学 働 力<br>人 | 雇 用 労<br>働 日 数 |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|-----|------------|---------|-----|------------------|-----------------------|----------------------|----------|-----|-----|-----|--------------------|-------------|----------|----------|----------|-----|--------------------|----------------------|-----------------|-------------------|----------------|
|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 計              | 畑 作 | 露 地<br>野 菜 | ハウ<br>ス | そ 他 |                  |                       |                      | 畑 作      | 野 菜 | 畜 産 | そ 他 |                    | 労 賃         | 肥 料<br>代 | 農 業<br>代 | 資 材<br>費 | そ 他 |                    |                      |                 |                   |                |
| 2-1<br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br><br>< |                |     |            |         |     |                  |                       |                      |          |     |     |     |                    |             |          |          |          |     |                    |                      |                 |                   |                |

北海道における農業生産力の現段階

- 注1. 1975年度社会教育研究室実態調査の結果より作成。  
 2. 農家番号は農業租収益の高いものから並べる。  
 3. トラクター所有は 合数/農家戸数をあらわしている。

れているところでは、富農層形成もなされている（たとえば表3—20の1—3農家）。

総じていえることは、第1に、洞爺村では、農民層分解を激化する方向、すなわち、農業「近代化」政策による一部の上層育成と圧倒的農民層の没落のコースをたどるという方向ではなく、高台ではトラクター段階の技術体系を基礎に、畜産導入による地力維持によって、より高い生産力を実現し、それを基礎に「高原野菜」の導入をはかり、下台では小規模面積でも可能な施設園芸を新部門として導入して急激に伸長し、こうして全体として経営の向上をはかっていることが特徴的である。第2にその結果として、畑作物は全道水準に比較して、高い反収をあげている。第3に、さらに、農民層分解を部分的な離農・兼業にとどめ、大多数の専業農家が存続し発展していることが特徴的である。第4に、生産力の担い手たる比較的豊富な労働力を確保していることは、現に洞爺農業を支え、今後の発展を可能ならしめる大きな条件となっている。

このことに関連して、とくに、労働編成の変化に伴う家族協業の変容について次にふれよう。

いうまでもなく、ハウス施設園芸は、労働集約的であり、豊富な労働力を必要とする。その労働過程には手労働を中心にした高度な技能が要請される。労働集約性と手労働中心の労働過程はハウス園芸の特性とあいまって婦人労働を不可欠なものとして位置づける。あるいは、新部門としての野菜栽培の導入も、青年あるいは婦人を家族内分業における専門的担い手として位置づける。こうした労働編成の変化が従来の「家父長的」性格を残存した家族内協業から新しい家族内分業・協業、専門化をおしすすめながら民主的家族関係を形成しうの一つの条件となっている。<sup>(7)</sup>そして、研究会その他、個別家族の枠をこえた、婦人層・青年層・成人層、さらにそれらを包含した農民層の結合がはかられた時、地域農業の真の担い手層として位置づけられる。洞爺農業はその条件・可能性を大きく含んでいるといえる。<sup>(8)</sup>

## (2) 自主的共同化と農協の役割

「野菜の主産地」形成を可能にしたのは、第1に自主的共同化であり、第2にそれをささえた農協の組合員農民に対する協力・援助体制である。すなわち、「技術の共同化」と「流通の共同化」に対して農協の諸事業が、農民の自主的対応の中で統一的に実践されたことによる。

その展開過程をあとづければ、1966年に「そ菜技術研究会」が結成され、技術交流・技術学習がはじまる。主な活動は、道内主要産地の栽培技術についての視察研修、毎年1月の冬期野菜講習会、会員相互の巡回研修、季節ごとの現地研修、さらには、共同育苗作業などである。在来の閉鎖的篤農技術・技能と異なった、科学的技能の開放は、農民間の技術・技能の平準化をもたらし、高い生産力形成の主體的契機を前進させた。1966年に20名ではじまった研究会が1975年には48名の規模にまで発展した。機械・施設共同化に対応して、流通面の共同化も農協の先行投資によって行なわれた。1968年には農協が野菜の共同集荷販売をてがけ、それをさらに、共同育苗ハウスの建設に進めた。1969年には、共同育苗が実施される一方で、グリーンアスパラ・トマトの共同撰果が開始される。この共同育苗・共同撰果は農民の過重労働を大巾に軽減させ、一方、定量・定質の洞爺野菜として有利な市場対応を実現した。それには毎冬の講習会も大きな寄与をしている。

こうした農民的技術・技能・流通共同化を基礎とする農民的・集団的な生産力形成を基礎に第二次構造改善事業では行政基準を修正した大型ハウス建設（表3—17参照）、大型流通施設設置が実現された。こうした、近代化は、政策主導ではなく、生産手段の充実による地域的生産力を高めていく物質的条件となったのである。

表3-21 ハウス農家経営概況—洞爺村—

| 階層 | 農家戸数(戸)  | ハウス規模(m <sup>2</sup> ) | 家族労働力(人)   |      |      | 年齢別農業従事者数(人) |       |       |       |     | 従事日数(日) |      | 雇 用 労 働 |         |       |       |             |       |          |                |
|----|----------|------------------------|------------|------|------|--------------|-------|-------|-------|-----|---------|------|---------|---------|-------|-------|-------------|-------|----------|----------------|
|    |          |                        | 総数         | 男    | 女    | 20~19        | 30~39 | 40~49 | 50~59 | 60~ | 計       | 一戸当り | 一人当り    | 導入農家戸数  | 農家比率  | 各階層率  | のべ日数        | 比率    | 一戸当り導入日数 | 全農家労働力のうちの占める比 |
| a  | 6        | 3,000<br>5,000~        | 3.17       | 1.67 | 1.50 | 6            | 3     | 2     | 5     | 3   | 19      | 975  | 306.0   | 4戸      | 50.0% | 66.7% | 960日        | 55.5% | 160.0日   | 14.1%          |
| b  | 4        | 2,000<br>~3,000        | 3.50       | 1.75 | 1.75 | 3            | 3     | 2     | 3     | 3   | 14      | 963  | 275.1   | 1       | 12.5  | 25.0  | 50          | 2.9   | 12.5     | 1.3            |
| c  | 4        | 2,000                  | 3.75       | 2.00 | 1.75 | 3            | 2     | 2     | 2     | 6   | 15      | 868  | 231.5   | 1       | 12.5  | 25.0  | 400         | 23.1  | 100.0    | 10.3           |
| d  | 5        | ~2,000                 | 2.00       | 1.00 | 1.00 | 0            | 1     | 7     | 0     | 2   | 10      | 533  | 266.5   | 2       | 25.0  | 40.0  | 320         | 18.5  | 64.0     | 10.7           |
| 計  | 総数<br>19 |                        | 平均<br>2.74 | 1.53 | 1.21 | 総数<br>12     | 9     | 13    | 10    | 14  | 58      |      |         | 総数<br>8 |       |       | 総数<br>1,730 |       |          |                |

注1. 1976年度社会教育研究室実態調査の結果より作成

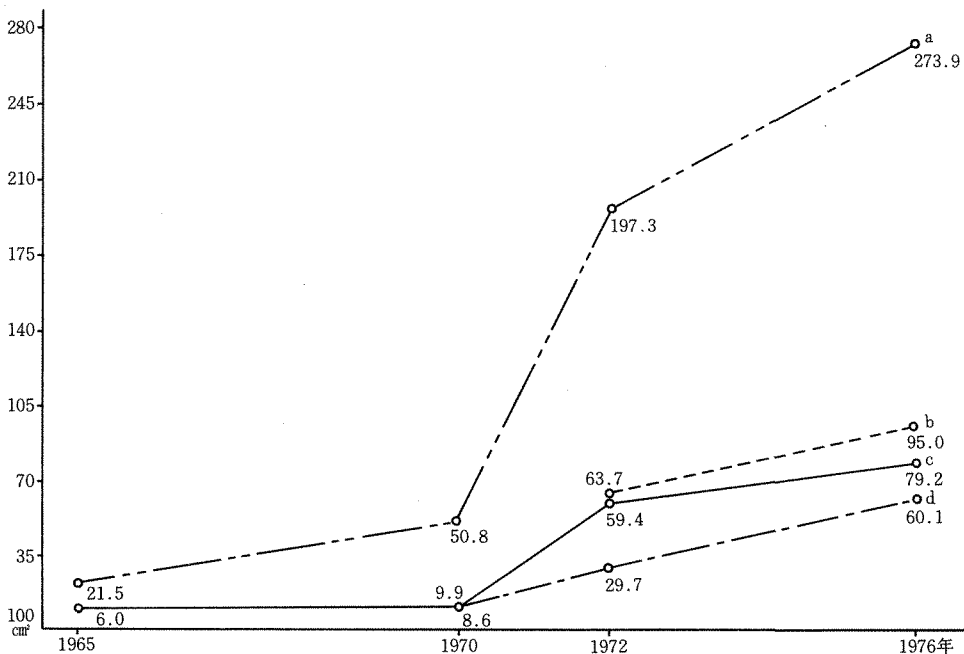
表3-22 ハウス農家の作付・生産概況—洞爺村—

| 階層 | 総積<br>ハウス面<br>㎡ | ト マ ト 栽 培 概 要   |                 |                 |                 |                 |                 |                 |                |         |      |      |                  |                  |                 |                 |           | メロン<br>作付面積<br>㎡<br>(比率%) | セルリ<br>作付面積<br>㎡<br>(比率%) | レタス<br>作付面積<br>㎡<br>(比率%) |             |       |                  |                  |                 |
|----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|---------|------|------|------------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|-------------|-------|------------------|------------------|-----------------|
|    |                 | 作付面積㎡(比率%)      |                 |                 |                 |                 | 販売額万(比率%)       |                 |                | 作付比率(%) |      |      | 作付本数<br>(比率%)    |                  | 総収量10K<br>(比率%) |                 | 収穫開始日(戸)  |                           |                           |                           | 収穫終了日(戸)    |       |                  |                  |                 |
|    |                 | 1976年           | 1975            | 1974            | 1973            | 1972            | 1975            | 1973            | 1972           | 1975    | 1974 | 1973 | 1974             | 1973             | 1974            | 1973            | 5月<br>31日 |                           |                           |                           | 6月1日<br>10日 | 6月11日 | 7月20日            | 7月21日<br>31日     | 8月1日            |
| a  | 27,390          | 8,250<br>(42.5) | 8,700<br>(40.8) | 7,590<br>(41.6) | 8,024<br>(47.8) | 5,924<br>(48.4) | 1,469<br>(42.9) | 1,083<br>(48.1) | 507<br>(49.4)  | 35.2    | 31.8 | 27.7 | 34,700<br>(40.0) | 30,100<br>(36.6) | 7,996<br>(40.4) | 7,117<br>(40.0) | 5         | 0                         | 0                         | 3                         | 2           | 0     | 10,098<br>(73.9) | 14,920<br>(82.3) | 3,597<br>(45.8) |
| b  | 10,395          | 4,620<br>(23.8) | 3,795<br>(17.8) | 3,820<br>(16.7) | 3,056<br>(18.2) | 2,054<br>(16.8) | 671<br>(19.6)   | 418<br>(18.6)   | 181<br>(17.6)  | 44.4    | 33.6 | 36.8 | 16,000<br>(18.5) | 18,050<br>(22.6) | 3,929<br>(19.9) | 3,407<br>(19.1) | 1         | 1                         | 2                         | 1                         | 1           | 1     | 2,640<br>(19.3)  | 2,870<br>(15.8)  | 2,600<br>(33.2) |
| c  | 7,920           | 3,234<br>(16.7) | 5,390<br>(25.3) | 4,490<br>(25.3) | 3,270<br>(19.5) | 2,810<br>(22.9) | 700<br>(20.4)   | 450<br>(20.0)   | 226<br>(22.0)  | 40.8    | 66.8 | 56.7 | 21,300<br>(24.6) | 20,100<br>(24.5) | 4,511<br>(22.8) | 4,582<br>(25.8) | 1         | 3                         | 0                         | 3                         | 0           | 1     | 924<br>(6.8)     | 0                | 1,450<br>(18.5) |
| b  | 6,006           | 3,300<br>(17.0) | 3,430<br>(16.1) | 3,300<br>(16.4) | 2,450<br>(15.6) | 1,457<br>(11.9) | 583<br>(17.0)   | 301<br>(13.3)   | 113<br>(11.0)  | 65.8    | 57.1 | 55.0 | 14,700<br>(17.0) | 13,810<br>(16.9) | 3,311<br>(16.9) | 2,690<br>(15.1) | 0         | 2                         | 2                         | 1                         | 2           | 1     | 0<br>(0)         | 330<br>(1.8)     | 200<br>(2.5)    |
| 計  | 51,711          | 19,404<br>(100) | 21,315<br>(100) | 19,200<br>(100) | 16,800<br>(100) | 12,245<br>(100) | 3,423<br>(100)  | 2,252<br>(100)  | 1,027<br>(100) |         |      |      | 86,700<br>(100)  | 82,060<br>(100)  | 19,747<br>(100) | 17,796<br>(100) | 7         | 6                         | 4                         | 8                         | 5           | 3     | 13,662<br>(100)  | 18,120<br>(100)  | 7,847<br>(100)  |

注1. トマト栽培概要(収穫開始日, 収穫終了日, 76年トマト作付面積)「トマト栽培概要」そ菜技術研究会より加工。

2. 総ハウス面積, 76年トマト作付面積, メロン作付面積, セルリ作付面積, レタス作付面積, 収穫開始日, 収穫終了日は1976年度社会教育研究室実態調査の結果より作成。

図2-11 ハウス規模拡大の推移



注1. 1976年度社会教育研究室実態調査の結果より作成。

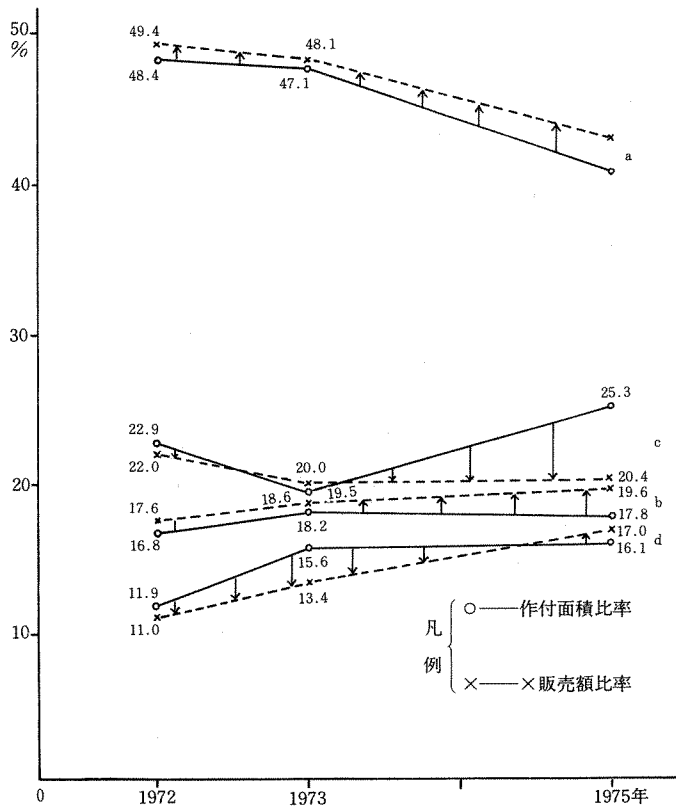
とくに農協の「中小農育成」を基本姿勢とした農民への対応がこうした結果をうみだしたといつて過言ではない。構造改善事業も、農民の代表を加えた構造改善事業実行委員会をつくり、個別農家の要求にそつて推進してきた。また、地力対策についても、全体的にそのとりくみを強め、肉牛導入を推奨していったことは前にふれた。

しかし、地域的・集団的な生産力形成とはいへ階層間の新たな矛盾は進行せざるをえない。それは、まず上層優位の生産・販売として展開している。この点を1976年に社会教育研究室で実施した農家実態調査による結果で検討する（表3-21、3-22参照）。

ここに掲げた階層は、基本的には、農業収入でその経営と生活を維持している中農層である。1,000㎡が労働力1人が経営しうるハウス規模とされていることから、ハウス規模2,000㎡のC層を中心に、それ以下を中農下層=d層、それ以上を中農上層とする。中農上層については、ハウス規模3,000㎡以上の大規模ハウスを有し、その規模故に大量の雇用労働力を有し、富農的性格も一部にある層（a層）と、それ以下の層（b層）とにわけて考察する（a層の中には常雇をやといっている農家もいる）。

まず第1に、第二次構造改善事業の展開を境に、ハウス規模の拡大テンポが階層間格差をともなつて進行していることである。しかし、そうしたなかでも中農上層b層は中農上層a層に、中農下層d層は、中農中層c層に接近する努力が追求されている（図3-11参照）。この格差構造は資金蓄積のちがいによるものだが、大型機械化「一貫」体系が行政・資本主導で進められた場合と異なり克服困難なギャップではない。第2に、主要基幹作目であるトマト・マスクメロン・レタスの作付において上層が支配的な位置をしめていることである。上層a層の作付面積比率はトマト42.5%、マスクメロン73.9%、セルリ82.3%、レタス45.8%ときわめて高い

図3-12 トマト作付面積比率・販売額比率の年次別推移



注1. 表3-22より作成

比率を占めている。第3に、トマト栽培について作付面積比率・販売額比率のそれぞれが上層優位に展開していることである(図3-12参照)。上層a層はともに比率は減っているが、販売額シェアは作付面積シェアを上まわり格差はひろがる傾向にある。上層b層は販売金額シェアを上まわる形でともに上昇している。それに対し、逆に中農層c層は作付面積シェアが販売金額シェアを上まわりその差が拡大している。第5にこのような格差をもたらすメカニズムとして販売時期の上層優位性が指摘される。上層ほど5月中に収穫を開始し、7月中に終了しているのに対し、下層では6月中旬の開始農家もあり、収穫終了日は8月中に入っている。したがって上層農の方が有利な市場対応を行なっている。こうした上層優位の生産・販売の階層構造は技術・技能上にもあらわれている。すなわち、第1にトマト作付面積シェアとトマト作付本数シェアをみるならば上層a層ほど面積シェアに対し、作付本数シェアが小さいことである。第2に作付比率が、上層a層では35.2%に対し下層では40%をこえ下層d層では60%をこえていることである(40%以下が合理的とされている)。これらは、下層ほど無理な生産をしていることを意味する。第3に収穫段数<sup>(9)</sup>が下層ほど多いこと。第4に上層ほど合理的な輪作体系をしていることなどがあげられる。

このようにして、研究会の技術交流・技術学習をつうじて技術・技能の平準化がすすみ、上層では、合理的技術体系によって水準の高い生産・販売を実現している。他方、下層では、小

規模ハウスに制約されながらも、より収益性を追求するところから技術・技能の歪曲が行なわれ、結果として生産・販売で上層より劣るものとなっている。

しかし、この階層間格差構造も、規模接近が追求され、技術的・技能的克服の努力も行なわれている中であって克服困難なものではない。

他方、上層優位の展開をおしすすめていくことが困難な状況もある。一般畑作の大型機械化「一貫」体系とは異なったハウス経営の労働ピークの存在は、とりわけ上層で労働力確保の問題としてあらわれている。さらに1975年から開始された農業構造改善資金の償還は、大型ハウス導入をてがけた上層では経営を圧迫する要因ともなっている。こうした状況のもとで、上層中心に規模拡大志向から市場対策志向にむかっている。それは現に野菜の低価格・不安定性が産地間競争をいっそう激化させており、今後の農家経営の発展にとって一つの焦点となっているからに他ならない。

表3-23 農民の意識状況—洞爺村—

| 階<br>層 | 経 営 志 向     |                  |                  |                                      |                  |                       |                            |                            | 研究会に対しての<br>ぞ む 活 動 |                            |                       | 研究会運営に<br>つ い て |                       |        |
|--------|-------------|------------------|------------------|--------------------------------------|------------------|-----------------------|----------------------------|----------------------------|---------------------|----------------------------|-----------------------|-----------------|-----------------------|--------|
|        | 反<br>収<br>増 | 技<br>術<br>向<br>上 | 価<br>格<br>安<br>定 | 流<br>経<br>通<br>費<br>機<br>構<br>削<br>減 | 負<br>債<br>償<br>還 | 健<br>指<br>康<br>増<br>進 | 離<br>考<br>え<br>て<br>農<br>る | 兼<br>考<br>え<br>て<br>業<br>る | 冬<br>期<br>講<br>座    | 巡<br>視<br>回<br>研<br>修<br>察 | 産<br>交<br>地<br>間<br>流 | 満<br>足          | ま<br>ま<br>あ<br>ま<br>あ | 不<br>満 |
| a(6戸)  | 3           | 1                | 5                | 3                                    | 3                | 2                     | 0                          | 0                          | 2                   | 0                          | 3                     | 0               | 4                     | 2      |
| b(4戸)  | 3           | 1                | 4                | 0                                    | 1                | 1                     | 0                          | 0                          | 2                   | 3                          | 1                     | 0               | 4                     | 0      |
| c(4戸)  | 2           | 2                | 4                | 2                                    | 1                | 0                     | 0                          | 0                          | 2                   | 2                          | 0                     | 1               | 3                     | 0      |
| d(5戸)  | 4           | 4                | 3                | 2                                    | 1                | 1                     | 0                          | 0                          | 4                   | 4                          | 2                     | 2               | 3                     | 0      |
| 回 答 数  | 12          | 8                | 16               | 7                                    | 6                | 4                     | 0                          | 0                          | 10                  | 9                          | 6                     | 3               | 14                    | 2      |

注1. 1976年度社会教育研究室実態調査の結果より作成

それは農民意識に如実にあらわれている。表3-23は今後の経営発展にとって重要と考えていることをまとめたものである。上層では、「価格安定」「流通機構経費削減」「負債の償還」が高く、下層では、「技術向上」「反収増」が高いという結果がでている。これは上層が一定の技能習得を終え、市場対応に関心を示しているのに対し、下層では依然、技能的に未熟なため上層に追いつこうとしていることをあらわしている。研究会が上層のイニシアチブによって市場問題・経済問題も学習に反映させていくならば、生産技術学習組織から、経済問題の学習も備わった、さらに一段質の高い研究組織に展開していく条件を内包している。そして、技術学習・市場対応・経済学習をつうじて、もう一段高い、農民的技術・技能を形成し、歪曲された独占資本の技術体系や、独占資本の市場支配の構造を農民がとらえ正す条件を含んでいる。この場合、具体的には研究会と農協の有機的連関が重要となろう。

### (3) 農民陶冶と教育課題

洞爺農業においては、農業技術・技能の農民的な総合性を追求する生産力展開がなされているということが出来る。すなわち、その特徴は土地生産性の偏向による地力収奪的な農業生産を排し、肉牛導入による堆肥生産によって地力維持をはかっていること、さらには、トラクターの共同所有・共同利用による効率的運用をはかっていることなどにあらわれている。従来の労働対象に傾斜し土地生産性に偏向した農業生産力形成に対し、独占資本によって「一貫」体系として大型機械が農民におしつけられる中で、技術的矛盾による様々な弊害があらわれつつある段階

にあって、洞爺農業の展開は注目すべき特徴をもっているといえる。

施設園芸・野菜栽培は労働集約的であるがゆえに、機械等の労働手段による直接的規制が少なく、その労働過程は農民的自由度の高い特性をもつ。それは、反面、高度な技能をも要求する。連作障害を防ぐ地力対策、そのための合理的輪作体系の確立、作付面積・作付本数・ハウス内の収穫段数等の調整は、長年の経験的技能を基礎としながら、科学・技術水準の農業適応によって、はじめて農民的合理性を獲得する。

研究会組織の技術・技能学習は、野菜技術の篤農の秘伝的封鎖性を克服し、経験交流による技術・技能の科学化を実現し、あわせて試験場、改良普及所等の示す農業技術体系の自主的摂取を可能にし、農業技術・技能の総合性の実現をめざしている。(2)でみたように、上層を中心に、合理的輪作体系、無理のない作付本数、収穫段数、合理的作付比率の確立によって、科学・技術水準を農業技術に適用して農民的生産力を形成しているといえる。

しかし、他方で経営費の占める比率が高く独占資本の市場支配と産地間競争による価格不安定性のもとで市場関係に強く制約されていることもたしかである。それは下層では、合理的作付体系を無視した農業技術・技能の総合性の歪曲としてあらわれ、上層では、合理的技術・技能の形成を一定程度確立したものの、資金蓄積の脆弱さゆえにその克服の道を模索していることが、規模拡大から、市場対応へ関心が集中していることに示されている。

また、研究会は生産技術学習組織から、経済学習への新しい展開をしつつある。<sup>(10)</sup>

市場問題、農産物価格の学習は、利潤追求の単なる手段としての知識にとどまらず、農家経営が資本主義的生産関係と小農的生産様式の矛盾によって規制されていることの科学的認識から勤労農民の生存権の主張に達する条件を備えつつあるといえる。

さらに、経済学習・技術学習をつうじて個別的農家の枠をこえた地域的・集团的連帯をうみだじつつあることも重要である。

これらは、婦人層独自の技術研究会が会員相互の交流をつうじて農休日を設置させ、農協婦人部においても婦人層として、それまでに形成した集团的連帯をもって生活改善にとりくむにいたっていることにもあらわれている。高台では、近年、野菜作導入を契機に青年層を中心に「高原野菜研究会」が結成された。

こうして、農協が農民の自主性の尊重した運営を進める中で量的発展をしてきた研究会は今や質的發展をも内包している。そして、この研究会を中心に各層ごとに、各地地域ごとにも研究会組織結成がすすみ、地域的集团的な農業生産力の形成・発展をめざす担い手が成長しつつある。ここに農民の陶冶過程の端緒をみることができるといえよう。

#### 4. ま と め

以上、本章では、農業生産力の形成過程を、とくにその階層構造、地域構造とそこにおける対抗、矛盾を主体的契機との関連で明かにする分析を進めてきた。具体的には、稲作―上川地域士別市T地区(補助的に空知地域月形町)、酪農―根室地域別海町、畑作(野菜)―洞爺村についてそれぞれ実態に即して分析してきたわけであるが、いずれの地域においても、われわれが北海道農業生産力の現段階を律する技術体系として設定した大型機械化「一貫」体系の導入を基礎に生産力の展開がみられるという点は共通しているといえる。むろん、そこにおける対抗関係と矛盾の発現形態は一樣ではないが、すくなくとも次の諸点は、現段階の生産力構造の共通の特徴として指摘することができる。第1に農業機械メーカーによって開発され、資本・行政主導で導入されている大型機械化「一貫」体系は、農業技術としてそれじたい歪曲性をもつ

ている。第2に、大型機械化「一貫」体系の階層分解激化の作用力が動力耕耘機段階とは異なり、より強力なものとなっているということである。これは動力耕耘機を中心とする技術体系が小農の生産様式でもほぼ全階層的に導入される技術的性格を有しているのに対し、大型機械化「一貫」体系は小農の生産様式と矛盾し、とくにその導入をめぐる階層間矛盾が波及激化する要因を含んでいるからである。第3に、こうした技術体系の導入をめぐる階層差は、それじたい階層分解をさらに激化させる。そして、その過程で、現に新たな上層農が形成されつつある。士別市T地区における10ha以上層、別海町における乳牛飼養頭規模40頭以上層（トラクター2台所有）、洞爺村における常傭雇入れハウス経営農家の出現などがそのような新上層農に該当する。第4にこのように大型機械化「一貫」体系は階層分解を激化するとともにその農民の対応の一形態としての共同化を促す。その中でとくに下層農家は、生産共同組織内では事実上経営の担い手層として排除され、各種労働過程の請負化傾向のつよまるなかで経営主体としての地域内での位置づけも変わってきている。

以上の共通の特徴をふまえて、さらに3地域の独自性についても概括しておかなければならない。

稲作では、従来、生産力形成における政策的介入が強いが、士別市T地区では行政・メーカーの強いイニシアティブのもとで大型機械化「一貫」体系の導入がはかられ、いまその進行過程にある。すでにそれらをめぐる矛盾が、農民諸階層、農家家族構成員、各関係機関のそれぞれの間で多角的に発生しており、これに対する農民の対応、とりわけ農協や農業改良普及所のかかわり方が、今後のこの地域の生産力の展開、さらに農業共同化の動向に大きな影響を与えることになるだろう。

別海町では、「新酪農村建設事業」を軸に酪農「近代化」政策が全町的に推進され、そのなかで酪農民の階層分解がよりドラスチックに進行している。しかし他方では、すでに、その一定の過程の進行のなかから、新たな主体的条件が集团的に形成されている点が注目される。たとえば泉川地区ではまさにそのような意味での先進的实践が行われている。そこでは行政・資本のイニシアティブの酪農「近代化」に對置される個別経営の充実・その集团的発展の方向が探求され、その実践が地域労働者を含む共同学習のもとで経験的レベルから自然科学・社会科学的認識のレベルへと主体的に高められはじめている。

洞爺村では、その生産力形成が農民研究組織、農協を中心に全農家階層のレベルアップ（生産力、経済性、担い手の全面発達）、そのための組織内での民主・平等の原則を貫く努力によって集团的に対応している。離農が少ないこと、婦人・青年が労働・生産の担い手として地域で生き生きと個人的集团的に活動していることなどはその反映であり、この点で農民的民主主義を基盤とする地域的・集团的生産力形成というにふさわしい一定のレベルの内実をもっているといえよう。

このように3地域における農民の農業生産力形成に対する対応と役割はことになっているが、その中であって、農民諸階層が農業技術の歪曲性を克服し、農民主体の農業生産力形成をめざす実践が萌芽的にみられる。これらの主体的条件が農民教育制度と現実とにどのようにかわっているか。この点を実態の中に探るのが次の課題である。

注 1. 稲作の大型機械化「一貫」体系導入にともなう地力問題については、最近、注目をひいているがその実態をうらづけるデータはかならずしも多くはない。付図は、農村省調査による東北地域の事例であって、この図から、ここ 10 年くらい逐次堆きゅう肥施用量が減少していること、ならびに作付面積が大きくなるほど（したがって機械化が進んでいるほど）施用量がへっていることが読みとれる。このような傾向は全国的にあてはまると推測される。

注 2. 牧草収穫作業においては、別海町では、上層農家群による自走式ハーベスターの共同利用が事例的にみられる。田畑保「北海道酪農の現状とその問題」（『農業総合研究』30-2, 1976, 4 頁）には、その実態が述べられている。根釧酪農の現段階について、本稿は田畑保氏に学ぶところが大きい。チョッパーは、家族労働力においても優位にたつ中層上層以上への個別導入、個別利用あるいは、それ以下の層も含めた共同利用という点で、現在では中層下層においても個別導入・利用が可能なモータと意義を異にしているが、さらに自走式ハーベスター等の大型機械の共同利用＝共同作業がみられることはその規模の大きさ、参加農家の階層の高さなど酪農地帯における機械化の現段階を示す重要なことである。

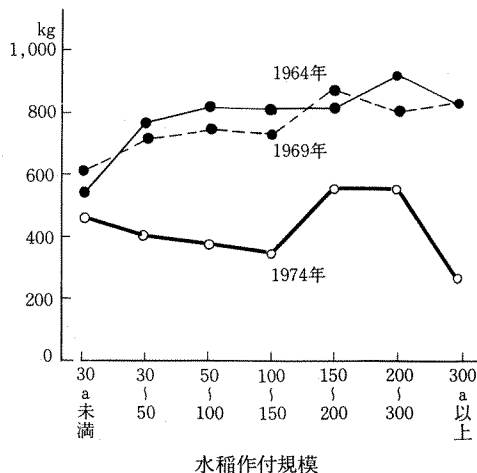
注 3. 乳牛の起立不能症の発生とその要因については、塩沢照俊「草地酪農の経営構造」（『北海道農林研究』道立総合経済研究所, 48, 1975.3）参照のこと。

注 4. 別海の離農については、木村純「酪農専業地帯における挙家離農の実態と性格」－要旨－『北大教育学部紀要』1976, 3）参照のこと。

注 5. 別海労働学習会については、山田定市「農村社会教育」（『講座日本の教育』9, 1975, 新日本出版社）参照。

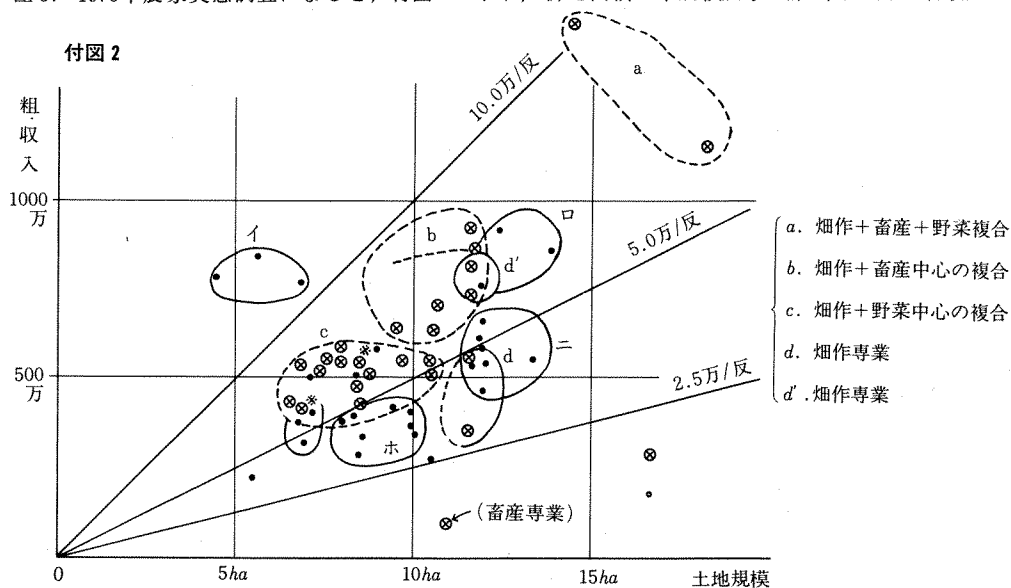
注 6. 1976 年農家実態調査によると、付図 2 の示す、耕地面積が中規模農家ホ群は、反当りの租収入が

付図 1 東北の堆きゅう肥施用量  
(10 a 当たり)



注 農林省「米生産費調査」による。

付図 2



2.5～5 万にあったのに対し、1975 年調査では C 群に移行し、反当り粗収入が 5～10 万にあがっている。

これは、高原野菜の導入によって収益を高めたものである。

注 7. 1975 年度農家婦人の実態調査によるとハウス農家の婦人は経営にも積極的に参加し（種苗選定、作付計画、栽培管理等）a 層の婦人担い手意識が強いという結果がでている。また研究会などにも積極的に参加している。

注 8. 施設園芸農家を中心とした婦人層独自の生産学習組織があり、青年層を中心として高台には「高原野菜研究会」が近年、結成され、他にも「ビート研究会」や「和牛組合」等がある。高台の「ビート栽培研究会」には隔年に、経営主とその妻が学習会に参加する形態をとり、妻の参加の年は、ビートの反収があがるという結果がでている。

注 9. トマト栽培の場合、収穫の際の板の段数をあらかじめきめて、その他の枝はきることになっている。無理をして収穫する場合その段数はふえることとなる。

注 10. 現に 1976 年の研究会の冬期講習会のカリキュラムには、価格問題、市場問題がとりあげられた。

## 補章 農業技術と農民教育制度の概要

### ま え が き

1970 年代の農業の大型機械化「一貫」体系の導入とともに——それまでの耕耘機段階と本質的に異った——農民層分解の新局面にいま日本農業は入りつつある。

そうした農業技術が農業生産力の水準を画する過程で、その主体的契機たる農民の主体的力量が——それ自体一つの経済的力能であることを洞爺、泉川の例は示している。

そこにわれわれは農民の技術・技能教育上 1 つの手がかりを見出すことができる。

むろん、労働生産力の発展と労働の社会化の苦渋にみちた進行の過程で、小農的生産様式のもつ「小所有」、「分散労働の浪費」の制約は本質的なものとして軽視はできない。

しかし、現代の農民が「科学の累進的応用」から全く排除されていた前世紀の農民でないことも事実である。そこに現代の国民的教育レベルの反映（科学、技術、文化と民主主義）をみることができるし、またみなければならない。

そのことを前提としつつ、農民教育とりわけ技術・技能教育の諸関連をわれわれは追求したいと考えているが、その現実技術における運用主体、農民の主体的力量との照応関係についての知見の蓄積はまだ十分ではない。

また、農民の技術・技能教育の諸課題は、農業の技術構造から演繹的に措定さるべきものでもないであろう。

そうした意味で、逆に現在大型機械化「一貫」体系の導入のもとで、現実の農民技術関係教育制度がどのように運営されているか、実態の方からもアプローチして、その特徴を探る方法をとることが必要であろう。

そうした意味で、その手がかりとして ① 農民の教育、学習要求、学習機会の実態をふまえ ② 農業改良普及制度、農協の営農指導制度 ③ 農業青年にたいする農業学園制度 ④ 農民にたいする公共職業訓練校の教育の 4 つについて、地域における実情を点検、整理して補論としたい。

#### 1. 農民の学習要求と学習機会

##### (1) はじめに

この節では、士別市における社会教育計画の基礎的資料をうるための一連の調査結果を中心として、農民の学習機会、関心領域、学習要求を、経営類型別、規模別にみるとともに、市街地成人男子のそれと比較分析し、生産力形成とかかわる農民の技術修得や主体形成のための学

習の位置づけを概観しようとするものである。

この調査は、1975年10月、農業経営者層、市街地在住の公務員、会社員を対象として、面接法により実施した。農業経営者層31名、市街地在住の公務員、会社員（以下市街地勤労者層と称する）40名から回答を得た。

## (2) 農民の学習経験

まず農民の学習の量的側面（最近5年間にいかなる種類の学習機会をとらえて学んできたか）から観察してみよう。

表4-1にみられるように、農民は市街地勤労者層よりもはるかに多くの学習機会を得ている。これが特徴である。すなわち、市街地勤労者層が1人平均1.25回に対し農民は4.3回とその学習機会は3倍強に達している。利用種類は、体育祭・文化祭参加および農協、農業改良普及所における学習に集中し、必ずしも多彩とはいえない。しかし、農協、農業改良普及所のそれは、毎年何本かが必ず実施されていることから、のべの学習機会は一層の厚みをもっている。このように農民の学習機会は、主として農協、農業改良普及所（農業試験場）という直接農業にかかわる施設において行なわれており、これらを媒体とした技術・技能修得に重点がおかれてきたことも指摘できる。<sup>(1)</sup>

表4-1 最近5年間に利用した学習機会

|                |                | 稲作中心 | 畑作中心 | 酪農中心 | 計   | 市街地勤労者層 |
|----------------|----------------|------|------|------|-----|---------|
| 対 象 人 数 a      |                | 16   | 12   | 3    | 31  | 40      |
| 公的機関による学習機会    | 研究会、研修会、講習会講座  | 1    | 12   | 1    | 14  | 6       |
|                | 講演、鑑賞会         | —    | 6    | —    | 6   | 6       |
|                | 体育祭、文化祭        | 14   | 12   | 1    | 27  | 7       |
|                | スポーツ教室、ラジオ体操   | —    | 3    | —    | 3   | 7       |
|                | 農業学園、農民大学、短期職訓 | 2    | 5    | 1    | 8   | 1       |
|                | 農業改良普及所における学習  | 14   | 9    | 1    | 24  | —       |
|                | 農業試験場における学習    | 6    | 3    | —    | 9   | 2       |
| 農協、商工会における学習   |                | 14   | 11   | 2    | 27  | 4       |
| 職場内教育（共同職訓）    |                | —    | —    | —    | —   | 12      |
| 労働組合農民組合における学習 |                | 1    | 3    | —    | 4   | —       |
| 自主的農民市民団体      |                | —    | 1    | —    | 1   | —       |
| 市外の実習機関学習活動参加  |                | 2    | 3    | 1    | 6   | 2       |
| 各種学校           |                | —    | 3    | —    | 3   | 1       |
| 通信教育           |                | 1    | —    | 1    | 2   | 3       |
| 合 計 b          |                | 55   | 71   | 8    | 134 | 50      |
| 一人当たり学習機会 b/a  |                | —    | —    | —    | 4.3 | 1.25    |

注 以下この節の表はすべて北大社会教育研究室が市別市において実施した調査結果から作成したものである。

しかし、経営類型別にみると、利用した学習種類は畑作中心に多く、この類型に属する者の学習経験が広範であることは注目すべきである。

学習機会の量的側面を経営類型別、階層別にみたのが表4-2である。1人平均の学習機会は畑作中心農民が圧倒的に多く（5.9）、以下稲作中心（3.4）、酪農中心（2.7）の順になっている。そして、稲作中心、畑作中心ともに中規模、大規模層が多くの学習機会を利用している傾向がみられる。

表4-2 農家階層別学習機会

|                | 稲 作 中 心 |         |       |      | 畑 作 中 心 |          |       |     | 酪農中心 | 総計  |
|----------------|---------|---------|-------|------|---------|----------|-------|-----|------|-----|
|                | 6ha以上   | 4～6ha未満 | 4ha未満 | 計    | 12ha以上  | 7～12ha未満 | 7ha未満 | 計   |      |     |
| 対象人数 a         | 3       | 11      | 2     | 16   | 5       | 2        | 5     | 12  | 3    | 31  |
| 総学習機会 b        | 12      | 39      | 4     | 55   | 34      | 14       | 23    | 71  | 8    | 134 |
| 一人当総学習機会 b/a   | 4.0     | 3.5     | 2.0   | 3.4  | 6.8     | 7.0      | 4.6   | 5.9 | 2.7  | 4.3 |
| 改良普及所、農試での学習 c | 3       | 3       | 1     | 20   | 7       | 2        | 3     | 12  | 1    | 33  |
| 一人当学習機会 c/a    | 1.0     | 1.45    | 0.5   | 1.25 | 1.4     | 1.0      | 0.6   | 1.0 | 0.3  | 1.1 |
| 農協、農民組合での学習 d  | 4       | 10      | 1     | 15   | 7       | 2        | 5     | 14  | 2    | 31  |
| 一人当学習機会 a/d    | 1.3     | 0.9     | 0.5   | 0.9  | 1.4     | 1.0      | 1.0   | 1.2 | 0.7  | 1.0 |

注 水田、畑作両方を所有している農家の場合、経営面積の多い方の地目の面積によって類別した。

表4-3 農民の経営・営農上の関心事

(人数)

| 稲 作 中 心           | 16 | 畑 作 (酪 農) 中 心  | 15 |
|-------------------|----|----------------|----|
| 規模拡大・大型機械導入       | 2  | 機械導入、野菜栽培、地力回復 | 3  |
| 投資の先走り(機械化に伴う)    | 5  | 畑作物価格問題        | 8  |
| 休耕による経営のゆがみ、休耕の今後 | 4  | 基盤整備の遅れ        | 1  |
| 若者に魅力のある農業にすること   | 2  | 共同化            | 1  |
| 冷害の心配、大規模農家中心の農政  | 2  | 低利長期の融資枠拡大     | 1  |
| 関心事なし             | 1  | 離 農            | 1  |

しかし、表の下段に示したように、農業改良普及所(および農業試験場)、農協(または農民組合)における学習機会をみると、類型別階層別にほとんど一定しており、直接農業にかかわる分野の学習経験には大きな差がないことがわかる。

### (3) 農民の潜在的学習要求

農民の主観的学習要求の分析に入る前に、農民が現在の自分達の経営や生活をどのように実感しているかをとらえてみよう。これは学習要求の背景をなすものであり、潜在的学習要求として位置づけられる。

農民の最大関心事を、経営(営農)、生活、社会と大別すると、圧倒的に経営(営農)に集中する(31人中30人が関心領域としている)。市街地勤労者層もこの分野への関心は高い(40人中27人)が、比率は低いし、切実度もそれほど強くない。<sup>(2)</sup>

経営(営農)についての関心事の中で最もその割合の高いものをまとめたのが表4-3である。これをみると、規模拡大、機械導入、新しい栽培技術の修得など積極的な面に関心をよせるのは5人にすぎず、大部分は経営が思うようにいかないもどかしさや不満を表明している。とくに稲作中心の農家は、機械化にともなう過剰投資や、休耕の問題、畑作中心の農民は価格問題など、技術的な問題よりも政策的・社会経済的問題の方に圧倒的に関心をむけていることが指摘できる。すなわち、農民に潜在する学習要求は、農業政策面の矛盾克服を課題とする方向にあるといえよう。

## (4) 農民の主観的学習要求

農民の学習要求は広範に及ぶが、9つの範囲に分けて整理してみた(表4-4)。

これをみると、農民の学習要求は圧倒的に技術その他実務に役立つ学習におかれ、余暇・教養に要求が多い市街地勤労者層と大きなちがいを示している。

そして、社会経済のしくみを知るための学習(時事問題・市場論など)、実務・社会経済のしくみを知るための基礎的学習(心理学、数学、憲法学習など)、実践活動を行なうための学習(リーダーシップ論、グループワークなど)が、市街地勤労者層と比較して非常に少なく、また技術その他実務に役だてるための学習にたいする農民の要求との比率と比較しても大きな差のあることが目立つ。

表4-4 農民と都市勤労者の学習要求比較

(MA)

| 学 習 要 求 内 容            | 農 民 |             | 市街地勤労者層 |             |
|------------------------|-----|-------------|---------|-------------|
|                        | 実 数 | %<br>31=100 | 実 数     | %<br>40=100 |
| 技術その他実務に役立てるための学習      | 25  | 80.6        | 17      | 42.5        |
| 社会経済のしくみを知るための学習       | 7   | 22.6        | 16      | 40.0        |
| 実務・社会経済のしくみを知るための基礎的学習 | 0   | 0.0         | 5       | 12.5        |
| 実践活動を行なうための学習          | 1   | 3.2         | 7       | 17.5        |
| 家庭生活をよりよくするための学習       | 4   | 12.9        | 10      | 25.0        |
| ゆたかな余暇をすごすための学習        | 10  | 32.3        | 18      | 45.0        |
| 人格形成のための教養的学習          | 3   | 9.7         | 14      | 35.0        |
| 地域をよくするための学習           | 4   | 12.9        | 8       | 20.0        |
| 体力づくり、健康を増進するための学習     | 6   | 19.4        | 9       | 22.5        |

こうした傾向をうらづける資料の1つとして、筆者が行なった空知地方の農民の学習要求調査がある。<sup>(3)</sup> すなわち、すぐ役に立つ農業技術・経営の知識を最大の要求としてあげた者が、48.9%いたのに対し、農業生産の基礎となる数学科などの知識5.1%、社会経済の知識4.1%、人をうまくまとめていく方法0%となっており、士別調査の結果とはほぼ一致している。

こうした農民の主観的学習要求と先にみた潜在的学習要求とを比較してみると次の点が指摘できる。

農民は技術よりも政策面から発生した諸問題の克服を潜在的課題意識としてもっている。とすれば、社会経済のしくみを知る学習、それを行なうための基礎的学習、農民の連繫をはかっていくための実践活動を行う学習などが高比率を占めるはずであるが、主観的には、技術その他実務に役立っている学習を強く要求しているという1つの自己乖離がみられる。

しかも、実務・社会経済のしくみを知るための基礎的学習をあげた者が士別の場合皆無であったことは、大型機械化(「一貫」体系)の中で高度化した技術・技能の修得を基礎学力の向上というより根底的な面から考えずに、即効的な技術・技能修得に傾斜していることを意味する。

この技術その他実務に役立てるための学習の内容を経営類型別にかかげたのが表4-5である。

表4-4でもみたように、この項目を学習要求としてあげなかった者が6人いたがそのうち5人までが稲作中心の農民であった。25人が8種類の内容をあげたが、その4割強は営農技術一

表4-5 経営類型別「技術その他実務に役立てるための学習」の内容

|      | 回答人数  | 農一業技術般 | 農操作機械術 | 栽培技術 | 土地改良 | 大工技術 | 簿記   | 共同経営 | 農業情報 | 計     |
|------|-------|--------|--------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 稲作中心 | 11    | 7      | 2      | 1    | —    | —    | 2    | 2    | —    | 14    |
| 畑作中心 | 14    | 4      | 5      | 2    | 1    | 1    | 2    | 1    | 3    | 16    |
| 計    | 25    | 11     | 7      | 3    | 1    | 1    | 4    | 3    | 3    | 30    |
| 比率%  | 100.0 | 44.0   | 28.0   | 12.0 | 4.0  | 4.0  | 16.0 | 12.0 | 12.0 | 120.0 |

般と答えており、必ずしも要求が具体的に意識化しているとはいえない。残る7種類中、自然科学を基礎においた狭義の技術が4種類、経営とのつながりを主とする内容が3種類あげられている。畑作中心の農民の学習要求がより具体的であり多彩であることもよみとれる。

#### (5) 学習要求を充足する場

以上のような主観的学習要求を農民はいかにして充足しようとしているのか。充足しうる場という側面から分析した結果が表4-6である。

期待しうる場・機会を具体的に回答したのは3分の2にすぎなかった。その中では、農協と農業改良普及所に期待が集中している。普及事業よりも農協の営農指導の方が上位を占めた点は注目すべきであろう。<sup>(4)</sup> つづいて農民の自主的研究集団・農業試験場があげられている。これら農業関係施設・機会が上位を占め回答総数の4分の3に達していることは、学習要求の内

表4-6 学習要求を充足しうると考えている場・機会

(MA)

|         |    |      |        |    |      |
|---------|----|------|--------|----|------|
| 調査総数    | 31 | —    | 無回答    | 8  | —    |
| 回答人数    | 20 | 100% | わからない  | 3  | —    |
| 農協      | 13 | 65%  | マスコミ利用 | 4  | 20%  |
| 農業改良普及所 | 9  | 45%  | 図書利用   | 1  | 5%   |
| 自主的研究集団 | 5  | 25%  | 通信教育   | 1  | 5%   |
| 農業試験場   | 4  | 20%  | その他    | 3  | 15%  |
| 教育委員会   | 4  | 20%  | 回答総数   | 44 | 220% |

表4-7 経営類型別・規模別、農業関係学習の充足の場・機会

|          |          | 対象人数 | 農協 | 農業改良普及所 | 農業試験場 | 農民の自主的研究集団 |
|----------|----------|------|----|---------|-------|------------|
| 稲作中心     | 6 ha 以上  | 3    | —  | —       | —     | —          |
|          | 4～6 ha未満 | 11   | 7  | 5       | 4     | —          |
|          | 4 ha 以下  | 2    | 1  | 1       | —     | —          |
|          | 計        | 16   | 8  | 6       | 4     | —          |
| 畑作(酪農)中心 | 12 ha 以上 | 7    | —  | —       | —     | 1          |
|          | 7～12ha未満 | 3    | 2  | 1       | —     | 2          |
|          | 7 ha 以下  | 5    | 3  | 2       | —     | 2          |
|          | 計        | 15   | 5  | 3       | —     | 5          |
| 総計       |          | 31   | 13 | 9       | 4     | 5          |

容からみて当然といえよう。そして、技術・技能修得と直接かかわりのうすい教育委員会などへの期待があまり高くないことは、教育委員会側の農民の学習要求充足への積極性の度合と、農民の側の学習要求の自覚化の水準の双方に問題が存在することの現われといえよう。

しかし、農民の期待が集中しているこれら農業関係施設・機会をみると、表4-7に示すように、経営類型や規模によってかなり異なることがわかる。その特徴をまとめてみよう。

第1は、農協、農業改良普及所（農業試験場）ともに、稲作・畑作大規模層からの期待がよせられておらず、中・小規模の農民の期待するところが大きい点である。

第2は、稲作農民は、農協、農業改良普及所（農業試験場）双方とも畑作中心農民よりも期待のよせ方が大であるが、特に後者（公的機関）に多くの期待をよせている点である。

第3は、農民の自主的研究集団への期待が畑作中心の農民によって出されている点である。

#### (6) 小 括

農民は、市街地勤労者層よりも多くの学習の機会を得、職業（農民の場合は経営）に関する関心もはるかに切実である。

しかし、士別市の稲作地域においては潜在的学習要求と主観的学習要求の間の乖離にみられるように、主体形成のための学習の自覚が未成熟であるようにみえる。これは農業政策面への農民の発言力を弱める要素が大であるにとどまらず、高度化する技術に対応するための基礎学力の重要性を充分理解できないことに通じよう。このことは、機械化「一貫」体系の技術・技能修得を不十分ならしめ、したがって生産力形成の主体的実現を困難ならしめる。さらにこのことは、農協や農業改良普及所への技術依存度を高める結果になる、というシューマがえがきうるのではなからうか。

こうしたなかであって、士別市地域の畑作農民は、稲作農民に比較して、学習経験は多く、学習要求も具体的かつ多彩であり、その充足の場として相対的に農業改良普及所（農業試験場）という公的機関よりも農協をえらび、さらに農民の自主的研究集団への期待をよせるのである。これは政策的保護や指導の不充分さを大きな要因とする畑作農業の困難さが、却って主体的技術修得および、経営分析への志向を強めているのではないかと考えられる。

もちろん、公的機関（普及所・農試）からの技術・技能修得を期待したからといって、それが単純に非主体的になるということの意味するわけではなく、公的機関における技術・技能修得にも二面性があることに留意しなくてはならない。

## 2. 農業改良普及制度と農協の営農指導事業の役割

### (1) はじめに

戦後の農業技術指導は農業協同組合法の制定（1947年）、農業改良助長法の制定（1948年）を契機に2本建の指導体制をとるようになる。前者は、営農指導員（農業技術員）、後者は農業改良普及員として農業技術、農業経営の農民にたいする直接的な指導を担うことになったのである。

2つの農業技術指導は、一方は農業協同組合事業の1部門、他方は制度的に確立した行政機関であるという本質的な性格の差異をもつ。

このちがいは、農協の営農指導が第1に、営農に必要な専門的、総合的な知識や技術というよりは、むしろ農協の経済事業へ従属した技術・技能指導になりやすいこと、第2に、社会経済状態の変動による農協経営の悪化に際しては、不採算部門として真先に切り捨てられること。第3には、農業技術・技能指導体制、農業技術研究機関の未確立は農民の技術・技能要求に対

応じきれないばかりか指導内容自体も系統性、持続性を持ちえず科学的水準も低いものとならざるをえない。しかし第4には、農協が農民的で民主的なものであれば個々の農民にみあった営農指導が可能であるという性格をもつ。

農業改良普及制度においては、第1に、国の農業政策に指導方針・内容がいちじろしく左右される。第2に、国都道府県の指導・研究体制網の制度的確立は国の農業政策の強力な推進を可能ならしめると同時に、農業技術の系統的・持続的指導を保障する。第3に、農業技術研究機関の設置は、農業技術・技能を経験的なものから科学的なものへ変革する可能性をもつ。しかし同時に現実の農民経済を軽視した農業の機械化、大規模化（技術主義）をすすめる可能性を内包するものでもあった。

今日、日本農業の大型機械化、大規模化の進行の中で2つの農業技術指導が「果した役割」は大きい。しかし、その過程は同時に日本の農業危機の深まりでもあったのである。この危機を克服し、農民の生産と生活を守り日本農業をさらに発展させようとする時、農業技術・技能教育は不可欠であり重要な役割を担っている。以下で、第1に、農業改良普及制度、農協営農指導はどのように展開してきたのか、第2に、とりわけ北海道農業とのかかわりを明らかにする。第3に、地域農業の展開における役割を明らかにする。

#### (2) 北海道における農業改良普及制度の展開

全国的な農業改良普及制度の展開は、第1期創草期（1948年～1951年）、第2期小地区制度期（1952年～1957年）、第3期中地区制度期（前期1957年～1962年、後期1963年～1964年）、第4期広域統合期（1965年～1969年）、第5期広域体制期（1970年～）と5つの画期をなす。この過程は、第1に、農業「近代化」政策への従属、第2に、地方農政局管理による地方自治の軽視、第3に普及所における「職階制」の導入、第4に、都道府県にたいする研修の義務化による普及員研修の強化と普及指導内容の統制、第5に、指導においては個別指導から重点対象指導と選別・差別体制の形成であった。

北海道においても同様の展開過程をたどるが北海道農業の限界地農業としての性格は農業改良普及制度の展開に色濃く反映しているのである。ここでは第5期広域体制期（1970年～）の特徴について述べる。この期は「当面する普及事業の重点目標」（農林省次官通達）による「システム化、装置化」農業を中心とした第2次構造改善事業の推進期である。農業改良普及員設置状況（表4—8）では、全普及員に対する作物、畜産専門改良普及員の比が全国で28.2%（1974年—以下同じ）、北海道は50%と極端に高くなっている。さらに専門改良普及員に占める作物、畜産専門改良普及員の比率が全国で44.9%、北海道は77.9%と北海道では専門改良普及員のほとんどが作物と畜産で構成されているのである。

北海道における普及員配置の地域動向（表4—9）では、上位3地域に1974年稲作6割、畑作7割、畜産4割、そさい5割の専門改良普及員が配置されている。これらは「選択的拡大」「主産地形成」と深くかかわっている。表4—10は普及活動における重点目標であるが、それを重点目標別活動（表4—11）でみると(d)「需要の動向に即した農業生産についての指導助言」が1974年に全国55.2%、北海道60.6%と普及活動の中心となっている。北海道においては(a)「地域計画についての指導助言」(b)「農業構造の改善についての指導助言」が高まっている。しかし、(c)「優れた経営の担い手の育成指導」は後退してきている。さらに重点目標にもとづく活動課題をとり上げた普及所割合（表4—12）で内容を見ると、全国的には重点目標全体がとり上げられているが、北海道においては一部の比率が高くなっている。とくに(d)「需要の動向に即した農

図-4-8 農業改良普及員設置状況

| 年度   |         | ①所長           | ②地域改良普及員         | 専 門 改 良 普 及 員   |                  |               |               |                  |              |               |              |              |              |              | 一 般 普及員          | 計                |                    |
|------|---------|---------------|------------------|-----------------|------------------|---------------|---------------|------------------|--------------|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|------------------|------------------|--------------------|
|      |         |               |                  | ③作物             | ④野菜              | ⑤果樹           | ⑥花き           | ⑦畜産              | ⑧工芸          | ⑨経営           | ⑩農機具         | ⑪病虫害         | ⑫青少年         | その他          |                  |                  | ⑬ 計                |
| 1971 | 全 国 (%) | 630人<br>(6.1) | 2,665人<br>(26.0) | 993人<br>(9.7)   | 1,071人<br>(10.5) | 793人<br>(7.7) | 182人<br>(1.8) | 1,051人<br>(10.3) | 63人<br>(0.6) | 335人<br>(3.3) | 44人<br>(0.4) | 24人<br>(0.2) | 58人<br>(0.6) | 14人<br>(0.1) | 4,628人<br>(45.2) | 2,330人<br>(22.7) | 10,253人<br>(100.0) |
|      | 北海道 (%) | 60<br>(7.0)   | 180<br>(21.1)    | 119<br>(13.9)   | 47<br>(5.5)      | 21<br>(2.5)   | 0             | 134<br>(15.7)    | 0            | 0             | 0            | 0            | 0            | 0            | 321<br>(37.6)    | 293<br>(34.3)    | 854<br>(100.0)     |
| 1972 | 全 国 (%) | 630<br>(6.3)  | 2,452<br>(24.6)  | 1,088<br>(10.9) | 1,234<br>(12.4)  | 862<br>(8.6)  | 221<br>(2.2)  | 1,163<br>(11.4)  | 98<br>(1.0)  | 376<br>(3.8)  | 48<br>(0.5)  | 16<br>(0.2)  | 73<br>(0.7)  | 12<br>(0.1)  | 5,162<br>(51.7)  | 1,739<br>(17.4)  | 9,983<br>(100.0)   |
|      | 北海道 (%) | 60<br>(7.4)   | 180<br>(22.3)    | 131<br>(16.2)   | 39<br>(4.8)      | 18<br>(2.2)   | 0             | 123<br>(15.2)    | 0            | 0             | 0            | 0            | 0            | 0            | 311<br>(38.5)    | 256<br>(31.7)    | 807<br>(100.0)     |
| 1973 | 全 国 (%) | 633<br>(6.4)  | 2,625<br>(26.5)  | 1,289<br>(13.0) | 1,234<br>(12.5)  | 869<br>(8.8)  | 269<br>(2.7)  | 1,163<br>(11.8)  | 101<br>(1.0) | 402<br>(4.0)  | 45<br>(0.5)  | 33<br>(0.3)  | 65<br>(0.7)  | 8<br>(0.1)   | 5,476<br>(55.4)  | 1,156<br>(11.7)  | 9,890<br>(100.0)   |
|      | 北海道 (%) | 60<br>(7.5)   | 180<br>(22.5)    | 206<br>(25.8)   | 78<br>(9.7)      | 28<br>(3.5)   | 0             | 193<br>(24.1)    | 0            | 0             | 0            | 0            | 0            | 0            | 505<br>(63.1)    | 55<br>(6.9)      | 800<br>(100.0)     |
| 1974 | 全 国 (%) | 624<br>(6.4)  | 2,748<br>(28.1)  | 1,459<br>(14.9) | 1,502<br>(15.3)  | 922<br>(9.4)  | 316<br>(3.2)  | 1,299<br>(13.3)  | 125<br>(1.3) | 387<br>(4.0)  | 43<br>(0.4)  | 24<br>(0.3)  | 55<br>(0.6)  | 15<br>(0.2)  | 6,147<br>(62.7)  | 279<br>(2.9)     | 9,798<br>(100.0)   |
|      | 北海道 (%) | 60<br>(7.5)   | 180<br>(22.5)    | 204<br>(25.5)   | 81<br>(10.1)     | 26<br>(3.3)   | 0             | 196<br>(24.5)    | 0            | 0             | 0            | 0            | 0            | 0            | 507<br>(63.3)    | 54<br>(6.7)      | 801<br>(100.0)     |

注 農林省「改良普及員の普及活動」より作成

表4-9 北海道における普及員配置の地域動向

| 年 度  | 特技・専門<br>項目別数 | 道内主要産地（普及員順位別） |    |      |     |    |      |       |    |      | 特技・専門<br>項目別数 | 道内主要産地（普及員順位別） |       |    |      |       |    |      |       |    |      |
|------|---------------|----------------|----|------|-----|----|------|-------|----|------|---------------|----------------|-------|----|------|-------|----|------|-------|----|------|
|      |               | 1 位            |    | %    | 2 位 |    | %    | 3 位   |    |      |               | %              | 1 位   |    | %    | 2 位   |    | %    | 3 位   |    | %    |
| 1968 | 91            | 空知             | 29 | 31.9 | 上川  | 18 | 19.8 | 石狩・留萌 | 7  | 7.7  | 1968          | 98             | 十勝    | 15 | 15.3 | 網走    | 14 | 14.3 | 釧路    | 13 | 13.3 |
| 69   | 173           | "              | 52 | 30.1 | "   | 49 | 28.3 | 石狩    | 14 | 8.1  | 69            | 202            | 網走    | 31 | 15.4 | 十勝    | 28 | 13.9 | 釧路・根室 | 21 | 10.4 |
| 稲 70 | 211           | "              | 63 | 29.9 | "   | 52 | 24.7 | "     | 18 | 8.5  | 畜 70          | 233            | 網走・根室 | 30 | 12.9 | "     | 30 | 12.9 | 十勝    | 27 | 11.6 |
| 71   | 202           | "              | 63 | 31.2 | "   | 49 | 24.3 | "     | 17 | 8.4  | 71            | 239            | 網走    | 30 | 12.6 | 根室・釧路 | 25 | 10.5 | "     | 25 | 10.5 |
| 作 72 | 211           | "              | 62 | 29.4 | "   | 51 | 24.2 | "     | 17 | 8.1  | 産 72          | 264            | 網・根・十 | 31 | 11.7 | "     | 31 | 11.7 | "     | 31 | 11.7 |
| 73   | 214           | "              | 62 | 29.0 | "   | 48 | 22.4 | "     | 20 | 9.4  | 73            | 263            | 十勝    | 35 | 13.3 | 網走    | 33 | 12.6 | 根室・釧路 | 26 | 9.9  |
| 74   | 210           | "              | 63 | 30.0 | "   | 47 | 22.4 | "     | 20 | 9.5  | 74            | 268            | 網走    | 38 | 14.2 | 十勝    | 34 | 12.9 | 釧路    | 27 | 10.1 |
| 1968 | 45            | 十勝             | 17 | 37.8 | 網走  | 15 | 33.3 | 上川    | 5  | 11.1 | 1968          | 31             | 空知    | 4  | 12.9 | 上・後・胆 | 3  | 9.7  | 十・渡・網 | 3  | 9.7  |
| 69   | 137           | "              | 49 | 35.8 | "   | 29 | 21.2 | 後志    | 14 | 10.2 | 69            | 58             | 石狩    | 9  | 15.5 | 空知    | 8  | 13.8 | 上川    | 7  | 12.1 |
| 畑 70 | 162           | "              | 49 | 30.3 | "   | 38 | 23.5 | 上川・後志 | 13 | 8.0  | そ 70          | 67             | 石狩・網走 | 9  | 13.4 | "     | 9  | 13.4 | 空知・上川 | 8  | 11.9 |
| 71   | 156           | "              | 48 | 30.8 | "   | 41 | 26.3 | " "   | 12 | 7.7  | さ 71          | 70             | 網走    | 11 | 15.7 | 石狩・空知 | 10 | 14.3 | "     | 10 | 14.3 |
| 作 72 | 159           | 網走             | 48 | 30.2 | 十勝  | 45 | 28.3 | 上川    | 15 | 9.4  | い 72          | 84             | 上川    | 15 | 17.9 | " "   | 11 | 13.1 | "     | 11 | 13.1 |
| 73   | 152           | 十勝             | 46 | 30.3 | 網走  | 43 | 28.3 | "     | 15 | 9.9  | 73            | 87             | 空知    | 16 | 18.4 | 上川    | 15 | 17.2 | 石狩    | 10 | 11.5 |
| 74   | 148           | "              | 46 | 31.1 | "   | 40 | 27.0 | "     | 18 | 12.2 | 74            | 96             | 上川    | 17 | 17.7 | 空知    | 16 | 16.7 | 石狩・網走 | 12 | 12.5 |

注 北海道農業改良普及協会「農業改良普及事業関係職員名簿」より作成

**附 註**

| ① 地域計画についての指導助言 |                 | ② 農業構造の改善についての指導助言 |             |                  | ③ 優れた経営の担い手の育成指導    |              |           | ④ 需要の動向に即した農業生産についての指導助言 |                    |                  |                  |              |
|-----------------|-----------------|--------------------|-------------|------------------|---------------------|--------------|-----------|--------------------------|--------------------|------------------|------------------|--------------|
| ① 農村計画資料の整備     | ② 農村計画策定への誘導と参画 | ③ 近代的農業経営の育成       | ④ 農業生産組織の育成 | ⑤ 転職希望農家・出稼農家の援助 | ⑥ 農業・生活についての知識技術の修得 | ⑦ 経営・管理能力の助長 | ⑧ 集団活動の強化 | ⑨ 畜産飼料規模の拡大と集団化の推進       | ⑩ 施設園芸農家の育成と集団化の推進 | ⑪ 園芸農家の育成と集団化の推進 | ⑫ 畑作農家の育成と集団化の推進 | ⑬ 近代的稲作経営の育成 |

|                           |                 |            |             |        |              |        |          |             |          |               |                  |                 |          |
|---------------------------|-----------------|------------|-------------|--------|--------------|--------|----------|-------------|----------|---------------|------------------|-----------------|----------|
| ⑥ 健康をめざす生活と生産の調和についての指導助言 |                 |            |             |        |              |        |          |             |          |               |                  |                 |          |
| 家族の健康増進                   |                 |            |             |        | 労働の適正化・効率化   |        |          |             |          | 営農、生活の計画化     |                  |                 |          |
| ⑭健康障害の積極的予防               | ⑮農作業並びに農作業環境の改善 | ⑯健全な食生活の促進 | ⑰清潔な被服の着用管理 | ⑱休養の確保 | ⑲農業・農機具の安全使用 | ⑳母体の保護 | ㉑子供の健康増進 | ㉒効率的作業体系の確立 | ㉓労働の適正配分 | ㉔労働効率化のための組織化 | ㉕健康を考えた営農設計と生活設計 | ㉖必要経費の優先確保と有効利用 | ㉗老後の生活設計 |

| ①農家及び農村地域の生活環境整備についての指導助言  |                                   |                   |                    |                   |                              |                            |                             |                                    |                   |                             | ②農業団地育成についての指導助言 | ③米の生産調整と稲作転換についての指導助言 | ④安全な食料の供給及び公害防止についての指導助言 |
|----------------------------|-----------------------------------|-------------------|--------------------|-------------------|------------------------------|----------------------------|-----------------------------|------------------------------------|-------------------|-----------------------------|------------------|-----------------------|--------------------------|
| 農家生活の環境の改善                 |                                   |                   |                    |                   | 地域生活環境の改善                    |                            |                             |                                    |                   |                             |                  |                       |                          |
| ③機能的<br>快適な住<br>居とすま<br>い方 | ③個室の<br>整備と家<br>族団らん<br>の場の整<br>備 | ③家族<br>関係の<br>民主化 | ④家庭教<br>育環境の<br>充実 | ⑤屋敷内<br>環境の整<br>備 | ⑥住みよ<br>い環境づ<br>くりの慣<br>習の醸成 | ⑦快適な<br>生活環境<br>整備の計<br>画化 | ⑧快適な<br>生活環境<br>施設設置<br>と運営 | ⑨児童の<br>健全な遊<br>び場と保<br>育施設の<br>充実 | ⑩老人の<br>憩楽と安<br>全 | ⑪家事労<br>働の共同<br>化と施設<br>の活用 |                  |                       |                          |

注 農林省「改良普及員の普及活動」より

表4-12 重点目標に基づく活動課題をとり上げた普及所割合

| 年度   |     | 普及<br>及所数 | a    |      | b    |      | c    |      | d     |      | e    |      | f    |      | g    |      | h    |      | i    |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|------|-----|-----------|------|------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
|      |     |           | 1    | 2    | 3    | 4    | 5    | 6    | 7     | 8    | 9    | 10   | 11   | 12   | 13   | 14   | 15   | 16   |      | 17   | 18   | 19   | 20   | 21   | 22   | 23   | 24   | 25   | 26   | 27   | 28   | 29   | 30   | 31   | 32   | 33   | 34   | 35   | 36   | 37   | 38   | 39   | 40   | 41   | 42   | 43   | 44   | 45   | 46   | 47   | 48   | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 |
| 1972 | 全 国 | 627       | 89.3 | 89.3 | 79.9 | 52.0 | 94.6 | 96.3 | 94.9  | 84.1 | 94.4 | 70.0 | 91.0 | 84.1 | 72.1 | 92.5 | 58.4 | 67.4 | 79.6 | 84.1 | 68.4 | 43.8 | 88.7 | 63.8 | 53.4 | 69.1 | 71.8 | 56.9 | 31.3 | 31.4 | 37.6 | 68.7 | 79.9 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|      | 北海道 | 60        | 75.0 | 75.0 | 50.0 | 43.3 | 85.0 | 90.0 | 100.0 | 28.3 | 63.3 | 73.3 | 71.7 | 38.3 | 21.7 | 73.3 | 20.0 | 33.0 | 35.0 | 55.0 | 41.7 | 16.7 | 41.7 | 16.7 | 16.7 | 50.0 | 45.0 | 20.0 | 5.0  | 11.7 | 8.3  | 36.7 | 55.0 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 1973 | 全 国 | 633       | 80.3 | 85.6 | 90.0 | 82.6 | 43.4 | 94.2 | 88.6  | 94.6 | 97.2 | 86.4 | 95.7 | 72.8 | 93.0 | 86.4 | 67.8 | 93.0 | 67.8 | 83.3 | 21.7 | 16.7 | 31.7 | 6.7  | 11.7 | 3.3  | 26.6 | 8.3  | 36.7 | 45.0 | 10.0 | 31.7 | 3.3  | 8.3  | 5.0  | 75.0 | 18.3 | 18.3 | 5.0  | 1.7  | 6.7  | 5.0  | 3.3  | 53.3 | 50.0 | 50.0 | 41.7 | 73.8 | 85.5 | 85.2 | 78.0 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|      | 北海道 | 60        | 53.0 | 55.0 | 66.7 | 35.0 | 13.3 | 91.7 | 53.3  | 78.3 | 96.7 | 30.0 | 63.3 | 75.0 | 70.0 | 65.0 | 11.7 | 83.3 | 21.7 | 16.7 | 31.7 | 6.7  | 11.7 | 3.3  | 26.6 | 8.3  | 36.7 | 45.0 | 10.0 | 31.7 | 3.3  | 8.3  | 5.0  | 75.0 | 18.3 | 18.3 | 5.0  | 1.7  | 6.7  | 5.0  | 3.3  | 53.3 | 50.0 | 50.0 | 41.7 | 73.8 | 85.5 | 85.2 | 78.0 |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 1974 | 全 国 | 633       | 80.4 | 82.5 | 87.5 | 85.3 | 37.4 | 92.7 | 82.1  | 91.6 | 96.2 | 84.5 | 94.9 | 74.9 | 91.9 | 82.4 | 65.8 | 92.6 | 52.9 | 51.9 | 48.9 | 23.9 | 47.6 | 52.1 | 69.2 | 44.6 | 75.3 | 62.2 | 51.7 | 76.6 | 47.6 | 46.0 | 42.6 | 69.5 | 62.0 | 68.8 | 49.5 | 23.6 | 29.1 | 24.1 | 24.4 | 82.5 | 75.2 | 75.8 | 77.0 |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|      | 北海道 | 60        | 55.0 | 58.3 | 75.0 | 45.0 | 13.3 | 86.7 | 28.3  | 61.7 | 98.3 | 36.7 | 63.3 | 76.7 | 70.0 | 60.0 | 11.7 | 90.0 | 11.7 | 8.3  | 16.7 | 1.7  | 13.3 | 6.7  | 33.3 | 11.7 | 38.3 | 26.7 | 10.0 | 25.0 | 5.5  | 10.0 | 5.0  | 76.7 | 23.3 | 16.6 | 6.7  | 1.7  | 3.3  | 1.7  | 0.7  | 73.3 | 46.7 | 39.9 | 56.0 |      |      |      |      |      |      |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |

注 「改良普及買の普及活動」より作成

表4-11 重点目標別活動割合

| 年 度  |        | (a) | (b) | (c)  | (d)  | (e) | (f) | (g) | (h) | (i) |
|------|--------|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1972 | 全 国(%) | 8.4 | 9.8 | 14.7 | 46.9 | 2.6 | 1.8 | 5.1 | 7.7 | 3.0 |
|      | 北海道(%) | 7.5 | 8.5 | 9.3  | 58.9 | 3.7 | 1.6 | 1.7 | 5.8 | 3.0 |
| 1973 | 全 国(%) | 7.8 | 8.9 | 14.6 | 52.3 | 2.7 | 2.1 | 4.8 | 4.3 | 2.5 |
|      | 北海道(%) | 7.1 | 8.6 | 11.0 | 60.3 | 1.4 | 1.8 | 3.1 | 3.7 | 3.0 |
| 1974 | 全 国(%) | 7.7 | 8.6 | 14.6 | 55.2 | 2.8 | 1.7 | 4.6 | 2.6 | 2.2 |
|      | 北海道(%) | 9.6 | 9.3 | 8.3  | 60.6 | 1.0 | 0.8 | 4.0 | 3.3 | 3.3 |

注 農林省「改良普及員の普及活動」より作成

業生産についての指導助言」における「畜産飼料規模拡大と集団化の推進」「畑作農家の育成と集団化の推進」「近代的稲作経営の育成」が全道的課題としてとり上げられているのである。

このように北海道の農業改良普及制度は、広域化の中で国の農政基調である「装置化・システム化」を中心とする「選択的規模拡大」「集団化」を集中的に推進しているといえよう。

### (3) 北海道における農協の営農指導

まず、1975年度都道府県営農指導員に関する調査(全国農協中央会営農部)により現在の農協の営農指導についての特徴をみる。第1に営農指導員の定義、したがってその性格が曖昧である。定義の特徴をみると ① 営農指導員認承試験合格者 ② 果樹や畜産の技術面の指導を主体とするもの ③ 指導担当部署者(指導課、営農課、生産課など) ④ 作目別の専任担当者 ⑤ 営農指導員連盟の盟友として登録されているもの ⑥ 定義のはっきりしないもの、などとなっている。すなわち営農指導員は専門的農業指導者として未形成であり、同様に営農指導部それ自体も内容的に不確定かつ不安定なものであるといえよう。北海道は「兼務体制が多いことから主として営農指導を担当している者」となっており、さらに不確定となる。

表4-13 営農指導員の研修(1975年)

|           | 新採用研修   | 再教育研修    | 部課長研修    | 税務・簿記研修 | 営農団地・構造改善研修 |
|-----------|---------|----------|----------|---------|-------------|
| 全国1県平均    | 6.1日37名 | 5.0日137名 | 2.5日83名  | 3.3日74名 | 9.5日178名    |
| 北海道       | ——      | 3.0日150名 | 1.0日100名 | 2.0日70名 | 2.0日700名    |
| 全(100%)   | 1.8%    | 29.8%    | 5.0%     | 2.0%    | 61.3%       |
| 北海道(100%) | 0       | 21.5%    | 4.8%     | 6.7%    | 70.0%       |

注 全国農業協同組合中央会「営農指導員の現状」(1975年)より作成

第2に、営農指導員の研修は不十分であり、かつ農業「近代化」推進型となっている。表4-13でみると全国的に営農団地・構造改善等研修が6割をしめ、それが北海道では7割となっている。とくに北海道は研修日数が少なく受研修人数が多い、内容の浅いものとなっている。第3に、営農指導員の動向についてみると(表4-14)、全国で営農指導員数は増加し、1組合当り指導員数も1963年から1973年に1.25人から2.99人と増加している。しかし、農協職員中に占める割合は6.8%から6.0%へと減少している。北海道においては(表4-15)営農指導員数の減少、農協職員中に占める割合7.7%から7.0%への減少と1970年以降農協「合理化」統合とともに減少しているのである。

表4-14 全国における営農指導員の動向

| 年 度  | 営農指導員数(A) | 職 員 数(B) | 集計組合数(C) | A/B (%) | A/C (%) |
|------|-----------|----------|----------|---------|---------|
| 1963 | 12,205    | 179,266  | 9,748    | 6.8     | 1.25    |
| 64   | 12,620    | 188,454  | 8,794    | 6.7     | 1.44    |
| 65   | 13,163    | 201,236  | 7,308    | 6.5     | 1.80    |
| 66   | 13,579    | 214,261  | 6,975    | 6.3     | 1.95    |
| 67   | 14,523    | 224,211  | 6,951    | 6.5     | 2.09    |
| 68   | 14,828    | 231,650  | 6,622    | 6.4     | 2.24    |
| 69   | 15,471    | 241,982  | 6,083    | 6.4     | 2.54    |
| 70   | 15,512    | 247,379  | 5,996    | 6.3     | 2.59    |
| 71   | 15,467    | 251,927  | 5,799    | 6.1     | 2.67    |
| 72   | 15,770    | 256,681  | 5,485    | 6.1     | 2.88    |
| 73   | 15,768    | 260,979  | 5,267    | 6.0     | 2.99    |

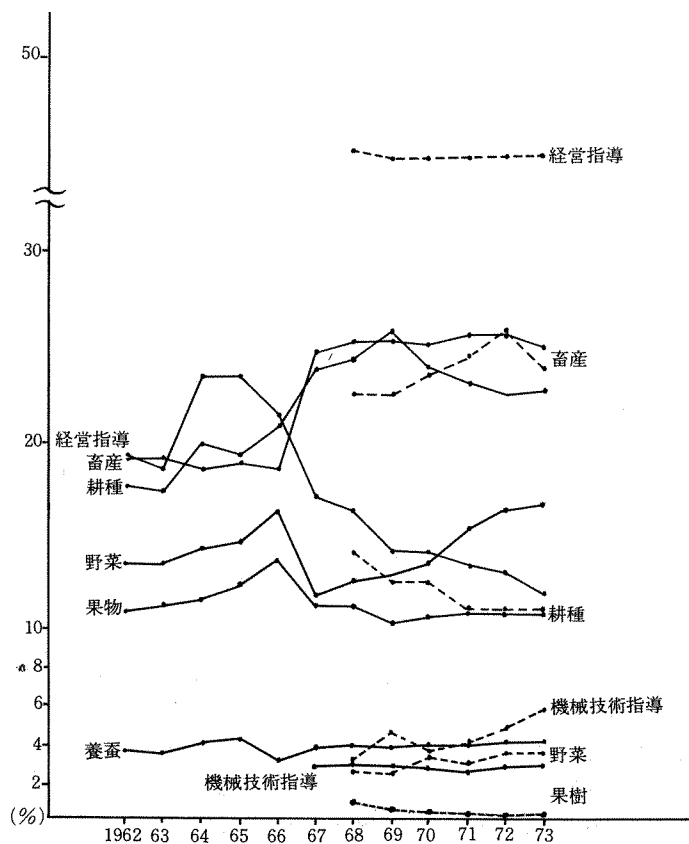
注 農林省「総合農協統計表」より作成

表4-15 北海道における営農指導員の動向

| 年 度  | 営農指導員数(A) | 職 員 数(B) | 集計組合数(C) | A/B (%) | A/C (%) |
|------|-----------|----------|----------|---------|---------|
| 1968 | 1,252     | 16,288   | 288      | 7.7     | 4.35    |
| 69   | 1,309     | 16,914   | 286      | 7.7     | 4.58    |
| 70   | 1,282     | 17,408   | 287      | 7.4     | 4.47    |
| 71   | 1,258     | 17,415   | 286      | 7.2     | 4.40    |
| 72   | 1,237     | 17,304   | 288      | 7.2     | 4.30    |
| 73   | 1,209     | 17,325   | 283      | 7.0     | 4.27    |

注 農林省「総合農協統計表」より作成

図4-1 営農指導員種類別従事割合

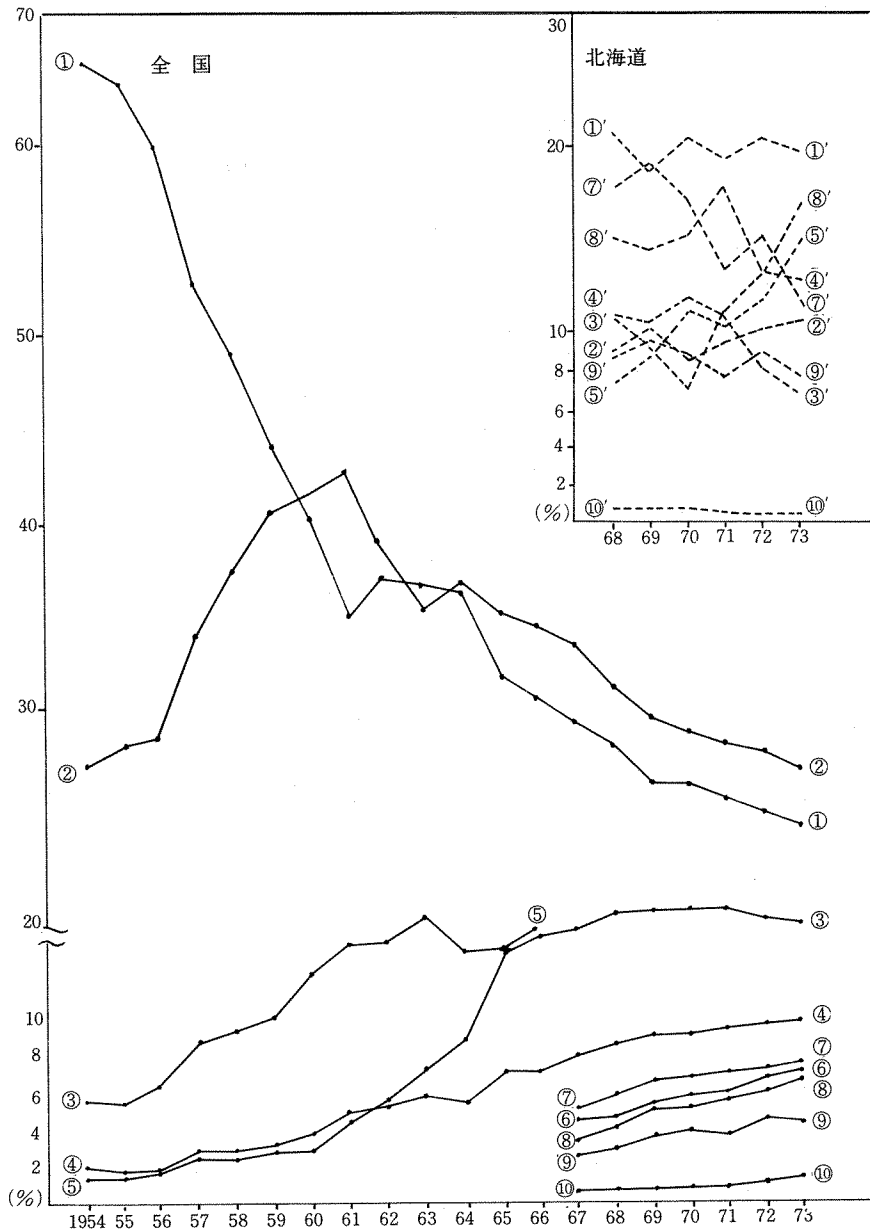


注1 農林省「総合農協統計表」より作成

2 実線は全国、点線は北海道を示す。

3 養蚕—北海道は「なし」

図4-2 営農指導員数別組合数



注1 ① いないもの ⑥ 4人 ①' いないもの ⑥' 欠番  
 ② 1人 ⑦ 5~6人 ②' 1人 ⑦' 5~6人  
 ③ 2人 ⑧ 7~10人 ③' 2人 ⑧' 7~10人  
 ④ 3人 ⑨ 11~20人 ④' 3人 ⑨' 10~20人  
 ⑤ 4人以上 ⑩ 20人以上 ⑤' 4人 ⑩' 20人以上  
 2 農林省「総合農協統計表」より作成

営農指導員種別別従事割合（図4—1）でみると、全国的には1973年畜産25%，耕種23%，野菜17%，果樹11%，農業の経営指導12%となるが、北海道は畜産23.7%，耕種12%，農業の経営指導43.7%となる。北海道における経営指導は ① 個別相談機能，営農計画の検討 ② 集団化指導である。すなわち北海道においては経営収支の相談と農業「近代化」政策推進が重点となっている。

第4に，営農指導員数別組合数（図4—2）は，1973年全国で営農指導員1人の組合26%，いない組合24%，2人15%となる，北海道では，いない組合20%，7～10人16%，4人15%となる。

このように，北海道における営農指導は体制的未確立の中で農協の合併とともに本所に統合集中化され，農民から遠ざかるとともに農業「近代化」をすすめ，さらに営農指導員は数的減少の中で十分な研修もうけられぬまま農業「近代化」ないし農協の事業推進に動員されているといえよう。

#### (4) 農業指導にたいする農民の意識

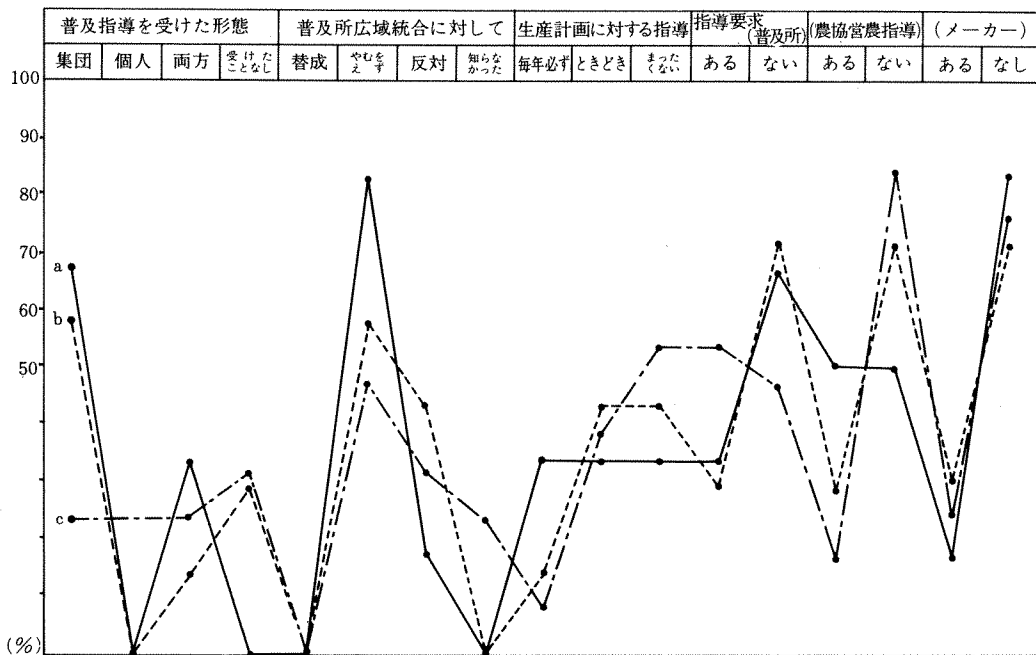
以上の全道的特徴をさらに地域農業にそくして事例的にみることにする。

##### ① 士別市T地区

この地区の第2次構造改善事業（1975年）は，行政，メーカー主導的であり，同じ田植機でも様々な機種が導入されている。農協は具体的な方針を欠き，基盤整備，機械導入はほぼ農民の「自主性」にゆだねた。農業改良普及所は機械導入後の生産過程の変化に（土質検査等）対応的に指導するにとどまっている。

T地区における農業指導とについて農民の要求（図4—3）をみると，上層は，集団指導を中

図4—3 士別市T地区における農業指導と農民要求



注1 aは6ha以上層 bは4ha～6ha層 cは4ha以下層 合計26戸

2 1976年度北大社会教育研究室実態調査結果より作成

心に、生産計画指導をうけている。普及所広域化についてはやむをえずと考えている。中層は、集団指導を中心にうけているが、「受けたことなし」もふえている。生産計画指導は「まったくない」がふえ（43%）、「広域化やむをえず」は6割である。下層は、普及指導を「うけたことなし」が3割になり「生産計画指導は受けたことなし」が5割強となる。広域化については「やむをえず」46%、反対30%、「知らなかった」23%である。

すなわち普及所の指導は上層中心で集団指導が主である。またこれら集団指導をうけている農家は全体の9割が田植機導入農家である。このことからT地区における農業改良普及所の指導は、上層中心、田植機導入農家中心の集団指導といえることができる。

指導要求は全体的に批判的・消極的であるが上層では営農指導に対して「農民の立場で活動せよ」の要望が強く、下層では普及所にたいして「もっと農家に入ってきてほしい」の要望が強い。メーカーにたいしての要望は「もっと研究してほしい」「アフターサービスをせよ」が若干ある。

基盤整備、大型機械導入による生産過程の変化、矛盾の生起にもかかわらず自分で経験的に解消しようという態度がつよく、このことが技術・技能指導要求の消極性となってあらわれている。

## ② 洞爺村（下台）

この村における第2次構造改善事業（1971年）は、農協・研究会主導であり、農民的な展開をしている。洞爺農協は1962年以降営農指導の強化を重視し、洞爺村そ菜園芸技術研究会は第2次構造改善事業以前1966年に結成されている。農業改良普及所の指導は主として研究会にたいする集団指導である。

洞爺村における技術・技能指導にたいする希望・評価（図4—4）をみると普及活動にたいしてはa層、b層、c層が改善希望をもち、d層は「良い」となる。営農指導にたいする評価は、a層が強い不満を表明しているがb・c・d層はほぼ満足している。内容についてみると、普及活動にたいする改善希望でa層は「農試（農業試験場）との協力で農家の先を行ってほしい」「もっと対話を、指導がおくれている」等積極的なものが多く、b層、c層では個別指導を多く望んでいる。農協の営農指導にたいしてa層の不満は「営農指導的なことは全くやっていない」「もっと営農指導に金を」に代表される。

すなわち、洞爺村においての指導要求は全体的に積極的な展開を示すと同時に指導も全階層にわたっている。しかし、技術・技能水準が前進するなかで多様化した個々の農民に即した指導という点が弱いようである。

## (5) 農業技術・技能指導の構造と農民

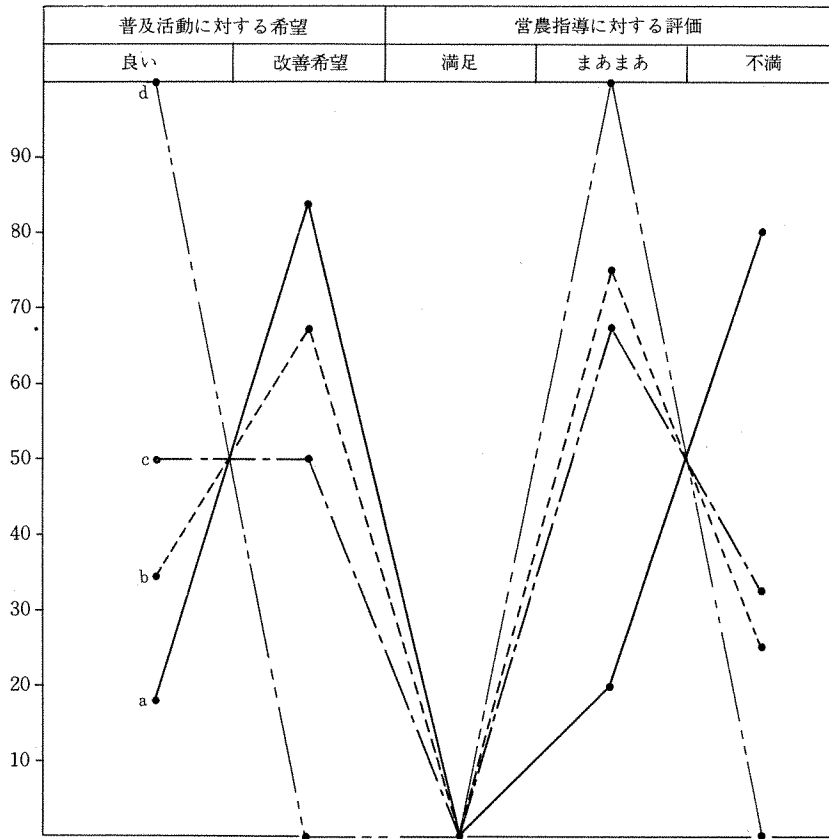
士別市T地区、洞爺村は第2次構造改善事業を導入した。しかし、T地区においては農業生産力構造に様々な矛盾をもたらし、他方、洞爺村においては農民的な生産力展開を可能にした。

両者間では第1に、行政・メーカー主導か農協・研究会主導か、第2に、生産手段と労働力の結合の仕方、などをめぐってに大きな違いをみいだすことができる。

### ① 農協・研究会の役割

洞爺村において農協は、離農を出さない洞爺農業の発展方向のひとつを施設園芸に求めた。そ菜園芸技術研究会はこの方向の中に位置づけられ設立された。これは激しい市場競争の中では優良で統一された生産物を協同出荷しなければならない、そのためには施設園芸の複雑な技術・技能を全員が学び修得しなければならないということに基本的には性格づけられる。農業

図4-4 洞爺村における技術・技能指導に対する希望・評価



- 注1 aは900坪以上 bは600～900坪  
cは600坪 dは600坪以下  
2 普及事業13戸 営農指導17戸  
3 1976年度農家実態調査より作成

改良普及所は研究会の研究、学習課題設定にたいして集团的に指導する機関として機能した。そしてこのような中に第2次構造改善事業ができるだけ現実に即応した修正をへたうで導入されていくのである。

ここでは農協の農民の性格、研究会の役割（技術の平準化）、そしてそこに位置づけられた農業改良普及事業の結合という農業技術・技能指導の構造があり、どれひとつを欠いても農民的な生産力の発展は困難であった。

士別市T地区は洞爺村とはまったく対照的な展開をしている。ここでは士別市内5農協、士別市農業指導連絡協議会、士別地区農業改良普及所が一体となり地域の近代化基準を営農指導方針として方向づけ企業の農業経営育成、農業団地育成を基盤整備事業、大型機械の導入という形で個々の農民に導入していった。農協は農民の自主性にまかせるという姿勢で第2次構造改善事業の経済的窓口としてとりまとめをただけである。農協の姿勢の曖昧さは、個々の農民にバラバラに大型機械の導入を促す結果となった。そして農業改良普及所の指導は機械導入

行に対応的に行なわれる。つまり士別市T地区においては地域的にも農民個々においても農民主体による農業生産力の形成はほとんどなされなかったといえよう。

## ② 農業技術導入と農民

士別市T地区は稲作が中心であり、トラクター、田植機、自脱型コンバインが導入され、田植機に対応して育苗過程に稚苗育生が導入された。しかし、労働力は今までの生産過程に対応した経験的・個人的技能水準のままであった。さらに、メーカー主導の、試験段階の不十分な生産手段の導入は、技術の総合性の破壊とともに生産力における労働力の役割を著しく減殺する結果となったのである。

洞爺村では施設園芸大型ハウス（「装置」）が導入され、それに対応した共同育苗も研究会を中心に行なわれている。ここでの研究会の役割は複雑な技能修得を全員のものとする、さらに普及所の「技術学」を農民経営に即して現実生産へ転化させ新たな生産力段階における労働力の主導的役割を高めた。さらに技術要求の内容を一層的に分化せしめつつも一段高いレベルに発展せしめるという関係が形成されている。

## (6) 小 括

1970年代にはいり農業「近代化」政策（第2次構造改善事業）は、行政、農協、農業改良普及所、そして農業機械メーカーが一体となった体制のもとで地域農業の「選択的拡大」「装置化・システム化」を推進している。このようななかで農業「近代化」反対を唱えるだけでなく農民の生産と生活を守り、日本農業の国民的発展をかちとる地域的・農民的生産力形成の課題が提起されている。

この地域農業をめぐる2つの道の対立のなかで農業技術・技能指導は反農民的な展開をしている。農業機械メーカーの営業マンは販売を主目的とした「指導」、農協営農指導員は組合員勘定による経営収支中心の指導、農業構造改善事業等の導入・指導、農業改良普及所は農業構造改善事業等の技術指導中心、というように普及指導はその内容、体制において、さらに研修（営業マン、営農指導員、農業改良普及員）において農業「近代化」推進を最大の課題としている。

農民的・地域的生産力の形成は農業技術技能修得、指導を不可欠の課題としながら、農民経営を軽視した農業「近代化」推進を主軸とする農業技術・技能指導とは鋭く矛盾するのである。すなわち、今日一農民的・地域的生産力形成における農民的技術技能修得（生産手段導入と農民の技能修得）は農民集団の民主主義確立と不可分であり、このことを通じてのみ農業改良普及所等の指導を農民的に生かすことができる。洞爺村農業協同組合、そ菜園芸技術研究会は実践的にこのことを示すものといえよう。

組織化、民主的な科学者、技術者集団との結合なしには困難であり、今後の課題は大きい。

## 3. 農業学園と農村青年

——剣淵町農業学園における後継者教育の実態を中心に——

### (1) はじめに

北海道の農業学園制度は、農業経営の担い手育成対策の一環として、1965年7月に発足した。それは、今日の「近代化」農業、および農業機械化「一貫」体系に対応するために「高度な農業技術」、「優れた経営能力」、「高度な専門的知識」を身につけた中核的担い手の確保を目的として設けられた、農村青年教育の主要な制度である。

発足以来、10年を経過する現在、後継者教育の量的、質的限界をかかえながら今後の運営の対応が追求されねばならない段階にきているといえる。

ここでは第1に、中核農家育成を目的としたこの制度と現実の農民経営の対応がどのようなものになっているのか、を上川郡剣淵町の実態を手掛りに、明らかにするものであり、第2に、農業技術・技能の修得過程の今日的段階、つまり、これまでの伝統的、経験的な技術修得段階から社会的な技術修得機関を通じて行なわれるように、後継者教育の変化があるが、今日の機械化された農業経営において、その技術修得、および経営能力がどのように養成されているのかを剣淵町農業学園の実態をもとに明らかにし、とりわけ、農民の主体形成とかかわりあわせながら、今後の農業経営における後継者教育の方向性をとらえていくものである。

## (2) 農業学園制度の教育方法と運営

農業学園制度の教育方法として特徴的な点は、合宿教育と通信教育にある。つまり、「農業経営技術の高度化に対応するため農業経営の担い手の確保をはかり、すぐれた能力とおう盛な意欲をかね備えた農業者を養成する」ために、勤労と学習を両立させながら、この目標を達成するうえで必要な教育を体系的、組織的に整備していくというものである。

1976年現在、北海道における農業学園の開設地域は、表4-16に示した通りである。発足時点における具体的な学園の設置及び運営について述べると、まず、市町村段階においては、中卒就農者を対象とした普通科2年と、各支庁段階において、高卒就農者を対象とした高等科2年、それに、全道段階に、支庁高等科の修了者、または、これと同等以上の知識、経験を有するものを対象に専修科1年が設置されており、定員は30名前後とされている。

普通科にかんしては、1973年開設時において、各市町村で1年入学者がなくなり、1974年度をもって廃止している。高等科においては、(1975年度時点)14支庁57学級が開設されている

表4-16 北海道農業学園開設地域(1道14支庁2市町村)

| 設 置         | 道、支庁農業学園    | 学 級 数 | 課 程 別             |
|-------------|-------------|-------|-------------------|
| 専修科         | 中 央 農 業 学 園 | 6     | 稲作、畑作、酪農、野菜、果樹、花き |
| 高<br>等<br>科 | 石狩支庁農業学園    | 6     | 稲作 園芸 生活          |
|             | 空知支庁 "      | 6     | 稲作 生活             |
|             | 上川支庁 "      | 6     | 稲作 畑酪 生活          |
|             | 後志支庁 "      | 4     | 田畑 生活             |
|             | 檜山支庁 "      | 2     | 稲作                |
|             | 渡島支庁 "      | 4     | 園芸 酪農             |
|             | 胆振支庁 "      | 5     | 園芸 酪農 生活          |
|             | 日高支庁 "      | 3     | 田酪 生活             |
|             | 十勝支庁 "      | 4     | 畑酪 生活             |
|             | 釧路支庁 "      | 2     | 酪農                |
|             | 根室支庁 "      | 3     | 酪農 生活             |
|             | 網走支庁 "      | 6     | 畑作 酪農 生活          |
|             | 宗谷支庁 "      | 2     | 酪農                |
|             | 留萌支庁 "      | 4     | 田酪                |
|             | 剣淵町農業学園     |       | 農業科 家庭科           |
|             | 小清町農業学園     |       |                   |

注 北海道農務部農業改良課「北海道農業学園の概要」1975年9月

が、各支庁相互の提携で学園生が確保されている現状で、専修科では、入園者が自家経営の中心的役割を果たしており、学園と自家経営との両立が困難な状況にある。

こうした背景には、普通高校の進学者の増大、稲作地帯の生産調整、出稼ぎ農家の増加などがあげられるが、「農業経営の担い手の成長過程に応じて段階的な研修を行なう教育体系」<sup>(6)</sup>において一定の限界が生じている現状である。

次に教育方法においては次のようになる。

①通信教育—学園テキストによる自宅学習と面接集合指導、課題別の添削指導などを行なう。②冬期合宿—学園生全員による共同生活を行ない、教科、科目の履修を行なう。③特別研修—農業機械の実技研修と作目別の農家留学研修を実施する。④実践活動—これはうグループ相互の連帯、リーダー養成のために学園生自治会活動を重視し、プロジェクト活動においては、通信教育、合宿教育の教育効果を高めることをねらいとしている。⑤学園行事においては、修了生との交流、他学園との合同行事、同窓会の組織化をはかっている。

以上、述べてきた教育方法は、農業学園発足以来、画一的におこなわれており、各年度の学園生の具体的動向に対応した改善はなされておらず制度そのものの運営上の問題がそこにあるといえる。

学園の講師については、市町村職員、改良普及所、農協職員、篤志農業者などがあげられる。また、農業学園の開設予算は、表4—17のとおりである。

表4—17 北海道農業学園年次別開設予算

単位(千)

| 区分  | 年度       | 1965   | 66      | 67      | 68      | 69      | 70      | 71      | 72      | 73      | 74      | 75      |
|-----|----------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 普通科 | (学園あたり)  | (300)  | (594)   | (635)   | (655)   | (685)   | (692)   | (695)   | (650)   | (657)   |         |         |
|     | 普通科運営費   | 12,000 | 24,390  | 25,420  | 25,890  | 25,584  | 21,608  | 17,304  | 11,439  | 8,543   |         |         |
| 高等科 | (1学園あたり) | (758)  | (1,341) | (1,599) | (1,768) | (2,107) | (2,496) | (2,711) | (2,541) | (2,466) | (2,686) | (4,692) |
|     | 高等科運営費   | 10,752 | 18,774  | 21,825  | 24,750  | 29,495  | 49,929  | 54,261  | 50,919  | 51,795  | 56,420  | 65,694  |
|     | 事業運営費    | 2,360  | 3,817   | 3,609   | 917     | 396     | 1,202   | 1,256   | 1,169   | 1,607   |         |         |
|     | 専修科運営費   |        |         | 1,149   | 4,309   | 4,410   | 3,974   | 4,192   | 4,204   | 4,369   | 4,897   | 5,255   |
|     | 計        | 25,112 | 46,981  | 52,003  | 55,866  | 59,885  | 76,731  | 76,969  | 67,731  | 66,314  |         | 70,949  |

注 事業運営費は普通科、高等科、専修科の共通運営費とする。

北海道農務部農業改良課「農業学園の概要」1975年9月

### (3) 剣淵町農業学園の概要

以上、農業学園制度について、運営、教育方法を概括的にみてきたが、つぎに、中核農家を育成しようとするこの制度が市町村段階でどのように運営がされているのか、教育内容を含めて、剣淵町農業学園の実態を中心にみていくことにする。

前述したように、市町村段階での農業学園は、1974年をもって廃止されており、ここにあげる剣淵町農業学園は、町の独自の予算のもとに毎年17名前後の学園生を送り出し、1975年時点で174名が修了し、1976年現在、22名で運営がまかなわれている。

まず、剣淵町農業学園の主要な特徴点を述べると、第1に、1967年に学園が開設されたが、ここでは、中卒就農者が少ないため高卒就農者を対象にした高等科を町段階で設置し、さらに、市町村段階で運営がされている全道で2つ(1つは小清水町)ある中の1つである。

第2に、年令別による教育体系が形成されていることである。つまり、剣淵高等学校(定時

制農業高校) (15~19 歳) → 農業学園 (19~21 歳) → 青年会議 (25~30 歳) = (1976 年度内に  
 発足) という教育体系をもとに、とにわけ、農業学園と高等学校との提携が強いことである。

第3に、学園と農協、農業改良普及所等の農業関係機関との連絡体制が強く、相互の関係が  
 密であることである。

その学習方法については、(1)で述べた形態と類似する点が多いので、詳しく述べることは避け  
 るが、教科の履習として ①教材自習 ②面接集合指導 ③研究部会学習 ④冬期合宿教育及  
 び宿泊研修を行ない、研修としては ①視察研修(農業施設の視察) ②農業機械実技研修  
 ③青年の家研修(青年の家にて行なわれる研修会に参加) ④道外研修(茨城県新利根共同農  
 学塾研修、農家留学研修)、を実施し、他に学園生自治会活動、さらには、農業技術研究会、生  
 活教養講座等の行事に参加させている。

表4-18 1976年度剣淵町農業学園事業計画予算(千円)

| 事 業             | 予 算 | 事 業         | 予 算   |
|-----------------|-----|-------------|-------|
| 教 材 費           | 280 | 青 年 の 家 研 修 | 144   |
| 面 接 集 合 指 導     | 36  | 道 外 研 修     | 250   |
| 宿 泊 研 修         | 174 | 農 学 塾       | 125   |
| 冬 期 合 宿         | 535 | 学 園 行 事     | 90    |
| 視 察 ( 道 内 ) 研 修 | 204 | 事 務         | 62    |
| 農 業 機 械 実 技     | 100 |             |       |
| 青 年 会 議         | 45  |             |       |
|                 |     | 計           | 2,045 |

以上にあげた事業計画の予算の割り振りは表4-18の通りである。市町村に普通科が設置さ  
 れていたときの道からの補助は、1973年の最高額で65万7千円であるから、 $\frac{1}{3}$ 弱の援助となり、  
 市町村農業学園の入園生の減少と同時に、運営の限界(教育方法の画一性)があったものと考  
 える。

つぎに学習内容については、表4-19に示した通りである。冬期合宿教育が教育方法として最  
 も力点が置かれていることは、予算で裏づけられるが、この1975年度の合宿カリキュラムから  
 いえることは、一般教養の不足があげられ、個別的領域に分散している傾向があり、もっと多  
 彩な領域(一般教養)から農業をとらえる必要性があるように思える。

さらに、女子においては、在学期間が1年(男子2年)であり、短い期間でのこの内容は、  
 家庭内の生活技術が中心になりすぎているようにも思える。この点は、「女子学園生」自身の学  
 習内容にたいする評価で詳しく述べることにする。

#### (4) 剣淵町農業学園生の実態

以下においては、今までみてきた、「近代化」農業、機械化「一貫」体系に対応した中核的担  
 い手を目的としたこの農業学園制度の概略、さらに、剣淵町農業学園の運営をふまえ、この制  
 度が、町段階において、いかに対応しているかをアンケート調査の結果をもとに、在学学生、卒業生  
 の階層性から明らかにし、剣淵町農業青年の技術・技能修得過程、さらに、学園生による学園の評  
 価、ならびに、学習要求を分析していくことにする。

ここにあげる調査結果は、1976年10月剣淵町農業学園の在学学生(19~21歳)、卒業生(21~30  
 歳)で、現在、在町している140名を対象に郵送によるアンケート調査を実施し、69名より回答  
 を得たものである。

表4-19 1975年度冬期合宿教育日程——剣淵町——

9:30~12:30 13:00~16:00

9:30~12:30 13:00~16:00

| 月 | 日  | 曜 | 学年            | 科 目                    |                                  | 月 | 日  | 曜 | 学年            | 科 目                    |                   |
|---|----|---|---------------|------------------------|----------------------------------|---|----|---|---------------|------------------------|-------------------|
|   |    |   |               | 午前の講義                  | 午後の講義                            |   |    |   |               | 午前の講義                  | 午後の講義             |
| 1 | 13 | 火 | 農1<br>農2<br>家 | 集合10時<br>環境整理          | 開 講 式<br>14:00<br>自治会総会<br>15:00 | 1 | 26 | 月 | 農1<br>農2<br>家 | 休 講<br>午後4時集合          |                   |
| 1 | 14 | 水 | 農1<br>農2<br>家 | 農政時事<br>"<br>"         | 農 政 時 事<br>"<br>"                | 1 | 27 | 火 | 農1<br>農2<br>家 | 農協概説<br>"<br>"         | 農業機械<br>"<br>農業一般 |
| 1 | 15 | 木 | 農1<br>農2<br>家 | 成人式(該当者出席)<br>自治会活動    |                                  | 1 | 28 | 水 | 農1<br>農2<br>家 | 畑 作 物<br>"<br>家庭経済     | 畜 産<br>"<br>保 育   |
| 1 | 16 | 金 | 農1<br>農2<br>家 | 農村社会<br>"<br>"         | 農 村 社 会<br>"<br>"                | 1 | 29 | 木 | 農1<br>農2<br>家 | 農協概説<br>"<br>"         | 農業簿記<br>"<br>栄 養  |
| 1 | 17 | 土 | 農1<br>農2<br>家 | 農協業務<br>"<br>"         | 野 菜<br>"<br>"                    | 1 | 30 | 金 | 農1<br>農2<br>家 | 水 稻<br>"<br>保 育        | 畑 作 物<br>"<br>保 育 |
| 1 | 18 | 日 | 農1<br>農2<br>家 | 自 治 会 活 動<br>(室 内 レ ク) |                                  | 1 | 31 | 土 | 農1<br>農2<br>家 | 畜 産<br>"<br>手 芸        | 野 菜<br>"<br>"     |
| 1 | 19 | 月 | 農1<br>農2<br>家 | 農村社会<br>"<br>"         | 農 政 時 事<br>"<br>"                | 2 | 1  | 日 | 農1<br>農2<br>家 | 自 治 会 活 動<br>(室 内 球 技) |                   |
| 1 | 20 | 火 | 農1<br>農2<br>家 | 農政時事<br>"<br>"         | 農 協 概 説<br>"<br>"                | 2 | 2  | 月 | 農1<br>農2<br>家 | 農業経営<br>"<br>家庭経済      | 畜 産<br>"<br>料理実習  |
| 1 | 21 | 水 | 農1<br>農2<br>家 | 農村社会<br>"<br>"         | 農 政 時 事<br>"<br>"                | 2 | 3  | 火 | 農1<br>農2<br>家 | 畑 作 物<br>"<br>農家住宅     | 農業簿記<br>"<br>手 芸  |
| 1 | 22 | 木 | 農1<br>農2<br>家 | 農政時事<br>"<br>"         | 農協の業務<br>"<br>"                  | 2 | 4  | 水 | 農1<br>農2<br>家 | 農業機械<br>"<br>手 芸       | 畜 産<br>"<br>農業一般  |
| 1 | 23 | 金 | 農1<br>農2<br>家 | 水 稻<br>"<br>保 健        | 海外視察報<br>告 会                     | 2 | 5  | 木 | 農1<br>農2<br>家 | 農業経営<br>"<br>家庭経済      | 農業簿記<br>"<br>料理実習 |
| 1 | 24 | 土 | 農1<br>農2<br>家 | 休 講                    |                                  | 2 | 6  | 金 | 農1<br>農2<br>家 | 水 稻<br>"<br>保 育        | 修了生との<br>意見交歓     |
| 1 | 25 | 日 | 農1<br>農2<br>家 | 休 講                    |                                  | 2 | 7  | 土 | 農1<br>農2<br>家 | 環境整備                   | 閉 講 式<br>14:00    |

## ① 学園生の階層性と経営志向

まず、剣淵町の経営規模別農家数年次別推移は表4-20の通りであるが、ここでいえることは、まず、15年間の推移で、農家数の減少が著しく、さらに、7.5～9.99 haを境に拡大志向と停滞、縮小志向に一応分けることができる点である。

表4-20 経営耕地面積規模別農家数(戸)

| 年次   | 農家数   | 1 ha<br>未満 | 1.0～<br>2.99 | 3.0～<br>4.99 | 5.0～<br>7.99 | 7.5～<br>9.99 | 10.0～<br>14.99 | 15ha<br>以上 | 兼 業 農 家 |     |     |
|------|-------|------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----------------|------------|---------|-----|-----|
|      |       |            |              |              |              |              |                |            | 1 種     | 2 種 | 専 業 |
| 1975 | 805   | 63         | 60           | 138          | 211          | 180          | 118            | 35         | 413     | 99  | 293 |
| 1970 | 882   | 56         | 65           | 176          | 267          | 181          | 118            | 19         | 224     | 73  | 585 |
| 1965 | 1,020 | 110        | 88           | 189          | 312          | 197          | 104            | 20         | 191     | 153 | 676 |
| 1960 | 1,125 | 113        | 139          | 263          | 331          | 176          | 67             | 16         | 181     | 170 | 774 |

注 農林省「農業センサス」より引用

この点をふまえて、学園生の後継者としての経営志向を階層別にみていくことにする。

あとつぎ率は、稲作、畑作とも70.7～80%と高い。次に就農理由については表4-21のようになり、「農業が好きだ」27.5%、「やりがいがある」23.2%、計50.5%となり積極的に就農しているといえよう。

階層別にみると、稲作で6 ha以上層は「やりがい」をあげ4～6 ha層は「他にやる人がいない」をあげている。畑作では、全階層で「農業が好きだから」をいう傾向がある。

表4-21 就農理由について(%)

|        |          | 農<br>業<br>が<br>好<br>き | や<br>り<br>が<br>い | 他<br>が<br>に<br>い<br>や<br>る<br>な<br>い | 都<br>い<br>や<br>生<br>だ<br>活<br>か<br>ら | 親<br>す<br>・<br>兄<br>弟<br>の<br>す<br>め<br>で | 先<br>め<br>生<br>の<br>す<br>す<br>で | 友<br>の<br>人<br>す<br>・<br>知<br>め<br>人<br>で | そ<br>の<br>他 | 無<br>記<br>入 |
|--------|----------|-----------------------|------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------|-------------------------------------------|-------------|-------------|
| 計      |          | 27.5                  | 23.2             | 14.5                                 | 5.8                                  | 4.4                                       | 2.9                             | 1.5                                       | 14.5        | 5.8         |
| 年<br>令 | 19～21(在) | 40.0                  | 10.0             | 20.0                                 | 10.0                                 | —                                         | 10.0                            | —                                         | —           | 10.0        |
|        | 21 ～ 23  | 18.2                  | 31.8             | 22.7                                 | 4.6                                  | —                                         | 4.6                             | —                                         | 9.1         | 4.6         |
|        | 24 ～ 27  | 33.3                  | 19.1             | 4.8                                  | 4.8                                  | —                                         | —                               | 4.8                                       | 23.8        | 9.5         |
|        | 28 ～ 30  | 25.0                  | 25.0             | 12.5                                 | 6.3                                  | 18.8                                      | —                               | —                                         | 18.7        | —           |
| 性<br>別 | 男        | 19.2                  | 31.9             | 21.3                                 | 6.4                                  | 6.4                                       | 4.3                             | 7.1                                       | 6.4         | 2.1         |
|        | 女        | 45.5                  | 4.6              | —                                    | 4.6                                  | —                                         | —                               | —                                         | 31.8        | 13.6        |
| 稲<br>作 | 6 ha 以上  | —                     | 46.7             | 6.7                                  | 20.0                                 | 6.7                                       | —                               | —                                         | 13.3        | 6.7         |
|        | 4 ～ 6 ha | 18.1                  | 9.1              | 27.3                                 | 13.6                                 | 4.6                                       | 4.6                             | —                                         | 13.6        | 9.1         |
|        | 4 ha 以下  | 42.9                  | 14.3             | 14.3                                 | —                                    | —                                         | —                               | —                                         | 28.6        | —           |
| 畑<br>作 | 12ha 以上  | 40.0                  | 30.0             | —                                    | —                                    | —                                         | —                               | —                                         | 20.0        | 10.0        |
|        | 7 ～ 12ha | 28.6                  | —                | 28.6                                 | —                                    | —                                         | 14.3                            | —                                         | 28.6        | —           |
|        | 7 ha 以下  | 62.5                  | 25.0             | —                                    | —                                    | —                                         | 12.5                            | —                                         | —           | —           |

注1 夫婦7組込み

2 アンケート調査(1976年10月実施)結果による。以下の表も同じ。

表4-22 経営指向について(%)

| ①（経営指向） |               |           |                       |                         |                         |                  |           |                                 |             | ②（経営の型）     |                            |                            |                                 |             |             |
|---------|---------------|-----------|-----------------------|-------------------------|-------------------------|------------------|-----------|---------------------------------|-------------|-------------|----------------------------|----------------------------|---------------------------------|-------------|-------------|
|         |               | 経営を<br>拡大 | 現<br>状<br>多<br>収<br>穫 | 現<br>状<br>を<br>維持<br>する | 現<br>状<br>を<br>維持<br>する | 兼<br>業<br>中<br>心 | 経営を<br>縮小 | め<br>ざ<br>し<br>た<br>ば<br>や<br>い | そ<br>の<br>他 | 無<br>記<br>名 | あ<br>く<br>ま<br>で<br>個<br>営 | 個<br>別<br>中<br>心<br>共<br>同 | 全<br>面<br>化<br>し<br>た<br>共<br>同 | そ<br>の<br>他 | 無<br>記<br>入 |
| 計       |               | 58.0      | 24.6                  | 1.5                     | —                       | 2.9              | 1.5       | 1.5                             | 2.9         | 7.3         | 23.1                       | 65.1                       | 5.8                             | 1.5         | 4.4         |
| 稲<br>作  | 6 ha以上        | 66.7      | 20.0                  | —                       | —                       | 6.7              | —         | —                               | —           | 6.7         | 40.0                       | 46.7                       | 6.7                             | —           | 6.7         |
|         | 4～6 ha<br>未 満 | 59.1      | 18.2                  | 4.6                     | —                       | 4.6              | —         | 9.1                             | 4.6         | —           | 18.2                       | 77.3                       | 4.6                             | —           | —           |
|         | 4 ha以下        | 71.4      | 14.3                  | —                       | —                       | —                | —         | —                               | —           | 14.3        | —                          | 85.7                       | —                               | —           | 14.3        |
| 畑<br>作  | 12ha以上        | 20.0      | 60.0                  | —                       | —                       | —                | —         | —                               | 10.0        | 10.0        | 20.0                       | 50.0                       | 10.0                            | 10.0        | 10.0        |
|         | 7～12ha<br>未 満 | 42.9      | 57.1                  | —                       | —                       | —                | —         | —                               | —           | —           | 14.3                       | 85.7                       | —                               | —           | —           |
|         | 7 ha以下        | 62.5      | 37.5                  | —                       | —                       | —                | —         | —                               | —           | —           | 37.5                       | 50.0                       | 12.7                            | —           | —           |

注 夫婦7組込み

つぎに、経営指向においては、表4-22の通りで全体の58%が「経営を拡大して機械化農業にする」、「現状維持で多収穫をめざす」が24.6%である。階層別では、稲作の全階層が「経営拡大」を志向しているのに対し、畑作の上層・中層が「現状維持で多収穫をめざす」を志向しているのが特徴的である。さらに、経営の型については「個別経営中心で、機械、育苗等は共同化したい」が65.1%、「あくまで個別経営」は23.1%となり、稲作、畑作の全階層において、個別経営中心で、部分的共同化を考えている。稲作にいたっては、下層にいくにしたがい高い率を出す。

剣淵町において農業機械の導入された時期はごく最近で、1975年時点の所有状況をみると、805戸中バインダーは284戸が個人所有、共同は、93戸で44台、自脱型コンバインは、57戸個人所有、共同は9戸で3台、米麦用乾燥機では、個人所有が403戸で433台、共同は28戸で13台というように、個別中心で量的にそれほど機械が普及されているとはいえない。

こうしたなかで、経営の一角に部分的共同化を考えているのは、育苗過程の合理化、また今日の独占価格による農業機械にたいしての個別的導入の困難等が、背景としてあげられるが、ともあれ、学園卒業生は、農業経営の一定の合理化を志向していることがうかがえる。

この点を考えた時、剣淵農業のこれからの方向性として、共同化の方法が次に問題となるのであり、農協、農業改良普及所等の指導が期待されるものである。

ところで、学園の運営においても、共同化は重要視されており、たとえば茨城県の新利根共同農学塾に研修にいらっていることは、それを裏づけるものである。

このように、学園制度のもつねらいは、ごく一部の専門的な中核農家を育成することにあつたが、剣淵町においては、それはむしろ、剣淵町農業の特性を考えたいうでの担い手育成という方向に再編成されており、町立のもつ積極的可能性をしめすといえよう。

## ② 農業学園生の営農、生活相談

学園生の卒業後の技術修得、営農相談が、どう行なわれているのかをみたのが表4-23である。家族内で解決するケースが多いことを示しているが、家族の次には、稲作、畑作とも改良普及員があげられ、学園と普及員の結びつきは強いものといえる。また、入学時において「町の農業学園にすすんだ理由」については、「今後、地元で農業経営を進めていくうえで、地元の農業改良普及員、農協職員等の接触が必要だから」が55.1%で、年令的にも歳が増すにつれて

表4-23 営農・技術の相談相手(人)

|        | 稲 作   |      |       |      | 畑 作    |      |     |      | 酪農  | 農 計  | 男    | 女    |
|--------|-------|------|-------|------|--------|------|-----|------|-----|------|------|------|
|        | 6ha以上 | 6~4  | 4ha以下 | 計    | 12ha以上 | 7~12 | 7以下 | 計    | 中心  | 計    | 計    | 計    |
| (対象人数) | (15)  | (22) | (7)   | (44) | (8)    | (7)  | (8) | (23) | (2) | (69) | (47) | (22) |
| 農業学園生  | 4     | 2    | 2     | 8    | —      | —    | 2   | 2    | —   | 10   | 10   | —    |
| 改良普及員  | 9     | 10   | 3     | 22   | 3      | 2    | —   | 5    | —   | 27   | 24   | 3    |
| 農協職員   | 1     | 1    | 1     | 3    | 1      | 1    | 1   | 3    | —   | 6    | 6    | —    |
| 役場の職員  | —     | —    | —     | —    | —      | —    | —   | —    | —   | —    | —    | —    |
| 社教主事   | —     | —    | —     | —    | —      | —    | —   | —    | —   | —    | —    | —    |
| 友人・恋人  | 3     | 4    | 2     | 9    | 3      | 2    | 1   | 6    | —   | 15   | 11   | 4    |
| 家族     | 9     | 11   | 4     | 24   | 1      | 2    | 2   | 5    | —   | 29   | 21   | 8    |
| 親類     | 1     | —    | —     | 1    | —      | —    | —   | —    | —   | 1    | —    | 1    |
| 先輩     | —     | 4    | 3     | 7    | 3      | —    | 2   | 5    | —   | 12   | 10   | 2    |
| 先生     | —     | 1    | —     | 1    | —      | —    | —   | —    | —   | 1    | 1    | —    |
| 誰も相談せず | —     | 1    | —     | 1    | 1      | —    | 1   | 2    | 1   | 4    | 3    | 1    |
| その他    | —     | —    | —     | —    | —      | —    | —   | —    | —   | —    | —    | —    |
| 計      | 27    | 34   | 15    | 76   | 12     | 7    | 9   | 28   | 1   | 105  | 86   | 19   |

注 夫婦7組込み

高まる傾向を示す。

階層別でも、稲作の4ha以下を除いて、全階層において50%平均を示している。

このように、剣淵町においては、普及員の役割が大きく、農村青年に入り込み、青年自身も普及員との接触が多く、相互の積極的連帯を形成しており、学園の特徴である農業関係機関との提携が強いという、その現われを示すといえる。

表4-24 農業学園修了の感想(%)

① 学園修了の感想

② (改善理由)

|        |                 | 改<br>善<br>し<br>て<br>い<br>る | 充<br>学<br>実<br>園<br>し<br>生<br>た<br>活 | 期<br>待<br>通<br>り | 大<br>体<br>良<br>か<br>た | そ<br>の<br>他 | 無<br>記<br>入 | 在<br>学<br>期<br>間<br>長<br>く<br>し<br>て<br>ほ<br>し<br>い | 研<br>究<br>修<br>入<br>れ<br>て<br>ほ<br>し<br>い<br>力<br>を<br>い<br>る | 科<br>目<br>を<br>ほ<br>し<br>い<br>へ<br>ら<br>い | 農<br>業<br>専<br>門<br>技<br>術<br>的<br>な<br>こ<br>の<br>に | 一<br>般<br>教<br>養<br>に<br>を<br>こ<br>の<br>に | そ<br>の<br>他 |
|--------|-----------------|----------------------------|--------------------------------------|------------------|-----------------------|-------------|-------------|-----------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|-----------------------------------------------------|-------------------------------------------|-------------|
| 計      |                 | 27.1                       | 28.8                                 | 10.2             | 28.8                  | 1.7         | 3.4         | 12.5                                                | 12.5                                                          | 6.3                                       | 50.0                                                | 25.0                                      | —           |
| 年<br>令 | 21 ~ 23         | 45.5                       | 22.7                                 | 13.6             | 13.6                  | 4.6         | —           | 20.0                                                | 10.0                                                          | 10.0                                      | 30.0                                                | 30.0                                      | —           |
|        | 24 ~ 27         | 9.5                        | 33.3                                 | 4.8              | 52.4                  | —           | —           | —                                                   | —                                                             | —                                         | 100.0                                               | —                                         | —           |
|        | 28 ~ 30         | 25.0                       | 31.3                                 | 12.5             | 18.8                  | —           | 12.5        | —                                                   | —                                                             | —                                         | 75.0                                                | 25.0                                      | —           |
| 性<br>別 | 男               | 25.6                       | 30.8                                 | 15.0             | 23.1                  | 2.6         | 2.6         | —                                                   | 10.0                                                          | 10.0                                      | 70.0                                                | 10.0                                      | —           |
|        | 女               | 30.0                       | 25.0                                 | —                | 40.0                  | —           | 5.0         | 33.3                                                | —                                                             | —                                         | 16.7                                                | 50.0                                      | —           |
| 稲<br>作 | 6ha以上           | 38.5                       | 23.1                                 | 15.4             | 23.1                  | —           | —           | 20.0                                                | —                                                             | —                                         | 80.0                                                | —                                         | —           |
|        | 4 ~ 6ha<br>未 満  | 25.0                       | 30.0                                 | 5.0              | 35.0                  | —           | 5.0         | —                                                   | 20.0                                                          | 20.0                                      | 60.0                                                | —                                         | —           |
|        | 4ha以下           | 16.7                       | 50.0                                 | 16.7             | 16.7                  | —           | —           | —                                                   | —                                                             | —                                         | 100.0                                               | —                                         | —           |
| 畑<br>作 | 12ha以上          | 44.4                       | —                                    | 11.1             | 22.2                  | 11.1        | 11.1        | 25.0                                                | —                                                             | —                                         | —                                                   | 75.0                                      | —           |
|        | 7 ~ 12ha<br>未 満 | 16.7                       | 50.0                                 | —                | 33.3                  | —           | —           | —                                                   | —                                                             | —                                         | —                                                   | 100.0                                     | —           |
|        | 7ha以下           | —                          | 40.0                                 | 20.0             | 40.0                  | —           | —           | —                                                   | —                                                             | —                                         | —                                                   | —                                         | —           |

注 夫婦7組込み

表4-25 1年間で満足か(女子学園修了生のみ)

①回答

②不満理由

(%)

|        |               | 満<br>足 | 不<br>満 | 男<br>子<br>と<br>同<br>じ | く<br>二<br>年<br>に | 農<br>業<br>技<br>術<br>を<br>専<br>門<br>的<br>に | 最<br>底<br>二<br>年<br>は<br>必<br>要 | そ<br>の<br>他 |
|--------|---------------|--------|--------|-----------------------|------------------|-------------------------------------------|---------------------------------|-------------|
| 計      |               | 45.0   | 55.0   | 9.1                   | 45.0             | 27.0                                      | 18.2                            |             |
| 年<br>令 | 21～23才        | 22.0   | 77.2   | —                     | 57.1             | 14.3                                      | 28.6                            |             |
|        | 24～27         | 42.9   | 57.1   | 25.0                  | 25.0             | 50.0                                      | —                               |             |
|        | 28～30         | 100.0  | —      | —                     | —                | —                                         | —                               |             |
| 稲<br>作 | 6ha以上         | 50.0   | 50.0   | —                     | 50.0             | 50.0                                      | —                               |             |
|        | 4～6ha<br>未 満  | 60.0   | 40.0   | 50.0                  | —                | 50.0                                      | —                               |             |
|        | 4ha以下         | 100.0  | —      | —                     | —                | —                                         | —                               |             |
| 畑<br>作 | 12ha以上        | 25.0   | 75.0   | —                     | 66.7             | —                                         | 33.3                            |             |
|        | 7～12ha<br>未 満 | —      | 100.0  | —                     | 66.7             | —                                         | 33.3                            |             |
|        | 7ha以下         | 50.0   | 50.0   | —                     | —                | 100.0                                     | —                               |             |

## ③ 農業学園生の学習内容の評価

学園発足以来、9年を経るなかで、剣淵町農業学園をどう評価しているのかを以下においてみていくことにする。

まず、剣淵町農業学園生の「学園修了後の感想」について、大半は、ほぼ満足として評価している。すなわち、表4-24に示すように「充実した学園生活」28.8%、「期待通り」10.2%、「大体良かった」28.8%、計67.8%である。

一方、「もっと改善してほしい」が全体の27.1%あり、とくに、稲作の6ha以上層が38.5%、畑作の12ha以上層が44.4%、ままた、年令的にみると、21～23歳層が45.5%と多くみられる。

この改善点は一稲作のそれは「農業技術、経営についてもっと専門的に」を、畑作のそれは「一般教養に力を入れてほしい」をあげ年令別の21～23歳層もこの両方をあげ、教育内容の改善希望を述べている。

つぎに、学園女子卒業生に「在学期間1年間で満足か」(表4-25)との問いに対し全体の55%が不満と答え、とくに、畑作の上中層に多く、年令的にも若い層になるにしたがい高くなる。その理由として、畑作のそれは「農業技術、経営について専門的にやりたい」をあげ、年令別では、24～27歳層は「期間として二年必要だ」をあげている。

このように、女子学園卒業生にいたってはまず、在学期間の延長という制度的改善がのべられ、同時に、農村婦人として、単なる補助労働力としてではなく、担い手としての自覚から技術要求が高くみられる傾向があり、一方で一般教養を重視してもらいたいという要求もある。

学習要求では、稲作、畑作の区別はつけがたいが、稲作専業、中心層は、肥料、農薬の知識、農業機械の修理、整備をあげ、畑作にあっては、多様化している。

## (5) 小 括

農業技術・技能教育にあっては、単なる機械の技術、個別的技術と、技能の習得といった単発的な対応をするのではなく、広く形成された農業関連諸知識の上に、個々の労働過程の技術的問題が位置づけられるわけで、その意味からも女子学園生の「一般教養に力を入れてほしい」という要求は、その点をつく重要な指摘といえる。

農業の中核的担い手を育成することを目的とした農業学園制度は、現段階において、剣淵町農業学園の実態からみる限り、必ずしも、その方向には沿っていないくて、むしろ、中層段階のものとして再編成されているといえる。

今日の日本農業は、激しい勢いで機械化されてきている。それが行政レベルで、あるいはメーカーの直接的売り込みにおいても、すさまじいものがある。また、化学肥料の多量の投入により地力低下をもたらし、また、一部の労働過程のみが発展してだけで、農業生産力形成上、アンバランスな状況をもたらし、さらに、機械が農産物を生産するかのような錯覚をもたらしている。

現在、いわば機械に振り回されている農民は、おそかれ早かれ今後の農業経営ないし農業の見通し、つまり、資本主義社会における農業の位置と動向を見極わめていかねばならないだろう。日本農業の方向性を考えそのもとにおける個別経営と地域産業の条件をさぐることにより、機械を生産手段として使いこなしていく農民の主体性が発揮されねばならない。

こうした、今後の農業経営の発展の方向を見通す力を養ううえで、後継者教育の役割は住民自治とのかかわりのなかで、とりわけ、教育内容、方法において、再検討が要請されているといわねばならぬ。

#### 4. 農業者転職訓練制度と農民

——士別市T地区の実態を中心にして——

##### (1) はじめに

本節では、農民にたいする技術、技能教育の特殊な一分野、積極的労働力政策の一環としての農業者転職訓練制度を農民層分解の視点から明らかにする。

農業者転職訓練制度は、離農促進の政策的意図で、1970年度から実施された労働省の農業者転職対策の重要な柱の1つである。そして、他方この転職対策に従属したものとして、農林省は、農業就業近代化事業を実施している。<sup>(7)</sup>

労働省の農業者転職対策の特徴は、米の生産調整、大型機械化「一貫」体系等の総合農政に対応して、職安行政が離農地域を積極的に選定していることであり、その点では、農民に対して重点的に、職業紹介、職業訓練の指導をきめ細かに実施している。<sup>(8)</sup>

また、農林省の農業就業近代化事業は、3つの施策からなっている。それは、第1に、農業後継者の養成確保、第2に、農繁期労働力調整、第3に、他産業就業促進である。

総合農政以降全階層的なやとわれ兼業化の進行する東北、北海道の稲作地帯では、この3つの施策の重点に、他産業就業促進を置いている。この他産業就業促進対策は、むしろ完全離農の促進を基本的な目的にしているが、しかし、現実の農民のやとわれ兼業化の中では、出稼ぎ、日雇いの対策になっている。<sup>(9)</sup>

70年代の国家独占資本主義の農民の転職対策は、資本の強蓄積のための積極的労働力政策の一環であり、人為的に不安定労働力市場を作り出すところの低賃金政策でもある。

農業者転職対策の中に職業訓練が積極的に位置づけられていることは、建設資本の「技能労働力不足」によるところが大きい。建設資本は、重層の下請制によって、農家からの出稼ぎ、日雇い労働力を大量に吸収している。<sup>(10)</sup>

ところで、農業者転職訓練期間は、3ヶ月間であり、基礎実技のみで、本格的な転職訓練になっていないのが実状である。

北海道の農業者転職訓練の実施は、表4—26に示すとおり、空知、上川の稲作地帯に集中し

表 4-26 農業者転職訓練入校者数と離農率（年次別）

| 支 庁 別      | 校 名                 | 入 校 者 数 |     |     |     |     |       | 離 農 率 |     |     |     |     |
|------------|---------------------|---------|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-----|-----|-----|
|            |                     | 70      | 71  | 72  | 73  | 74  | 計     | 70    | 71  | 72  | 73  | 74  |
| 石 狩        | 札幌                  |         | 9   |     |     |     | 9     | 2.4   | 3.4 | 3.6 | 4.7 | 3.9 |
| 空 知        | 美 瑛<br>滝 川          |         | 120 | 95  | 110 | 58  | 383   |       |     |     |     |     |
|            |                     |         | 35  | 56  | 43  | 65  | 199   | 3.3   | 2.4 | 2.3 | 2.8 | 3.6 |
| 上 川        | 旭 川<br>名 寄<br>富 良 野 | 52      | 90  | 94  | 39  | 15  | 290   |       |     |     |     |     |
|            |                     | 10      | 28  | 18  | 38  | 30  | 124   | 3.5   | 3.2 | 3.2 | 2.9 | 3.5 |
|            |                     | 25      | 38  | 39  | 75  | 55  | 232   |       |     |     |     |     |
| 留 萌        | 留 萌                 |         | 64  | 39  | 6   |     | 109   | 2.4   | 4.5 | 4.9 | 5.9 | 3.6 |
| 後 志        | 岩 内                 |         |     |     |     |     |       | 2.4   | 4.5 | 4.9 | 5.9 | 3.6 |
| 檜 山        | 江 差                 |         | 22  | 30  | 20  |     | 72    | 5.6   | 6.2 | 7.8 | 3.3 | 3.8 |
| 渡 島        | 函 館                 |         |     |     |     |     |       | 3.4   | 5.9 | 5.9 | 5.9 | 5.2 |
| 胆 振        | 室 蘭<br>苫 小 牧        |         |     |     |     |     |       |       |     |     |     |     |
|            |                     |         |     |     |     |     |       | 2.4   | 5.6 | 5.7 | 4.1 | 4.5 |
| 日 高        | 浦 河                 |         |     |     |     |     |       | 3.0   | 4.8 | 4.7 | 3.4 | 3.9 |
| 十 勝        | 帯 広                 | 13      |     | 20  | 19  | 18  | 770   | 4.1   | 6.3 | 5.5 | 5.0 | 4.4 |
| 根 室<br>釧 路 | 釧 路                 |         |     |     |     |     |       | 3.5   | 7.5 | 6.4 | 6.0 | 4.0 |
|            |                     |         |     |     |     |     |       | 0.7   | 7.1 | 3.7 | 3.9 | 2.1 |
| 網 走        | 北 見<br>網 走<br>遠 軽   |         |     |     | 32  | 19  | 51    | 4.3   | 6.7 | 5.7 | 5.1 | 4.9 |
|            |                     |         |     |     |     |     |       |       |     |     |     |     |
| 宗 谷        | 稚 内                 |         |     |     |     |     |       | 6.1   | 6.0 | 4.4 | 5.6 | 7.8 |
| 計          |                     | 100     | 406 | 391 | 382 | 260 | 1,539 | 3.5   | 4.8 | 4.5 | 4.3 | 4.1 |

注 離農率は農林省「農業センサス」、北海道「農業基本調査」による入校者数は道労働部職業訓練課調による。

表 4-27 農業者転職訓練訓練科年令別推移(北海道)

|         | 1972 年    |       |       |     | 1973 年    |       |       |     | 1974 年    |       |       |     |
|---------|-----------|-------|-------|-----|-----------|-------|-------|-----|-----------|-------|-------|-----|
|         | 24才<br>まで | 25～34 | 35～44 | 45～ | 24才<br>まで | 25～34 | 35～44 | 45～ | 24才<br>まで | 25～34 | 35～44 | 45～ |
| 型 枠     | 6         | 51    | 80    | 64  | 10        | 49    | 122   | 61  | 1         | 65    | 142   | 4   |
| 塗 装     | 0         | 0     | 5     | 3   | 0         | 0     | 0     | 0   | 0         | 17    | 0     | 0   |
| 木 材 工 芸 | 0         | 2     | 5     | 8   | 0         | 0     | 0     | 0   | 0         | 0     | 0     | 0   |
| 溶 接     | 10        | 10    | 13    | 6   | 14        | 10    | 20    | 10  | 3         | 5     | 11    | 0   |
| 農業機械整備  | 10        | 7     | 12    | 11  | 13        | 5     | 4     | 0   | 0         | 0     | 0     | 0   |
| 建 築     | 2         | 7     | 11    | 11  | 0         | 0     | 0     | 0   | 0         | 0     | 0     | 0   |
| 配 管     | 2         | 3     | 21    | 8   | 6         | 9     | 24    | 7   | 4         | 15    | 9     | 2   |
| ブ ロ ッ ク | 0         | 3     | 14    | 2   | 1         | 3     | 14    | 0   | 0         | 0     | 0     | 0   |
| 計       | 30        | 83    | 161   | 113 | 44        | 76    | 184   | 78  | 8         | 102   | 162   | 6   |

注 道職業訓練課調

ている。これは、米の生産調整に対応して、農業者転職対策を行なうため、道東、道北の酪農地帯での実施は、むしろきわめてわずかである。表4-27より、道の農業者転職訓練の科目は、型枠、溶接、配管等の建設労働を中心にしている。しかし、部分的であるとはいえ農業機械修理等の農業経営と直接関連をもっている科目の設置は、離農促進のための訓練制度が、農民側においてむしろ農業経営発展の訓練に利用されていることを現わしている。農業者転職訓練の実施機関は、都道府県の自治体の運営する職業訓練所である。そして、その職業訓練所は、各市町村を単位としての簡易訓練施設を設けている。簡易訓練施設の設置は、各市町村自治体の協力体制によって実施されている。つまり、農業者転職訓練は、地域の実状によって科目の設置を可能にしている。

農業者転職訓練制度にたいする農民の対応は、階層によって異なって現われ、その役割も階層によって多様である。

70年代のやとわれ兼業化は、全階層的に現われているが、その性格は階層的に大きく2つに分かれる。第1は、安定兼業化という、小農民の経営と所有の分離によるプロレタリア化の形態であり（いわゆる「土地持ち労働者」化）、第2は、中農上層に典型的に現われるように、農民のままでの労働力市場への動員形態である。農民にとっての転職の本質は、小農民の経営の分解過程であり、単なる労働の質的变化による職業転換ではない。ここに、労働者の転職と本質的に異なる意義がある。

## (2) 農業者転職訓練受講者の階層性

本稿は、士別市T地区の農業者転職訓練受講者の実態分析を中心とする。

T地区は、稲作の北限地であり、冷害による不安定生産の特徴をもち、とりわけ1971年の冷害は、T地区の農民の多くを出稼ぎへかりだした。この地域での農業者転職訓練は、冷害と減反による全階層的な出稼ぎの増大の中での実施で、表4-28にみられるように農業者転職訓練の受講者の多くは出稼ぎを行なっている（1970年の専業農家率60%、46年28.8%、1975年30.1%）。T地区の受講者は、階層的に4つに類型化される（図4-5）。

第1の階層は、6ヘクタール以上層である。この層は、経営規模の上向運動を積極的行なっており中農上層である（全受講者の18.8%）。

第2の階層は、4ヘクタールから6ヘクタール未満層の中農中層である（全受講者の50%）。

第3の階層は、4ヘクタール未満層であり、経営規模の下降移動、安定兼業化層であり、中農下層である（全受講者の18.8%）。

表4-28 多寄地区農転受講者の専兼別構成

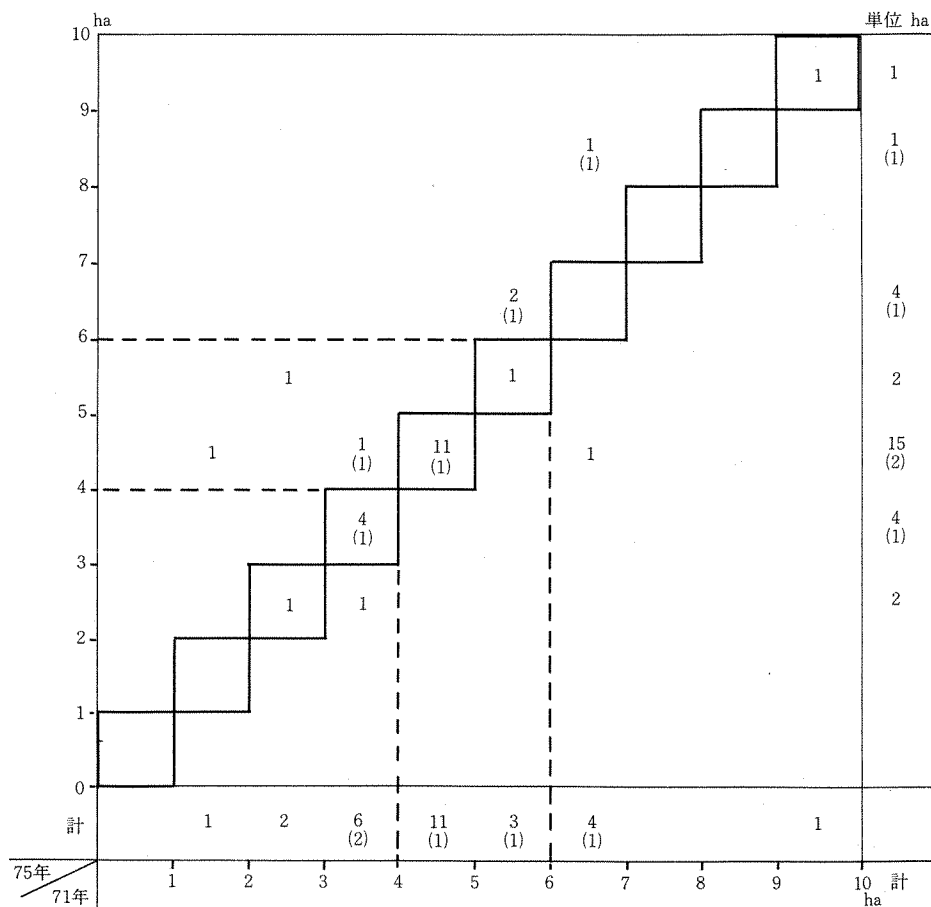
(1975年現在)

| 経営規模         | 専業 | 第1種兼業 | 第2種兼業 | 150・日<br>農業労働婦<br>人のみ | やとわれ兼業形態 |    |    | 71年時<br>やとわれ兼業形態 |    |    |
|--------------|----|-------|-------|-----------------------|----------|----|----|------------------|----|----|
|              |    |       |       |                       | なし       | 日雇 | 出稼 | なし               | 日雇 | 出稼 |
| 6ha以上        | 2  | 3     | 1     | 3                     | 3        | 3  | 0  | 0                | 1  | 5  |
| 4～6ha<br>未 満 | 2  | 13    | 1     | 6                     | 2        | 10 | 4  | 3                | 2  | 10 |
| 4ha未満        | 1  | 4     | 1     | 3                     | 0        | 6  | 0  | 0                | 3  | 2  |
| 計            | 5  | 20    | 3     | 12                    | 5        | 19 | 4  | 3                | 6  | 17 |

注1. 農業者転職訓練受講後の完全離農4戸

2. 農業者転職訓練受講者の専兼別農業センサス個票より集計

図 4-5 士別市T地区の農業者転職訓練受講生の経営規模移動状況



注 農業センサス個票より作成, ( ) は 75 年の専業農家

表 4-29 1972 年度農業者転職訓練受講者の経営規模別構成比(北海道)

| 経営規模 | 1 h  | 1.5 | 2   | 2.5 | 3    | 3.5 | 4    | 4.5 | 5    | 5.5  |
|------|------|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|------|------|
| 構成比  | 6.2% | 3.3 | 5.9 | 6.4 | 13.0 | 6.4 | 12.3 | 6.4 | 10.0 | 30.2 |

注 道職業訓練課調

第 4 の階層は、完全離農した層である（全受講者の 12.5%）。

1972 年度の農業者転職訓練の全受講者にたいする全道調査より、受講者の階層性をみれば、表 4-29 に示すとおり、5.5 ヘクタール層以上にもっとも集中している。

また、空知、上川において、農業者転職訓練の受講者の集中している市町村を 4ヶ所選び、そこでの転職訓練の受講者の経営規模の分布を示したのが、表 4-30 である。この表より、それぞれの 4 地域は、分解基軸以上層に集中していることがわかる。つまり、中農下層の受講者の比率が、相対的に低い。

表4-30 1974年度農業者転職訓練受講者の階層・年令構成

| 市町村      | 経営耕地規模別構成比     |                |                |                |              |                  | 世帯主別数   |    |          | 年 令 別 数   |           |           |     | 計   |
|----------|----------------|----------------|----------------|----------------|--------------|------------------|---------|----|----------|-----------|-----------|-----------|-----|-----|
|          | 0～3ha<br>未 満   | 3～5            | 5～7.5          | 7.5～10         | 10～          | 計                | 世帯<br>主 | 長男 | 2・3<br>男 | 24才<br>まで | 25～<br>34 | 35～<br>44 | 45～ |     |
| 長 沼      | 4.9<br>(13.3)  | 23.7<br>(27.1) | 53.3<br>(34.6) | 13.1<br>(15.7) | 4.9<br>(9.3) | 100.0<br>(100.0) | 64      | 50 | 8        | 10        | 25        | 54        | 33  | 122 |
| 士 別      | 0.0<br>(19.3)  | 77.3<br>(38.1) | 22.7<br>(29.5) | 0.0<br>(8.8)   | 0.0<br>(6.1) | 100.0<br>(100.0) | 19      | 3  | 0        | 0         | 4         | 12        | 6   | 22  |
| 妹背牛      | 6.4<br>(14.8)  | 51.0<br>(48.4) | 17.0<br>(31.5) | 2.1<br>(3.5)   | 2.1<br>(1.3) | 100.0<br>(100.0) | 25      | 17 | 5        | 2         | 11        | 19        | 15  | 47  |
| 上富良<br>野 | 28.3<br>(19.4) | 41.3<br>(26.6) | 26.1<br>(26.7) | 4.3<br>(13.0)  | 0<br>(14.0)  | 100.0<br>(100.0) | 18      | 27 | 1        | 3         | 17        | 19        | 7   | 46  |

注1. 経営耕地規模別構成の( )内は、その市町村全体の農家の階層別構成比。

2. 農業者転職訓練受講希望名簿より作成

表4-28にみるとおり、1971年から1975年までの受講者の専兼別戸数は、第1種兼業農家20戸、第2種兼業農家5戸、完全離農4戸である。

T地区のやとわれ兼業は、1971年から1975年まで、その比率の変化をみせないが、しかし、その内容は出稼ぎから日雇いの形態に移行している(1971年出稼ぎ率47.3%、日雇い率18.9%、1975年出稼ぎ率18.9%、日雇い率36.6%)。

この傾向は、農業者転職訓練受講農家においてもみられる。受講農家の1975年のやとわれ兼業のうち、日雇い農家率は、81.8%である。受講農家の1971年のやとわれ兼業の形態の比率は、日雇い率17.2%、出稼ぎ率75.9%であった。

農業者転職訓練受講農家で、農業従事150日以上農業労働力が女性のみというのは、12戸で(全受講者の37.5%)、それぞれの階層に平均的に分布している。これらの農家は、米の生産調整の転作率、休耕率の高い層である(転作率100%7戸、休耕率100%1戸)。

また、農業者転職訓練は、出稼ぎから日雇いへの移行促進の役割を果たしている。さらにこの過程は、農業労働力の女性化を強めている。つまり、安定的な日雇い化により、男子労働力は、田植期、収穫期以外は、農業労働から分離していき、農民層の下降分解を促進していく。<sup>(11)</sup>

T地区の1971年から1975年までの離農は64戸であった。このうち農業者転職訓練を受講したのは、4戸にすぎない。完全離農をせまられている農家は、農家経済の窮迫のため、3ヶ月間の訓練の経済的余裕すらもてない。農業者転職訓練の訓練手当は、表4-31に示すとおり、きわめて低額であり、家族全員の生活を保障するものとはなっていない。

受講者24名のアンケート調査からみると、21名までが、訓練手当の必要を訴えている。そして、さらに、「もっと訓練手当を増額してほしい」という回答は15名になっている。もともと農業者転職訓練は、離農促進ということから、中高年齢農業経営主層を対象とした政策であった。

ところでT地区の受講者の年令構成はどのようになっているか。

表4-31 1人当たり訓練手当(日当)(1974年度士別市)

|         |                                            |
|---------|--------------------------------------------|
| 失業保険なし  | 基本手当(780円) + 受講手当(285円) + 扶養手当(0～190)      |
| 失業保険受給者 | 失保(1,940円～3,800円) + 受講手当(285円) 扶養手当(0～190) |

注 名寄専修職業訓練校資料より

表4-32 士別市における農業者転職訓練の年令別構成比

| 年 令     | 71 年 | 72 年 | 73 年 | 74 年 | 75 年 | 計    |
|---------|------|------|------|------|------|------|
| 20 ~ 24 |      |      |      |      | 11.1 | 3.5  |
| 25 ~ 29 | 5.9  |      | 6.3  |      | 11.1 | 5.9  |
| 30 ~ 34 |      |      | 6.3  | 21.1 | 7.4  | 8.2  |
| 35 ~ 39 |      | 16.7 | 37.5 | 15.8 | 7.4  | 14.1 |
| 40 ~ 44 | 23.5 | 66.7 | 12.5 | 42.1 | 22.2 | 28.2 |
| 45 ~ 49 | 35.3 |      | 18.8 | 5.3  | 14.8 | 16.5 |
| 50 ~ 54 | 11.8 | 16.7 | 18.8 | 15.8 | 18.5 | 16.5 |
| 55 ~ 59 | 11.8 |      |      |      | 7.4  | 4.7  |
| 60 ~ 64 | 11.8 |      |      |      |      | 2.4  |
| 実 数     | 17名  | 6 名  | 16名  | 19名  | 27名  | 85名  |

注 名寄専修職業訓練校・農業者転職訓練受講者名簿より作成

表4-33 農業者転職訓練生の就職先

| 経営耕地<br>面 積 | 道 外 | 士別・名寄管内 | 士別・名寄管内<br>道 |
|-------------|-----|---------|--------------|
| 6 ha 以上     | 2   | 3       | 2            |
| 4~6ha未満     | 5   | 7       | 4            |
| 4 ha 未 満    | 0   | 4       | 2            |
| 計           | 7   | 14      | 8            |

注1. 北大社会教育研究室1976年7月調査

2. 対象は71年から75年までの士別市多寄地区の受講者。

表4-34 1974年度農業者転職訓練受講生の就職先(士別市)

|     |       |
|-----|-------|
| 風 連 | 3     |
| 士 別 | 15(7) |
| 札 幌 | 2     |
| 旭 川 | 2     |
| 名 寄 | 1     |

注 1. 名寄専修職業訓練校、農業者転職訓練受講者名簿より作成

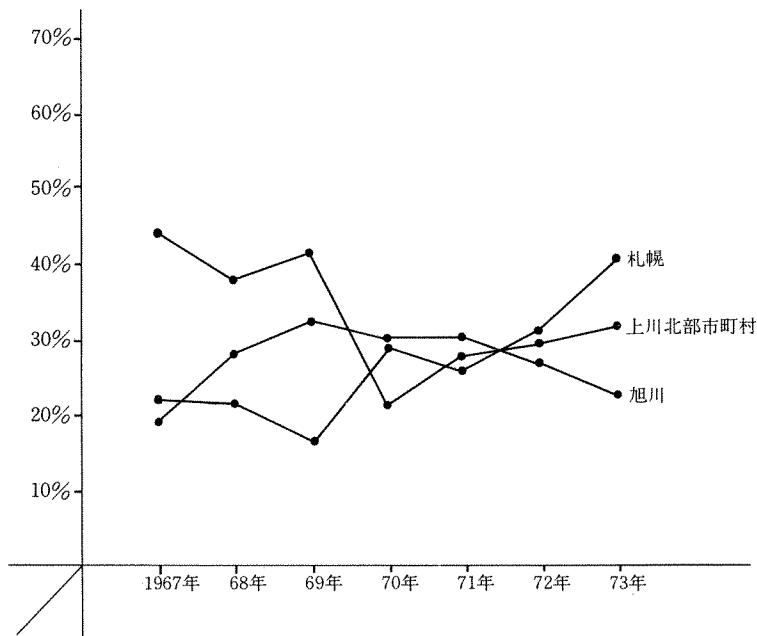
2. ( ) は、指導員の経営する企業に就職。

T地区の年齢別受講者は、表4-32に示すとおり、1971年の実施当初は、中高年齢層に集中していたものが、1975年には、すべての年齢層に分布するようになった。つまり、農業者転職訓練の普及は、若年層の後継者にも及んでいる。表4-30のように、長沼等の地域においても、後継者の受講が目立っている。

この受講者の若年層への広がりとは、完全離農ではなく、安定的な兼業のための職業訓練の現われである。安定的兼業のための職業訓練としては当然受講修了後の就職が重要になる。表4-33、表4-34より、受講後の就職は、地元の比率を高くしているといえる。とくに、農業者転職訓練の指導員(講師)の企業へ、多くの受講者が就職していることは、注目すべきことである。

指導員は地元の建設業者のリーダー層がこれにあたっている(農業者転職訓練の指導員は、専修職業訓練校の教員でなく、訓練実施地域の業者に依存している)。士別市の建設業者は「技能士会」をつうじて農業者転職訓練の講師派遣など積極的援助体制をとっている。士別市における「技能労働力不足」は、とくに建築技能士において目立ち、地元の建設業者の判断から建築科が農業者転職訓練の科目として設けられている。

図 4-6 訓練生の就職先構成比推移 (名寄1年コース, 木工, 塗装, 電気)



注 名寄専修職業訓練校資料より作成

表 4-35 農業者転職訓練経費(1975年度)

単位 円

|    | 事務員<br>賃 金 | 時<br>間<br>講<br>師<br>料 | 需要費計      | 実習消耗資材    |         | 使用料及<br>び貸借料 | 役務費    | 旅 費       | 合 計        | 備 考          |
|----|------------|-----------------------|-----------|-----------|---------|--------------|--------|-----------|------------|--------------|
|    |            |                       |           | 実習消耗資材    | 消耗工具    |              |        |           |            |              |
| 名寄 | 115,000    | 1,160,000             | 706,000   | 540,000   | 80,000  | 90,000       | 6,000  | 80,000    | 7,157,000  | 40 名<br>(名寄) |
| 全道 | 287,500    | 5,692,000             | 3,748,000 | 2,710,000 | 410,000 | 720,000      | 30,000 | 4,000,000 | 10,877,500 | 全 道<br>8ヶ所   |

注 道職業訓練課調

このように各地域の専修職業訓練校は、地元の技能労働力確保対策としての役割を担わせられている。このため訓練科目の設置は、地元の産業構造の性格に大きく左右される。図表4-1より名寄の場合の専修職業訓練生の就職は、地元でなく、札幌への傾向を強よめている。このことは、地元の「技能労働力不足」に拍車をかけている。

農業者転職訓練の経費は、表4-35に示すとおり、きわめて低額であり、そのため専任の技術・技能の指導員を置けず、したがって外部の民間企業に指導員を依託せざるをえない。

訓練施設は、各市町村の公共施設、認定職業訓練校、民間企業の施設等を借り上げて使用している。その使用料及び貸借料は、1975年度の場合、1ヵ所3ヶ月間9万円であり、施設面から、市町村単位での地元の協力体制なしには実施しえない状況にある。表4-36より、訓練施設として、公民館、体育館、保育所等の地域社会生活に欠かせない公共施設が、農業者転職訓練施設に利用されていることがわかる。

表4-36 農業者転職訓練の実施施設(1974年度)

| 支 庁 | 校 名 | 訓練科 | 実施地   | 実 施 施 設           | 定 員 |
|-----|-----|-----|-------|-------------------|-----|
| 上 川 | 旭 川 | 型 枠 | 旭 川 市 | 旭川専修職業訓練校         | 15  |
|     | 富良野 | 型 枠 | 富良野市  | 富良野 "             | 30  |
|     | 名 寄 | 型 枠 | 上富良野市 | 公 民 館 分 館         | 25  |
|     |     | 型 枠 | 士 別 市 | 職 業 訓 練 セ ン タ ー   | 30  |
| 空 知 | 美 唄 | 型 枠 | 長 沼 町 | 長 沼 町 公 民 館       | 45  |
|     |     | 配 管 | "     | 日 多 基 組           | 10  |
|     | 滝 川 | 型 枠 | 妹背牛町  | 妹背牛町臨時保育所         | 35  |
|     |     | 型 枠 | 雨竜川町  | 追 分 体 育 館         | 20  |
|     |     | 配 管 | "     | 追 分 青 年 研 修 所     | 10  |
| 網 走 | 網 走 | 溶 接 | 網 走 市 | 認 定 高 等 職 業 訓 練 校 | 10  |
|     |     | 配 管 | "     | "                 | 10  |
| 十 勝 | 十 勝 | 溶 接 | 帯 広 市 | 佐 藤 鉄 工 KK        | 10  |
|     |     | 型 枠 | "     | 本別事業内訓練センター       | 10  |

注 道職業訓練課調

以上のように農業者転職訓練の実施は、施設と指導員など地元の協力体制を必要不可欠としている。士別市の農業者転職訓練は、地元の建設業者の積極的対応によっておこなわれ、地元業者からの講師は、熱心に受講者の指導を行なっている。

指導員の教え方について、多くの受講者は、「大体よかった」と答え(24名中19名)、工具や施設については、24名中15名が「大体よかった」と答えている。受講者にとって、指導員と工具・施設の不満はそれほどない。むしろ工具についての一括購入割引などは、受講者に非常に喜ばれている。ここにも、指導員のこまかい配慮がみられる。

士別市の農民の転職訓練の受講の理由は、大きく、2つの類型に分かれる。1つは、将来の離農の不安にそなえるためであり、2つは、一時的出稼ぎ、日雇いのためである。この点について全道的には、1972年の道の職業訓練の調査がある。表4-37によると、訓練受講後農業に従事しながら農閑期出稼ぎ、日雇いするものが、全回答者の67.5%を占めている。

表4-37 農業者転職訓練生の就職希望状況(入校時)

|                                |       |
|--------------------------------|-------|
| 訓練受講後離農しようとするもの                | 17.1% |
| 訓練受講後農業に従事しながら、農閑期、出稼ぎ、日雇いするもの | 67.5% |
| 現在出稼しているもの                     | 6.6%  |
| 訓練受講後安定した職につこうとするもの            | 8.7%  |

注 道職業訓練課、1972年度受講者391名のアンケート調査結果より

T地区の農業者転職訓練の受講理由としては、表4-38のように全回答者24戸のうち8戸が「将来離農の不安のため」としている。この8戸のうち7戸までが、「後継者の計画を全くもてない」としている。この8戸の階層の内訳は、中農中層6戸、中農下層2戸である。

農業者転職訓練の受講者のうち中農下層は、すべて、「農業後継者を全然もてない」として構造改善の積極的導入による、安定兼業化の志向をもっている。この階層の6戸のすべては、「構造

表4-38 農業者転職訓練受講生の農業経営志向

| 経営規模      | 経営規模の志向                       |            |          | 農転受講理由           |          |       | 離農証明  |    |       |    |      | 構改の共同化    |          |          |        |        |
|-----------|-------------------------------|------------|----------|------------------|----------|-------|-------|----|-------|----|------|-----------|----------|----------|--------|--------|
|           | 拡大志向                          | 現状維持志向     | 縮小志向     | 将来離農             | 出生計のため日雇 | 一時的出稼 | 公費である | 形式 | いやな感じ | 不当 | 回答なし | 構改改善のため加入 | 機械のたため加入 | 自分が農業の経験 | 営有利未加入 | 離農し未加入 |
| 6 ha 以上   | 3<br>(4)                      | 1          | 0        | 0<br>(1)         | 0        | 4     | 1     | 1  | 1     |    | 1    | 2         |          | 2        |        |        |
| 4~6 ha 未満 | 7<br>(2)                      | 5<br>(11)  | 2<br>(1) | 6<br>(5)         | 3        | 5     | 3     | 9  |       | 1  | 1    | 3         | 4        | 2        |        | 4      |
| 4 ha 未満   | 1                             | 5<br>(6)   | 0        | 2<br>(6)         | 1        | 3     | 1     | 3  | 1     |    | 1    | 6         |          |          |        |        |
| 計         | 11<br>(6)                     | 11<br>(17) | 2<br>(1) | 8<br>(12)        | 4        | 12    | 5     | 13 | 2     | 1  | 3    | 11        | 4        | 4        |        | 4      |
| 備考        | ( ) は、昭和46年から75年までの現実の経営規模の増減 |            |          | ( ) は、全く後継者の展望なし |          |       |       |    |       |    |      | 回答不明 1名   |          |          |        |        |

注 北大社会教育研究室調査（1976年7月）による。

改善のため共同化した」と答えている。この階層の経営規模の志向は、「現状維持」である。

他方、受講者のうち中農上層は、現実に経営規模の拡大を行っており、今後の経営志向も「規模の拡大」になっている。

このように農業者転職訓練の受講の性格は、中農上層と中農下層とでは明らかに異なる。いうまでもなく、中農上層は、安定したやとわれ兼業のための職業訓練でなく、一時的出稼ぎ、日雇い、または、農業経営との関連で受講している。

どの階層においても、「離農証明は形式的なもの」としていることは、転職訓練即完全離農の意識でないことを意味している（受講には農業委員会の離農証明が必要である）。

### (3) 農業者転職訓練の内容と農民

農業者転職訓練のカリキュラムは、表4-39に示すとおりである。このうち「実技」は転職訓練1年コースと全く同じであり、学科は、普通科目がなく、専門の一部が欠けているという点で、時間の絶対量と配分が、1年の転職コースと異なっている。農業者転職訓練は、基本実技を中心にして、カリキュラムが組まれている。

表4-39 農業者転職訓練のカリキュラム編成(士別市建築科, 1976年)

| 科目   | 時間  |         | カリキュラムの内容                                 |   |                        |
|------|-----|---------|-------------------------------------------|---|------------------------|
|      | 農転  | 転職1年コース | 農                                         | 転 | 転職1年コース                |
| 普通   | なし  | 200     | なし                                        |   | 社会, 体育, 数学             |
| 専門   | 50  | 230     | 建築構造, 工作法, 規く術, 施工法, 建築材料, 仕様及び積算, 製図, 法規 |   | 左記の科目に建築設備, 建築生産大意, 測量 |
| 基本実技 | 250 | 460     | 器工具使用法, 機械基本作業, 工作基本作業, 施工基本作業, 安全衛生作業法   |   | 左記と同じ                  |
| 応用実技 | 100 | 810     | 基礎工事作業, 建築作業                              |   | 左記と同じ                  |
| 計    | 400 | 1700    |                                           |   |                        |

注 名寄専修職業訓練校資料より。

農業者転職訓練の実施期間は、1月～3月の冬期である。学科についての受講者の感想は「むずかしかった」11名、「ふつうに理解できた」12名、「やさしかった」0名である。受講者にとって転職訓練の勉強は、決して楽なものではない。しかし、多くの受講者は、皆勤している。このことは、農民の職業技術訓練の強い要求の現われとみてよい。

表4-40に示すように、農業者転職訓練の受講者の多くは、「訓練を受けて役に立った」と答えている(24名中21名)。その役に立った内容としては、「仕事に対する理解と自信をもった」ことをあげている。「賃金と労働条件がよくなった」という回答は、全くない。3ヶ月訓練では、「きわめて不十分である」という意見は、中農下層に強く現われている。

表4-40 農業者転職訓練の効果

| 経営規模    | 職業訓練を受けて |        | 役にたった点 |         |        |       |          | 自分の農業に役に立った |
|---------|----------|--------|--------|---------|--------|-------|----------|-------------|
|         | 役に立った    | 役に立たない | 就職の上   | 賃金よくなった | 労働条件で楽 | 仕事に自信 | 仕事の能率上がる |             |
| 6ha以上   | 3        | 1      | 0      | 0       | 0      | 2     | 1        | 3           |
| 4～6ha未満 | 12       | 2      | 5      | 0       | 0      | 5     | 3        | 5           |
| 4ha以下   | 6        | 0      | 2      | 0       | 0      | 2     | 3        | 4           |
| 計       | 21       | 3      | 7      | 0       | 0      | 9     | 7        | 12          |

注1. 役に立った理由。1人が2項目答えている 4名  
無回答 3名

2. 北大社会教育研究室調査(1976年7月)による。

表4-41 農業者転職訓練受講後の希望訓練

|         | さらに職業訓練を受けたいか |    |    | うけたい場合の科目 |      |      | 将来技能士の資格は |        |
|---------|---------------|----|----|-----------|------|------|-----------|--------|
|         | はい            | いい | いえ | もっと進んだコース | 別の科目 | 農業科目 | とりたい      | 考えていない |
| 6ha以上   | 3             | 0  | 0  | 0         | 2    | 1    | 1         | 0      |
| 4～6ha未満 | 11            | 3  | 8  | 3         | 0    | 7    | 5         |        |
| 4ha以下   | 4             | 2  | 1  | 3         | 1    | 3    | 3         |        |
| 計       | 18            | 5  | 10 | 7         | 2    | 11   | 8         |        |

注 北大社会教育研究室調査(1976年7月)による。

他方、農業者転職訓練が「自分の農業に役に立った」という回答は、少なくなかった(24戸中11戸)。とくに、中農上層では、その回答の比率を高くしている(4戸中3戸)。農民の意識としては、農業者転職訓練が農業経営に役立つとしているのである。中農上層は、今後の職業訓練の要求として、農業機械修理の科目をあげている。

表4-41に示すとおり、中農中層、下層は、さらに進んだコースの積みあげと技能士の資格取得に強い要求をもっている。また、中農下層は、うけたい科目として、測量という高度な訓練を要求している(2戸)。この要求は、質的に高度な訓練によって安定した兼業化の志向を示しているのである。

農業者転職訓練の今後の充実要求は、階層的に明らかに異なっている。中農下層の安定兼業化は、労働者としての専門性志向を強め、中層上層は、自己の農業経営との関連で技術・技能の総合性を志向している。

#### (4) 小 括

以上、農業者転職訓練の受講理由は、階層的に異なっていた。中農下層の安定兼業化のためと中農上層の一時的出稼ぎ、日雇い、農業経営に利用との2つに大きく分かれる。今後の農業者転職訓練の充実の方向についての意見も階層によって異なっている。農民層の下降分解の一形態としての安定兼業化は、いうまでもなく労働者の性格を強く志向し、中農上層は、農業経営規模拡大にもかかわらず、小農的な技術・技能の総合性を志向している。

農業者転職訓練は、安定したやとわれ兼業化、離農不安にみられるように階層分解の促進要因になっているが（地元の建設業資本の「技能労働力不足」の充足に役立っていったことも重要なことである）、政策的意図である完全離農の促進の機能は、果しているとはいえない。

#### 5. ま と め

以上、農民が自らの学習要求を充足する場として位置づけた、直接農民にたいする公的な農業技術・技能学習の場（農業改良普及所、農業学園、離農者転職訓練の3種類）、および農協の営農指導について実態を概括的にみてきた。

これらの目的、内実はずしも同性格のものではなく、一様にくくことは困難であり、またそれぞれの機能分野に多面性がみられ、一面的に割りきることはできないが、そうしたなかでも一定の傾向をよみとることができるようにおもう。

2節以下の指摘のように、行政および農機具メーカーなど農業に基礎を置く独占資本の利益と密接不可分な農業政策の意図を直接間接にうけて、大型機械化という技術中心主義におちいりがちな農業改良普及所、上層農育成を目的とした農業学園、農民きりすて策の一環としての要素をもっている転職訓練、農業政策とは一定の距離をおきながら基盤整備・構造改善事業等をうけいれることによって農協経営面に与えうるうまみ故に政策的意図をうけいれがちな農協、いずれも農民の主体的生産力形成を歪曲する側面を否定し難くもっている。

しかし客観的にはこれらが農民の学習要求充足の場として、とりわけ技術・技能修得のかけがえのない場としての積極面をもっていることも事実である。

農民も一方ではそうした政策的意図と、他方では確固たる農業政策不在といううずまきこまれ、主体形成の側面を見失いがちであり、新しい技術体系への主体的対応の自覚が不充分といえる。

狭い技術・技能修得にとどまることなく、こうした農民のもつ弱点の認識と、その克服の自覚化を触発していくことが、農民教育の重要な課題といえよう。

しかし、農民による主体形成の芽が、水準のちがいがあっても、それぞれの場で存在することも指摘されている。

研究会が一定の力量をもち、農業改良普及所や農協と接している洞爺、年をへるにしたがって入園者に小規模経営層が増加し、農民的要求が顕在化してきたり、教養学習の増加を望む学園生の存在など、主体形成へ結合できるきざしのみえる剣淵、そして、休耕中にうけた転職訓練によって、より高く広い技術を求めるようになるなど1つの農民の目ざめのみえる転職訓練がその例としてあげられよう。

こうした芽を大切に、大きくしていくことが重要である、といえよう。第1節の表にしめされた農民の自主学習への期待の少くないこと、それら諸制度が地方自治体ないし住民自治の形態をとっていることはその有力な手がかりといつてよいであろう。

注1 学習の内容については回答が一定しておらず、表にまとめることはできないが、およそ次のことがいえる。

技術指導（栽培技術）……………改良普及所  
 経営指導……………農協  
 青色申告……………農民組合

改良普及所（農業試験場）で学んだ具体的内容を示すと、気象予報（5人）、防除（5人）、農薬（3人）、施肥（3人）、品種（3人）、土地改良（2人）、などが主なものである。

なお、1961年、本学部商業教育計画研究施設が中心となって網走管内端野町において実施した農民対象に調査においても、農民は農業技術面の諸情報を講演会、懇談会、視察旅行という面談的な方法では、改良普及員や農業試験場から主に得ているという結果がみられる。留岡清男・布施鉄治・鈴木秀一「農業近代化と農民の生産意欲第1編」（北海道大学教育学部産業教育計画研究施設研究報告書1、1962年4月）77～78頁

注2 ただし、会社員と公務員では関心度の内容、切実性も大巾に異なる

注3 高倉嗣昌「農民の公民館利用とその意識」（「北海道大学教育学部紀要」第16号、1968年）56頁表6－2より

注4 「農民は農協をこうみている」、協同組合経営研究所1959年頁74によると、1958年の調査においては、農協の技術員よりも、農業改良普及員の方が役だったと答える者が31%あり、前者の方が役立ったとする者16%を大幅に上廻っている。すなわち、士別調査の結果とは逆になっている。ただし、都府県が対象の調査で北海道は入っていないこと、改良普及所の合併以前の調査であることを考慮すべきであろう。

また、注1で述べたように、農民はこれまで技術指導は主に改良普及所、経営指導は主に農協からうけてきたという分業的関係もみられる。

さらに、本章第3節においては、農業青年の経営・技術上の相談相手として、家族以外では改良普及員が圧倒的に多く、農協職員をあげた者が少なかったという結果がみられる（表4－23参照）。青年層は、まだ経営をまかされている度合いが低く、営農指導よりも技術指導面への志向が強いためと考えられるが即断はできない。

注5 北海道農務部農業改良課「北海道の担い手育成対策の概要」1971年

注6 北海道農務部農業改良課「北海道農業学園の概要」1971年

注7 「農業者転職訓練は、農業構造の近代化を図る総合農政推進の一環として、農業以外の産業へ就業を希望する農業従事者に対し、新たな職業に必要な能力を開発することにより、農業以外の産業への就業を容易にするため、農業従事者の実態に即した職業訓練を実施することを目的とする。」1970年7月20日、労働省職業訓練局長通達、「農業者転職訓練実施要領」より

農業者転職訓練の対象者は、農業委員会の発行する離農転職者証明を必要としている。

労働省職業安定行政は、農業者転職対策を重要な課題としている。

最新におけるわが国の農業については、米の生産調整、大規模・高生産性の近代的農業の育成、農家所得の確保等とならんで、離農の援助・促進をはかることが必要とされるとともに、他方、農業以外の産業部門においては、労働力需要が増大し、労働力不足の度が強まっている。このように農業の内外からの農村労働力の他産業への就業が期待されているところであり、この際農村における労働力の他産業の円滑化をはかり、これらの人々の職業と生活の安定をはかることが、職業安定行政にとってきわめて重要な課題となっている。1970年5月58日「労働省職業安定局長」通達

注8 農業者転職対策は、市町村単位に農村巡回相談所、農村人材銀行、農業者転職相談員を設けている。この目的は、農家まで出かけて直接的に転職活動を行うためであり、さらに、農業協同組合、農業委員会、市町村自治体との協力体制を組むためである。

注9 農業就業近代化事業は、昭和44年から全国の農業委員会を実施されるようになった。「専業農家を自立経営へ移行させるためには、兼業農家の農地を、所有権だけでなく、賃貸の形でいいから移行させること、また生産組織を含めてでも専業農家に結びつけていくことが必要であります。このためには、兼業農家の側に、その条件が整っていないとは思いますが、兼業農家の条件とは、その最大なものが、「兼業の安定化」であります。そして農耕については専業農家にまかせ、兼業だけで生活できる状

態をつくりあげていくことであります。」(就業改善相談員手帳, 全国農業会議「農業就業近代化対策事業の意義」より)。農村人材銀行は, 農業者転職相談員, 離農転職者および関連する出稼ぎ労働者の把握としている。この関連する出稼ぎ労働者とは, 完全離農を前提としながら, 経過的に出稼ぎ労働者となる離農転職希望者としている。(1971年3月26日「労働省職業安定局指導課長」通達より)

1972年7月27日の農林事務官通達「出稼農業者営農改善等特別対策事業実施要領」が出され出稼ぎ先の営農研修対策が実施されるようになっている。

注10 全国建設業協会の会長, 江島池藤氏は, 1974年の総需要抑制の中でも, 建設業の技能労働力不足を次のようにのべている。

「いまや建設業をとりまく環境は総需要抑制等の浸透による受注量の減少を通じ転換期を迎え, 又労働力の確保など極めて困難な多くの問題に直面しているといわなければならない。特に技能労働力の不足がここ数年の間に急激に深刻さを増し, 最近では工事の施工にも支障を来すという事態にまで追いつめられている。」1974年7月号「職業訓練」誌1974年7月号6頁。

注11 「農家が兼業労働に従事するということは, 農業労働への従事を弱めるか, あるいはまったく従事しなくなることを意味する。つまり, 農作業過程からの労働の分離を示す。この分離したところに機械がはいりこみ, 機械の所有農家もしくは所有組織が, 農作業から分離した農家の耕作を担当することになる。」河相一成「農民の貧困化と農業生産」(講座現代日本資本主義2『経済』青木書店)249頁

## あとがき

われわれは, 北海道における農業生産力の形成とその現段階的特徴を, 全道的に, またそこにおける諸関連を地域事例について分析した。そこでは, 今日的な小農の生産様式に応じた生産力形成の, それぞれ独自の地域構造及び階層構造がみられるが, とりわけ大型機械化「一貫」体系の急速な導入にともなう矛盾が顕著にみられる。

われわれは, その大型機械化「一貫」体系の「一貫」性, さらに敷衍するなら, その労働手段の体系的「一貫」性のみならず, 労働対象とのかかわりにおける技術の「総合性」, さらに生産力形成の主体的契機とのかかわりにおける「全面性」のそれぞれに, 現代資本主義のもとにおける小農の生産様式と資本主義の生産諸関連の矛盾を見出すことができる。その方法論と現状の概括が第1, 2, 3章で追求され, 農業技術教育の課題を具体的に明らかにする準備作業が試みられた。

それにたいして, 補章で概観した農業技術・技能教育制度の現状は, それらの矛盾の克服とのかかわりあうところが少いのみか, 場合によってはその矛盾の激成の条件とさえなっていることを示す。それを基本的に規定しているのが農工間不均等発展であることはいうまでもない。複合ウクラッドの場合その矛盾はとくにはげしい。

さらに——今回はそれにふれられなかったが——農業技術関連「教育」諸制度をより広くとりあげてみる場合, 矛盾はよりドラスティックに進行していることをつけくわえざるをえない。

たとえば, 既述の農業改良普及制度, 農協営農指導制度はそれぞれ改良普及員, 営農指導員にたいしても一定のセンター的な教育制度を備えているし, さらに農業関連独占も同種施設をもっている。とくに後者は, 農民にたいする独自の技術「教育」をおこなっているが, 他方, 自社の営業部員には資本主義的なセールスマン用技術「教育」と, 労務管理をあわせおこなっている。それらの性格差は, いわば教育と広告の差と共通の似而非なる擬似性をもつ。

したがって, そうした各種の, それぞれの独自目的を有し, それに規定された技術・技能関連教育の, その「技術教育」的性格がどの程度の共通の本来的教育的領域を形成しているか, これははなはだ疑問である, というよりは逆に技術「教育」がそれぞれ行政なり, 営業の手段として

位置づけられ、顛倒、歪曲されているというのが現状である。

それが農業技術の矛盾、より正確には、現実技術（運用の条件をふくんだ）の矛盾を形成しているわけだが、他方、農民の農業技術・技能の習熟、運用の力量も——大型機械化「一貫」体系導入の場合にみられるように——きわめて不十分なレベルのものといわねばならぬ。そのことは、たとえば、農機具アフターサービス機関利用状況からみた農民の農業機械運用ないし故障の修理能力からいえることである（これについては別途に調査予定であるが、それに関連して、剣淵農協の農機具修理センターで農民とともに修理しつつ研修している実践例は重要な萌芽を示す）。

このように、農民的技術・技能教育は——一方ではテクノロジー個有の領域と同時に——その運用主体の民主主義的、自治的力量の形成と不可分の関係にあると考える。

その点では、第1章でふれた国際的農業機械独占が世界市場において大きなシェアをしめている現在、フランス、ドイツの小農においても日本と同様大型機械化「一貫」体系への移行がみられるが、そこではフランスにおけるクーマ、ドイツのマシーネンリンクのような農協の農業機械センターなり、共同利用組織が制度的に形成されていることが、一つの教訓となろう。

つまり、成人教育としての農民の技術・技能教育には、プロバーの技術教育と同時に、そうした現実の生産力形成とのかかわりにおける農民の主体形成が他方では不可分の分野となると考える。

本論はそうした研究方法の枠組の、いわばスタート台の設定を試みたものである。

なお、本論文の作成にあたっては、社会教育研究グループ全員の討議にもとづき、各自つぎの執筆分担をおこなった。

第1章（美土路）、第2章（山田）、第3章1（藤田）、2（木村）、3（千葉）、4まとめ（山田）、第3章1（高倉）、2（柳田泰典・研究生）、3（兜賢一・研究生）、4（神田）、5まとめ（高倉）、あとがき（美土路）

なお、第3章の資料のソースたる実態調査（研究室調査及び学生調査実習）には全員が参加、集計分担をおこなっているため、執筆担当者と集計分析担当者は必ずしも一致しない。とくに洞爺農業の分析の項には社会教育ゼミナール学生三上英範君の調査、集計結果を一部利用したことを附記したい。